

イナズマイレブン 二回
目は好きな物から逃げ
ずに。

ウツマ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

イナズマイレブンに憧れてサッカーを初めて、挫折した。

そんな主人公がイナズマイレブンの世界に転生し、紫藤幻斗としての第二の人生を好きな物から逃げずに頑張る話。

憧れの円堂と一緒に雷門中に入って……って、あれ？尾刈斗中？

上手いかならないことだらけの陰謀渦巻くイナイレ世界で、好きな物を守るために足掻き続ける。

※一部原作キャラ（主に尾刈斗）の設定を捏造しています。もともと存在する設定が少ないせいで半ばオリキャラ化しているかもしれません。あらかじめご了承ください。

※個人的な都合により、現在更新を中止しています。来年度になればまた更新できるはず……

目次

プロローグ

00	神様のイタズラ	1
----	---------	---

入学編

01	入学式（全てが変わった日）	6
----	---------------	---

6

02	入学式（神成FC）	13
----	-----------	----

03	インタラプト	20
----	--------	----

04	初めての試合	27
----	--------	----

05	信頼とか、夢とか	33
----	----------	----

06	幽体離脱	44
----	------	----

1つ前のFF編

07	イカれたメンバーを紹介するぜ	
----	----------------	--

08	負けイベント	53
----	--------	----

09	変えられること	60
----	---------	----

10	救出大作戦	68
----	-------	----

暗躍編

11	呪い、占い、超次元	78
----	-----------	----

12	共犯者	90
----	-----	----

13	催眠術師	100
----	------	-----

14	鐵大輔（後悔）	110
----	---------	-----

15	鐵大輔（協力）	120
----	---------	-----

16	鐵大輔（真実）	130
----	---------	-----

17	交通事故	140
----	------	-----

天魔大戦編

1つ前のFF編

07	イカれたメンバーを紹介するぜ	
----	----------------	--

18	レジスタンス	168	29	収穫祭の夜	291
19	じゃんけん至上主義	178	登場人物紹介		
20	秘策×n	191	紹介		298
21	最強は誰?	203	傍観する少女編		
22	喧嘩	213	30	新しい風	313
ハロウィーン編					
23	仮装をしよう	222	31	ゴーストロック	322
24	大集合	231	32	転生日記と少女の奮闘	330
25	ヴァイオリニストと助っ人		33	尾刈斗が来た!	338
240			34	帝国が来た!	350
26	デジャヴ	253	35	占い師	360
27	サツカーバカ達	265	36	無知と自己犠牲	374
28	ハロウィーンデート	279	37	お見舞い	393
			38	思惑	408

クーデター編

39 こつくりさん

414

49 ウィークポイント

540

40 いざフットボールフロンティア

50 好きな物から逃げずに

550

428

41 たくらみ

437

42 種明かし

448

FF開幕編

43 データサッカー

461

44 必殺技禁止令

471

45 突撃！メイド喫茶

488

46 正々堂々

504

47 事の顛末

519

48 蹴りのトビー

530

プロローグ

00 神様のイタズラ

これは、転生する前の最後の記憶です。

誰しも自分は客観的に世界を見ているって思い上がる時期があるじゃないですか。え、無い？でも僕にはあつて、ちょうどそういう時期だったんです。

自分の限界を感じてサツカーをやめて、友達とも疎遠になつて。自分に嘘ついてないとやつてられなかつたんです。

どうしてあんな現象が起きたのかは僕にも分かりません。

神様が僕にチャンスをくれた、と考えるには僕は平凡な人間でしたし。多分神様の気まぐれでしょう。

ただ一つ言えるのは、その神様のイタズラが、僕に最高の二回目の人生を与えてくれたということ。好きなものと向き合うことができる、そんな人生を。



「イナズマイレブン新作ゲーム再び延期。開発が難航か？」

別にもう興味はないけれどなぜかネットニュースにはでてくる。なんだか性格が悪いと自分でも思うけどけれどこういうニュースを見ると少し気味が良くなる。

ジャンプ漫画ではないけれど「友情・努力・勝利」に則った熱血青春物、僕が一番嫌いなタイプだ。

いくら頑張ったって覆せないものなんて世の中たくさんあるのに、努力すればなんとかなるってただの絵空事。

さっきまで小気味良かった気持ちもなんだか情緒不安定にイライラしてきた。二度と見ないように詳細からこのニュースに関心がないを押す。

最近何もすることがなく、目的もなく毎日を過ごしている。

でもみんなそんなものでしょ？何か目的を持って生きている人なんて少数派だし、まだ高校生でそんなことを考えているやつなんて普通はいない。

僕は今のままで充分幸せだし、自分で言うのもなんだけど、結構恵まれた家に生まれたと思う。お金持ちって訳でもなく中の上くらいの家だが、僕が部活をやめたいと言った時も、皆僕の決めたことだからって尊重してくれたし、部活をやめて僕の生活が大きく変わった後、僕の楽しめることをいっぱい提案してくれた。両親に言われて始めたパソコンも今では結構扱えるようになって、簡単なプログラムなら作れるように

なつてきた。お金の話とかせずに僕の幸せを願つてくれた。うん。

☆☆☆

えーと、なんの話をしてたんだけ？歩きスマホは良くないって話だけ？

歩きスマホは良くないよ、だつてよそ見しながら歩いてるとこうやつてトラックに引かれちゃうもん。

こういう事故にあつたとき世界がスローモーションになるつてのは本当だつたんだ。

家族のこと、友達のこと、部活のこと。

トラックにはね飛ばされて地面に落ちるまでの間に色んなことを思い出した。

(これが走馬灯つてやつか、人つて本当に死ぬんだなあ)

そんな訳の分からないことを考えながら僕の人生は終わった。

☆☆☆

「好きなアニメって何？」

まあ、こういう質問が来たら今アニメ見てないしつて答えるか、まあコナン辺りを無

難に答えておくか、大体そのどっちか。

僕は基本的にアニメは見ないし、漫画も読まないけれど、ある程度ストーリーを知っていたりする作品もいくつかある。「名探偵コナン」「ハリーポッター」「進撃の巨人」「僕のヒーローアカデミア」「HUNTER × HUNTER」「ONE PIECE」などなど。

ただ、実際に転生するとなると、巨人のいる世界なんて選んでられないし、日常的に殺人事件が起きる世界にも、ヴィランが暴れまくる世界にも行きたくない。つまり何が言いたいかというと、僕の選択は間違ってたかったってこと。

自称宇宙人が学校壊したり、地球がブラックホールに吸い込まれそうになったりするけれど、僕が何もしなければ僕になんの被害もないし、普通に生きられる。放っておけば主人公達が全て勝手に解決してくれる。

ああそうだった、あまりの混乱で話が飛んでしまった。僕が車に轢かれて死んだ後、謎の祭壇のような場所で目が覚めて、神様らしき人にどの作品に転生したいかと聞かれたんだ。そうして口から出たのは

「イナズマイレブン」

僕は、僕の大嫌いな世界に転生することとなった。

入学編

01 入学式（全てが変わった日）

入学式だ。

小学校じゃなくて中学校の入学式だ。おいおいもう中学生かよって思われるかもしれないけど大切なのはテンポって誰かが言ってたから問題ない。

今から入学式が始まるわけだけど、だいたい入学式とか式典って内容のない話を聞くだけって相場が決まってるもんだから真面目に聞く必要は無い。

新入生は名前を呼ばれたら返事するだけだから、入学式が終わるまで僕が転生してからのことを振り返ってみよう。

最初に話すべきは、あの日のことかな。

☆☆☆

小学校1年生の6月。まだ僕がいろいろとひねくっていた時。

「何？刃也、じんや話があるって」

友達のがしんやの野賀刃也のがしんやに学校が終わったあと少し話があると言われていた。

1度義務教育を終了した身である僕にとつて小学校のお勉強はどう考えても退屈だった。多分先生達には「天才」として認識されていたんだろうけど、クラスでは浮いていた。僕自身小学生と関わる気になれなかったからだ。

そんな中僕に近づいてきた人がいた。それが刃也だった。

「今日の授業寝てたでしょ、もう6月なんだから春眠暁を覚えずなんて言つてられないよ」

刃也はそれこそ「天才」だった。父親が教育者だとかで書齋の本を読みふけり小学生一年生とは思えない知識を有していた。

「そりや数字の書き取りなんて退屈だっただけで……そんな話をしにきたわけじゃないよね？」

小学生とは思えなくて刃也も転生者じゃないのかと最初は疑ったが未来の流行語や作品を言っても反応しなかったしそれとなく探りを入れても違うようだった。某少年探偵団の光彦くんも小学一年生だしそんな子もいるのかもしれない。

「単刀直入に言うよ。幻斗げんと、サッカーする気は無い？」

単刀直入なんて小学一年生が使わねえよ。

☆☆☆

そろそろ名前が呼ばれる頃合だ。

しとうげんと
「紫藤幻斗」

「はい！」

紫藤幻斗。それが今世での僕の名前だ。

☆☆☆

話を聞くと、近所のサッカークラブに入ることになって一緒にやらないかという話らしい。でも刃也にはサッカーは僕が1番嫌いなスポーツって言ったことがあるはずだった。

「僕はサッカーが嫌いって前に言ったよね？」

「うん、聞いた。でも体育の授業でサッカーやったとき、幻斗ちよつとりフティングしてたよね？」

授業でサッカーボールを触ったとき、前世でのサッカー経験があればこの世界でも有利にサッカーを始められるかもしれない、なんて思ってた。

「それくらい光島や奥村もできてたでしょ。」

僕は他にサッカーボールで遊んでいた人の名前を挙げた。不思議なことにこの世界ではリフティングくらいサッカー初心者でもできる技術らしい。

「僕はサッカーをやるつもりはない」

そう言つて僕は教室から去った。

「すぐに返事を貰えるとは思ってないから。次学校来る時まで考えておいて」
強く否定したにも関わらず、刃也はまだ諦めていないようだった。

☆☆☆

「——ですから、まだこの学校はできてから10年しかたっていないません。周辺の学校に比べても歴史が浅く——」

校長の話はまだまだ続きそうだ。

僕はこの世界でサッカーをすることになるとしたら、もつと重要な人（つまりは原作キャラ）によつてサッカーを始めることになるんじゃないかと思つていた。例えば、とあるサッカーバカが僕がもう一度サッカーをすることを許してくれるんじゃないかなんて期待していた。

でも僕を助けてくれたのは原作では登場すらしていない刃也で、僕は自分の思っている以上にサツカーが好きだった。

☆☆☆

刃也から話を持ちかけられたのがちょうど金曜日だったのでそれについて考える時間は十分にあった。

土曜日の朝から家を抜け出して隣町の稲妻町まで向かった。自転車もない小学一年生にとつては長い道のりだったけど、そこに答えがあるような気がした。

稲妻町のシンボルである鉄塔にたどり着くとそこには期待していた人はいなかった。まだここで特訓していないのか今日はやってないだけなのかは分からなかったが、鉄塔を登るのもなんだか怖く特に何もせずには帰った。

家に帰ると両親にはどうして勝手に外に出たのかとこつぴどく叱られたが、なんとなくか自分の心にけじめが着いた気がした。

☆☆☆

「幻斗、考えは変わった？」

週末が明けた月曜日、再び刃也に聞かれた。

「僕、サッカーするよ」

結局僕の悩みとか後悔とか大したものでもなかった。こうやって「サッカーしよう」って言われただけで揺らぐなんて、ずっと僕はサッカーがしたかったらしい。

刃也が僕を誘ってくれたのはただ友達も一緒にサッカークラブの人に言われただけなのかもしれないし、僕の本心を見透かしてたのかもしれない。そうじゃないとサッカーが一番嫌いって言うてる人にサッカーを勧めたりしないか。

☆☆☆

「——皆さんはまだ子供です。ですから私たち教師が皆さんを正しく導く——」

この校長はかなり話が長い。まだまだ終わらなさそうだ。

まあなんやかんやあって僕はこの世界でもサッカーをすることになった。このときはまだトラウマを全部克服できたって訳でもないけど、刃也のおかげで大きく前進できたと思ってる。

刃也も今日が入学式だっけ？帝国の入学式はどんな感じだ？総帥の話は長いのか短

いのか、後で聞かせて欲しいな。

02 入学式（神成FC）

「——人という漢字はどういう成り立ちでできたか知っていますか？——」

おい校長それパクリじゃないか？

校長はまだまだ話を続けるつもりらしいので僕もまだまだ振り返ってみよう。

☆☆☆

僕達が入ったサッカークラブは神成かみなりフットボールクラブ通称神成FCだ。僕の通った神成小学校の校庭で主に活動しているらしい。神成町にあるから神成小学校、シンプルなネーミングだ。ちなみに某ネコ型ロボットの出てくる漫画で空き地の近くに住んでいてよく盆栽を壊されるおじさんの名前も神成さんだ。どうでもいい知識がまたひとつ増えたな。

前世の経験があるはずなのに、神成FCの中でも僕は下から数えた方が早かった。けれども神成FCでのサッカーは苦じゃなかった。いつかあの夢見た世界、必殺技が自分のものになるかもしれないと思うと立ち止まっていられなかった。

僕の学年で一番早く必殺技を覚えたのは、やっぱり刃也だった。覚えた必殺技は「キースライド」。刃也曰く、まずは既存の必殺技を練習して、必殺技の感覚を掴む方が合理的とのこと。

4年生になる頃にはチームメイトの大半は必殺技をいくつか覚え、オリジナルの必殺技の開発に取り掛かる人も増えていった。僕はみんなに置いていかれないように1人残って練習していたが、いつまで経っても必殺技の感覚は掴めなかった。

仮説というほどのものではないが、必殺技の感覚が掴めない原因は僕の才能というより前世の記憶にあったのではないかと思う。この世界で生まれ超次元の存在を身近に感じてきた人達と違い、僕は一般次元で過ごしてきたためにまだ心のどこかで必殺技を信じきれしていない部分があったのだろう。この仮説はもう1人この世界に転生者が現れるまで証明は出来ないが。

練習後に残って特訓する。いつの間にか刃也を含めて何人かが参加してくるようになった。

「これじゃ、いつまで経ってもみんなに追いつけないじゃん」

ふと思いつくことがある。僕がイナズマイレブンに憧れてサッカーをしていた頃のことを。あのときも僕が居残りで特訓していたところにカケルとタクヤがやってきて、みんなで特訓することになっていたのだ。こうしてサッカーをしていると、蓋をしてい

たあの思い出も案外悪いものでもなかったと思えてくる。

結局僕が必殺技を初披露するのは6年生のときになる。自分で言うのもなんだが、最高にかっこいいお披露目だった。

☆☆☆

「——この辺りに伝わる伝説ですが、ある日獵師が雉を捕まえようと——」

この地域の言い伝えだ。貧しい獵師は狩りの途中美しい雉の神様に会う。慈悲深い雉の神様は自らの体の一部を獵師に差し出し、それを持ち帰った獵師の一家は途端に幸運に恵まれる。調子に乗ってしまった獵師はそれを使い商売をしようとして、神の怒りに触れる。ありきたりなストーリーだが、地名の由来になるほどよく知られている。

昔話はだいたい何かしらのメッセージがあるが、この話は調子に乗るなつてことなのだろうか。そういう意味では僕は獵師と同じことをしてしまったわけだ。新しい必殺技を覚えたからつて調子に乗つて、その危険性を何も分かつていなかった。

☆☆☆

あれは最高にかっこいいお披露目だった。そして、最悪の出来事を引き起こすきっかけとなった。

神成FCの中でも僕の学年はとりわけ強く、6年生でついに小学生サッカー大会の地区大会の決勝まで辿り着いた。決勝の相手は「ジュニアエンパイア」。決勝まで全て3点差以上の圧勝で決勝まで辿り着いている。その名前から分かるように天下の帝国学園のお抱えジュニアサッカーチームである。特に脅威なのはキャプテンで司令塔な鬼道有人だろう。他にもベンチには佐久間がいたり、他にも原作で見た顔がちらほら。唯一の救いはGKが源田ではないことか。この頃の源田は別のチームにいるのだろうか。

僕は元から人より体力が少ない上、連戦が続いたため、前半はベンチからのスタートとなった。刃也と心音の2人を中心としたディフェンスで攻撃を凌ぐも、鬼道の「イリリジョンボール」から寺門の「百列ショット」の流れで2失点を許してしまった。すぐにでも試合に出たかったが、出ても最後まで全力を出せずにお荷物になるのなら本末転倒だ。

後半、ジュニアエンパイアからのボールで始まった。鬼道が攻め込んでくるが、僕を含め3人がかりで止めにかかる。刃也と心音には必殺技こねを使つてパスコースを防げるように少し回り込んでもらった。この状況で鬼道が打つ手はもちろん、

「イリリジョンボール」

イリユージョンボールはボールを3つに分裂させ惑わせる必殺技だ。シンプルであるが気をつけなければ平衡感覚すら失ってしまう。しかし対策がないわけでもない。分裂したボールのうちどれが本物のボールであるのかさえ見抜くことさえできれば、

「これだっ！」

僕は本物のボールを見つけ出し、鬼道からボールを奪った。彼らも「イリユージョンボール」が止められるとは思っていなかったただただだろうが、すぐに気を取り直して僕を止めにかかる。

僕の必殺技。試合で使ったことは一度もないし、練習でもたまにしか成功していない。でも、僕は上手くいく気がした。

「だってさつき生で見たからね。イリユージョンボール」

さすがにそれは思いもよらなかったのだろう。混乱しているDFを抜き去り、GKの兵頭と向かい合う。

「くらえっ！僕の新しい必殺シュート技」

まあそんなものあるわけないんだけど。本命の後ろにいる光島みつしまにパスを出す。

「シャインドライブ！」

不意をつかれた強い光に対応できる人などいない。こうして僕たちはジュニアエンパイアから1点を取り返すことができた。

ジュニアエンパイアも「イリユージュオンボール」に頼らずに突破口を見出そうとするが、うちの固い守備に阻まれ、かといって「シャインドライブ」はもう一度通用するか怪しかった。試合は膠着状態となり、本来ならば前半を無失点で抑えこの1点を持って逃げ回る予定だったが、前半の失点が響き1―2で敗北してしまった。

☆☆☆

負けたものの、僕はあのジュニアエンパイアから1点をとった立役者となったことに満足していた。もちろん必殺技「イリユージュオンボール」を覚え、みんなの隣に立てたことにも。

「イリユージュオンボール」は鬼道の十八番だ。それは何より「イリユージュオンボール」は対策が難しいからだ。鬼道は必殺技を使う度に本物のボールの位置を変えている。全く同じ動きに見えてもどのボールが本物かは分からない。僕が本物を見つけ出すことができたのは、毎日鬼道が「イリユージュオンボール」を使う映像を見つけて練習していたからだろう。

鬼道の「イリユージュオンボール」を見破ることができる。それが何を意味するのかを深く考えていればこんなことにはならなかったのに。

「——皆さんは今日から尾刈斗中の生徒です。この学校でたくさん楽しい思い出を作ってください」

ほんと、どうしてこうなったんだろう？

03 インタラプト

尾刈斗中の入学式を無事に終え、「幻斗の晴れ姿、パパにも見せなきゃ」なんて言うてる母と共に家に帰る。

どうして尾刈斗中に入学することになったのか、それは話すと長くなる。

☆☆☆

今からまた回想に入るんじゃないかと思つたかもしれないが、今日はもうたつぷり回想したのもうしない。そんなことよりも、

「友達のところに行つてくる」

どうしても行かないといけない場所がある。

「いくら友達だからって勝手に他の学校に入るのはダメじゃないの？」

母から正論を言われるが、「大丈夫だって」とだけ言つて家を出る。

今日は尾刈斗中の入学式の日であり、刃也のいる帝国学園の入学式の日でもある。

そして、雷門中の入学式の日でもある。

聞いた話だと、うちの学校とは違い雷門中は入学式の日から部活動をしていて、新入生も即日入部できるらしい。彼らが来るのもこの日だったはずだ。

もちろん、彼らが来るのはパラレルワールドのひとつでこの世界にはやってこない可能性も十分にある。しかし、もし彼らがやってきて何かイレギュラーな出来事が起きてしまったら。サッカーが嫌いになる円堂なんて僕は見たくない。

そんなことを考えながら僕は雷門中へ向かった。

☆☆☆

「ここから始まるんだ。雷門サッカー部の歴史が…」

「でも、それを阻止するためプロトコル・オメガが現れるはずだよ。雷門にサッカー取り戻すためにも絶対に奴らを倒さなきゃ」

雷門サッカー部の誕生を見届ける2人と1体のアンドロイド。

「あれ？でもなんで円堂監督だけなんだろう」

☆☆☆

入学式だからか普段からなのか門は大きく開けられていた。記憶と勘を便りにサツカー部室へ向かう。

「見つけた！」

遠くに見えるはボロボロの部室と、円堂と可愛い女の子、秋かな？それと紫の髪の毛の姿。アルファがいる！なんとかギリギリ間に合ったか？

そう思っていると突然アルファを中心に青い光が展開される。

「僕たちも行かなくちゃ」

その光に飛び込む天馬達。僕も行かないかと思つて全力疾走して光に飛び込もうとしたが、直前に光は消え、僕は地面にダイブしてしまった。

☆☆☆

周りの人からあの子大丈夫？の目で見られたが、ちよつとこけちゃったんです……の顔をしながら雷門中を立ち去った。雷門の制服とは全く違った服だったけど入学式だからかなんともなく済んだ。

あの青い光の行き先は予想が着いている。原作と同じならば、彼らの行先は雷門が伝説を作っていく場所、フットボールフロンティアスタジアムである。

でも、今から行っても間に合うのだろうか？ここからスタジアムまで電車で30分以上はかかる。そもそも今お金も何も持ってきてない。

(行かなきゃ、かな?)

少し悩んだ末、全速力で家に帰り財布だけ取り出して家を飛び出した。何があったのか問う母も無視して駅へ向かった。

たとえ間に合わなかったとしても、ほとんど意味は無かったとしても、歴史が変わるかもしれないことを知りながらそれを無視するということは出来なかったのだ。なんて言い訳を電車の中で考えていたが、結局は好奇心だろう。あのアニメの中だけだと思っていた光景が直接見られるのかと思うとじっとしていられなかった。多分それだけだろう。

スタジアムの前に着いたが、予想していた活気も何もなく、ただひたすらに静かだった。

(どこから入ればいいんだろう?)

侵入するためのルートを考えていると、

「きみきみ、ここは立ち入り禁止だよ」

「今日はこのスタジアムは誰も使っていないよ」

スタジアムの整備でもしていたのだろうか、おじさんが話しかけてきた。

「今ここ誰もいないんですか？」

「もう俺たち以外には誰もいねえよ、そうだよな？」

「ああ、誰も見なかった。どうしてそんなことが気になるんだ？誰も使っていないからって勝手に中に入って遊んでいいわけじゃないぞ」

「いや、さつき中から声がしたような気がして」

原作知識でここにアルファがワープすると知っていたからなんて当然言えるはずもなく

「いやそんな声は聞こえなかったな」

「気になるんならおじさん達がもう一回見回りしてこようか？」

「いえ、結構です。聞き間違いだったかも……」

そう言うとおじさん達は駅の方へ帰っていった。嘘をついたのは申し訳ないけど、再びどこか入れるところはないか探す。

☆☆☆

なんとか侵入しフィールドまで来たが、おじさん達が言っていたように誰もいなかった。

フットボールフロンティアスタジアムだと思っていたのは僕の勘違いだったのかも知れない。でも神様の謎特典で原作知識は正確なはずだから、アルファがどこのスタジ

アムを選ぶかはそのときの気分次第で、今回はここじやなかっただけなのかな。

「はあー、ほんと疲れたな」

疲れたつてのは全速力の結果なのか、時間とお金と心意気が無駄になった心の疲れなのか、はたまた転生してからの色々を振り返つてのなのか。自分でも自分の気持ちがよく分からなかったが、とりあえず芝の上に横になりたい気分だった。

この芝の上で、雷門は円堂達は伝説を作つていくことになるのかと、そんなことを考えて

「僕も雷門に行きたかったなあ。円堂と一緒にこの芝の上でサッカーしたかったなあ」

心の声が言葉となつていく。転生した頃はサッカーなんて嫌いだって言つてたのに、こうして出てくる言葉は「サッカーしたい」なのか、なんて自虐を挟みつつ。

誰かに見られたら説明に困るけど、ちよつとここで一眠りしようかな？

シユン

何か音がしたような……まるで誰かがワープしてきたみたいに。

「紫藤幻斗、お前がなぜここにいる」

やっぱり説明に困るなあ。

「紫藤、これはどうなつてるんだ？」

そして、この作品の主人公円堂守の声。どうやら先程呟いた僕の願いはすぐに現実に

なるようだった。

04 初めての試合

「紫藤、これはどうなってるんだ？」

えーつとなんて答えるのが正解なんだろう？僕は人のいないスタジアムに侵入して昼寝することが趣味だったんです……は却下だな。いい言葉が思いつかない。

「情報を確認、紫藤幻斗はインタラプト修正に付随する擬似時間固定を受けている。従来の予定通りここで円堂守と紫藤幻斗の両名のインタラプト修正を行う」

ごめんアルファはちよつと何言ってるか分からない。

「どうして紫藤さんがここに？」

「何か時空に異変が起きているのかもしれないね」

遅れて天馬とフェイ、そしてワンダバがやってくる。

「まあいい、円堂守と紫藤幻斗、お前らにはこれから我々とサッカーをやってもらおう……試合だ」

「え？どういふことだよ？それで紫藤はどうしてここにいるんだ？」

「何が起きてるの？」

「円堂さんと……じゃなくて円堂さんと紫藤さん！そいつらはサッカーを消そうとして

いるんです!」

「え? えー君は?」

そりや円堂も秋も混乱するよね。僕でも混乱してるもん。

多分あの光でワープしたけど、同じ時間にじやなくて一時間くらいちよつと未来にワープしたってことなのだろう。どうしてそうしたのかは分からない。

「俺! 松風天馬です! 説明は難しいんですけど、大好きなサッカーを守るためにここに来ました。信じてください円堂さん、紫藤さん!」

「俺は信じるぞ。サッカーが好きって言葉に嘘はつけないもんな」

「あ、まあ僕も信じるよ。うん」

とりあえず適当に相槌を打っているが、ここにしている理由をどう説明したらいいか分からない。

「そんなことよりも、紫藤さんがここにしているのは何故ですか?」

「それは私からも問う。紫藤幻斗、お前は我々の存在を知りえないはずだ。どうしてこの場所を知った?」

フエイがもつともらしい質問をすると、意外にもアルファから同調が飛んて来た。

「えーつと、尾刈斗の入学式が終わってから暇だったから円堂のここに行こうかなって思っつて。それで雷門に忍び込んだら青い光でみんながいなくなるのが見えて」

嘘を隠すには真実を織り交ぜることらしい。今言ってることは大体は真実だ。

「それで、どうしてここに來たの？」

フェイに問い詰められるが、原作知識なんて真実は到底話せない。

「あー、そう！みんなが消えたあと青い光がふわふわーってこつちの方向に行くのが見えて、それで追いかけなきゃってここに來たんだ」

「NO。それは虚偽だ。空間を繋げて転移しているため、軌跡が見えることはありえない」

頑張つて絞り出した説明も、アルファに完全に否定される。

「だが、空間を繋げたことによつて生まれた空間の亀裂なら見ることが出来るかもしれないぞ。紫藤くん、見たのは青い光じゃなくて黒い線のようなものじゃなかったか？」

「あー！そういうえばそうだったよ。ワンダバの言う通り黒い線だった。間違いない」

ワンダバのフォローのおかげでなんとか助かった。さんきゅーワンダバ。

「ちよつと私には何が起きてるのか分からないけど紫藤くんは円堂くんの友達で、私たちを助けに來たんでしょ？」

「もちろんそうだよ。円堂達が何か変なことに巻き込まれてるんだと思つてやつてきたんだ」

秋の質問には嘘にならない程度に答える。秋とは初対面だけど、信じてくれるのつて

申し訳ないけど嬉しいな。

「俺は紫藤を信じるぞ。紫藤はサッカーが大好きでいいやつだつて知ってるからな」

円堂はやっぱり天然のタラシだと思う。僕が自分でも自信を持ってずに困っていることをこんなふうには断言してくれるんだから。

「とりあえずこのアルファつて奴らがサッカーを消そうとして、天馬と紫藤は俺たちを助けに来たつてことだろ？」

「はい！そういうことです！円堂さん紫藤さん、一緒にアルファ達と戦いましょう！」

「不確定な事柄が多いが、ここで全員まとめて潰せばいいだけのこと。試合を開始する」
「……うん、試合を始めようか」

円堂や天馬はどうやら僕のことについて納得してくれたようだ。アルファは僕達を潰せたらどうでもいいって感じ。

だけど何故かフェイだけはずっと僕に疑念の目を向け続けていた。

☆☆☆

焼きそばのヘラを持って矢嶋さんが呼び出された。毎度お疲れ様です。それにしても、審判は呼ばずに実況だけ呼び出すと言うのも謎である。奥さんも審判として呼び出

せばいいのに。

アルファ達はいつの間にか1人現れ、いつでも試合を始めていいように待機している。対するこちらもフェイのデュプリによって足りない人数をカバーしている。

「それでだが、円堂くんにはGK、紫藤くんにはDFとして入ってもらいたい」

「おう！ゴールは絶対守ってみせる」

「うん、DFだね。分かった」

フェイのデュプリの数は少しでも減らした方がいいというのも分かるし、助けるために来たって言い訳したくせに試合には参加しないというわけにも行かないからテンマーズのDFとして参加することになった。不安は残るけど。

DFも経験はあるから問題ない。ただ、まだまだ僕の実力じゃ未来人相手に何か出来る気がしないだけである。原作の円堂のように「時空の共鳴現象」があるといっても、主人公である円堂や天馬達とは違ってそう上手く行くような気がしなかった。

「紫藤ありがとな、助けに来てくれて。なんだか良く分からないことがいっぱい起こって、お前がいなかったらほんと不安だったよ」

この世界で円堂と会ってからもう5年ほど経つ。僕がもう一度サッカーを始めるようになった後再び铁塔に行つて、会うことが出来た。サッカーが好きって話したらすぐに友達になってくれた。円堂は僕なんかよりずっと眩しくて、そんな円堂が僕を頼りに

してくれたという事実が嬉しかった。

「僕も色々不安だけど、こうして円堂と同じフィールドに立てるとは思ってたからさ。なんだか頑張れる気がする」

一緒に雷門に行くって約束したけど、叶わなかった。だから、こうして肩を並べられるのが奇跡に思える。

「円堂さん、紫藤さん、そろそろ試合始まりますよー」

「こーやって試合すんの実は始めてだけど、一緒に頑張ろうな」

そういうえば、円堂はサッカークラブに行くのが許されてなくてろくに実戦経験がないんだった。

「大丈夫だよ、多分。円堂が頑張ってきたの知ってるし」

——試合が始まる

05 信頼とか、夢とか

試合はテンマーズのボールで始まったが、すぐにアルファによって奪われた。

そうして手に入れたボールをアルファはフェイのデュプリ達にぶつけていく。試合に勝つことでなく、潰すことを目的としたそのプレーに、

「こんなのサツカーじゃない！」

「ちゃんとシュート打ってこいよ！」

憤りを覚えていたのは僕だけでもないようだ。その言葉を聞いたアルファはデュプリ達をいじめるのをやめ、シュートの体勢に入った。

「シュートコマンド01」

アルファの必殺シュートがテンマーズのゴールに迫る。でもその程度じゃ円堂から点は奪えないぞ。

「ゴツドハンド！」

イナズマイレブンの象徴とも言えるその金色の手は、アルファの必殺技をしっかりと受け止めた。

「やったね！円堂！」

「あれが円堂さんの伝説のゴッドハンド……」

「時空の共鳴現象」などではなく、円堂は既にゴッドハンドを習得している。僕の知るゴッドハンドのイメージを正確に円堂に伝えたら、何故か完成してしまったのだ。

円堂が受け止めたボールはデュプリのストロウ、チビットを渡り天馬へと繋がる。

「円堂さんから貰ったこのボール、決めてみせます！真マツハウインド！」

「キーパーコマンド03」

天馬はザノウの必殺技も容易く打ち破り、テンマーズは先制点をもぎとった。

試合はプロトコル・オメガのボールで再開するが、アルファはまさかの失点にこのままでは厳しいと悟ったようだった。

「天空の支配者ホウオウ、アームド！」

化身を身に纏う。化身すらよく分からない僕にはどういいうわけだかさっぱりだが、じいさん曰く化身を喰うんだっけな？少なくとも今までとは段違いな力を持つことは、ここからもうすぐに理解出来た。

さつきよりも速いスピードでスライディングを躰しながらこちらへやってくる。

「フアントムミ……」

僕も必殺技を使ってアルファを止めようとすると、目の前からアルファの姿が消えた。

「上か？」

見ると、身に纏った化身を翼のようにして僕の頭上でシユートを放っていた。必殺技を使つてないにも関わらず威力もスピードもさつきとはまるで違う。

でもきつと円堂はそれを止めてくれる。そんな確信があった。

それはいわゆる信頼なのか、ただの原作知識なのか。ただ一つ言えることはその確信は間違つていなくて、やっぱり円堂はすげえやつだったってことだ。

「サツカーが滅んで、たまるか！」

魔神グレイト！グレイト・ザ・バンド！」

化身とかいう訳分からんものを出して円堂は見事シユートを止めて見せた。

「円堂さんが、化身を？」

「ズバリ、時空の共鳴現象だな！」

「円堂！いつの間にかそんな技を覚えたの？」

「俺もよく分かんないんだけど、絶対止めてやる！って思ったら出来たんだ！」

「分からないけどできたって……やっぱり円堂はすごいよ」

天馬達が騒がしい様子なので、僕だけ黙っているわけにもいかず、驚いたようなフリをして適当に円堂と話す。こうやって知らないフリをしているとなんだか申し訳ないような気持ちになる。

ボールが外に出ているわけでもないのに長時間試合を止めるのはさすがによろしくないで、円堂からボールを貰って再び反撃に移る。

しかし先程の反撃を見てか、プロトコル・オメガは天馬達FW陣のマークを強めている。デブーンにボールを渡しながら、攻撃の目を探る。

デブーンに向かってエイナムが近づいていった。もう一度僕のところへボールを戻すようジェスチャーしたが無視され、代わりに前線のフェイに向かってロングパスが放たれた。

「甘いねえ、そのパスは」

しかしそのロングパスはクオースの素早いクリアによって阻まれてしまった。

（僕はフェイから信頼されていないのかな？）

（デュプリの操作による体力の消耗を減らすための数合わせとしてテンマーズに入れてもらったけど、戦力になるって思われてないに決まってる。

円堂は化身までして大活躍しているけど、僕なんかいてもいなくても変わらないんだ）

そんな後ろ向きな思考は観客席を駆け下りる足音によって中断された。

「おーい！

「この試合、俺も入れてくれないかな？」

「劍城！来てくれたんだ！」

「いや、俺は君の知る劍城京介ではない。京介の兄、劍城優一だ」

「優一さん、もうサッカーができるようになったんですか？」

天馬は困惑しているのだろうが、原作通り優一さんはテンマーズの一員として僕達と戦うことになった。きつと試合はこのまま原作通りに勝つのだろう。

「優一さんと戦えるなんて、夢みたいですよ！」

「俺もあの円堂さんと戦えるなんて夢のようさ。」

それから、そんな顔は似合いませんよ、紫藤さん。一緒にプロトコル・オメガを倒しましょう」

優一さんになんだか僕のことを知ったような口で話しかけられる。もしかしたら10年後の僕の交友関係は思いの外広いのかもしれない。

「紫藤さんはすごい人だつて信じてますから」

そんなことを優一さんに言われたけど、僕には化身もなければ主人公補正とやらもない。その言葉に自分自身が一番納得出来ないまま、優一さんを迎えて試合が再開する。

クオースのクリアで試合は中断したため、ボールはテンマーズからだ。新しく参戦した優一さんを基軸に攻め上がる。

優一さんの足元にボールが届くやいなや、華麗な足さばきとスピードでプロトコル・オメガのディフェンス陣をゴボウ抜きする。

これが未来世代の力か、なんて感服している暇もなく、

「魔戦士ペンドラゴン！アームド!!」

優一さんは未来世代の力の象徴を見せつけてくる。

「天馬くん、君も出来るはずだ!」

「うおおお! 魔人ペガサスアーク! アームド!」

「で、出来ました! 優一さん!」

なんて言っているうちにまた別の未来世代さんが化身アームドを習得していた。

(化身、サッカーが好きだつて気持ちちが形になったもの、だったっけ? 円堂が化身を出せて、僕が化身を出せないのは気持ちちが足りないから。なのかな?)

(そりゃ、そうだよ。一度諦めた僕と一度も諦めなかった円堂。どっちがサッカーが好きなのかなんて分かりきってる)

勝利の女神は諦めないやつが好き

誰が言ったのだったかその言葉は、僕に勝利の女神など微笑まないということ伝えていたように感じた。

☆☆☆

「なんだそれ？すつげえな！」

化身アームドという知らなかった新しいサッカーの姿を見て、根っからのサッカー馬鹿である円堂はその興奮を友人にも届けようとした。

「紫藤！見たかあれ？」

返事はない。

「あれ？どうしたんだ？大丈夫か？」

紫藤はゴールでも円堂でもないどこかを見つめていた。

「この試合、棄権させてもらおう」

アルファがそう宣言した。

「それじゃあ、雷門サッカー部は守られたんですね！」

アルファの棄権、すなわち雷門の勝利に喜ぶ天馬達。

「作戦変更だ。紫藤幻斗、お前のインタラプト修正を行う」

アルファは紫藤に近づき、スフィアデバイスを取り出した。そして橙色のボタンを押す。

ストライクモード

「紫藤幻斗、サッカーを嫌いになれ」

「僕は紫藤さんはサッカーが大好きだということを知っていますから」

「そうだ！紫藤がサッカーを嫌いになるなんてありえないぞ！」

優一と円堂の反論は無視して、アルファは紫藤に向かって全力でボールを蹴りこんだ。

ボールは紫藤に直撃し、辺りに土埃が上がった。

「紫藤！大丈夫か？」

円堂が心配して声をかけるが、

「大丈夫だよ！」

土埃から出てきたのはピンピンした紫藤の姿だった。

☆☆☆

「俺は紫藤さんはサッカーが大好きだということを知っていますから」

「そうだ！紫藤がサッカーを嫌いになるなんてありえないぞ！」

（どうしてみんな僕のことをそんなに信じてくれるのだろうか）

（こんな辛い気持ちになるくらいならわざとアルファに負けてサッカーを嫌いになるうだなんて考えた僕が馬鹿みたいじゃないか）

（そうだよ。みんなその通りだよ。僕はサッカーが大好きなんだ）

「残像……」

全力で僕に向かってボールを蹴りこむアルファを見ながら、僕は小さくそう呟いた。

「紫藤！大丈夫か？」

「大丈夫だよ！」

僕にサッカーが大好きだということを思い出させてくれた感謝をこめて、出来る限りの元気な声で僕はそう返した。

☆☆☆

結局、アルファ達はそのまま帰っていった。

天馬もフェイもワンダバも優一さんもいつの間にか帰ってしまい、スタジアムには僕と円堂と秋の3人だけになっていた。

「なあ、今のって夢だったりするのかわ？」

「夢じゃないよ、多分。僕達、歴史を守ったんだよ」

夢を疑う円堂に僕はそう答えた。

「もう日も暮れたし、家に帰りましょう」

秋にそう言われて、僕達は家に帰った。

☆☆☆

「プロトコル・オメガ？なんのことだ？」

不思議なことに、家に帰ってから電話で円堂にその話をするとうっかり全てを忘れていた。

(もしかして、本当に夢だったりしたのかな?)

もし本当にあれがスタジアムで昼寝をして見た夢だったのだとしたら、今こんなに疲れて眠たいわけがない。

そう思っ僕は眠りについた。

06 幽体離脱

今日は尾刈斗の入学一日目。昨日の疲れは十時間の睡眠によっておおよそ回復し、希望と不安の入り交じった足取りで尾刈斗中へと向かう。正確に言うならば、希望2：不安8くらいの重たい足取りだ。

あの学校でまともな授業を受けられるわけではない。

☆☆☆

前言撤回。授業はそこそこまともだった。最初の授業ということで大体の授業は自己紹介や授業方針の説明だけで終わったが、前世の中学校で受けたものとおおよそ変わらなかった。

面白かったのは理科の先生が、

「私が教える内容を真実だと思わないものもいるだろう。しかし一般的にはこれが真実だとされていて、高校受験の際には覚えていないといけないから信じなくてもいいからちゃんと覚えて欲しい」

と言ったことだ。オカルト的な性質と授業とはある程度割り切って別物として扱っているらしい。

授業の種類も英数国理社とほとんど普通の学校と変わらない。ただ一つ他の学校にないだろうと思うのが月曜日にあるらしい心理学の授業だ。いわゆる総合の時間を使って地木流尾刈斗中監督。催眠術をかけていた張本人先生が教えてくれるんだとか。

そんでまあ知つての通り地木流先生はサッカー部の顧問でもあるわけなんだけど、サッカー部へと向かうのがほんとに怖い。だってあいつら催眠術かけるんだよ？

意外にも広く清潔感のあるサッカー部室を前に足を踏み入れることが出来ずウロウロしている、

「お前、入部希望者か？」

紫色の髪先輩が話しかけてきた。

「オレは月村憲一つきむら けんいち原作時中3、FW。満月で凶暴化する狼男体質。サッカー部の2年だぜ」

聞いたことのある名前だ。尾刈斗のFWにいたような気がする。

「僕は紫藤幻斗。サッカー部の入部希望です」

「こんな初日からサッカー部来てくれるなんてありがたいぜ。今から練習あるから見ていくか？」

「はい！」

「月村君もさっそく新人さんを見つけたのかい？」

「うわっ！」

赤い髪の毛に白く塗られた顔。いわゆるピエロの格好をした人が突然話に入ってきた。そういえば真・帝国だったかにも似たような格好の人がいたような。

「驚かせちゃってすまないねえ。私は道化みちばけいど一糸原作時高1、MF。オリキャラ。ピエロなのに部長。サッカー部の3年生さ。それから私の後ろにいるのが三途君だよ」

「三途渡原作時中2、DF。幽体離脱経験があるとかです。よろしくお願いします」
道化先輩のインパクトで隠れて気が付かなかったが、後ろには緑色の長髪の子が立っていた。名前に聞き覚えがあるから、彼もきつと原作にもいたキャラなのだろう。

部室のドアを開けると、それはもう个性的すぎる面々が僕を歓迎してくれた。

「うがー！一年よろしくうがー！」

「よ、よろしくお願いします」

僕にできたのはただ挨拶を返すだけだった。

「それにしても月村、今日が満月じゃなくて良かったな。あと三日早かったら新入生達に引かれていたぞ」

「お前が言うな魔界。絶対お前の見た目の方が引かれてるぞ」

「俺は魔界の住人だからこれが正装なんだ」

月村先輩と魔界まかい崇雄たかお原作時中3、MF。おぼけのような被り物をして魔界の住人を自称するという名前の白い不思議な覆面を被った先輩が何やら言い争いをしていた。魔界先輩は月村先輩と同学年の中学2年生。つまりはそういう時期なのだろう。

「その1年の君、タロットに興味はありますか？」

部室の隅でカードを持っていた先輩が話しかけてきた。

「僕ですか？」

「君は紫藤君でしたっけ。僕は多呂斗たろと占原せん原作時中3、DF。オリキャラ。名前の通り占い師キャラです。僕に君を占わせてください」

「多呂斗先輩は占いが出来るんですか？」

「いいえ、タロットが君について教えてくれるだけですよ」

何を言ってるかはあまり分からなかったが、とりあえず多呂斗先輩が僕についてタロットカードで占ってくれらしい。

「何について占ってくれるんですか？」

「いいことを聞きますね。タロットカードは何についてなのか詳細に決める必要があります。今回はあなたの尾刈斗での今後について占うとします」

先輩が丁寧にカードを混ぜ、僕も少しだけシャッフルした。そしてシャッフルし終わったカードの山から上から1枚目と12枚目を出して表に向けた。

「正位置の吊し人と逆位置の愚者ですね」

「これはどういう意味なんですか？」

「正位置の吊し人は自己犠牲、修行、再生を表しますね。そして逆位置の愚者も希望や再生、旅、もしくは無知を表します。

つまり君にとってこの尾刈斗は修行の場であり、何か大切なものを再生させる場所になるのでしょうかね。

それから悲しいことに、君はきつと誰かの自己犠牲の姿を見て無知を嘆くことになりました」

「あ、ありがとうございます」

半分くらいしか意味は分からなかったけど、再生する何か大切なものというのには「サツカーに対する熱意」とかいうものなのだろうか。占いは誰が聞いても当てはまるようなことを言ってるだけだったりすることも多いからあんまり信用するようなもの

でもないのかもしれないけど。

自己犠牲と無知。こっちは本当になんのことなのか分からなかった。

自己犠牲——そう言われて思い出すことは一つだけある。でも僕はそれについて無知では無いはずだ。

そもそも僕はこの世界において無知とは対極の存在だし。知りたくないこともたくさん知っている。多呂斗先輩には申し訳ないけどやっぱりタロット占いに特に意味なんてないと考えることにしよう。

「みんな賑やかにやってるね。もう新生生が2人も来てくれてるんですか」

入学式で挨拶したときと同じ、優しいモードの顔で地木流先生が部室に入ってきた。

「はい、1年3組の紫藤幻斗です」

「1年2組の三途渡です」

まだちゃんと挨拶をしていなかったのを思い出し、僕と三途は監督に挨拶をする。

「みんな癖の強い子達だからちよつと怖いかもしれませんが、根はいい子達ばかりだから安心してください。」

今からグラウンドで練習をするので見学しておいてくださいね。入りたいて思ってくれたら明日から体操服持ってきてくれたらいいので」

☆☆☆

練習を見学している間、同学年である三途と少し話をする事になった。僕も三途も緊張していて、2人ともしばらく何も話せずにしたけど、三途から話かけてくれた。

「キミはもう入るか決めたの？」

「うん。だってそりゃサッカーが好きだから」

昨日の一件で、僕はやっぱりサッカーが好きなんだって分かった。それにイナズマイレブンの世界に転生したのにサッカーと関わらずに生きるってのも変な話だし。

「僕も同じかな」

三途も原作でそうであつたようにサッカー部に入ることに決めたらしい。

「そういえばキミってさ、死んだことある？」

「……ないよ。そんなの」

三途の突然の質問に少し固まったけど、嘘をついて答える。

「僕はあるんだ。昔川で溺れて病院に運ばれたけど、そのまま死んじゃったんだ」

どうやらただ話し始めるためのきっかけとしての質問だったらしい。それにしても尾刈斗だからかやっぱり変なことを言う。

「こうして生きてるのに何言ってるの？って思ってるでしょ。

でも僕ははつきり覚えてるんだ。僕が、僕の体から出ていく瞬間。ああ僕って死んだんだって分かった。でも結局、僕はこうして生き返った」

「それは……よかったね」

普通に考えたら荒唐無稽な話なんだろうけど、少なくとも転生とかいうわけわからん体験をした僕はそれを否定できる立場にはない。

そもそもこんな超次元な世界で何が起きててもおかしくないし。

「それでもときどき分からなくなるんだ。もしかしたら僕はもう死んでいて、ここにいるのは幽霊に動かされた死体かもしれないってね」

「僕には、ちゃんと生きてるように見えるけど」

ちよつと不思議ではあるけど、尾刈斗においては多分平均的な不思議さだろう。少なくとも不死先輩とかに比べたらだいぶ人間味がある。

「僕はサッカーをしているときに一番生きてるってことを実感できるんだ。サッカーの興奮で心臓が高鳴るとき、僕はちゃんとここに生きてるんだって自信をもてるんだ」

三途のその霊体験は特殊だけど、サッカーに対する気持ちは僕にも分かるかもしれない。

今はこうしてサッカーができていくけど、一度辞めていたときの僕は「魂が抜けてい

たよう」だったらしいし。

☆☆☆

月村先輩の提案でちよつとだけ先輩方と一緒にボールを触りながら、見学が終わる頃にはもう明日が楽しみになっていた。

朝に抱いていた不安なんてとつくに消え去っていた。

1つ前のFF編

07 イカれたメンバーを紹介するぜ

尾刈斗中サッカー部に入部して早くも四ヶ月が経った。てことで個性的な尾刈斗のみんなを紹介しようと思う。

「そんな弱つちい必殺技で私を止めようとも思ってるのかい？レッドバルーン」

相手のDFのクイックドロウを赤い風船と共に空に飛ぶことで華麗に回避しているのがキャプテンの道化みちぼけいと一糸先輩だ。

そのピエロのような狂った外見と口調とは裏腹に、部内随一の常識人である。部員勧誘も一番積極的にやっていて、僕を除けばだいたいの新入生は道化先輩に連れてこられた。そろそろ部長を交代する時期だけど、任せられる後輩がいなくて困っているらしい。

「道化ナイスパス！悪夢を見せてやるよ、ナイトメアロード」

パスを貰って必殺技で中央に切り込んだのが道化先輩と同じ3年生の筒井悪夢つひいあくむ原作時高I、MF。オリキャラ。悪夢を見がち先輩。

原因不明の悪夢に悩まされているそうで、地木流監督のおかげで最近マシになっているものの常に目の周りにはクマができています。悪夢の辛さは僕も良く知っているから筒井先輩にはなんていうか同情してしまう。

「決めな、堀田」

「終わりサ、ポルターガイスト」

尾刈斗サッカー部のエースである堀田騷靈原作時高1、FW。オリキャラ。元ネタは必殺技名にもなってるそれ先輩が筒井先輩からボールを貰い、必殺シュートでゴールを奪う。

道化先輩、筒井先輩、堀田先輩の3年生トリオで尾刈斗中は竜宮中から開始5分で先制点を得た。

そういうええ言っただけじゃなかったかもしれないけど、この試合はフットボールフロンティア地区予選の初戦。そして僕はベンチからそれを眺めてるってわけだ。こうしてベンチに座ってる以上いつでも試合に出られる準備はしなきゃダメなんだけど、見た感じこのまま尾刈斗中が竜宮中に負ける気がしない。

ということメンバー紹介の続きをしよう。

キックオフしてすぐに魔界崇雄先輩が怨霊でボールを奪う。魔界先輩はただの厨二病だと睨んでいる。

そして月村憲一先輩のフアントムシユートで2点目。今日は月齢が18だから先輩はかなり調子がいい。月村先輩のおかげで僕は毎日月齢を調べる癖がついてしまった。それにしても2点目が早い。

不乱拳原作時中3、DF。死者蘇生を目指してるが生物は苦手先輩のフランケン守タイン（あれは化身なのか？）、多呂斗占先輩のザ・タワー（なんで塔子の十八番が使えちゃうの？）、百谷鬼行原作時高1、MF。オリキャラ。百鬼夜行をもじつただけ先輩の百鬼夜行（名前そのままに見えるのは錯覚です）、冥門希望原作時高1、DF。オリキャラ。元ネタは地獄の門先輩のザ・ゲート・オブ・ヘル（技名がもうかつこいい）によるDF陣の固い守備で不死祀原作時中3、GK。痛みを感じない体質らしい先輩が控えている。ゴールにはボールがやってこない。

そして地味に活躍しているのが武羅渡牙原作時中2、FW。ナイターで活躍し、トマトジュースを好むドラキュラ体質。僕と同じ1年生のくせしてもう既にスタメン入りしている。

先輩方だけだと守備が厚い代わりに攻撃の人数が少ないから、それを補うために入れられたんだらう。これならMFである僕が選ばれなかったのも仕方ない、と適当に自分に言い訳しておく。

ちなみにベンチに座っているのは僕の他に、一回死んだことがあるらしい三途渡と控

えキーパーとして鉈なた十三原作時中2、G.K。ホツケーマスクを被り、鉈を振り回してヤバイやつ、心靈写真を撮るのが趣味らしい玉響たまゆら真原作時高1、M.F。オリキヤラ。元ネタは玉響現象先輩に普通っぽい見た目して一番ヤバイやつだと僕が思っているたまゆらまことかげやましんせき陰山時史原作時高1、M.F。オリキヤラ。元ネタは陰謀論とか先輩だ。陰山先輩は聖徳太子が今でも生きていて日本を操っていると信じているらしい。名前を最初音で聞いたときはあの男の親戚かと身構えたが、実際話してみると別ベクトルでヤバイ人だったから以降会話は避けている。

とまあベンチメンバーの紹介も終えたあたりで前半が終了した。尾刈斗のいつものアレすら使うことなく、7-0で勝ち越している。ちなみに内訳は堀田先輩が3点、月村先輩が2点、武羅渡が1点、道化先輩が1点だ。

「監督、竜宮中相手にアレは必要ですか？」

道化先輩が地木流監督に後半の作戦について質問する。先輩は目上の人にはいつもの口調を封印して敬語を使える人なのである。

「いや、要りません。このまま個々の実力だけで問題なく勝てるでしょう。一応必殺技を連発していた百谷と筒井は下がって、玉響と三途が入ってください」

僕の名前が呼ばれなかったのはちょっと不服ではあるけど、三途が活躍してくれるの

ならそれでもいいかとかがんばれのハンドサインを送る。

堀田先輩と月村先輩と武羅渡のFW3人が1点ずつ得点を重ね、結果は10―0で試合は終了した。地元の強豪校と呼ばれるだけの威厳を見せ、尾刈斗中は地区予選2回戦へと駒を進めた。

2回戦の相手は王者帝国。この地域のFF本戦出場を狙う学校が、必ず超えなければならぬ壁。尾刈斗の前に高く高くそびえ立っていた。

☆☆☆

「尾刈斗中でいいんじゃないの？帝国には及ばないけどこの辺りじゃ強豪校なんでしょ？」

その発想はなかった。原作でも最初の方に戦っただけで、強さは催眠術ありきの最弱級。そんなイメージしかなかったけど、他の学校に比べたら弱くは無いはずだ。

「尾刈斗中かあ……」

「ほんとなんで影山さんの話断っちゃったのかしら。タダであの帝国に通えるなんてこんなないことないのに」

母さんだって僕をいい学校に入れてあげたいって気持ちがあるだろうし、そもそもサッカーが好きな僕が日本一の帝国学園からの招待を蹴った意味が分からないのだから。

「でもそれは——」

「幻斗が考えて決めたこと、なんでしょ」

僕の言いたかったことを先回りして言われる。

「だから母さんがこうやって色々学校探してるのよ」

母さんには本当に感謝しかない。

「そういえば幻斗って結構頭いいでしょ？通知表オールよくできるだし」

さすがに小学校の勉強でつまずくわけがない。刃也ほどではないけど頭はいい方はずだ。

「それじゃあこの奨学金システム使っちゃったらいんじゃないの？」

「でも奨学金って後で返さなきゃいけないでしょ？」

「それが尾刈斗で成績上位になったら全額免除になるんですって」

なるほど、悪くない話かもしれない。尾刈斗中で幽谷と一緒にゴーストロックを使う僕の姿を想像するとちよつと変な気分になったけど、我が家の経済事情を鑑みるに最善の選択のようにも思える。このまま物語の中心からフェードアウトしていくのに比べ

たらはるかにマシだ。

こういうのはもう少しじっくり考えるべきなのかもしれないけど、多分この決断は揺るぐことはないんだろうなって気がしてた。

「じゃあ決めた。僕尾刈斗に行くよ」

08 負けイベント

「俺たちの引退試合、楽しんで終わりたいネ」

堀田先輩のその言葉に僕はびっくりした。

「先輩は次の試合負けると思ってるんですか？」

3年生の先輩達はこのFFを最後に引退する。でも次の試合は決勝でもなんでもなく、まだ2回戦だ。きつと先輩は帝国に勝てるはずがないと思って引退試合だと言ったのだろう。

「そんなの、勝てるわけないヨ」

「でもそんなの、戦って見るまで分からないじゃないですか」

先輩のその勝つことを諦めた姿は、見ていたくない。

「でも紫藤だつて帝国の強さくらいは分かっているだろ？」

道化先輩が会話に混ぜてくる。どうやら道化先輩も勝てるとは思っていないらしい。

「でも、小学校の頃クラブで鬼道のいるチームから点を取ったことがあります」

勝てたわけではなかったけど、全く何もできないわけじゃない。僕の経験がそれを示

している。

「こんなこと言うのは癪だけど、オレ達のシユートじゃ帝国ゴールをぶち抜けねえ。満月の日のオレのフアントムシユートでも必殺技を使わせられるかなってぐらいだ」

確かに月村先輩の言う通りかもしれない。あのときはキーパーが源田じゃなかった。どう頑張つても点が入らなければ勝てるはずがない。

「堀田のポルターガイストも月村達のフアントムシユートも動きが不規則だったり本物を見分けにくかったりするだけさ。威力は対してないからどれも帝国キーパーの使うパワーシールドを貫くことができないんだよ。

それに今年は1年が帝国の正キーパーらしいね。1年だけ過去の中のキーパーよりも強いって噂さ」

道化先輩が尾刈斗は帝国に勝てない理由を丁寧な解説してくれる。

「それでも、絶対なんてことはありません。帝国の調子が悪かったりしたら僕たちにも勝機はあるんじゃないでしょうか」

「まあ、それもそうだね」

帝国が本調子なら尾刈斗に勝ち目がない。それを否定できなかったことがどうしても悔しかった。

ちなみに、多呂斗先輩の占いによると正位置の死神と逆位置の塔で「窮地に陥って終わり」だそうだ。

もうちよつとみんなのモチベーションを下げないような言い方はないのだろうか。

☆☆☆

帝国学園との試合が始まる。僕は今回もベンチからのスタートだ。僕なら鬼道を止められると地木流監督にアピールしたが、少しは他のチームメイトを信用しろと断られた。

帝国陣地を見渡すと鬼道や源田や寺門、五条の姿が見える。キャプテンマークをつけているのは鬼道だ。

神成FCで共に戦ったチームメイトはどこにも見当たらない。

帝国ボールで試合が始まった。

「もっらうヨ、怨霊」

キックオフの直後、堀田先輩が必殺技で帝国のFWからボールを奪う。幸先のいいス

ターゲットだ。

帝国のDF陣のスライディングを避け、1人でゴール前まで突き進む。どう考えても帝国は本気を出していない。それくらい先輩も分かっているんだろうけど。

「悔ったことを後悔しな、ポルターガイスト」

ゴールに向かって蹴りこんだボールはなんの力が働いてか不規則に方向を変え、ゴールの左上を狙う。

「フッー」

しかし帝国のキーパー源田はそれを必殺技すら使わずに止めてしまった。

源田の手から投げられたボールは素早いパス回しであつという間にフィールドの中央にいる鬼道のもとへと行つてしまった。

「さあ、反撃開始だ」

「止めるうがー!!」

「甘いな、イリユージョンボール」

不乱先輩が鬼道の前に立ち塞がるが、鬼道はボールを3つに分裂させ必殺技を使う隙すら与えずに抜き去っていく。

(ぼくならあれを止められたかもしれないのに……)

「デスゾーン開始」

寺門達FW3人がボールを中心に回転しながら浮かんでいく。

不死先輩はゆがむ空間を使おうと手を怪しく動かすが、すぐに無意味だと気づき別の必殺技の構えに入った。デスゾーンを使う3人は全くゴールの方を見ていない。おそらく彼らはゆがむ空間のからくりを知っていて、催眠術への対策としてゴールを一切見ずに必殺技を放とうとしているのだろう。

「デスゾーン！」

堀田先輩や月村先輩の必殺シュートよりはるかに威力の高いシュート技が尾刈斗ゴールを襲う。

「ザ・タワー！」

「ザ・ゲート・オブ・ヘル！」

「ロケットこぶし」

巨大な塔と恐ろしい装飾の施された門が地面からせりあがって現れる。多呂斗先輩と冥門先輩のシュートブロックでデスゾーンの勢いは大きく削がれ、不死先輩の必殺技でなんとかボールを弾き返す。

しかし帝国はそう甘くはない。

「貰ったぜ！百烈ショット」

弾いたボールをついさつきデスゾーンをうっていたはずの寺門に拾われ、百発（は多

分誇張だけど)の蹴りを込めてシュートされる。

「キラーブレード」

不死先輩は咄嗟に青い刃を出してシュートを止めようとするが、ロケットこぶしを使用した直後で体勢も整っていなくて押し切られてしまう。

「さすが帝国。生半可なディフェンスでは押し込まれてしまいますね」

「監督、やっぱり僕を出してください。僕がいたら少なくとも鬼道の動きを抑制させることができます」

「いいえ、君は出しません。君にはまだ何も見えていません」

冷静に点を決められた理由を分析している監督にもう一度試合に出してくれるように頼み込んだが、なんだかよく分からない理由で断られる。

原作でも久遠監督が似たようなこと言ってたような気もするけど、何が見えていないのか教えて欲しい。

「さあ、気を取り直して行くぜ」

月村先輩がボールを持って駆け上がろうとするが、やはりさつきは手加減されていたようで帝国お得意のキラーズライドでボールを取られてしまう。ボールはまたもやゲームメーカー鬼道のもとに渡り、鬼道はイリュージョンボールで百谷先輩を抜き去

る。1点目と同じ流れだ。

「同じ展開になるとは思うなよ」

尾刈斗は寺門らFW3人を強くマークすることでデスゾーンを封じる。しかし3人にマークをつけるということはDFを3人減らすことと同義。

当然あいつだつてシュート技の一つや二つ持っている。

「ツインブースト」

名前も知らない帝国MFと連携して放たれたシュート。きつとフィールドにいる全員と目を瞑つてでもできるように練習しているのだろう。

「くそつ、間に合わねえ」

「ロケットこぶし」

FWのマークについていたせいでシュートブロックも間に合わず、不死先輩の飛ばしたその拳は帝国のシュートを止めるには力が足りなかった。

また失点だ。

「監督、アレは使えないんですか？タネは割れて対策はされているでしょうが、少なくとも相手の視覚や聴覚を制限できるはずですよ」

このままだと失点を重ねて負けるのが目に見えている。成功すると限らなくても、何

か手を打つべきだと監督に提案する。

「いいや、無意味です。少なくとも初めのうちは聴覚を封じることができないにはできませんが、次第にそれも出来なくなります」

「どうしてですか？」

「慣れるからです。ゴーストロックは不可思議な動きと強迫的な言葉が合わさって初めて効果が現れます。逆にどちらか片方だけだと目と耳が慣れて『この動きや音なんの異常もない』と勝手に脳が判断します。

そうなると結局こちら側はフィールドプレイヤー3人に奇妙な踊りをさせているだけになってしまいます。

君達1年生は知らないでしょうが、去年のFFでの帝国戦で同様の事態が起きました。一体どうして帝国が途中からゴーストロックを無効化できたのか、分かったのは試合が終わった後でした」

少なくとも心理学とかそういった方面において、地木流監督は誰よりも信用できる。今言ったことは間違いのないことなのだろう。

それはつまり、尾刈斗に打開の策はないということだ。

絶対的な敗北。それがはつきりと輪郭を帯びる。

僕を試合に出してくれたら、まだ何かできるかもしれないのに。

09 変えられること

河川敷。

「紫藤、久しぶりー！」

「久しぶり、 円堂」

電話で話すことは何度かあったが、僕が部活に忙しくして鉄塔にも行かなくなつたせいで会うのはあの入学式以来だ。円堂はあの日の記憶がないらしいからもっと会つてないことになるのかもしれない。

「こいつが紫藤ってやつか。ずいぶんちっこいけどほんとにサッカーできるのか？」

「尾刈斗中1年、紫藤幻斗。よろしくね。まあそれなりにはサッカーできる方だと思つてるよ」

「まあいい、FWの染岡だ。よろしくな」

まるでカタギとは思えない強面のストライカー、染岡竜吾。身長差もあつてか萎縮してしまつた気持ちをなんとか隠して自己紹介した。

「紫藤、俺のことは覚えてるか？」

「半田でしょ。小学の頃に何回か戦つたはず」

「へえ、覚えててくれたんだ」

半田のいるチームと戦ったとき、原作キャラである半田の姿に少し興奮して記憶に残っていた。でも、正直目立った活躍をしていたとは言えない半田のことを名前も含めて覚えてるっていうのはちよつと不自然だったかも。

「紫藤くん、久しぶり」

紅一点、マネージャーの秋が話しかけてくれた。秋とはあの入学式の日初めて会って……

あれ？

「あれ？木野は紫藤と会ったことがあるのか？」

「紫藤くんとは挨拶を交わした記憶があるんだけど……それっていつだったっけ？」

「ま、まあいつでもいいじゃん」

半田が時空の闇に触れてしまいそうになったのでなんとか誤魔化す。

「ボクは松野空介。マックスって呼んでね。ボジションは未定かな」

「そして俺が風丸一郎太で全員だ。今日はよろしくな、紫藤」

雷門中サッカー部全員の自己紹介が終わった。

原作の時期にはサッカー部にいなかったマックスこと松野空介。円堂の使うゴッドハンドを見て「キミとなら退屈しなさそう」と入部を決めてくれたらしい。その日の夜

に円堂が電話で教えてくれた。

そしてもう一人、本来なら陸上に打ち込んでいるはずの男、風丸一郎太。風丸が陸上部に行かず円堂が作ったサッカー部に入ることにした理由は、多分僕にあるのだろう。原作と違いが生まれてる部分は全部元を辿れば僕のせいなのかもしれないけど。

風丸は円堂と小学校の頃からの友達で、つまるところ僕と円堂と風丸は一緒に鉄塔で遊んでいたことがある。

でも僕と円堂が雷門でサッカーをする夢を語り合う中、風丸は中学で陸上部に入るんだと一人離れて見ていた。

僕が雷門中には行けないと円堂に伝えた夜、風丸は鉄塔にいなかった。後でそれを円堂から聞いて、もしかしたら円堂を心配に思っただけであげたいと考えたのかもしれない。

「紫藤、ボーつとしてどうしたんだ？」

「あ、ごめん」

「風丸に注意されて回想を抜け出す。最近昔を顧みることが多い気がする。前世を足すともう30才近いから心がオッサンになってしまったのかな。」

「キミが必殺技を教えてくださいるって話なんだよね？」

マックスの言うとおり、ここに来た目的はみんなに必殺技を教えることだ。

「そうそう、俺達も円堂みたいに必殺技が欲しいと思ってな。でもなんていうか、円堂は人に教えるのにはあんま向いてないだろ？」

「風丸の言うとおり、ギューンとしてドンだ！みたいなのはつかでさ」

円堂の相変わらずの語彙力の無さに半田も苦勞しているらしい。

「それで俺が紫藤を呼んだらどうだって提案したんだ」

「なるほどね」

「どうやらこの場を整えてくれたのは風丸のようだ。わざわざ尾刈斗中サッカー部が休みの日を調べて日程を調整するなんて円堂にしてはしっかりしすぎているなど思っていたところだった。」

「それで？お前はどんな必殺技が使えるんだ？」

染岡が僕の使えるの必殺技を聞いてくる。当然気になることなんだろうけど、やっぱりちよつと怯えてしまう。まあいつかは慣れるさ。

「僕が今使えるのはドリブル技のイリュージョンボール」

その場にあつたボールを踏みつけるように分裂させ、くるくると3つを漂わせる。

「ブロック技のファントムミスト」

左手を掲げ、そこから黒いもやを出して辺りを覆う。

「ドリブル技の残像」

もやがちように晴れてくるころに、残像を残して後ろへ下がる。

「シュート技のフアントムシュート」

ボールを分裂させ円堂に必殺シュートを放つ。

「これだ！」

キーパーとしての勘なのか、円堂は幻に惑わされることなくキャッチしてみせた。

(それでも一応必殺シュートなんだけどなあ)

まあ円堂の実力なんてとつくに分かってたことだし、気にせず最後の技を使う。円堂のいる方向へ一瞬で加速。通り過ぎる瞬間に円堂が足元へ落としたボールを奪い取る。

「最後がディフェンス技のクイックドロウ。これは動作もシンプルで現実的だから、初めに必殺技の感覚を掴むには最適だと思う」

僕が初めに覚えたのはイリユージョンボールだけど、やっぱり刃也の言う通りシンプルな既存の必殺技から始めるのが正攻法だ。

他人に何かを教えるってのは初めての経験だけど雷門の強化は必須。できる限りの魔改造を施そう。僕が抜かれてしまうまでね。

☆☆☆

クイツクドロウの動きやコツを教えていると、僕の3年間の努力も嘲笑うようにすぐにみんな必殺技の感覚を掴んでいった。スポンジのようになってのはこういうときに使う言葉なのかもしれない。

全員僕からしたら信じられないくらい習得が早いのだが、一番初めにクイツクドロウが使えるようになったのはマックスだった。原作でも自力で習得していただけあって、僕の真似をしていたらなんかできたらしい。

マックスに続いて風丸も覚えた。半田と染岡はまだだが、もう数日したら覚えてしまうのだろう。GKであり今のところディフェンス技を覚える必要のない円堂は少し離れて1人タイヤ特訓に励んでいる。なんか申し訳ない。

「クイツクドロウ！」

目にも留まらぬ速さで僕からボールを奪う風丸。悔しいことにそのスピードは僕よりもはるかに速い。

「もう完璧だね。教えられることなんてなんにもなくなっちゃったよ」

「そうか、ありがとうな紫藤」

「どういたしまして」

もういつ追い抜かれるかも分からないから、感謝はありがたく受け取っておく。

「そういえば紫藤、あの技について教えてくれないか?」

「あの技って?」

「風のように走るドリブル技、疾風ダツシユ。昔お前が言つてただろ?」

「ああ、そういえば」

それぞれの必殺技を練習する僕と円堂を保護者のように見守つてた風丸に「風丸も必殺技を覚えたらどう?」って提案したんだつた。薦めた必殺技は当然疾風ダツシユ。原作云々を抜きにしたとしても足の速い風丸にぴったりの技だ。

結局あの後どうなったんだつけ? まあ俺には要らないって断られたんだろう。

「僕も使えるわけじゃないし、見たことがあるだけだからあんまりちゃんと教えられないかもしれないよ」

見た、というのは画面の中での話だけだ。

「それでも構わん。紫藤、頼んだ」

「とりあえず、全速力でドリブルしてみて」

「ああ、分かった!」

競技前の陸上選手のように少しストレッチしたあと、僕の言つたとおりに全力でドリブルした。さすが風丸、もしかしたらボールなしで僕が走るよりも速いかもしれない。

でも……

「なんか違うね。速さのためにコントロールを犠牲にしてるから簡単にボールを奪われるし、それに……」

「クイックドロウのほうがもつと速かった」

「そう。超次元って言われるだけあって、必殺技は簡単に常識を打ち破るんだ。今のはただのドリブルでしかない」

もし風丸が陸上で日本一の足の速さを持っていたとしても、サッカーグラウンドの上では疾風ダッシュなどのスピード系の必殺技を持っている選手に勝つことはできない。

「クイックドロウの加速する瞬間の感覚を再現してみて。それから、緩急つけて加速と方向転換を繰り返すイメージで」

「ああ、やってみる」

☆☆☆

「なあ紫藤、何か強いシュート技は知らないか？」

雷門の点取り屋を自称する染岡はクイックドロウだけで満足できないらしい。

「走り込みをさらに速く、足のふりあげをさらに高く、キックの瞬間をまうドラゴンをイメージしてヒネリを加える……」

この世界でこの技が昔からあるのかなんてどうでもいい。原作でも染岡の代名詞であつたこの技は、きつと雷門を強くしてくれるだろう。

強くならないと、いけないから。

☆☆☆

夕方。

「今日はありがとうな、紫藤」

「円堂には教えられるようなことがなかったけどね。でもほんとに楽しかったよ。うん、本当にね」

「落ち込んでたのはやっぱりFF2回戦で負けたからか？」

あまり他の学校の対戦結果などを知ろうとしない円堂でもさすがにそれは知っていたらしい。

円堂はあんまりデリカシーがない。いや、今の今までこの話題を避けていたのは気を遣ってくれていたのか。

「あんまりそうは見えないようにしてたつもりなんだけどね」

結局あれが道化先輩達の引退試合になって、部長は月村先輩に引き継がれた。そして

僕は最後まで何が見えていないのか分からないままだった。

「来年こそ雷門中もFFに出れるように部員集めなきゃ」

多呂斗先輩の予言を覆すことは出来なかった。僕に未来を変えるだけの力なんてなかったのかもしれない。

「それに円堂、おじいさんの特訓ノートも大切だけど、強くなるためには他人のプレーを盗むのも大切だよ。FFに出場しないにしても見に行ったりした方が良かったんじゃないの？」

でも、僕にだって変えられることは何かあるはずだ。

「FFの決勝は明日でしょ？テレビでもやるらしいし見てみたらどう？」

いい方向に変わるとは限らない。取り返しのつかないことが起きてしまうかもしれない。それでも……

「ちなみに僕はもうチケットを予約してるからね。当日スタジアムまで行くつもりだよ」

10 救出大作戦

目が合った。

ヤバイ、殺される。

☆☆☆

作戦は最初の方は順調だった。

試合が始まる3時間前に駅に着いた僕は、豪炎寺の家へと向かった。

円堂のように豪炎寺とも顔なじみだったりするわけじゃない。それなのにどうして家を知っていたか、一言でいうと尾行したからだ。

ひと月ほど前、尾刈斗中が創立記念日で休みの日に僕はこの駅に来た。入学式の日のアレを含めると、ここに来るのは今日で3回目ってことになるね。

フットボールフロンティアスタジアムから北へ5分程のところの大きく開放的な校舎が見える。それが名門木戸川清修中学だ。元プロサッカー選手の二階堂監督が教え

るだけあって、全国大会常連の強豪校である。

そんな木戸川の特訓内容を偵察しつつ豪炎寺の住所を探るため、フェンスの隙間から観察していた。僕の体が中学生でなければ、もっと犯罪的な臭いがしていたところだった。そして下校する豪炎寺の後を追いかけて、家の場所を知ることができた。

木戸川から北にさらに5分ほど歩いたところにある豪炎寺の家は、広い庭のついた豪華な一軒家だった。豪炎寺が木戸川に通うことになったからこの家を買ったって可能性もある。医者の子子め、羨ましい。

3時間早く着いた僕は家から豪炎寺の妹、夕香ちゃんが出てくるのをずっと待っていた。うーん、これはたとえ僕が中学生でも犯罪の臭いがプンプンする。人助けのためならセーフってことで。

小学一年生に1人でスタジアムまで行かせる豪炎寺家はどうかとも思うが、歩いて10分ほどの距離だから大丈夫だと判断してしまったのか。

夕香ちゃんが家政婦のフクさんにいってきます！と大きく挨拶をして門を出たのを確認して、僕は隠れながら後ろを着いていった。人生2回目の尾行だ。

夕香ちゃんは僕が地図を見ながら予想した通りのルートでスタジアムまで向かった。

スタジアムの少し手前にある大通り。夕香ちゃんがトラックに轢かれそうになる場所も、僕の予想通りだった。

(ここで夕香ちゃんはトラックに轢かれて、一年間目を覚まさない。そのおかげで豪炎寺は雷門に来て、雷門は日本一になる。

でも、そんな未来は絶対に認めない)

「きゃーっ!」

ちゃんと手を挙げて横断歩道を渡っていた夕香ちゃんを、信号無視したトラックが襲った。

バレないように注意して尾行していたせいで、夕香ちゃんとは少しの距離が開いてしまっていた。トラックは一切ブレーキもせず突っ込んでいて、普通なら諦めてしまっていたかもしれない。

でも、不可能を可能にする方法を僕は知っていた。

「クイックドロウ!」

必殺技の超加速で一瞬でその距離を縮め、ボールをくすねる代わりに夕香ちゃんを抱えて向かいの歩道まで運んだ。

正直めちゃくちゃ怖かった。トラックが後ろを通り過ぎる風をしつかりと感じた。後一步後ろにいたか、後一瞬反応が遅れていたら轢かれていたに違いない。

「おにいちゃん、助けてくれたの?ありがとう!」

でも僕は感謝してくれる少女を目の前にして、人生のこれまでにないほどの達成感を

味わっていた。

僕にも誰か救えた。

それを知ったことはものすごく僕にとって意義のあることに思えた。

「今のわざってクイックドロウ？ ゆうかのおにいちちゃんが使ってるのを見たことある。」

おにいちちゃんもサッカーやってるの？」

豪炎寺がクイックドロウが使えることはそれくらいできて当然としか思わなかったが、なぜかなりゆきで夕香ちゃんと一緒にスタジアムまで行くことになった。

影山の仕込んだ罠がこのトラックだけとは限らず、また未知の何かが夕香ちゃんを襲うかもしれないと考えると、その方が安全だと判断した。

その判断が間違いだったわけだけど。

結局何事もなくスタジアムに到着した。心配は杞憂だったようだ。

☆☆☆

「おにいちちゃんだ！」

木戸川の選手入場。兄の姿に喜ぶ夕香ちゃんを横目に、僕は歴史を変えられるという

ことを強く実感して満足していた。

フットボールフロンティアスタジアムには鉄骨を落とせるような天井もないし、決勝戦というだけあって満員の観客に囲まれている。いくら影山といえど、試合が始まれば下手に手出しはできないだろう。

(後は、木戸川のプレー次第か……)

1年のブランクがあってもあれだけの實力を見せつけた豪炎寺なら、帝国に勝つてしまってもおかしくない。そう思っていたが、試合が進むにつれてサッカーは1人でする競技ではないということを実感した。

豪炎寺の實力は確かに高い。でもあの王者帝国がそれを警戒していないはずがなかった。

DF3人がかりのマークで豪炎寺は完全に動きを封じられていた。

木戸川の最大の問題、豪炎寺に頼りすぎた攻撃がそんな馬鹿げた戦術を帝国に許してしまった。

FWは豪炎寺の他にも武方三兄弟の1人(多分勝)ともう1人がいたのだが、彼らは積極的に攻撃に参加しなかった。

「みんなもちゃんとシュートしてよ!」

ひたすら豪炎寺にパスを繋げようとして帝国にカットされるといふ展開が繰り返さ

れ、夕香ちゃんですら不満に感じたようだった。

素人でも分かるその問題に二階堂監督が気づいていないわけではなかった。ハーフタイムに何か指示があったのか、後半になると勝（仮）もシュートを狙うようになった。だが今まで攻撃を豪炎寺に任せて自身の攻撃参加を怠っていたツケが回ってきたらしい。豪炎寺にDFが集中してできた隙を攻め、勝（仮）はバックトルネードをゴールへとうち込んだが、源田に必殺技すら使わずに止められてしまった。

防御面もまた苦しかった。西垣らDFの洗練されたチームプレーでなんとか攻撃を凌ごうとしていたが、帝国のドリブル技には合体技であるハリケーンアローしか通用せず、かなり不利な状況であることは間違いないかった。

そして木戸川の攻撃陣とは対照的に、帝国の全てのFW（と恐らくMFも）が木戸川GKのタフネスブロックを破ることができただけのシュート技を有していた。つまり、どのような選手に対しても、シュートを許すと即失点してしまう可能性があるという危険な状態だった。

合体技でのディフェンスを強いられた木戸川は、前半に1点と後半はDFの疲弊のせいかさらに3点と大きく失点を許してしまった。

試合終了間近。4点差を覆すだけの時間はなかったが、木戸川の闘志は消えたわけではなかった。

帝国だってずっとマークをしていて集中力が途切れないはずがない。鋭いスルーパスが奇跡的に豪炎寺のもとへと届いた。

「おにいちゃん！がんばって!!」

「夕香……ファイアトルネード!」

夕香ちゃんの応援が届いたのか、渾身のシュートが炎を纏い帝国ゴールへと突き進む。

「止める！パワーシールド」

源田の作った衝撃波の壁も、ファイアトルネードには敵わなかった。

木戸川の執念が、帝国から一点を奪った。

そしてその直後、試合終了を告げるホイッスルが鳴った。

シュートを決め、すぐにホイッスルが鳴る。イナズマイレブンではよくあった展開だ。

いつもと違うのは、そのシュートは4点差を3点差に縮めることしかできなかつたということと、帝国がFFの決勝戦を棄権するはずがないということだった。

木戸川は大敗した。たとえ一矢報いられたとしても、到底満足できる結果ではないだろう。

スタジアムを去りながら観客席へ視線を向けた豪炎寺は何を思っていたのだろうか。妹にカツコいいところを見せられた喜びか、ほとんど何もできずに負けた悔しさか。

ただひとつ言えることは……

(豪炎寺、こつち見んな！)

豪炎寺と目が合った。

☆☆☆

「つまり、お前は偶然トラックに轢かれそうになっていた夕香のことを助けてくれたってことだな？」

「なんでもそう言ってるじゃん」

何度も何度も繰り返して説明して、やっと豪炎寺は納得してくれた。

「この人はゆうかのいのちのおんじんなんだよ！」

夕香ちゃんが僕のことを庇ってくれるのだが、その度に豪炎寺からの殺気が強くなる

からちよつとやめて欲しい。

僕の姿を見た豪炎寺は何を思ったか試合後のミーティングもすつ飛ばして観客席の僕と夕香ちゃんのところへやってきた。

明らかに僕のことを睨みつけてやってきたのを「豪炎寺選手、試合は残念でしたね」とただの観客のふりをして、「てめえ、夕香に何をした！」と睨みが強くなっただけだった。睨まれ死しそう。

夕香ちゃんの助けもあつて、なんとか誤解が解けて今に至る。偶然っていうのは嘘だけど、原作知識で……なんて言えるはずがないし。

「少し、二人きりで話をしていいか？」

誤解は解けたはずなのに、夕香ちゃんを置いて話したいことがあると言う豪炎寺。

「え、まあいいけど」

「お前、紫藤と言ったな」

ここなら夕香も聞こえないか、ときつきの席から少し離れたところで豪炎寺が話し始めた。

「うん」

「夕香は誰に狙われてる？そしてお前は どうして それを知った？教えてくれ」
「え……」

僕の思っていた以上に、豪炎寺は状況を理解していたらしい。

「夕香ちゃんは誰にも狙われてなんかないよ。たまたま信号無視したトラックに轢かれ
そうに……」

「そういうのはいい！本当のことを教えてくれ。お前がこの間俺を尾けていたことも分
かってる。それでも俺は紫藤、お前を信用しているんだ」

「分かっていたんなら、どうして……」

どうして、僕のことを信じてくれるのか。

自分のことを尾行していた怪しい男が、自分の妹の隣に座っていたらそりや怒るのも
当然だ。一体どうしてそんな僕のことを信用しているなんて言ってくれるのか。

「ただお前は悪いヤツじゃなさそうだって思っただけさ。実際そうなんだろう？」

そう言うのと豪炎寺は僕に向かって深く頭を下げた。

「それにお前は夕香の命を助けてくれた。その事実は変わらねえ。もしかしたらお前は
いろいろと夕香のために動いてくれてたんじやないか？」

「まあ……そうだね。本当にその通りだよ」

豪炎寺には全てがお見通しらしい。

「僕は夕香ちゃんの命が狙われていることを知って、それを止めようと行動してたんだ。……尾行したのはごめんね。方法が他に全く思いつかなくて」

「誰に、誰に夕香は命を狙われているんだ？」

「影山零治。中学サッカー協会副会長で、帝国の監督としてついさつきまであそこに座ってた男だよ」

帝国のベンチ席を指さしながらそう答える。

今回のトラックでの事故は防げたとしても、影山は何度でも豪炎寺とその家族に危害を加えようとするだろう。安全のためにも豪炎寺も事情を知っておくべきだ。

それに、言わないわけにはいかないんだ。信用されてるなんて言われちゃったからね。

☆☆☆

豪炎寺には僕の知ってるほとんど全てを話した。さすがに転生とかについては話さなかつたけど。

これから何が起きるかは僕にも分からない。僕の知ってる原作というものはなんの

頼りにもならない。ただ豪炎寺には自分の身と夕香ちゃんを守るように頼んだ。

このまま何事もなければ、豪炎寺は木戸川に居続けるはずだ。豪炎寺が1年特訓を続けられれば、間違いなく恐ろしい成長を遂げるだろう。

代わりに雷門に炎のエースストライカーが訪れることはなくなっただけだね。

帝国がFFに優勝するという歴史は変えられなかったけど、他に僕は色んなことを変えられた。

その勝利を示すように、僕はスタジアムに向けて親指を大きく突き上げた。

暗躍編

11 呪い、占い、超次元

『どうして?』

『どうして?』

『どうして僕のパパを殺したの?』

汗だくのままベットから飛び起きる。悪夢を見たのは久しぶりだ。

内容が内容ゆえに地木流監督に相談するわけにもいかない。

大丈夫。僕は夕香ちゃんを救った。僕は僕にしかできないことを成し遂げた。

(一度は全部嫌いになって忘れて逃げようとしていたくせに)

でも今は違う。僕はもう逃げないって誓ったんだ。

(どれだけ頑張っても死人が生き返るなんてことはない)

そんなことは分かっている。許してくれなんて言わない。でも、せめて僕に償いをさせてほしい。

☆☆☆

6時間目の心理学の授業が終わった。ちなみに授業内容は「嘘の見分け方」だった。前回の「正しい応援の方法」といい、この授業はいつも普通に役立つことばかりだ。

「あ、そうだ紫藤君。君に伝言を頼んでいいですか」

いつもどおりサッカー部室へ行こうとすると、地木流監督に呼び止められた。

「今から出張があつてサッカー部には行けません。ですから練習は月村君に任せるようにと言つてください」

部室に着き月村先輩に監督からの伝言を伝えると、

「それなら今日は休みでいいんじゃないか？」

とのこと。

部長である月村先輩がそう言ったことで、サッカー部の練習はなくなってしまった。

「それじゃあ俺はオカ研へ行くことにするよ」

「僕も超常研へ行つてきます」

それを聞いた八墓やっはかと円谷つぶらやはそれぞれ別のクラブに顔を出すことにしたらしい。

それに続くようにみんながどんどん帰っていった。

尾刈斗中では兼部が認められているから他の部とかけもちしてる部員もいる。それどころか八墓やつはか崇原ただる原作時中2、MF。呪いや崇りに詳しいはオカルト研究部、円谷つぶらや未知原みち作時中2、FW。UFOを信じているは超常現象研究部にいたのを道化先輩に引つ張られてきてサッカー部に入っている。

ちなみにそのふたつのクラブの活動内容にどんな違いがあるのか僕は知らない。さらには心靈研究部なんてものもあるが、本当に何が違うのだろうか。

とまあ八墓や円谷は他のクラブとの兼ね合いで練習が出来ないのも仕方ないと思えるのだが、練習の中止を言い渡した本人である月村先輩はサッカー部一本だったはずだ。

「どうした？何か言いたいことがあるようだな、紫藤」

不満が顔に出てしまっていたことに月村先輩に指摘されてやっと気づいた。

「もうちよつとやる気を持ってくれてたらって思つて。でもそうなつてしまう理由も分かりますし……」

理由について言い始めたら、僕に先輩達を非難する権利はないんだけど。

「今月の練習試合の数はゼロだもんな。やる気も出ねえよ」

サッカー部の予定が書かれたホワイトボードを指さして魔界先輩が言う。

そう、試合が全く無いのだ。

遠くの学校から練習試合を申し込まれるということが無くなったのに始まり、監督が試合を申し込んででも断られ、さらには定期的に練習試合を組んでいた近隣の北斗星学園や古墳中学も試合を断るようになってしまった。

監督はこの原因を呪いの噂のせいだと考えていた。

尾刈斗の必殺タクティクス、ゴーストロック。選手の動きを完全に封じてしまうという強力なこの技がその原理も分からないまま噂だけが広がっていき、尾刈斗と試合をする呪いがかかるといふ噂になってしまったのだ。

でも実のところその噂を率先して流していたのは他ならぬ尾刈斗中である。ゴーストロックの正体が催眠術であるという事実を隠すために、呪いの噂はうってつけだったわけだ。

調子に乗って噂を広めすぎたせいでも試合をしてくれないのかもしれない、と監督は言っていた。

でも、それだと既に互いの手の内を知っているはずの北斗星学園や古墳中学も試合をしてくれなくなった理由にはならない。彼らはゴーストロックの正体なんてもう7年も前から知っているらしいし。

ひとつ仮説がある。その仮説はこの事態を完璧に説明できる。僕としてはあんまり

信じたくはないものだけだ。

嫌がらせ。中学サッカー協会副会長から僕に対する嫌がらせだとしたら、全て辻褃は合う。

僕が夕香ちゃんを助けたことはとつくに影山の耳に届いているだろう。逆に今まで僕に何もしてこなかったことが奇跡なくらいだ。それに影山なら圧力をかけて試合を白紙にさせることくらい容易だ。

もしそうだとしたら、僕はみんなに大きな迷惑をかけてしまったことになる。

「じゃあ僕は一人で練習します」

試合ができない本当の理由がなんなのかなんて知らないけど、今の僕にできることは強くなることしかないから。

かごからサッカーボールを1つ手に取ってグラウンドへ向かった。1人でだつてできる練習はたくさんある。神成FCと前世と、記憶を漁ってちよいどいいのは何かと考える。

「僕も混ぜてもらっていいかな」

練習は無くなつたにも関わらずまだ部室に残っていた三途が僕の練習に加わってくれるらしい。

「後輩が頑張るって言ってるのなら、オレたち先輩もやらないわけには行かないよなあ」
「つたく、仕方ねえな」

結局月村先輩や魔界先輩も一緒に4人で練習することになった。

「月村、魔界の住人である俺と合体技を組んでみないか？」

「おお、合体シユートか！いいいぜ、やってやるぜ！」

「シユート技とは言ってねえって。やりたいのは合体ドリブル技だよシユート馬鹿」

「誰がシユート馬鹿だって？オレだってマジックとかドリブル技ちよつとは使えませー」

喧嘩するほど仲がいい先輩2人は合体ドリブル技に挑戦するらしい。

「紫藤、ちよつとお願いがあるんだけど……」

「三途も合体技を試してみたいの？」

「ううん、そうじゃなくて使いたい技があるんだ。イリユージョンボール、僕にも教えてくれないかな？」

「もちろん！」

最近教える立場に立つことが多い気がする。僕はそんな大それた人間じゃないんだけど。

勉強でもスポーツでも、教えるには理解を深める必要がある。これもきつと僕のレベルアツプに繋がるだろう。

そんなこんなで4人で練習を続けていると、

「やっぱり皆さんやってますね」

多呂斗先輩と黒上くろがみのうい 呪原作時中2、FW。黒魔術が得意が部室にやってきた。

「お、多呂斗！お前も混じるか？」

「そのつもりですよ。教室で占ったときは今日の部活はなしって結果でしたが、黒研の部室でもう一回占ったら練習はしてるっていう結果が出ました。それで後輩の黒上を連れてやって来ました」

「他の部のみんなにも練習やってることを伝えておいたので、いっぱいやってくるかもしません」

タロット占いの結果だけで自信をもって他人に情報を知らせられるのはさすが先輩といったところだろう。

「うがー！やっぱりやってたー」

「帰ってきて正解だったアル」

不^ふ乱^{らん}先^{れい}輩^{げん}と靈^{みち}幻^{ひさ}道^{ひさ}久^{ひさ}原^{ひさ}作^{ひさ}時^{ひさ}中^{ひさ}2、M F。体が固くキョンシーのように動くが多呂斗先輩の占いを聞いてか、部室へとやってきた。

「アンビリーバボー！さすが多呂斗パイセン、アメイジング！」

「ぐふ……先輩の占いは百発百中……ぐふふつ……」

鈍^な十三^たや屍^{じゆうぞう}藤^{しかばね}美^ふ原^{じみ}作^{じみ}時^{じみ}中^{じみ}2、D F。自分を不死身だと思つていたりとかも占いを信じて部室を訪れ、見事の中させた多呂斗先輩を褒めている。

占いなんて非科学的な、今までの僕ならそう言つていたかもしれない。でも理科の先生が言つていたように、科学が全てつてわけじゃないらしいことを僕はこの学校で学んだ。

そもそも必殺技つていう超次元かつ非科学的なものを使つてくるくせに何を今更つて話だけど。三途に必殺技を教えているという現状を俯瞰し、自分で自分にツツコンでおく。

それにしても、多呂斗先輩の占いはほんとによく当たる。外れることはないのだろうか。

「僕だつてタロットを読み違えることくらいありますよ」

（心を読まれてる?!）

一瞬びつくりしたけど、今の発言は屍の百発百中つて言葉に対して答えただけだろ

う。

いくら先輩でもさすがに心の中まで見通せるはずがない。

「僕にできることはタロットを読むだけで、何もかも見通せるわけではありませんから」
ほんとに心を読んだりしてないよね？ね？

既に帰ってしまった人もいるらしいけど、かなり多くの部員がこのグラウンドに戻ってきた。

みんなが来るタイミングがバラバラだったこともあって、各々が必殺技を強化しようと練習することになった。

こうやってみんなが集まってきて練習する流れは神成FCを思い出す。それに、あいつらのことも。

なんだかんだ言って先輩達もサッカー好きじゃんか。
そう思うと、なぜだか少し気が楽になった。

☆☆☆

6時まで練習を続けたあと、僕は自転車で家まで帰った。友達にはバス通学の人も多

いけど、我が家はお金がないので自転車で我慢している。

「ただいまー」

「幻斗、おかえりなさい。ついさつきお友達から電話が来てたわよ。どうしても話したいことがあるんだって」

どうしても話したいこと？それってなんだろうか。

その友達が誰なのかってのは見当がついているからこちらからかけ直す。

「もしもし、話したいことって？」

「長話は許されていないから単刀直入に言うよ——」

12 共犯者

幻斗の大きなサムズアップを確認して、俺は安堵の息を吐いた。作戦は大成功らしい。

試合後のミーティングをしている影山の顔を少し観察してみたが、夕香ちゃんの襲撃に失敗した苛立ちなどおくびにも出さなかった。

影山と目があつたわけでもないのに、その底の見えない瞳に形容しがたい恐怖を感じて俺は目を逸らした。

☆☆☆

俺は帝国学園の野賀刃也だ。中学校を選ぶとき、幻斗からは帝国だけはやめておけと言われたのに結局ここに来てしまった。

この学校には自由がない。携帯電話の持ち込みは許されているが、それは自由に連絡を取れることと同義ではない。

電波を遮断する金属などで覆われているのか、寮の部屋では電話が通じない。そのた

め携帯で連絡をとるためには部屋の外、衆人環視の中で電話しなければならない。

外出も長期休暇以外は原則禁止。やむを得ない事情があるときは外出申請書を提出しなければならない。

サッカー部の1軍になればこれらのしがらみの全てから解放されるとの話ではあるが、まだ1年生である俺には遠い話だ。

実際には1年でありながら正ゴールキーパーやキャプテンの座を手にした者がいるが、上を見て自信を喪失するくらいなら、どこも見ずにがむしゃらに走ればいい。昔幻斗がそう助言してくれた。

幻斗は他にも七つほど格言のようなものを持っていて、座右の銘をそれらのうちから臨機応変に選んでいるらしい。なんとも強かなやつだ。

俺が帝国を選んだ理由。両親からの期待に応えるため、というのも大きい。帝国はスポーツだけでなく勉強面でも都内有数の進学校である。通うだけで将来が確約されているようなものだ。

でも、一緒に雷門でサッカーをしたいという幻斗の提案を断った理由はそれじゃない。

俺は役が欲しかった。スパイに憧れたと言い換えると他愛なく聞こえるが。

☆☆☆

帝国において情報を探るのは困難で、とても危険だ。

不審な動きをした人物がいれば帝国の生徒は学校に報告する義務がある。帝国に害をなす可能性のある存在は決して許されない。

帝国に反逆したら東京湾に沈められるぞ、と噂されるが、影山の過去の悪行を鑑みるにあながち冗談とは言いきれない。交通事故に見せかけて殺されるくらいが妥当だろう。

影山や帝国の動きについて情報を集めたいが、聞き込みして回るわけにもいかない。影山に嗅ぎ回つてることを報告されると何をされるか分からない。

逆に影山の信用を得ようと仲間を売ってしまうと、友人からの信頼を失う。影山の犬のようになった俺を誰が好き好んで話しかけてくれるだろうか。

まさにあちらを立てればこちらが立たずといった状況だが、俺はなんとかちようど良いバランスで保っているつもりだ。

基本的には影山や学校に忠実に動き、それでいて友人からの信頼を損ねない程度に使

宜を図っている。

学級日誌の提出や些事の報告を率先して行い、職員室や事務室に入れる機会は最大限に利用した。誰々の水筒が無くなったなんてことをいちいち報告する俺は、教師たちには生真面目なヤツとして写っていただろう。

生徒と話するときにはできるだけ気さくに振る舞い、困り事があれば手を差し伸べ、多少の校則違反も見逃した。

どうしても隠蔽ができないと思ったものはポイント稼ぎのために報告させてもらったが、それでも実は融通の効くヤツという評価を貰っていた。

そして俺は今、総帥室の前にいる。職員室には何度も足を運んだが、ここに来たのは本当に数えるほどしかない。

「影山総帥、いらつしやいますか?」

ノックのあとに尋ねるも返事はない。

「失礼します」

鍵はかかっておらず、影山はいなかった。ここまで完全に予定通りだ。

帝国の多くの場所には監視カメラが設置されているが、ここ総帥室だけはそれが無いのは既に確認している。あの影山もカメラに見られていると落ち着けないのだろうか。

机の上のいくつかの書類に目を通す。詳しくは分からないが、学校運営に係る普通の書類しか無かった。一応指紋に配慮してハンカチを使いながら色々と物色したが、不審なものは何も見つからなかった。

生徒の入れるこの部屋にそんなものを置いているはずがないだろう。

封筒が二通、野村と黒岩と名乗る人物から届いていた。しかし封を切って中身を見るわけにもいかない。

情報の眠る大本命のパソコンも、さすがにロックがかかっており、パスワードが分からない以上諦めるべきだ。

(ほんの少しでも情報を掴められたらと思つて準備してきたが収穫は皆無か……)

ピロリン

通知音。俺の携帯からではないから、このパソコンからだ。

ロック中でも通知が来る設定らしい。情報の管理を徹底すべき影山の立場からすれば杜撰としか言いようがないが、今はお年寄り特有のその疎さに感謝するしかない。

通知に示されたメールの送信者名は、全ての「答え」を教えてくれた。なるほど、これ筋が――

足音。

ずっと耳を澄ませていたつもりだったが、通知に気をとられてか近くに来るまで分かんかった。

書類の配置が最初と何も変わってないことを確認し、ハンカチをポケットに戻す。パソコンの画面が光ったままであることだけが気がかりだが、紙を握りしめて消えろと念じる。

念が届いたのか画面は黒に戻った。

(消えた！)

「野賀、何か用かね」

真つ暗なパソコン画面への安心も束の間、影山総帥が帰ってきた。

「総帥に報告したいことがあります——」

「その手に握っている紙は何だ？」

俺が手に持っていたメモを影山は目敏く見つける。

「総帥が部屋にいらつしやらなかったのだからこれを机の上に置いて伝えようと思いまし

た」

「見せたまえ」

用意していた小道具のメモを影山に渡す。

「ほう、咲山が校則違反の漫画の持ち込みをしていると」

「はい。漫画を2冊サッカー部室に置いています。」

校則違反なので職員室に話に行こうとしましたが、生憎職員会議で出払っていたので職員会議にはいつもも参加されていない総帥ならいるだろうと思ひ総帥室に来ました」

嘘だ。大嘘だ。今日職員会議があるのは職員室のホワイトボードを見ていれば簡単に分かる。

そして火曜日の3時半は総帥は基本的に総帥室にいない。それどころか校内にいることすら珍しい。帰ってきてしまったのは完全に予想外だ。

「しかしメモを用意したのであれば、わざわざこの部屋に来なくとも職員室にそれを置けば良かったのではないか？」

痛いところを突かれる。

「総帥がいらつしやれば直接言葉で伝えられるのでその方が良いかと。それに咲山はサッカー部員ですし、部室の私有化という点ではサッカー部監督である総帥の耳に入れ

ておくべき話だと思いました」

言い訳を連ねる。影山との対話は既に何度もシミュレート済み。言い訳も十二分に備えている。

「咲山の他にもその漫画を読んだ人が何人か部内にいるそうです。それと、これはあくまで噂ですがゲーム機の持ち込みも画策しているそうです。ただの冗談かもしれないのであまり真に受けるべきでは無いかもしれませんが」

「そうか、分かった。こちらで対処する」

なんとか切り抜けたようだ。

「失礼しました」

退室し、すぐにでも逃げたい気持ちを抑えいつも通りの歩幅で歩く。影山の視線を感じるが、人間には痛みや熱を感じる神経はあれど視線を感じる神経はないことを思い出し平静を保つ。

角を曲がり、もう影山から姿が見えない場所まで来てやっと胸を撫で下ろした。寿命が5年ほど縮んだ気がした。

あれを幻斗に伝えるために、携帯電話を使うタイミングを考えないと。



尾刈斗中学、職員室前。

「監督、少し話があります。大切な話が」

昨日とは逆に、職員室から部室へと向かう地木流監督を僕は引き止めた。

「僕には何も見えていない、その言葉の意味がやつと分かりました」

「ほう、それはなんですか？」

「監督は、僕達に試合に勝ってほしくなかった。違いますか？」

「まさか。私は勝つために最善の行動をとったつもりですよ。あなたが自分に自信を持つことは結構ですが、今のままでは試合に出すことはできません」

さすが地木流先生。姿勢はいつもどおりで、瞬きの回数も変わらない。生徒に嘘の見破り方を教えても、自分の嘘は決して悟らせないってわけか。

「そうやって言葉を濁せば勝手に僕が深読みすると思ってるのなら大間違いですよ」

先生に向かつてこんな口のきき方をするのは僕のキャラじゃないんだけど、今はそんなこと言ってる場合じゃない。

相変わらず監督はニコニコした表情を崩さない。気持ち悪いよ。

「それじゃあ少し話を变えます。今朝、古墳中学に問い合わせの電話を入れました」

少し監督の表情が崩れた。すぐにまたいつもの気持ち悪い笑顔に戻ったけど、一瞬覗かせたそれは明らかに驚きの表情だった。

「古墳中学のサッカー部顧問、百舌鳥先生は、監督が試合を断ったと言っていました。練習試合を断つたのは古墳中学の側ではなく、尾刈斗中だと」

気分はさながら取り調べ中の刑事。そうやって演じていないとこんなこと言ったられないし。

「答えは簡単なことだったんです。僕達は試合のセッティングを全部監督に任せています。だから監督が試合を申し込まず、申し込まれた試合を断れば、僕達は試合が出来なくなります。何か違いますか？」

監督は何も答えない。

次が最後の質問だ。

「監督、あなたは影山とどういう関係なんですか？」

13 催眠術師

「監督、あなたは影山とどんな関係なんですか？」

「紫藤君は催眠術師HYDEを知ってますか？」

僕としては思いきったつもりだった質問は、訳の分からない催眠術師についての質問で返された。

「ハイド……聞いたこともありませんし、今その人は関係ありません。僕は監督と影山の関係を聞いています。はぐらかさしないでください」

気を取り直して、影山との関係性を問いたです。

「察しのいい紫藤君なら分かるかとも思ってたんですけどね。HYDEというのは私が催眠術師として活動していたときの名前です」

監督の下の名前は灰人だったはずだ。ジキルとハイドにかけたネーミングだろう。

それにしても、監督が催眠術師として活動していたとは。ただ心理学を専攻しただけってよりは催眠術を使えることに納得はする。

「影山との関係を話すと長くなります。立ちながらというわけにもいきませんし、そこに座ってください」

監督が影山との関係を話してくれるというので、職員室横の小さい机と椅子だけがあ
るスペースに座って話を聞くことにした。

☆☆☆

私の家庭はいろいろと複雑で……

いえ、この話は長くなりすぎるのでやめましょう。

私は中学を卒業してすぐにアメリカへ催眠術の修行へ行きました。少し伝手があり
ましてね。

4年間の修行を経て、19才のときにそのままアメリカで催眠術師デビューしまし
た。

HYDEっていうのは私のお師匠様がつけてくれた名前です。ジキル博士とハイド
氏にちなんで二重人格キャラで行けと言われまして。

催眠術を使うとき別人格になるってので売り出していました。それが自分自身への
暗示になってしまったのか、今では別人格を演じていないと催眠術を上手く使えなく
なってしまったんですけどね。

そのキャラが功を奏したのか知りませんが、界限ではそこそこの知れた術師になる

ことができました。

まあそんな折に日本のテレビ番組に出演させていただくことになりましたね。サツカー選手に催眠術をかけてPKをさせるといった内容のものでした。

私としてはまずまずの手応えを感じていました。

ところがその収録から数日後、私が催眠術をかけた選手が死んだというニュースを聞きました。彼の友人の証言によると、収録以降彼はボーっとしていることが多かったそうです。

そして山道を運転中に車の操作を誤り、崖に落ちて死にました。

私のせい。私だけでなく、その証言を聞いた誰もが思いました。あの催眠術のせいだ、と。

私はちゃんと催眠術を解いたはずでした。ですが、催眠術が解ける原理は基本的に本人が解けたと思うから解けるだけです。

正しく催眠術が解けたと確認するのを私は怠っていたのかもしれない。私は人を殺してしまった。そう信じ込んでいました。

収録は当然お蔵入りになり、私は二度と催眠術師としての仕事は出来なくなりました。

た。人殺し催眠術師なんて呼ばれてた私に仕事の依頼なんて来るはずがありませんから。

そんな私を助けてくれたのが影山です。助けてくれた、なんて言い方は全くもって正しくないのかもしれませんが。

私が影山と初めて会ったのは例の番組の収録の打ち合わせです。私が催眠術をかけたのは皆帝国出身の選手で、企画段階から影山が関わっていたそうです。

「君が仕事を出来なくなったのは君を呼んだ私にも責任がある。だから君に仕事をやりたい」

そんなことを言われてホイホイと影山に従うことになりました。

私も人を見る目には自信があつたはずなんですけど、あのときは死んでしまった彼への償いをしなきゃなんて思っていて正常な判断が下せてなかつたんでしょね。

影山は私を地木流灰人として当時創立して間もなかつたこの尾刈斗中の教員として働かせました。

あ、地木流つて名前は本名じゃありませんよ。ただ私の催眠術師としての名前からとつただけのセンスのない偽名です。こんな変な苗字の人いるはずが……

いや、サッカー部の面々を見ているとそうは言いきれませんがね。この辺りは不思議な苗字が多いようですし。

尾刈斗の教師となった私は影山に従い、サッカー部顧問として催眠術を応用した戦術を研究していました。

そしてその傍ら催眠術を悪用して、他の学校の校長に非常に不利な契約の判を押させたり、サッカー部の監督に試合を棄権させるように誘導したりしていました。

☆☆☆

「つまり私は影山の手下。そう言えば分かりやすいでしょうか」

監督の昔話が終わった。ツツコミどころは多々ある。

中卒でアメリカに催眠術修行ってどんだけ複雑な家庭環境やねんとか、HYDE↓地木流の順番やったんかいとか、脳内がついエセ関西弁になってしまった。

ただ一番注目すべきポイントはやはり……

「その交通事故ってほんとに監督のせいだったんですか？」

「真実はきつと君の考えるとおりですよ」

僕に限らず、影山のことを知っている人はみんな同じことを思うだろう。全て影山のせいって。

「私は影山のもとで働いているうちに影山のやり口が分かり、疑念を抱きました。

そして例の証言をしていた選手を問い詰めると、影山に命令されて偽の証言をしたとあっさり吐いてくれました」

問い詰めるって監督は言ってるけど、催眠術とかも使ってそうな気がする。まあどうでもいい。

「それならどうして監督はまだ影山に従っているんですか？」

贖罪として影山に仕えていたのなら、真実が分かっただけなら影山の手下である理由が分からない。

「亡くなってしまった彼に償うためには影山の手下を辞め、警察に告発すべきでした。ですがそのときには既に警察は信用ならないということを知っていました。

それに、私は職を失いたくありませんでした」

尾刈斗の教員をやっていたらいられてるのも影山の口利きがあつてこそ。それにそもそも監督は中卒で催眠留学をしちやつてるから……

「監督は高校にも行っていないんですよね」

「ええ、ですから当然教員免許なんて持つていません。紫藤君から見たら許されないことなのかもしれませんが、犯罪者でもないから私はここで教員として監督として働き続けられたんです」

★★★

紫藤君は私を呆れたような目で睨みつける。

職を失いたくないなどという自らの保身が理由だなんて、大人として情けないとは思
う。

催眠術の世界からは追放され、学歴も皆無。新たな職に就くのは難しいかもしれない
が、そんなのは言い訳でしかないだろう。

「でももう現状維持なんて言つてられません。バレてしまいましたから。君の願いどお
り、私はここを辞めます」

いつかこうなる日が訪れることは分かっていた。それどころか、私は罪から開放され
るこの瞬間を待っていた。

紫藤君も影山の手下である私を監督として慕うなんてできないだろう。

私が辞めるだけで全てが解決する。全て丸く収まるに違いない。

「え……？困りますよ、そんな」

なぜか紫藤君は困惑の声をあげる。そしてその予想外の困惑に、今度は私が困惑する。

「どうしてですか？あなたは私を憎んでいるのでしょうか。私に学校を辞めて欲しくてこの話をしてきたのではないんですか？」

「僕はただ事実を確認したかっただけです。それと、できれば試合ができるようにお願いしたくて。監督を憎んでなんかいませんよ。」

だって、僕も監督も被害者でしょ？」

「被害者……ですか。たとえ私のせいで潰れた学校があつたとしても？」

少なくとも私は、私が被害者だなんて思っていない。

「そんなの関係ありません。監督が仕事を辞めて逃げ出したとしてもまた別の手段で影山は学校を潰すだけです。監督もおっしゃっていたとおり、警察に告発しても効果はたかが知れています。だから、監督は何も悪くありません」

なるほど、君はそう主張するわけか。

「影山の野望を止める唯一にして最高の手段は影山を、帝国を倒すことです。そのためには監督の力が必要不可欠です」

さすがサッカープレイヤーらしい考え方だ。そして私も、監督でありサッカーの指導者だ。

「紫藤君は私を買いかぶりすぎですよ。ですが、そう言ってくれるなら手は貸します」
その言葉に合わせるように私は手を前に出す。

「この腐ったサッカー界に革命かせを起こしましょう」

そう言つて紫藤君は私の手をしっかりと握つた。

☆☆☆

姿勢、視線の動き、話のトーンやテンポ。それらを総合して私には嘘が分かる。彼は隠したつもりだったのだらうが、5ヶ月ほどといえ監督して見てきた私には確かに分かった。悲しいことに分かつてしまった。

『監督は何も悪くありません』

あれは、嘘だ。

彼は私を間違いなく憎んでいる。私のことを被害者だなんて思っていない。

それでも彼は、私と手を組むことのほうがメリットが大きいと判断した。彼は私を利用する気である。

でも、そんなことはなにも関係ない。私は彼を助けなければいけない。教員免許が偽物だったとしても、彼は私の教え子なのだから。

14 鐵大輔（後悔）

ボールを全力で上に蹴りあげる。

ボールは熱せられた鉄に包まれ、巨大な黒い鉄球となったそれをオーバーヘッドで蹴り込む。

「うおおりやああ！アイアンブレイク!!」

俺が愛用していた必殺技。この技でどんなゴールをも貫いてきたんだった。

「無限の壁！」

（たとえ鉄壁のディフェンスだとしても、そんなもん俺がぶち壊してやる）

心の中の宣言どおりに、黒い質量を持ったボールは石の壁を粉々に砕きゴールネットを揺らした。

「そんな……オラ達の最強の必殺技が……」

『ゴォー……!!あけびやま明日山中のエースストライカーくろがね鐵大輔だいすけが千羽山の無失点記録を打ち破り1点を奪ったあ!』

「やったね！大輔！」

「おう！鉄壁てつぺきごときじゃ俺のシュートは止まらないぜ！」

親友でライバルの水野拓矢みずのたくや。いつも俺の隣となりにいて、シュートを決めたとき一番に駆けよってくるのは拓矢だった。

「いくらでも決めてやるぜ！アイアンブレイク！」

「まき割りチョップ」

もう無限の壁を使うだけの余力が無かったのか、それとも諦めたのか。

当然そんなもので俺のシュートが止められるはずもなかった。

『ゴオール！鐵この試合3度目の得点、ハットトリック達成です！』

ピー　ピー　ピー　ピー……！！

直後、試合終了を告げる笛が鳴った。

『ここで試合終了！フットボールフロンティア二回戦は3-0で明日山中の勝利です！』

「よっしやああ!!」

そのときの俺は勝利の喜びと達成感に溢れていて、今までのどんな瞬間より幸せな気分だった。そして3日後の帝国戦が終わったときには、この幸せを更新できるものだ

信じていた。

「次は帝国、36年間無敗の王者。相手にとって不足はないね！」

「ああ、次の帝国戦が事実上の決勝戦みたいなものだ。でも誰が相手でも俺のアイアンブレイクで蹴散らしてやるぜ」

「僕達のあの約束が、もうあと一步のどこにあるなんて信じられないよね」

小学校の頃に拓矢と交わした約束。一緒にFFで優勝するというデカすぎる夢。それは確かに目前にあった。

「そのためには拓矢も頑張れよ？拓矢もFWなんだからもつとシユート狙っていいんだぜ」

「もちろんそのつもりだよ！今日は大輔に全部決められちゃったけど、次は僕もハットトリック狙うからね」

「……」

拓矢ならできる。そう言いたかったけど言えなかった。

最初から約束を破っていたのは、裏切っていたのは俺の方だったのかもしれない。

☆☆☆

『2年3組、鐵君。至急生徒指導室へ来なさい』

「え……？」

周りの友人達から何をされたのかと問い詰められるが、なんの心当たりもなかった。
(FFに支障が出るような問題じゃなければいいが……)

そんな不吉な予想をしながら生徒指導室へ向かった。

扉を開けると、生徒指導の秋山先生とサッカー部室の監督でもある今川先生が座っているのが見えた。

「鐵、なんでここに呼ばれたかは分かってるよな？」

「いいえ、分かりません」

秋山先生に質問されたが、何も分からなかった。

「胸に手を当てて考えてみる。本当は全部分かってるだろ」

言われたとおり実際に胸に手を当てても、やっぱり分かるはずがなかった。しかしそんな俺の動きが秋山先生の癩に触ったらしかった。

「ふざけるな！」

「でも本当に何も分からないんです」

俺はそう答えることしかできなかつた。

「これを見てもまだシラを切り続けるつもりか？」

そう言つて秋山先生はタバコの箱を俺に見せた。

「タバコ……ですか？」

「この箱が見つかつたのはサッカー部室のお前のロッカーからだ」

今川先生が初めて口を開いた。

「俺の他にタバコを持ち込んでるやつがいて、そいつが俺のロッカーに箱を入れたんじゃないでしょうか」

信じたくないようなことだったが、それくらいしか考えられることはなかつた。

「しらばくれるな！このタバコがお前のだつてことはもう分かつてるんだ。お前がタバコを吸つてるところを見たつて奴もいる」

そのとき、さっきの信じたくないことよりさらに信じたくない仮説が頭をよぎつた。
(もしかして、嘘をついて俺を嵌めようとしてる奴がいる?)

「本当に俺は何も知りません。俺がタバコを吸つてたなんて嘘をついたのは誰ですか？」

「教えることはできん。本人から名前は言うなと言われている」

秋山先生のその返答に、俺は仮説の確信を強めていった。

「諦めろ。お前がどう反論しようが、処分はもう決まっている」

「処分って……監督、フットボールフロンティアには出られますよね？」

そのときの俺の関心はそれだけだった。成績が下げられたとしても反省文を書かされたとしてもどうでも良かった。FFに出ることさえできれば。

今川先生がこの場にいるという時点で全て察するべきだったのかもしれないが。

「その件なんだが……」

今川先生が深刻な顔で話し始めた。

その後のことはほとんど覚えていない。

1週間の部活動と大会の参加を禁止され、秋山のげんこつを食らうまでいろいろ喚き散らしていたように思う。

俺は何も悪いことをしていないのに殴られ、そして夢を潰された。

夢を潰されたのは俺だけじゃない。そんなことに気づけるほどの余裕なんて当時はなかった。

☆☆☆

「お前だろ！お前が俺を嵌めたんだろ！」

ああ、思い出したくもない。

放課後、グラウンドでの拓矢との記憶。

「違う。僕がそんなことするはずない！」

そうだ。拓矢がそんなことするはずがない。

「じゃあさつき今川と話したのはなんだったんだよ！」

あの時の俺は冷静じゃなかった。誰かが俺を嵌めたんだって思うと誰も信じる事ができなかった。

「大輔がタバコなんてやってないのは僕が一番知ってるから。それを監督に伝えてただけだよ」

拓矢はちゃんと説明すればすぐに誤解は解けると思っていたのだろう。

俺と拓矢はずっと一緒だった。喧嘩することは何度もあったけど、その度に仲直りしてきた。

「嘘だ！お前は俺からエースの座を奪おうと思ってるんだろ」

でも俺は拓矢の言うことを嘘だと切り捨てた。

拓矢は説明を信じてくれなかったことに驚いていたのか、大きく目を見開いて俺を見

た。

でも俺は拓矢の心情を正しく理解することができていなかった。

「ほら、凶星なんだろう？ お前は俺の方がサッカーが上手いことに嫉妬してたんだろ？」

俺は拓矢のことをライバルだと思っていたが、実力が上だったのはやっぱり俺だった。

努力した量は拓矢も俺も一緒だから、いわゆる才能とかいうやつ差だったんだろ。

「嫉妬は、してたよ。一緒に特訓してるのに大輔ばつが強くなって」

拓矢は悲しそうにそう叫んだ。

「でも！ 僕は絶対にそんな卑怯な真似はしない！」

「嘘だ、嘘だ嘘だ！」

気づいたら、俺は拓矢を突き飛ばしていた。そして地面に倒れた拓矢を上から見下ろしていた。

どうして俺があんなにイラついていたのか今ならなんとなく分かる。俺はずっと拓矢を見下していたんだ。拓矢は俺より下だった。

俺と拓矢の差を一番気にしていたのは俺だった。

拓矢は俺の事を嫉妬してるに違いないと思ってた。それは確かに間違っていたが、俺は拓矢のことを俺のように下劣な人間だと考えて、俺を陥れる可能性があると思っていた。

だから誰かが俺を嵌めたと思ったとき、親友であるはずの拓矢のことが頭に浮かんだ。

拓矢のことをちゃんと見てたら、そんな奴じゃないことなんてすぐに分かったはずなのに。

喧嘩をしたとき、先にごめんなさいを言うのはいつも拓矢だった。

でも、今更後悔してもなんの意味もない。記憶の中の景色は変わることはない。次に俺が言う台詞も、何も変わらない。

「なあ、いつも俺は鉄の塊蹴ってるだろ？俺が全力でお前の頭蹴ったら頭割れちまうかもな」

「信じてよ……」

そう拓矢が言ったのは、俺の蹴りが拓矢の頭に届いたのとほぼ同時だった。

本当にごめんなさい。

15 鐵大輔（協力）

拓矢は頭蓋骨にひびが入ったらしく、あの日以来学校に来なくなつた。本気で蹴つていたら死んでいてもおかしくなかつただろうから、俺は最後の最後でちよつとだけ踏みとどまることができたのかもしれない。

でも拓矢に暴力を振るつたことは事実で、また生徒指導室に呼ばれた。今度は冤罪じゃなかつたから何も弁解する気も湧かなかつた。

今後一切サッカー部での活動を禁止されたが、多分禁止されなくてもきつと顔を出すことはなかつたと思う。

俺と拓矢がいなくなつたサッカー部は帝国学園に大敗を喫した。

サッカー部員からの恨みの視線を日々感じていたが、彼らと共有できる悔しさなんてもうどこにもなかつた。

「本当にタバコは吸ってないんだー」

そう叫んでも、誰も俺のことを信じてくれなかつた。

こつそりタバコを吸っていたことを拓矢にチクられ、その腹いせに頭を蹴った。クラスではそういつた認識で固まっていた。

しばらくすると俺は否定することを諦めた。もう誰も反論する人はいないから、その認識こそが事実となった。

明日山の名を背負ってFFでエースストライカーとして活躍したクラスの人気者は、ただの暴力少年へと落ちぶれた。

前科持ちの俺を恐れてかいじめられるなんてことはなかったが、みんなが俺を避けているのは嫌でも理解できた。

俺はそれをどうしようもない罰だと受け止めていた。

拓矢のように学校を休もうかとも思ったけど、俺にはそうやって逃げることも許されないような気がして意地で中学生生活を乗り越えた。

部活もせず独り勉強していた甲斐があったのか、このあたりじゃそこそ賢い高校に合格した。

でも高校に進学したところで何も変わらなかった。明日山から来た生徒がみんなに暴露したから、やっぱり高校でも俺は避けられた。

どこの高校に行つたとしても隠し通せるようなもんじゃないし、きつと避けられない運命だったのだろう。

サッカーの禁止は解けたが、今更やり直すだけの気力なんてどこにもなかった。俺はいわゆる帰宅部になった。

☆☆☆

全部俺が悪い。そう思って日々を過ごしてきたけど、やっぱりまだ分からないことがある。

（あのタバコは誰のものだった？）

そして今、それを知る鍵が俺の目の前にあつた。

昨日家に届いた封筒に入れられた手紙。

鐵大輔様

明日山中学での事件について、私は真実を知っています。

誰が煙草をあなたのロッカーに入れたのか見当がついています。

私はその件についてあなたの無実を知っています。

私はあなたの味方です。

場合によってはあなたの冤罪を証明できるかもしれません。

こちらの電話番号までおかけください。

0 3 | 8 × | × × ×

× × ×

私はあなたを信じています。

あなたの協力者より

ㄣ

あの事件について詳しく知っている、と語るからにはやはり明日山の関係者だろう。サッカー部の誰かだろうか。

どうして今までそれを秘密にしていたのか問いただしたい気持ちもあるが、きつとそ
の人なりの理由があるのだろう。

俺が拓矢に暴力を振るつたのは真実だといいつも知ってるだろうから、俺と関わりたくなかったのかもしれない。

でも少なくとも今は俺を助けようとしてくれている。家族も教師も友達も誰も信じなくてしなかったのに、こいつは「信じています」って言ってくれた。

そう思うとこの「協力者」に対する怒りが薄れた。完全に無くなったわけではないが。ただ、どうして今になってこんな手紙を送ってきたのだろうか。

気になることがあるのなら全部電話で聞いてしまえばいい。

(本当に?)

その思いつきが正しいのか考えなおす。もし電話をかけてしまったらもう引きもどることはできない。慎重に考える必要がある。

もしこの「協力者」が俺にとって敵で、全部嘘だったとしたら。電話をかけることでどんな問題がある?

まず俺の電話番号がバレる。だけどこれはそんなに問題がない。手紙を送られたってことは俺の住所はとつくにバレてるから電話番号くらいいくらでも調べようがあるだろう。

まあ念の為公衆電話でかけるってのもありだな。

他には……もしかして生じる問題ってこれだけか？

俺との会話を録音してなにか良くない噂を流そうなんて思っていたとしても、俺はもう失うものなんて何も無い。

社会的信用が地に落ちた俺はもうこれ以上落ちるとこなんてないんだ。

冷静に考えれば考えるほど電話をかけるべきに思える。

「よしっ、やってやろう」

口にしたことで気持ちは固まった。

深呼吸する。

0, 3, 8……ひとつずつ丁寧にボタンを押していく。間違えてもちよつと気まずい空気が生まれてしまうだけのはずなのに、爆弾のコードを一つ一つ解除するような緊張感にあった。

プルルル……プルルル……

『はい、紫藤です』

「もしもし、鐵です」

『あなたが鐵君ね』

女性の声。「げんと、鐵君から電話よ」と電話口から聞こえたから、その「しとうげんと」の母親だろう。

しとうなんて名字の奴は聞いたことがない。少なくともサッカー部にはいなかった。

『もしもし、鐵さんですか？』

聞こえてきたのはまだ声変わりもしていないガキの声だ。

「そうだ、俺は鐵大輔。お前が俺の協力者ってやつか？」

電話の相手が俺に敬語を使ってきたからか、どう考えても年下に聞こえたからか、俺は少し荒い言葉で聞き返す。

『はい、僕がその協力者の紫藤幻斗です。僕は鐵さんの味方です』

「俺はお前のことを知らねえんだけど、お前はどこのどいつなんだ？」

『僕は、東京神成町の神成小学校6年生です』

「しよ、小学生……」

『小学生です』

声から俺より若いことは予想がついていたが、まさか小学生とは思わなかった。しかもその所在地が東京だとは。

『でも、鐵さんの味方になれることは保証します』

「ああ、俺はお前を信じるぜ」

『……いいんですか？ 僕のことをそんな簡単に信じて。まだ経緯の説明も何もしていないのに』

俺がこいつを信じようと思った理由——それはとてもシンプルなもの。

「お前は俺のことを信じてるって言ってくれた」

誰も信じてくれなかったことをこいつは信じてくれた。

「それだけでも、信じてるって言葉は凄いパワーを持つんだぜ」

☆☆☆

明日山中央公園。市の誕生50周年だったかに合わせて作られた不思議な形のモニュメントの下が待ち合わせ場所だった。

青のキャップを被って待っている。そう彼、紫藤幻斗は言っていた。

わざわざ東京から足を運んでくれたのだから、俺だって誠意を見せなきゃいけない。

モニュメントの下にいたのは、小学4年生くらいの子供と中学生くらいの子供だった。

でも2人はただの子供じゃない。青いキャップと俺を見つめる眼差しがそのことを教えてくれた。

「こんにちは鐵さん。信じて来てくれてありがとうございます」

その声で、背の低い方が紫藤だと分かった。

「俺は野賀刃也です。幻斗と同じ小学6年生です。今日は俺も一緒に話をさせてもらいます」

背の高い方は野賀というらしい。もう1人来ると聞いていたからつきり大人かと思っていたが、両方とも小学生だった。

それにしても、喋り方からは2人とも小学生だととても思えない。どういう育ち方をしているんだろうか。それとも人生2回目？

「いやいや感謝するのは俺のほうが。こんな俺を助けてくれるんだから。お前らは協力者なんだからもっと上から目線で話せよ。

協力者っていうのは大抵上から目線で喋って、自分の素性を明かさず、神出鬼没つてのが道理だろ？」

そういうと紫藤が少し笑った。

「鐵さん、そんなことも言えるんですね。もっと元気ないのかと思ってました」

（心配、されていたのだろうか）

「あ、いやそんな失礼なこと言うつもりはなかったんです。あの、ほんとすいません」

もっと生意気でいてくれたらこっちも話しやすいのに。

「まあそんなことはどうでもいいんだ。俺は話を聞きに来た。君たちの知ってる情報を教えてくれ」

「人がいっぱいいますが、ここで話しますか？それとも謎の協力者らしく喫茶店で密談してみますか？」

その言い回しはなんだかっこいい。俺は気に入った。

「ここから歩いて2分くらいところに小さめの喫茶店がある。もちろん俺の奢りだ」

16 鐵大輔（眞実）

場所を喫茶店に移し、窓に近いテーブル席に俺達は座った。

3人はとりあえずコーヒを頼んだ。俺が小学生のときはコーヒなんて苦くて飲めなかったのに。最近子供はこんなもんならうか。

「それで？そろそろちゃん教えてくれるんだらうな？」

公園から移動する2分の間、彼らは何も話してくれなかった。もしかしたら俺を弄んで楽しんでるだけなんじゃないか、なんて悪い考えも出てきていたところだった。

すると紫藤はやたら真面目な目で俺を見してきた。

「鐵さん。僕達が今から話す情報は、とても重要なものです。その情報を持っているだけで、鐵さんの身に危険が及ぶ可能性すらある代物です。鐵さんが何もしなければ何も起きないとは思いますが」

スパイ映画じゃあるまいし。なんて言える余裕は、彼らを前になくなっていた。

「そんなこと言って、お前らこそ大丈夫なのかよ」

「全く大丈夫じゃありませんよ。特に俺は。中学になってからこんなことをしていたことがバレるときつと交通事故にみせかけて殺されます」

野賀は冷静に恐ろしいことを言つてのけた。「そんなに深刻な問題ではありません」と言つて欲しくて大丈夫かか聞いたのに、結果は正反對だった。

「まあでもバレなきや大丈夫ですよ。さすがに今は監視されていませんから」

紫藤がフォローするが、何か大きな組織の存在を感じさせられて恐怖がどんどん大きくなる。

「CIAとかFBIとかが関わっているとでも言うのか？」

「バックにいる組織を考えると、似たようなものですね」

紫藤は冗談を言っているようにはやはり見えなかつた。

「これ以上脅しをかけられたつて、俺は引かないぜ。俺は眞実を知りたくて今日ここに来た。怖気付いて家に帰るなんてわけには行かないんだ。

それにもしそんなやばい組織が関わつてんのなら、俺がこの喫茶店でお前らと話してるときで危険つしよ」

「もう覚悟ができてきているのなら、今からでも話を始められます」

「ああ、全部話してくれ」

☆☆☆

「僕達があなたの事件について犯人が分かるかもしれないと思ったのは、あの事件を引き起こすだけの動機があつて、それでいて悪事をなんとも思わない人物を知っているからです」

「俺を嵌める動機がある奴……」

一瞬拓矢の顔が頭をよぎつたが、あの日拓矢が話してくれたことは全部真実だと結論づけたことを思い出して、外に追いやる。

「あの一連の事件で明らかに得をした人達がいますよね」

俺はずっとサッカー部の奴らを疑っていたが、エースである俺を嵌めてなにか得するようにはやはり思えない。事実、次の帝国戦では明日山は惨敗した。

「帝国学園です」

試合に勝つため、なるほど動機はある。

それだけの理由で俺の人生をぶち壊したのかと憤る気持ちもあるが、そもそもこんなことになってしまったのは俺が短気を起こしてしまつたのが悪いわけで。

「帝国戦だけでも俺を出場させないつもりが、俺が勝手に暴れて自滅してくれただつて何か」

「はい、そんな感じでしょうね」

紫藤が頷く。

「それで、なにか証拠があるんだろう？ 帝国が俺を嵌めて俺は冤罪だって証明してくれる証拠が」

暴力少年の俺を信じてくれたってことは、信じるに値するだけの確固たる証拠を持っているに違いない。

「ありません」

「えっ？」

予想外の紫藤の発言に驚きの声を上げる。

「信じられないかもしれないけど、幻斗は憶測だけでこの場所に来ているんですよ」

野賀が信じられないようなことを言う。

「でも刃也だつて僕の憶測が正しいと思つたから着いてきたんでしょ？」

「1人で遠出することを幻斗のお母さんが許してくれなかつただけだろ」

（ただの憶測……）

なんの証拠もないのに憶測だけで俺を信じてくれたことを感謝するべきなのに、無敵

の協力者がただの小学生に成り下がってしまったように感じた。

「あ、でも安心してください。僕は犯人は帝国で間違いないと思っ
ていますから」
俺の不安な面持ちに気づいたのか、紫藤は必死にフオローする。

でも小学生が1人や2人信じてくれたところで何も変わらないだろう。

「鐵さんはサッカー上手でしたよね？全国でもトップレベルに」

「あ、ああ」

突然の質問に戸惑いながら答える。パワーだけで言えば、俺は最強級のストライカー
だったと思う。

自惚れじゃないと思いたいが、映像で見た他のどの学校のストライカーよりも俺は強
かった。俺のアイアンブレイクは他のどの必殺シュートよりも強かった。

「それなら、やっぱり帝国の仕業としか考えられません。影山をよく知る人からすると、
鐵さんになんの手出しもしないということの方が考えられません」

「その影山つてのは誰のことだ？」

「帝国学園総帥で、中学サッカー協会副会長の影山零治。全ての元凶です」

そう言い放つ紫藤の顔には強い憎しみがこもっているように見てとれた。

「1995年。幸福中学のキャプテンで司令塔の滝島悠は帝国戦の当日、試合直前に工事現場での事故に巻き込まれ病院に運ばれた」

「どうした？」

紫藤は突然何かを読み上げるように話し始めた。

「1994年。アルプス中学のストライカー杉山和哉はFF決勝の帝国戦前のトレーニング中に器具が破損し右足を骨折」

「同じく1994年。千羽山の歴代最強キーパーと呼ばれた堤鉄平は準決勝帝国戦に出場しなかった。原因は不明」

「1992年。桜咲木^{さくらさきぎ}中学を決勝まで導いた優秀な監督である久遠道也は帝国との決勝前日に問題を起こし、帝国の不戦勝となった」

「ここまで聞くと、紫藤が何を言いたいのかわかってきた。

「1991年。巨人中学のキャプテン城内翠は地区予選決勝に勝利した帰り道、交通事故に遭い死亡」

「1989年。高天原中学のストライカー武川慎司は決勝に出場せず。唯一の肉親であつた母親が交通事故で重体になり、試合に参加出来る余裕がなかったとのこと」

「1988年。狩火庵中学は準決勝で帝国と戦うはずが帝国の生徒に対して集団で暴力

事件を起こし、出場停止。一昨年までFFに出場することを禁じられていた」

「同じく1988年。決勝は帝国と木戸川清修中学。木戸川清修のメンバーはいつもどおりで、何事もなく2-0で帝国が勝利した。しかし試合後のインタビュにて木戸川のキャプテン飯島陽斗は『試合当日の朝、トラックに轢かれて弟が死にました。天国の弟に勝利を見せてあげたかった』と答えている」

「1987年——」

「もういい」

紫藤の話が野賀が遮る。

「幻斗の言いたいことは多分もう伝わってるよ」

「ああなんとなくな。つまり今言った全部が帝国の、影山の仕業だつて言いたいんだろ？」

「はい、そういうことです。40年前、雷門中サッカー部が乗ったバスが決勝に向かう途中で事故を起こして帝国が不戦勝となって以来、FFで帝国と戦う学校は事故や事件に見舞われています」

「でも特に証拠があるわけじゃないんだろ？」

もし証拠があるのなら今頃影山は刑務所にいるはずだ。

「それじゃあ鐵さんは全部偶然だつて言うんですか？」

少し紫藤が語気を強めたように感じた。

時代を遡れば遡るほど、情報を集めるのは難しい。40年前からの全てのデータを集めるために新聞や雑誌記事を漁って苦労したのだろう。

「ていうかそもそも、サッカーで勝つために人を殺すなんて普通じゃないだろ。どう考えてもメリットとデメリットが合わねえ。

木戸川の選手の弟がトラックで轢かれたって話。試合に勝つために選手の家族を殺すっていうのは理解できない。実際試合に影響はなかったらしいし、人の命がそんなに軽くていいわけないし」

「影山は殺せます。試合に勝つただけに人を殺せるような奴です」

紫藤はそう断言する。その自信は一体どこから生まれているのだろうか。

「紫藤はどうしてそんなことが言えるんだ？どうして帝国学園の中で影山が黒幕だって言えるんだ？お前は何を知っているんだ？」

「……」

紫藤は何も答えない。

「なあ幻斗、隠し事せずと言ったらどうだ？」

「ごめん、それは言えない……言えません」

野賀に頼まれても紫藤は言わないらしい。

薄々感じていたが、2人の立場は平等ってわけでもないらしい。少なくとも野賀は独断で俺に情報を伝えることはできないようだ。

「俺は、俺のことを信じてくれたお前らのことを信じている。だから、2人が俺にいたずらしたり嘘をついて騙したりしてゐるなんて思っていない。

でも、このままだとお前らの話を信じることはできない。ただの妄想だとしか——」
「そんなことはありません！」

「これは全部本当のことなんです！影山は勝つためにはなんでもできる奴で、影山のせいで死んだ人や人生が狂ってしまった人はたくさんいます。僕は知っていたはずなのに、鐵さんも誰も助けられなかった。この間のFFだって僕は見てただけだった。まだ始まっていないからとか高をくくって。それに、あの記憶は絶対妄想なんかじゃないんです。全部幻だったようにも思えるけど間違いなく真実なんです！」

「幻斗、落ち着け！」

野賀の静止を受けて、紫藤は少し冷静に戻ったようだった。

かなりびびつくりした。いきなり俺の話を遮ったかと思えば、息継ぎすらせずにかかまくらしたてる。正直なところ、この様子を見たことでやつぱり紫藤の妄想なんじゃないかって思いが強くなってしまった。

「ごめんなさい。鐵さんの質問に何も答えずにただ信じてくれたのは自分勝手すぎますよね。少し頭を冷やしてきます」

そう言うのと紫藤は立ち上がって、トイレの方へ歩いていった。本当に顔でも洗って頭を冷やすのだろうか。

紫藤と入れ替わりになるようにマスターがコーヒーを3つテーブルに運んでくれた。さつき声を荒らげていたのを聞かれていたかもしれないが、マスターは何も追求するつもりも関わるつもりもないようだ。

いやそれが普通の対応か。

「幻斗は、背負いすぎてるんです」

野賀がそう呟いた。

「フィアズ・マティクの『繰り返す人』の話って知ってますか？」

「なんだそれ？」

全く聞いたこともない。

「愛する妻を事故で無くした男は、神に祈って時を遡る力を得るんです。そしてその力を使って妻の命を救います」

「いい話じゃないか」

野賀もまた紫藤と同じように脈絡もなく話を始めたので、適当に相槌を打つ。

「しばらくすると男は、病気で死んだ両親を助けたいと思い始めます。そしてまた時を遡り、医者を呼ぶことで両親の命を救います」

なんとなく結末が見えてきた。だんだん男は欲を持ち始め、欲に動かされるまま力を使うことになる。最後は神に見放されて天罰が下るつとこだろう。

「それからは男とその家族は神に感謝しつつ慎ましく暮らしていました。しかしある日、男は町で両親を失った少女に会います。そして、その少女の両親を救うために再び力を使います。

男はそれこそが自分の使命だと信じて、力を使って人々を救います。世界中を幸福にするために」

でも、そんなこと――

「でも、そんなことは不可能でした。どれだけ男が努力しても、世界から不幸は消えません。その消えない不幸を、男は自分の責任だと考えました。

どれだけ時を遡っても、不幸は消えない。繰り返すうちに、男は不幸にのみ目を向けるようになりました。繰り返し繰り返すほど男は不幸になってしまふのでした」

予想とは少し違った結末だったかもしれないが、それでこの話を俺に言っただけになる

のだろうか。

「結局この話は、人生は1度きりだからこそ幸福であるという教訓の話です。

でも俺は、幻斗にこの男を重ねてしまうんです。幻斗にはたくさんの秘密がありません」

「秘密……?」

「どうして幻斗は影山が黒幕だと確信を持てるのか、鐵さんが思った疑問と同じ疑問を俺は持っていました。でも、幻斗は決して答えを教えくれませんでした。

そもそも最初に帝国について調べようと思っただけがなんだったのかも教えてくれません。最初に幻斗が言っていた『影山のバックにいる組織』っていうのがなんなのかも知りません」

それでも、と野賀は力強く続ける。

「俺は幻斗のことを信じています。小学校の6年間一緒にいた俺は、幻斗はものすごく賢くて、良い奴だっただけを知っています。幻斗は意味もなく隠し事するはずなんてないって分かっています。

だから今はまだ幻斗が俺に秘密を話してくれなくても、俺は幻斗を助けるつもりです」

野賀のその宣言を聞いて、俺は俺と拓矢の関係を思い返していた。

(どうして俺は……)

後悔は、消えない。

「多分幻斗は最初から影山のことや帝国のことを知っていたんだと思います。知っていたからこそ、自分なら救えたんじゃないかって思ってた罪悪感に苦しんでいます。繰り返すの男のように、自分の使命だとか義務だとかと勘違いしてしまってた。

本当は幻斗も同じ被害者のはずなのに……」

「被害者ってのはどういう意味だ？」

あいつも、俺のような苦しみを背負っていたということなのだろうか。

「幻斗の父親は、交通事故で死んでいるんです。轢かれそうになった幻斗を庇って。そして幻斗はその事故を影山の仕業だと考えています」

「それは本当に影山の仕業なのか、野賀はどう思ってるんだ？」

F Fの関係者の事故に影山や帝国が関わっていたとしても、全く関係のない交通事故まで影山のせいなんて言われたら困るだろう。

「俺の考えだと半々って感じですよ。幻斗を殺すことで影山は自分の育てた選手に傷を付

けられる可能性を減らせるかもしれないと考えていた可能性は否定できません。俺には狂人の考えなんて理解できませんから。ただ……」

そこまで言つて野賀は口を噤んだ。振り返ると、紫藤がトイレから帰ってきていた。

「冷静になつて考えてみたら、鐵さんに信じてもらう必要なんて何もなかったんです」

紫藤はそう俺に言つた。

「僕は、必ず影山を捕まえてみせます。影山のこれまでの全ての悪事を白日の下に晒し、しっかりと刑務所で罪を償わせます。被疑者死亡で終了、なんて結末は僕が許しません。

だから、鐵さんは黙つて待つてください。いつか影山が捕まったとき、タバコの件についても自白してくれるかもしれません」

「捕まえてみせるつてお前は刑事か。なんで小学生のくせにそんな背負わなきやいけなんだよ。」

俺はお前より年上だ。俺を頼つてくれたつていいだろ？」

「だって、鐵さんは僕のこと信じてくれないんでしょ？」

紫藤が悲しそうに呟く。そう言われると、俺は反論できない。今だって紫藤の妄言の可能性を疑っているのだから。

「さ、コーヒーが冷めないうちに飲んじやいましょう」

紫藤に言われて俺たち3人はコーヒーを飲み始める。

野賀が時折何かを喋ろうと口を開けるが、その口から言葉が出ることはなく、沈黙が続いた。

「ごちそうさまでした」

沈黙を破つたのは紫藤だった。

「もう話すことはなにもありませんから、さっさと会計を済ませましょう。鐵さんが奢ってくれるんですよね？」

「ああ、もちろんだ。約束はちゃんと守るぜ」

☆☆☆

会計も済ませ、俺と2人は店の前で別れることになった。

「まあ、色々教えてくれてありがとな」

信じられるかはさておき、俺が1人閉じこもっていたままだったら決して知ることのできない情報を、彼らは教えてくれた。

「僕達も情報を集めに来たから、お互い様ですよ」

俺とのこの出会いを通じて、紫藤は自分の仮説に確信を深めたってわけか。

でもそれってすごく勇気のいることなんじゃないか？

もし俺が噂通りに暴力少年だったとしたら、あいつらは逆ギレした俺に殴り殺されていたかもしれない。

「そういえば、後悔していることがあるなら今からでも行動に移せばいいと思いますよ」
「なんの事だ？」

「水野さんはきつと許してくれます」

どうして拓矢の名前が？俺がそう呆気にと取られているうちに、2人は曲がり角の奥へと消えていった。

（ああ、そういうことか）

あいつらの目的がF Fに関連する事件の情報を集めることなら、わざわざ俺と話をしなくてももう1人の当事者である拓矢に聞けばいい。

つまり、あいつらは俺に会う前に拓矢に会っていたんだ。

既に拓矢から話を聞いていたから、俺の話を信じる事ができた。

それって拓矢は俺のことをまだ信じてくれていたってことになる。少なくとも拓矢は、俺がタバコを吸っていなかったことを証言してくれたのだ。なんだか嬉しい。

それじゃあどうしてあいつらは俺にも話を聞きに来たのだろうか。俺が知ってることなんてほとんどない。俺は俺自身の無実の他になんの情報も持っていない。

(もしかして……)

俺と拓矢を仲直りさせるため、とか？

人の良さそうな2人の姿を思い出すに、あながち違わないのかもしれない。

喧嘩して仲直りするのは初めてのことじゃない。ただいつもと違うのは謝るのが俺だということだけだ。

2年という期間は喧嘩にしては長すぎるが、俺と拓矢が友情を育んだ期間よりはまだまだ短い。

俺はあんなことをしたのに、拓矢はまだ俺のことを信じてくれていた。

俺が勇気を出すための理由はそれだけで十分だろ？

17 交通事故

「なあ、幻斗は将来サッカー選手になりたいのか？」

父さんが僕に質問した。

「うん。僕は雷門に行つて、円堂と一緒にフットボールフロンティアを優勝するんだ！」
僕は元気に答えた。

前世も合わせたらもう大人なわけだけど、父さんや母さんの前なら子供でいてもいいのかな、なんて思っていた。

「それから大人になったら——」

「幻斗！」

☆☆☆

父を轢き殺したあの紫色の……いや違う色だったかもしれないが、あの車は茫然と立ち尽くす僕をよそにどこかへ去っていった。

それからのことはほとんど覚えていない。

多分僕が公衆電話とかから119に電話をかけたから、救急車がやってきた。それで僕も一緒に救急車に乗って病院に行っただけだと思う。

僕は父さんのおかげで怪我ひとつしてなかったんだけど、父さんはダメだったらしい。

僕はずっと「僕のせいだ」って呟いていて、母さんが必死に慰めてくれたらしい。僕自身はほとんど覚えていないから全部「らしい」ってなっている。

その後警察の人と話をし、身内だけで父さんの葬式もした。葬式をしたという事実だけは辛うじて覚えているけど、そこで何をしたかなんてろくに覚えていない。警察の人と話した内容もやっぱり分からない。

車のナンバーだとかちゃんと目に焼き付けてたら良かったんだけどな。警察の人に話したのはきつと色についてだけ。その色についても「彼は錯乱していたため信憑性は薄い」なんて調書に書かれているかもしれない。

もしかしたらほんとに紫色じゃなかったかもしれないし。そんなことないとは思いますが、倒れた父の髪の色を車の色と間違えてしまった可能性もある。僕の父さんの髪色は僕と同じで薄い紫だったから。

やっぱり僕の証言に間違いがあったのか、轢き逃げの犯人はいつまで経っても見つからなかった。

母さんはその件で一度、警察を訪ねたことがある。普段は自己主張なんてしないタイプだけど、いつまでたつても警察からなんの連絡もないことに痺れを切らしたのだ。

担当してくれた警察の人は母さんの質問に対してはぐらかし続け、ほとんど何も教えられなかった。

ただひとつ問いつめて聞き出せたことは、もう轢き逃げ事件の捜査はされていないということだけだった。

そして母さんが警察に乗り込んだ翌日、影山から帝国へ入学するよう再び打診を受けた。君の才能を不慮の事故で捨ててしまうのは惜しい、なんて体のいい言葉を並べて。

このころになると、僕は裏で何が起きているのか理解していた。認めたくなかっただけで、もしかしたら、最初から分かっていたのかもしれない。

このイナズマイレブンの世界で交通事故といえは、原因はひとつしかない。

そう、全て影山のせい。

影山は最高傑作である鬼道のイリユージョンボールを攻略しうる僕を手元に置いておきたかった。それなのに僕が一度目の打診を断ったから、僕の存在ごと葬りそうとした。

作戦は失敗し僕が死ぬことはなかったが、代わりに父さんが死んだ。経済的に苦しくなったことを見透かした影山は再び僕を帝国に誘った。

そんなところだろう。

☆☆☆

僕は当然誘いを断った。帝国へ行ったらそれこそ影山の計画通りだったからだ。

心配させたくもなかったし、母さんには理由を全く言わなかった。でも母さんは最終的に僕の決めたことだとして認めてくれた。

本当は雷門に行きたかったが、我が家は決して裕福とは言えず、母さんのパートの掛け持ちだけじゃとても雷門の学費とシユーズ代を払えそうになかった。

理事長もいる雷門はもちろん私立だ。

普通なら公立中学に進学すればいいと思うのだが、この世界の進学事情は前世と少し異なる。

この世界には私立中学校がたくさん存在していて、中学受験というものがかなり一般的な選択肢として存在する。といっても小学生のころから塾通いなんて人は前世どおりそんなにいないくて、大抵の学校は小学校で授業を受けてさえいれば問題なく入試は通る。言ってしまうえば学費だけ払えば誰でも入れるということだ。

もちろん公立中学に行く人もたくさんいる。だが、中学でサッカーをしたい人は私立に行けというのが常識となっている。

というのも、公立中学でちゃんとしたサッカー部があることが珍しいからだ。

地球の命運をサッカーで決めるくらいだから、この世界ではサッカーがマイナースポーツだったりするわけでもない。

だが、F Fに出場する学校はどれも私立だ。噂によると中学サッカー協会が関わる大会に公立中学が参加するには複雑な手続きや負担が多いのだとかで、たとえサッカー部があっても公立中学はF Fに出場しない。その結果F Fを目指すような子供はだれも公立に行かなくなり、サッカープレイヤーが私立中学に固まることになる。

十中八九あいつの仕業だろう。公立に通う子供から、サッカーの大会に出場する機会

すら奪うなんて……

これが日本のサッカー界の弱体化に繋がっていると気づいていないのだろうか。いや、弱体化こそがあいつの目的だったかもしれないな。つまらない復讐だ。

僕が通う中学校、すなわち神成中学校はそもそもサッカー部がない。円堂みたいにサッカー部を創部する選択肢もあるが、公立である神中しんちゆうにはサッカーに意欲的な生徒がそれほどいるとは思えない。

神成FCの人達の中にはサッカーはもう終わりにして神成中学に進学するつもりの人もある程度いるから、頼み込めば部員数だけはなんとかなるかもしれない。だけど、やはりFFに出場するとなるとさつき言った公立問題が浮上する。

サッカー部でサッカーが続けられたとしても、FFに出場できないんじゃないや物語に関わることができない。ただテレビで決勝の様子を眺めるだけなんだつたらそれは前世と何も変わらない。

母さんと色々話し合った結果、雷門以外の通える私立を探すということで保留になった。

☆☆☆

ある日刃也が帝国学園に行くと言い出した。

もともと刃也は両親から帝国へ行くように言われていて、それを僕がゴリ押しで一緒に雷門に行くことになっていた。

僕が雷門に行くのをやめたから、刃也が帝国へ行くことになるのは当然の帰結だった。

刃也を帝国へ行かせるわけにはいかないような気がして必死に反対した。

なんの理由もなく考えを変えてくれることはないと分かっていたから、僕は図書館へ向かった。影山の悪事の状況証拠を集めるために。

影山が起こしたと思われる悪事は山ほど見つかった。ちょうどその年のFFでも、帝国の初戦の相手のキーパーが交通事故で死んでいた。

僕がジュニアエンパイア相手にイリユージョンボールを披露して喜んでいたのと同じころに。

彼は、僕が救うことのできた命だった。悔やんでも悔やみきれなかった。

帝国に関係する事件や事故を集めて刃也に見せ、これらは全て帝国の影山の仕業だと力説した。

それを聞いてもなお、刃也は帝国に行くと言った。

「この事件や事故が全部偶然だって言うの？」

「いいや、偶然なんて言わないよ。幻斗がそこまで言うつてことは全部本当のことなんだって俺は信じる」

「それなら、どうして？」

「帝国のことを知るには帝国の内部にいた方が有利だからさ。幻斗のお父さんの事故についても知ることができるかもしれないし」

刃也は賢いから、父さんの事故の真相について気づいていた。その上で、自らスパイとなると言い出した。

それは危険なことだったかもしれないけど、僕は刃也の提案に乗った。

☆☆☆

母さんには経済的に無理のない範囲で僕がサッカーを続けられる学校を探してもらった。

母さんが見つ付けてくれた尾刈斗中学は、催眠術だとか不穏な要素もあるけど、悪くない選択肢だった。交通遺児に対する保証も充実していて、僕の勉強の頑張り次第では無料になるという。

そして、刃也とは影山の悪事の証拠を集め回ることになった。

僕達がどれだけ頑張ったところで警察と繋がっている影山の力を前には無力かもしれない。でも、何にもならないなんてことはない。

捕まえることこそできずとも、影山が悪いやつだということを知らしめることができたらいい。

行動を始めたのが遅かったから、僕達にできたことは少なかった。

中学が始まれば、刃也は行動が制限される。それまでにできる限りのことをしたつもりだったが、調べることができたのは3件だけだった。

ただ、そのどれもが影山の仕業で間違いないと確信を深めることができた。

☆☆☆

実は父さんが影山に殺された後、僕はサッカーを辞めようと思っていた。父さんが死んだのは全部僕のせいだから、サッカーボールに触らないことで償いになる、なんて豪炎寺みたいなことを考えて。

でも夕食の席でその考えを母さんに言うと、

「父さんがそんなこと望んでいるはずがないでしょ。父さんは最後まで息子が幸せに生きることが願っていたの。幻斗自身がしたいことをしなさい」

なんて言われた。

感動ものの小説で、「僕のせいだ」っていう子供に対してかける言葉としてはありきたりなものだったかもしれない。

「僕をしたいことなんてもうないよ。もう僕は何もしたくない」

そう僕が答えようとしたとき、母さんの言葉が全く違う意味で聞こえた。

（僕はもう何もしなくてもいいかもしれない。でも、幻斗は？）

母さんが言った『幻斗』は、もちろん僕のことだ。そうに決まっているのに、僕の思

考は変な方向に加速していった。

(僕はこの世界に紫藤^父柊斗^{さん}と紫藤^母涼子^{さん}の子供として転生した。前世で死んでしまった僕に奇跡が起きて、こうして2回目を与えられたんだ。

じゃあ奇跡が起きなかったとき、紫藤家はどうなっていたんだろう。紫藤幻斗と父さんと母さんは、今頃仲良く3人で食卓を囲んでいるのかな。

紫藤^{僕じゃない僕}幻斗は何を考えている？何を願っている？)

『どうして僕のパパを殺したの？』

僕の耳に呪詛が響くようになったのは、この日からだった。

☆☆☆

いつか、影山の悪事を白日の下にする。そして全ての影山の被害者を解放してやる。

それで、君のパパを殺してしまった償いになるだろうか。

天魔大戦編

18 レジスタンス

『この腐ったサッカー界に起こしましょう。革命を』^{かぜ}って何だよ。いやまあ自分の発言なんだけどさ。何その倒置法。

僕は松風天馬にでもなつたつもりか？

それはさておき、地木流監督が打倒帝国に手を貸してくれることになった。

尾刈斗の最強戦術の担い手である監督が仲間になってくれたならこれほど心強いことは無い。

想定していた最悪のパターンは監督の家族が人質に取られていることだった。

監督が結婚しているなんていう話は聞いたことなかったが、人質にとられるのは何も妻や子供とは限らない。監督の両親の命を影山が握っている、なんていう可能性もあった。

監督の家族が関わっていないってことは、何かがあったとしても監督が自分で自分の

泥を被るだけ。

残酷かもしれないけど、僕は安心した。僕のせいで罪の無い人に被害が及ぶことはないんだって。

そんな長い付き合いでもないけど、選手と監督として一緒にフィールドに立っていたから、監督がそんな悪い人間じゃないと信じていた。

だから影山と監督が繋がっているって刃也から聞いたときは、脅されて仕方なく命令に従っているだけだと思った。

脅されていたのは事実だけど、実際監督は思ったよりも多くの悪事を重ねていた。

僕が監督のことを『罪の無い人』であるとはは思えなくなるくらいに。

それは正直ショックだった。

でも、この現実を前向きに考えよう。監督が影山の重要な駒であったということは、それが裏返って僕のものになったとき影山に大きな損害を与えられるということだ。

罪があるかないかなんて関係ない。僕は世の中の罪人を全員裁くほど正義感に満ち溢れてないから。

僕の目的のために監督が使えるのならそれでいいじゃないか。

☆☆☆

監督は僕に知りうる限りのたくさんの情報を与えてくれた。今まで僕が図書館を必死に漁っていたのが馬鹿らしくなるくらいに。

例えば、尾刈斗中学の設立に影山が関わっていたという話とか。監督が尾刈斗の教師になれたのもそのおかげなのだろう。

尾刈斗の校長は基本的に影山に頭が上がらない。でも影山が学校の経営に口を出すことは滅多になく、唯一あったのが奨学金制度の改定だったらしい。ある日突然影山から電話があり、「交通遺児への援助を積極的にするように」とだけ言ったのだとか。

それはちようど僕が入学する直前、そして父さんが事故で死んだ直後だった。

僕が本当に知りたかった情報——あの交通事故の真相は監督も知らなかったらしいが、あれは影山の仕業だったと考えるのに十分な証拠は集まっていた。

母さんが探し出してくれたと思っていたこの選択肢も全て影山の掌の上だったって思うととても腹立たしい。影山は自らの管轄下にある尾刈斗に僕を誘導していたって

ことだ。

でも、僕はここで影山の意のままに踊るつもりはない。いくらでも抵抗してやる。何を犠牲にしても。

そういえば、今日監督が別れ際に変なことを言っていた。

『紫藤君、君は君が思っている以上に悪役なんて似合いませんよ』

人の心を見透かしているつもりなら本当にやめて欲しい。

☆☆☆

打倒帝国、それは生半可な気持ちでできるものじゃない。尾刈斗のみんなで気持ちを固めなければまた蹂躪されるだけだ。

道化先輩達みたいに、どうせ勝てないって諦めていたなら勝てる試合も絶対に勝てなくなる。

もしかしたら、先輩達は帝国と監督の繋がりを薄々察していたのかもしれない。

帝国にさえ反逆しなければ、尾刈斗は帝国の庇護下で楽しくサッカーを続けられるから。

実際、僕のせいで尾刈斗サッカー部は試合ができなくなつた。サッカーをするという最低限の楽しみも奪われた。

先輩達が僕らがサッカーをする権利を守っていたのだとしたら、みんなに迷惑をかけた僕には文句を言う資格はない。

「私たち尾刈斗サッカー部の今後の目標が決まりました」

監督が部室に部員みんなを集めて話をしている。いわゆるミーティングだ。

いつもなら他の学校との試合を控えているときなどにするのが、最近は練習試合もできていないからFF地区予選以来ということになる。

「帝国学園に勝つことです」

「そ、そんな無茶アル」

「イツツインポツシブル！」

突然監督に掲げられた大きすぎる目標に、みんなは驚きの声をあげる。

「魔界の住人の俺にかかれば帝国なんて余裕だぜ」

「王者帝国を倒すなんて血が高鳴るぜ！」

消極的な靈幻れいげんや鉦なたとは対照的に、魔界先輩や月村先輩がやる気を見せる。FFの帝国

戦では諦めていたように見えたが、実際にフィールドに立つてああもコテンパンにされると色々と思うところがあるのだろう。

「お前らももつと根性見せろや！アオオオオーン！」

だとしても月村先輩がこんなにやる気（というより雄叫び）を出しているのは今日が満月の日だからだ。満月モードの先輩でチーム全体の士気をあげる、監督のことだからそこまで考えて今日を選んだのだろう。

「それより……呪い……」

月村先輩のおかげで熱くなった空気の中、八墓やつはかがおずおずと意見を言う。

「呪い？」

「正確には……呪いの噂……試合が出来なきや……強くなれない」

影山の嫌がらせ。本当はただ監督が試合を断っているだけなのだが、呪いの噂が原因だとみんなは信じている。

「それは問題ありませんよ。あれは全部私が試合を断っていただけですから」

監督が大きな爆弾を投下した。

☆☆☆

「つまり、監督は帝国学園の影山と協力体制を取っており、今まで情報を帝国に流していた。そして試合ができていないのは、影山の指示で監督が試合を断っていたから。こういうことですか？」

衝撃的な監督の告白にみんなが狼狽えるなか、部内随一の優等生でもある円谷が話を纏める。

ちなみに2番手は僕である。前世では伊達に高校に通っていたわけではない。奨学金に関するアレは少し心配になったが、1位でなければならぬといったわけではなく、絶対的評価で決めるらしいから大丈夫らしい。

そんなに賢いのにどうして円谷は毎日UFO探しに勤しむのか理解に苦しむ。宇宙人なんているはずが……ないことはなかった。

「円谷君、そのとおりです」

みんなが監督に不信の目を向けているのが分かる。例外的に八墓や鈍、木乃伊原作時中2、MF。乾燥肌だとかで前身ミイラ男や黒上、魔界先輩は表情を窺い知ることができないが、似たようなものだろう。思ったより例外が多い。

「監督が今までどうだったとしても、今は俺たちの仲間なのは変わらないというがー。一緒に戦うがー！」

不穏な空気を察知したのか、不^{ふらん}乱先輩が監督をフオローする。

不^{ふらん}乱先輩は単純な人で、悪くいうなら少し頭が悪い。賢さを客観的に評価する指標のひとつである通知表によると、円谷とは対照的にかなりヤバいと月村先輩が言っていた。

生命の創造だなんて禁忌感あふれる不^{ふらん}乱先輩の夢を聞いても恐怖を感じないのは、不^{ふらん}乱先輩なら絶対にやりとげられないという信頼があるからだろう。幼い子供がスーパーマンになりたいと言うのを聞き流すみたいな感じ。

少しデイスリスペクトしすぎた気がするけど誰にも聞こえてないから大丈夫。

気になって多呂斗先輩の方を向いたら目があつた。

たまたま……だと思いたい。

「確かに監督が帝国と繋がっていたのなら……こちらも向こうの情報を手に入れられませぬ……」

「ぐふ……木乃伊の言う通り……深淵を覗くとき、深淵もまたこちらを覗いている……ぐふふふふつ」

その台詞、もう引退した冥^{くわいかど}門先輩なんかが言っていたらもつと様になったのに。

それにしても、八墓といひ木乃伊といひ屍^{しかばね}といひ、どうして尾刈斗のみんなはそんな間の置いた話し方をするのだろう。

なんかホラー感が出るから、とかそんなくだらない理由かな。

「お前らの言う通りだぜ！監督はオレ達の仲間だぜ！」

月村先輩が熱い言葉を熱く叫ぶ。道化先輩は部長を引き継ぐときに満月モードの月村先輩のことを少し危惧していたが、このみんなをひっぱるリーダーシップは無くしてはならないものだ。

実際その一言で、みんなの不信が取っ払われたのが分かる。

それもこれも監督の想定通りなんだろうけど。

☆☆☆

——ですから、ゴーストロックはそのまま使わずに、何か改良を加える必要があります。現在のゴーストロックの情報は私のせいで全て帝国に伝わっていますから。

皆さんくれぐれもこの話を外に漏らさないように。我々サッカー部が打倒帝国を掲げていることは私以外の他の教師にも絶対に言わないでくださいね」

監督の知りうる帝国の情報（今度は影山の活動についてとかじゃなくて、選手の情報

のことだ)をもとに、対帝国の作戦について語り合った。例の監督の過去とかも合わせて、2時間くらいは話をしていたのかな。

今まで最も長く、最も有意義なミーティングだった。

「とりあえず今日はこのあたりにしましょうか。長く話しすぎたのもう終わりにしてもいいんですが……少しサッカーボールを触らないと帰れない人もいるようですね」

月村先輩はサッカーがしたくて「ウウウル」ともはや人間のものではない声を発しているし、それ以外のみんなも帝国という大きな目標ができて体がうずうずしている。

もちろん、僕だってそうだ。

19 じゃんけん至上主義

サッカー部員16人が部室に揃っている。道化先輩達が引退してから、こうして全員が一堂に会するのは初めてかもしれない。

16人を2で割って8人ずつ。時間がないのでハーフタイムなしの30分だ。

普通なら紅白戦として赤と白に分かれるところだが、魔界先輩の提案でHee-eeチームとHeavenチームという名前になった。

命名センスが確実にアレを患っている。

「じゃあ魔界の住人の俺がHee-eeチームのキャプテンだ。異論はないか?」

「ナツシング!」

月村先輩が満月モードになってしまった以上、この部でみんなを纏めるのは魔界先輩の仕事だ。多呂斗先輩はサッカーに関してあんまり積極的じゃないし、不死先輩はコミュニケーションに難あり。不亂先輩は周知の通り馬鹿なので、消去法で魔界先輩になる。

謎の白い布を被って魔界の住人を自称している点さえ除けば、比較的まともに頼れる

先輩だ。

「Heavenチームのキャプテンは……多呂斗、任せた！」

みんなの視線が多呂斗先輩に集まる。多呂斗先輩もあんまり自分から前に立ちたがるタイプではないが、頼れる先輩の1人だ。

「僕よりも適切な人がいますよ。紫藤君です」

「えっ？」

僕が素っ頓狂な声をあげると同時に、みんなの視線は僕に移った。

「理由は……占いです。紫藤君に任せるとよし、とタロットが教えてくれました」

タロットさんがそういうのなら仕方ない……のか？

こうして魔界先輩率いるHeerチームと僕率いるHeavenチームでの天魔大戦（またの名を紅白戦）が始まる。

☆☆☆

「最初はグー、出さなきやパーよ、じゃんけんぽん」

僕はチョキで、魔界先輩はパーだ。

「よしつ、不死先輩ゲット！」

「じゃあHeerチームのキーパーは鉈だな」

今のじゃんけんはキーパーを決めるためのもの。

今尾刈斗には不死先輩と鉈と2人のキーパーがいる。1年後の原作では鉈が正キーパーとなっているが、現状ではまだまだ不死先輩の方が実力は上だと思う。

「出さなきゃパーよ」と掛け声をかけることで、無意識に相手はパーを出してしまうという戦法で見事勝利をもぎ取った。前世から多用している戦法で、その勝率はなんと3分の2だ。

「どんどん決めていこうぜ。せーので1番仲間に入りたいやつを指さしな」

キーパーを決めたら今度はフィールドプレーヤーを1人ずつ決めていく。思ったより僕の責任は重大だ。

「せーのっ」

2人が指さしたのは当然……

「やっぱ月村かあ」

「そりゃそうですよね」

月村先輩しかいない。もともと部長に選ばれるほどの実力があるが、満月の日の先輩

は本当にずば抜けて強い。

2人の指名が被ったからには当然じゃんけんだ。このじゃんけんで勝敗が決まると言っても過言ではない。

出さなきやパー作戦は1度しか通じない。今度は実力で勝たなければいけない。

(先輩の思考を読め……さつきはパーを出して負けたから、心理的にパーを出しにくいんじゃないか？いやそう思わせてあえてパーを出すなんてことも先輩ならしかねない……)

(ここは裏の裏の裏をかいて……)

「最初はグー、じゃんけんぽん！」

僕はパーで、先輩はチョキだった。敗北である。

「よしつ、魔界の住人の俺に月村がいればHeeーチームの勝利は固い」

「アオオオオオーン！」

「じゃあ僕は多呂斗先輩で」

続く2回目、僕と魔界先輩が選んだのは不亂先輩。唯一残っている2年生ということを選んだが、またまた被ってしまった。

だが、今度は絶対に負けない自信がある。

「魔界先輩はじゃんけんが強くて勝てそうなので、Heeチームの鉦とじゃんけんするのつてありますか？」

「同じチームなら誰がじゃんけんしてもいいだろう。最強の俺の前に恐れおののいたか！」

誰がじゃんけんしてもいい、魔界先輩は確かにそう言った。

「あ、じゃあHeavenチームもじゃんけん交代します。多呂斗先輩お願いします！」
うちのチームには、じゃんけん最強多呂斗先輩がいるのだ。

「オーマイガー！そういう作戦かよ！」

多呂斗先輩がじゃんけんでは負けているところは見たことがない。やっぱり先輩は心が読めるんじゃないだろうか。

多呂斗先輩と鉦とのじゃんけんは危なげなく先輩が勝利し、僕らは不亂先輩をゲットした。

じゃんけんに負けたHeeチームは、武羅渡ぶらどを選んだ。

武羅渡は今の尾刈斗で月村先輩に次ぐFWだ。あれ……もしかしてちよつとヤバイ？

不死先輩に多呂斗先輩、不亂先輩と防御は厚くなっているが、シュートを打つ人がい

ないと試合には勝てない。

次のターン、僕はFWの黒上を指名。魔界先輩が指名したのは円谷、こちらもFWだ。HeavenチームにFWがない以上、DFをとるよりFWを独占した方が得策だと判断したのだろう。

そして次のターン、僕と魔界先輩は最後に残ったFWの人形原作時中2、FW。人間だと自称するチャッキー人形的なやつを選んだ。

人形は下の名前が幻で僕と似ているから勝手に仲良くなりたいたいと思っただけだ。俺は人形だ！とか人造人間だ！とか時折叫んでいるが、自分が人間でないと主張するタイプの生徒はこの学校に少なくない。過去の記憶が全くない、とも彼は言っているが、全く記憶がなかったり工房で生まれた記憶があつたかと思えば実験室で生まれたと言つたりと主張にまとまりがないから嘘だろう。

ていうか人形が親と話してるところを僕前に見たことあるし。

「てことはじゃんけんかよ。多呂斗に勝てるわけないし三途に変更」

多呂斗先輩にじゃんけんさせるまでもなかったようだ。

その後Heavenチームは八墓・霊幻を、Heelチームは木乃伊・屍を獲得しチー

ム分けは終了した。

「チーム分けに時間がかかっていたので、早くしないと下校時刻になりますよ。見て分かるでしょうがもう空も暗いですし」

監督に急かされて、両チームともフィールドに散らばる。

Heilチーム

月村

武羅渡 円谷

魔界

木乃伊

三途 屍

鉈

Heavenチーム

黒上 人形

八墓

 紫藤

 霊幻——多呂斗——

 不亂

 不死

先行はじゃんけんで決めたので、当然僕たちからになる。

キックオフと同時に攻め込むことはせず、一旦八墓に下げて様子を見る。下手に前に出て月村先輩にボールが渡ってしまえば戦況は一気に不利になるからだ。

極力月村先輩がボールに触ることができないような試合運びにするつもりだ。

「よしっ、上がれ！」

機を見て八墓と人形の2人で右サイドを攻める。前線に立つ月村先輩や武羅渡はブロツク技を覚ええない。

「呪い……」

八墓から出た黒い幽霊のような何かが武羅渡の体にまとわりつく。尾刈斗で散々使われてきた技の1つというだけあって、月村先輩は身をひねって回避してみせた。

「それだけで……十分」

必殺技で動きを封じた一瞬の隙について、八墓は左サイドにいる僕へとロングパスを出した。

初めから左サイドが本命だった。

屍と三途、どちらが攻めるうえで驚異となるか。先輩達に尋ねたところ答えは揃って「三途」だった。

それも仕方ないだろう。体格こそ優れていても、屍はまだブロック技を覚えていないのだから。道化先輩に誘われてサッカーを始めたうちの1人で、その中でも何一つ必殺技を覚えていないのは屍だけである。

チーム分けでも最後まで指名されずに残った屍は、間違いなくチームのウィークポイントなのだ。

木乃伊を屍に近い位置に配置することで補強しようと考えているのだろうが、木乃伊もブロック技は使えない。この超次元サッカーにおいて必殺技の有無は非常に大きなハンデとなる。僕のドリブル技で強引に突破することもできるはず。

「八墓ナイスパス！」

このまま黒上と一緒に上がっていき、黒上のサイコショットで1点。そう考えていたとき、突然のスライディングでボールを奪われた。

「もらったぜ！アオオオオオーン！」

雄叫びを上げながら駆け上がるのは間違はなく月村先輩だった。

満月モードの先輩はやけに簡単に釣られてくれるなど思っていたけど、どうやらその考えは間違っていた。

読み合いや誘導なんてしなくても勝てるだけのスピードとパワーがある。それだけなんだ。

ただボールがある場所に全力で走り、全力でボールを奪う。愚直なそのプレーも月村先輩がすれば対策不能な脅威となる。

「行かせません！ザ・タワー」

行く手を塞ぐ塔が地面が生まれ、さらには雷がボールを持つ選手を狙う。2段階の防御がこの技の強みなのだが、月村先輩はそのどちらをも文字通り越えて見せた。

雷を操るのは塔の上に立つ多呂斗先輩だ。そして雷は自身より下にしか放つことができない。異常なまでの跳躍で塔を飛び越えた月村先輩に対して、多呂斗先輩ができることは何も無かった。

「止めるうがー！フランケン守ティーン！」

不乱先輩の背後から巨大な緑色の怪物が現れる。

フランケンシユタインは人造人間で別に巨人じゃないぞとか、ていうかそもそも作り出した博士の名前だぞとかのツツコミ（あるいはウンチクの披露）はさておき、見事月村先輩の足を止めることに成功した。

先程のように飛び越えることも不可能ではないが、フランケンの手が動いて地に叩き落とされることを嫌ったのだろう。

「この間練習してたアレやろうぜ！今のお前の調子なら絶対上手いくってー！」

中盤からダツシユで上がってきた魔界先輩がそう呼びかけた。

魔界先輩と月村先輩の2人はボールを囲むように丸くなる。

「地獄車！」

そのみタイヤのように猛スピードで加速し、緑の巨人を突き破った。

満月モードのときは協調性が下がるくらいのデメリットがあってもいいものだけど、合体技に関してもいつも以上のパフォーマンスができてしまうのが恐ろしいところだ。

「決めてやるぜ！フロントムシユート！」

「ロケット(ぶし)」

すっかり目を閉じてシュートを打っていたため、ゆがむ空間も使えない。

分裂したボールの中から本物を見極め、そのボールに必殺技をぶつけることは出来たが、パワーの差でゴリ押しされてしまった。

「アオオオオオン!!」

審判を務めるつもりなんてない監督の代わりに、月村先輩の雄叫びがHeeーチームに1点が入ったことを示した。

「今日は満月ですから、こうなってしまうことは占うまでもなく明らかでした。君が気を落とすことではありません」

多呂斗先輩に慰められても、そう簡単に割り切れるものではない。

もともと月村先輩にボールが渡らないようにとプレーしていたのに、月村先輩にスライディングを許したのは間違いなく僕なのだ。

でも後悔や反省なんてものはただ気分を落ち込ませるために存在しているわけではない。次に繋げるために存在しているのだ。次は月村先輩の思うようにはいかせない。相手が強いからってくらいで僕は諦めるつもりはない。

「たとえ敵が強くても諦めない……君らしいですね」

多呂斗先輩のそのつぶやきを聞いて、僕も案外円堂に似てきたかもしれないなんて思
い始めた。

20 秘策×n

「よっし、切り替えて行くこう！」

試合時間はたったの30分しかない。そして下校時刻は僕らを待ってくれない。

対月村先輩の作戦を練るのも大切だが、そんなことに費やしている時間はどうやらないらしい。

僕らはこれから2点をとるんだから。

黒上と人形のFW2人に一言だけ指示を伝え、試合を再開する。

人形は黒上にボールを渡すと同時に敵陣へ全力ダッシュで攻めこむ。

人形の奇妙な動きに警戒しながらも、月村先輩は黒上のボールを奪わんとやってきた。そりやそうだ、こつちが何を企てていたとしてもボールさえ取ってしまえばなんの脅威でもない。

「サイコショット」

近づいてきた月村先輩を一瞥すると、謎のPKなパワーでボールを浮かせてゴールまでぶっ飛ばす。これを果たしてシュートと言えるのかは定かではないが、必殺技である

ことは間違いない。

月村先輩も魔界先輩も飛び越えてちやんと人形の元へボールは届いた。

「わーお。ほんとに上手く来るなんて思ってたぜ。ファントムシユート！」

オフサイドにならないギリギリの位置で、人形は飛んできたボールの勢いを殺さないまま必殺シユートを重ねる。

そう、シユートチエインだ。これしか方法がないと思つて2人に頼んでみたが実際僕もここまで上手くいくとは思わなかった。

「マジかよーキラーブレード！」

本当に驚いたとき鉈の口から出てくるのは日本語なのか、なんて思っている間に人形のシユートが鉈の水色の刃を破壊しゴールネットを揺らした。

「俺のナイスシユートで同点だぜ！俺つて天才か？」

「運が良かっただけだ」

人形と黒上は正反対のリアクションを見せる。どっちもほんとにすごいけど一番すごいのは作戦を立てた僕！なんて言うのは自分のキャラには合わないな。頭の中で言っただけでなんだかくすぐつたい気持ちになる。

実際すごいのは僕じゃなくて2人だし。

「紫藤君、次もこうやって速攻で点を取るつもりですか？」

「それが出来たらそうするんですが……」

多呂斗先輩も危惧するように、速攻というのは意表が突けるから強いのであって、そう何度も使えるものではない。

「それなら僕にいい作戦があります」

「ほ、ほんとですか？」

「それはズバリ……カウンターです。そもそも次はHeeーチームのキックオフで始まりますから、月村君の攻撃を凌ぐ必要がありますし」

それはつまり、多呂斗先輩達守備陣に全てがかかっているというわけだ。

「かっこいいところがまだ見せてられてないんだ。俺達に任せろってんだー」

「……次は止める」

不乱先輩も不死先輩もかなりやる気だ。先輩達の意地、見せてもらおう。

「さつきはビビって失点を許しちゃったが、地獄の覇者の俺はもう負けねえぜ」

「すぐにオレが取り返してやるぜ！」

魔界先輩と月村先輩の2年生コンビがキックオフから2人で切り込んでくる。

そういえばいつの間にか魔界先輩の自己紹介がランクアップしてたが、Heeーチー

ムのキャプテンだから的な理由なのかな。

「僕なりにできることを、つてね。ファントムミスト」

「怨霊」

僕が出した黒い霧から抜けて現れたのは月村先輩だけだった。暗闇に紛れて霊幻の必殺技——地面からの蠢く手が魔界先輩の足を封じたのだ。

前回フランケン守タイムを破る要因となった必殺技、じごくぐるまを使わせないようにといい霊幻の考えだろう。逆に、月村先輩一人なら先輩達が止めてみせるという信頼の表れかもしれない。

抜けられちゃったから先輩に任せよう、なんて気楽に考えていたわけではない。僕も霧を抜け出した瞬間を狙って月村先輩にクイツクドロウを仕掛けたのだが、謎の嗅覚で察知して見事に回避されてしまっただけ。

どちらにしろ先輩に任せざるをえない状況であるのは変わらないけど。

「今度こそ止めますよ。ザ・タワー」

塔を創り出してもまたさっきのように飛び越えられるだけじゃないかと思っていたが、今度は違った。塔の上に立っていたのは多呂斗先輩だけではなかった。

「どうだー」

塔のその上に、不亂先輩が堂々と立っていたのだった。

「メガクエイク！」

月村先輩が戸惑って立ちすくんでいる間に、必殺技を使いながら不亂先輩が飛び降りる！

位置エネルギーの暴力がフィールドの大きなうねりとなって表れ、ボールは大きく真上に跳ね上がった。

そのボールを拾おうと前線にいた武羅渡が跳ぶが、武羅渡より先にボールに届いた存在があった。オレンジ色の拳——不亂先輩のロケットこぶしだ。

そして弾かれたボールはちよほど僕の足元に届いた。全て計算されていたのだとしたら不亂先輩が凄すぎるとしか言えない。そうでなく偶然なのだとしたらまあ運も実力のうちってことで。

Heerチームのみんなは前に攻めだして、守りはとても薄い。絶好のカウンターチャンスだ。

攻めるのはもちろん屍のいる左サイド。しかしそんな僕の思考は読まれていたのか三途が僕の前に立ちはだかる。

こっちは僕1人で向こうは屍と三途の2人。普通に考えたら不利だ。でも一旦後ろに下げてしまうとせつかくのチャンスが潰れかねない。

こんなときに僕が頼るのはもちろん十八番の……

「イリユージュオンボール！さて、どれが本物でしょう」

グルグルと動く3つのボールを注視して、三途はなぜか首を傾げた。

「あれ……どれも違う」

「えっ？」

確かにこの間イリユージュオンボールを三途にレクチャーしたけど、たったそれだけで

……

「まさか初見で見破られるなんてね。でも、もう遅いと思うよ」

「サイコショット！」

「フアントムシユート！」

横を見ると、HeavenチームのFW2人の超至近距離シユートチェインが鉈へと

襲いかかっていた。

☆☆☆

作戦通りの鋭いカウンターから、人形と黒上の活躍で2度目のゴールが入った。密かに僕が開発していたトリックイリユージュオンボールも使えて満足している。

三途にすぐに見破られたけど。

30分という短い試合時間、逆転するにはいかに速く点を決められるかにかかっていた。そして、実際に試合が終わるより前に2点目を入れることができた。ただ少し問題があるとしたら、速すぎたことだった。

時間はまだ半分近く残っていた。

試合はHeerチームのキックオフで再開する。一度中盤の木乃伊に下げ、チャンスを狙うつもりらしい。

さつきまで脳死突撃！速攻！カウンター！ってなつてたのがおかしいだけで、これが正しい試合の展開のしかたなんだ。

いい感じにパスを回しながら少しづつこちらの陣に攻めよってくる。思っていた以上に魔界先輩は指示を出すのが上手いらしく、みんな絶妙にいて欲しくないところに位置取りされていた。

ボールはずっとHeerチームのもとを動き、僕達は全くボールにさわれなかった。

このままパス回しで時間を稼いでくれるなら甘えたいけど、まさかそんなはずがない。

相手の好きなタイミングで試合を動かされるくらいなら、僕が今動かす！

「フアントムミスト!!」

Heerチームを中心にできる限りの広範囲に黒いもやを出す。

物理的な実体はなにも伴わないが、視界を封じればパス回しを続けるのは難しくなる。となれば当然攻めてくるはず。もやが広がっているのは向こうのフィールドだけだから、心理的に暗闇の外である前線に出たくなるのだ。なんて監督みたいなことを言ってみる。

突然の暗闇に驚いたHeerチームのみんなは、まず最初に誰にパスを出すか。最も信頼できるストライカー、もちろん月村先輩だ。

「貰うよー」「行かせないアル」

さつきは回避されたけど、今度は1人じゃない。2人同時にスライディングをかける。

さつきまで暗闇にいたはずなのに、なぜかこちらの行動を見切っている月村先輩は空中に回避する。2人でも止められないみたい。

「3人いますよ。クイツクドロウ」

跳んだということは、着地の瞬間が存在する。後ろに控えていた多呂斗先輩のクイツクドロウで、ついにボールを奪取することができた。

スマブラでもサッカーでも着地狩りは基本。どれだけ運動神経が良くたつて空中で軌道を変えることなどできないもんね。必殺技を使えばその限りではないけど。

「一旦後ろに引いて……って、え？」

多呂斗先輩が何かにつまづいたかのようにすつ転ぶ。多呂斗先輩のこういう姿は初めて見たかもしれない。

「返してもらおうね」

そう言つて三途は転んだ先輩からボールを奪い、自陣へボールを蹴り返した。

怨霊だ。多呂斗先輩が何もなくてこけるはずがない。霊幻だけでなく、三途も覚えてたんだった。

僕の黒いもやのせいと逆に相手の必殺技の発動が見えなくなつてしまつていた。フアントムミストの問題点を一つ発見だね。

でもまたHeeチームのもとにボールが戻つたつてことはさつきまでと何も変わらない。太陽が裏山に沈みかけている。もうすぐ試合終了の時間、18時だ。フットボールフロンティアスタジアムにあつたようなデカイ照明なんてこの学校に設けられ

てるはずもなく、提灯やシャンデリアの形をした雑多なライトで明るさを補っている。

ちなみに今日は満月だから月の出もちょうど18時。月村先輩のこれ以上のパワーアツプはギリギリ避けられたみたいだ。

もう後がなくなった相手は最後の突撃をしてくるだろう。月村先輩の本気の攻撃を耐え凌げるのだろうか。

「少し……模倣させてもらいます……毒霧の術」

木乃伊の必殺技、どくぎりのじゅつ。毒の霧が辺り一面に広がり、むせるような咳の音がいくつも聞こえた。

いつもよりもかなり広範囲で、その分毒のパワーも下がっているんだろう。受けてる瞬間は苦しいけど、必殺技が終わると後遺症も何もなくてすっかり元気という謎の超次元ポイズン。成分は不明。

そして紫色のその霧は、弱いライトの光を完全に遮断してしまった。

周囲の仲間が苦しむという割と大きいデメリットがあるものの、ファントムミストのように視界を断ってみせた。

霧の中から突然飛び出してきたのは、月村先輩と魔界先輩そして武羅渡。

「ボールを持っているのは……誰も持っていない。あ……」

模倣、模倣。僕達 Heavenチームの作戦をパクること。それはつまり、
「シユートチェインですか」

多呂斗先輩がほぼ同時に気づいたけど、気づかなくても大して変わりはない。毒の霧を吹き飛ばしながら、彗星のように青い光を纏ったシユートが飛んできたからだ。

円谷の得意技、彗星シユート。FWのアイツがなぜ前線に来なかったのか、理由を考えたらずっとすぐに分かったかもしれない。

彗星シユートの軌道の先に待つのは当然月村先輩。魔界先輩と武羅渡は少し遠い位置にいる。僕は急いで先輩を封じようとマークに向かう。

「元さえ止めてしまえば問題ありません。ザ・タワー」

多呂斗先輩は再び塔を出してシユートを止めにかかる。気づいて直ぐに構築したものの時間が足りず不完全な代物だったが、彗星シユートはそう威力の高いシユートではない。月村先輩に渡る前にシユートが止まれば嬉しいんだけど。

「フアントムシユート！」

それはザ・タワーを突き破り、呆気に取られていた不死先輩からゴールを奪った。

太陽はもう沈みきっていた。

2 1 最強は誰？

「……すまない」

不死先輩が頭を下げる。普段からあまりコミュニケーションを取ってくれるタイプの先輩じゃないので珍しい。

「仕方ないアル。動きが速すぎたアル」

「あそこからちえいんするなんて想像できなかつただ」

霊幻と不乱先輩が必死にフォローしている。

確かに2人の言う通りだ。

僕も月村先輩がチェインするものだと思いこんでいた。相手の策にまんまと嵌められていたんだ。

「尾刈斗にはフシギ体質が2人いるんです。完全に忘れていましたよ」

Heerチームの同点弾を決めた張本人、武羅渡牙は優雅に勝利の美酒を口にしていた。実際には引き分けだし、お酒じゃなくてトマトジュースなんだけどそれは些細な問題だ。

Heavenチームは負けたかのような重苦しい空気に包まれていて、Heelチームでは月村先輩が勝利の雄叫びをあげていた。

武羅渡は普通なら絶対届かないような距離を一気に詰めて、普通ならシュートなんて不可能な姿勢でシュートチェインをした。つまり何が言いたいかというと、武羅渡は普通じゃないってことだ。

理屈は全く分からないんだけど、武羅渡は日が沈むと強くなる。元から十分に強いのにそれ以上になるなんてほんとズルい。

そういう意味では月村先輩とかなり似ている。

(あれ?そういうえば……)

「ウウルル……アオオオーン!!」

さっきのあれは勝利の雄叫びなんかじゃ無かったみたい。

月村先輩の瞳が青く光っている。

「満月……もう誰も止められない……」

「魔界先輩のその被り物で視界を塞げばいいんじゃないかね?」

「おい人形!これは帽子じゃなくて俺の体の一部だっつーの!」

「これは避難するのが正解っぼいね」

「ぐふっ、俺の人生は先輩に嘔み殺されて終わる。ぐふふっ」

「靈幻君！はやまらないでください！」

「同級生の血なんて見たくもありませんよ。さらば！」

地獄絵図。

逃げよう！と手を引いてくれた三途と一緒に木陰に隠れる。

武羅渡も夜間の超スピードを使って遠くに逃げていた。暴走中の月村先輩に唯一太刀打ちできるやつだと思ってたのに。

「こんなに人がいて狼一匹対処できねえのか無能共！お前らの自主性とかいうやつを見よう」と黙っていたが、そんなんで帝国に勝つなんて馬鹿言ってるじゃねえ！」

痺れを切らした監督がハイドモード（僕が勝手にそう呼んでいる）になり、いつもなら決して言わないような口調で僕達を責める。

「そしてその馬鹿狼！」

馬鹿狼が自分のことだという自覚だけはあったのか、月村先輩は監督の方を見る。

「試合の興奮が冷めやらないのは勝手だが多少は抑える努力をしろ。」

よし！俺が今から手を叩けば、なんで今まで暴れてたのか分からないくらい冷静になる」

そう言つて監督は大きく手を叩いた。

効果はてきめん。月村先輩は一気に大人しくなり、少し反省したようなしょんぼりした顔を見せた。謎の青い光はすっかり瞳から消え去った。

「お前の頭はどんどん重くなる。上げようと思つてもどんどん首が曲がつて下を見てしまふ。お前は家に帰るまで空を見ることができない」

月村先輩は真下しか見ることが出来なくなつた。しよんぼりした顔とあわせて、ものすごく落ち込んでいるようにも見える。

首が痛くなりそうで可哀想だとちよつと思つたけど、満月を見られたら困るから仕方がない。

「月村君、落ち着きましたか？」

ジキルモードに戻つた監督が優しく声をかける。

「今日が満月だと知つていながら6時まで部活を続けた私にも責任があります。さつきのはあれは本心じゃないつてことで忘れてください。

さつきの練習試合はとて面白い試合でした。さあ、帰りましょう」

それを試合終了時刻にしていたから必然なんだけど、もう下校時刻は過ぎてしまっている。ジキルモードで喋っていたから催眠術の効果なんてないはずなのに、監督の言葉によつてみんな急いで黙々と帰り支度を始めた。

尾刈斗で最強なのは月村先輩でも武羅渡でもない。地木流監督だった。

☆☆☆

あの日から、帝国を倒すための特訓が始まった。練習試合で使われた戦術も特訓に加わり、特にシユートチェインの存在は打倒帝国をより現実的なものにした。

個々のシユート力が低くても、シユートを重ねることで威力をあげることができる。さらに完成度を高めていけば帝国のパワーシールドを突き破ることもできるかもしれないとFW陣はワクワクして言っていた。

それと僕が使った広範囲フアントムミスとも、もつとうまく試合に活かすことができないかと検討中だ。

しかしゲームでいうところのTP的なやつなの消費が馬鹿にならないというダメ

リットもある。あの技を使つてからクイツクドロウを使うべき場面でただのスライディングをしたりともう必殺技が使えなくなっていた、と監督や三途など観察眼に優れたやつらに見抜かれていた。

一応フロントムシユートは覚えているので僕もシユートチエインの練習をしてみた。今度は多呂斗先輩の塔の上に乗つてみたりと試行錯誤の毎日。

フロントムシユートの改良も試みたところ、改だとか真だとかになる代わりに僕のTP（仮）の最大値が増えたっぽい。

努力すればするだけ形になっていく。そんな毎日が僕には楽しくて、影山のことも少しは忘れていられた。

前世の僕は、それが楽しくなかった。前世はこの世界とは違って、努力が必ず実るとは限らなかった。

努力が無意味であると気づくのが怖くて努力することからすら逃げた僕に、努力を語る資格なんてどこにもないんだろうけど。

でもそんな前世が役立つこともあった。こんな弱い僕だからこそ気づけたことがあった。

フィールドの外で1人たたずむ屍に話しかける。

「屍つてき、サッカーやってて楽しい？」

「え、なんで？」

「なんでは凶星の証。屍はあの日の僕と同じだ。楽しいはずのサッカーが楽しめなくなってしまうている。」

「なんだかあんまり楽しそうに見えなかったから」

「……そりゃあ楽しくないよ。俺はみんなと違ってなんにもできないし」

俯きながら屍は答える。これは紛れもない屍の本音だろう。

「紫藤には分からないよな。俺みたいな落ちこぼれの気持ちなんて、ぐふふつ」

「分かるよ」

「分かるわけない！」

「俺が1つ目の必殺技も覚えられず苦勞してる間にお前は軽く2つも習得してて、俺はいつまでたつても戦力外なのに、お前は紅白戦でキャプテンにまで選ばれるし」

確かに、そう言われると今の僕はできるほうなのかもしれない。もつと直接的に言うのなら僕には多分才能があるのだ。

前世の記憶のせいで必殺技が覚えにくかったという仮説が正しかったのかもしれない

い。一度必殺技を覚えてから、特に尾刈斗に入ってから、はそう苦労せずにフロントムシユートやクイツクドロウという必殺技を覚えることができた。

そして今、尾刈斗の1年生組の中ではそこその実力があるほう、というのも事実だ。「でも、僕が君の気持ちができるのはほんとだよ。昔、ずっと昔、僕も君みたいだったことがあるから」

「それはどれくらい昔のこと？」

小学生のころって答えようと思ったけど、それは嘘になる。そして僕は上手く嘘をつける自信が無い。屍だって監督の授業受けてるわけだし。

だから、正直に答えた。

「ずっとずっと昔。前世」

ものすごく真面目な顔で答えた。この世界がフィクションの世界だなんて誰にも言うつもりはないけど、転生歴くらいなんてことない。

前世の記憶があるってのも、尾刈斗じゃ普通程度の異常だ。

真面目に答えたつもりだったのに、屍は笑った。いつものあの笑い方とはまた違った笑い方だ。

「ふふっ、真面目な顔で言うから面白かった」

「冗談とかじゃなくて……」

「いいよ、気を遣わなくても。紫藤がオカルトを信じてないってのは知ってる。俺も信じてないし、ぐふっ。宇宙人も妖怪も超能力者もそんなのいない、ぐふふっ」

実は宇宙人も妖怪もこの世界にはいるんだけどなあ。最後の1つもいるんじゃないかと最近思い始めたし。

「紫藤の事情も聞いたことある。多呂斗先輩から」

さすが超能力者候補、なんでもお見通しらしい。僕の目的とかも全部見抜かれていたりするのだろうか。

「紫藤と同じなんてとても言えないけど、俺も小学校のころ体型でからかわれてて、ぐふっ、逃げるようにここに来たからさ、別にそういうのを信じてもない」

「そうなんだ、知らなかった」

初めて聞いた屍の過去。ゲームのキャラクターなどでなく、生身の人間である屍に過去があるのは当たり前なわけで。

屍は生身の人間……声に出して読みたい日本語だね。

「このみんなはからかったりしなくてさ、ぐふふっ」

「だからこそ辛い、でしょ？ 暴言でも浴びせてくれたら嫌いになることができるのに、みんな優しい人だから失敗しても大丈夫って言ってくれて。誰も嫌いになれないから、自

分のことだけが嫌いになる」

カケルもタクヤも僕のことを責めたりはしなかった。僕がサッカーから逃げても、今まで通り変わらず接してくれた。でも、それが僕にとつては辛かった。

屍はびつくりしたような顔で僕を見る。

「言つたでしよ、分かるんだつて。君が僕の話を通じてくれなくても、僕だつて君の立場なら多分信じないし、それでも僕が君の気持ち分かるつてのは本当なんだ」

ただの傷の舐め合いつてやつなのもかもしれないけど、屍となら仲良く話せそうな気がした。

2 2 喧嘩

雨降って地固まる。

喧嘩を乗り越えて仲直りをする事で絆が深まる。J-POPあるあるな感じのシチュエーションだ。

鐵さんと会って、羨ましさを感じたこともあった。鐵さんは、仲直りができるんだってことに。

水野さんは優しい人だった。頭蓋骨にひびを入れられるとかいう普通なら絶交不可避なことをされても、仲直りに応じるつもりだと言ってくれていた。

水野拓矢。この世界にしてはそうなんてことない名前だけど、僕はある友人と重ねてしまった。

もう一生仲直りすることができない友達。

☆☆☆

あの日、僕はパソコン部を休んだ。パソコン部はそう熱心な部活じゃなかったから、無断で休んでも何も言われることはなかった。

中学の途中で部活を辞めて、無気力になった僕を見かねた両親がいい感じのパソコンを買い与えてくれた。多分そこそこ値は張ったと思う。

ネットで適当に調べながら、プログラミングとか色んなことに手を出した。何か将来の役に立つかもしれない、そう思うと漠然とした不安から逃れられた。

高校生になった僕は、特にやりたい部活もなくて消極的にパソコン部を選んだ。ものすごくゆるゆるだということは聞いていたから、それも理由だったと思う。

陰キャ、なんていう言葉は使いたくないけど、カーストがかなり低かったクラスメイトがパソコン部にはいた。でもある日彼が見せてくれた自作のゲームはものすごく面白かった。無生物主語構文というなら、そのゲームは僕をワクワクさせた。

僕もそういうのが作れるようになりたいってのがモチベーションになった。そうして半年近くかけて作った超大作アクションゲームは、ものすごくつまらなかった。

僕やクラスの皆が少し蔑んで見ていた彼には、すごい才能があったってことだった。ゲームは作るよりもするほうが楽しい。それが僕がパソコン部で学んだことだった。だからときどき、彼が独り黙々とゲームを作っている間も、教室でスマホゲームをし

ていた。

学校はスマホの持ち込みは原則禁止だったけど、放課後に触っている人はたくさんいた。授業中に音が鳴ったりしたら没収されるとかも聞いたけど、そんなヘマをした人を見たことは一度もなかった。

スマホゲームは飽きたらすぐにアンインストールする性格だったから、あの日僕がなんのゲームをしようとしていたかは覚えてないし、多分それは重要ではない。

とにかく、僕はゲームを始めようとスマホを開いたときに2人に話しかけられた。カケルとタクヤ、僕の親友だった2人。

「マモル、仲直りしよう」

そういえば、僕の前世の名前はマモルだ。漢字で書くと護。僕がイナズマイレブンを見るようになったきっかけだったたりもする。

「仲直り？僕は2人と喧嘩した覚えなんてないけど」

当時のマモル君は今の僕よりもひねくれてて、面倒くさいやつだった。

「僕とタクヤのこと避けてるでしょ？ずっと」

実際、僕は2人のことを避けていた。僕だけ勝手にサッカーをやめて、一緒にいるのが居心地悪くなったんだろう。それを認められるくらいに素直だったら問題なかったんだけどね。

「避けてないし」

そんな無愛想な僕に溜息をこぼしながら、タクヤが諭すように口を開く。

「あのなあ、俺らはお前にサッカーに戻れなんて言ってるわけじゃないんだ。サッカーやめたのは正直寂しいけどさ、前みたいに友達じゃなくなる方がもっと寂しいんだよ」
今思い返してもやっぱり聖人みたいなやつらなんだけど、僕はそんなところも癪に障っていた。

「じゃあさマモル、また遊園地とか行こうよ！僕とタクヤとマモルの3人で」

「2人で行って」

その魅力的なカケルの提案も、僕は短く拒絶した。

「何がそんなに不満なんだ？教室の隅でゲームをする時間がそんなに大切か？」

僕と同じ2組だったタクヤは、僕がよく楽しくもなさそうにゲームをしていることも知っていた。

ゲームの邪魔をされて僕が不機嫌になったのかと思つてタクヤは皮肉を飛ばしたんだらうけど、その言葉は僕の傷を大きく抉った。

「なわけないじゃん。なんにも楽しくないよこんなの。みんなでサッカーしてたときの方がもっと楽しかったに決まってる」

「それならなんで……」

「でもそれ以上に嫌だったんだよ。辛かったんだよ。サッカーするのが。カケルもタクヤも分かるわけないよ、僕の気持ちなんて。僕より後に始めたのに、すぐに僕を追い越して」

僕の言葉に、2人は苦笑しそうな顔をする。2人にサッカーの才能があつたことは罪でもなんでもないのに。

「心の中じゃ、僕のこと見下してるんでしょ?」

「そんなことない!」

「見下したりなんてしない。信じてよ」

「信じれないよ」

2人が良い奴だなんてとつくに分かりきっていたはずなのに。

「サッカーの話なんてしないから、また友達としてやり直すつてのはダメか?」

「ダメ。僕が思い出しちゃうから」

2人は少し目を合わせて考えごとをしていた。2人のことから、どうするのが一番僕のためになるのかなんて考えていたんだろう。

「マモルは嫌って言うかもしれないけど、このままじゃ良くない気がする。多分後で後悔することになる。逃げ続けることに」

優しい2人のことだから、僕がどうしても嫌だと伝えたら引き下がってくれると思っていた。でも、そうはならなかった。

「逃げ続けることって悪いことなの？」

僕の質問に2人は答えてくれなかった。

「じゃあもう遊園地も行かなくていいから！休み時間、僕が2組に遊びに来きたとき、クヤと一緒に話をしようよ。それだけ！」

「嫌だ」

僕は冷たく突き放した。

「どうしても？」

「死かどちらかを選べって言われたら潔く死ぬぬくらい嫌だ」

「そんなに嫌かよー！」

タクヤがしつかりツツコミをしてくれた。3人で話しているとき、僕とカケルはどちらかというとボケでタクヤがツツコミだった。

少しだけ楽しい気持ちも蘇った。もしかしたらちよつと笑顔になっていたかもしれない。

でも、僕がサッカーをやめてから、友達をやめてから、時間が経ちすぎてしまった。

「2人も早くサッカーの練習に行かないと怒られるよ？」

そうやって僕は荷物をまとめて席を立った。

☆

神様、もう一度だけ救いをください。

もう一言だけ、2人に伝えさせてください。

冗談だよ、って。

ただ僕の不注意のせいなのに、気に病んでしまうことがないように。
あの日、僕が初めてあなたに会った日。

★★★

その夜、タクヤはカケルのスマホに電話をかけた。もしタクヤが電話をかけていなければ、恐らくカケルの方からしていた。

「もしもし」

『タクヤも聞いたの?』

「ああ」

少しの間、沈黙が2人を包んだ。どちらかのしゃくり上げる声だけが響いた。

「部室でうちの学校の誰かが事故にあつたってニュース聞いたときから、そうなんじゃないかもってちよっと思ってた」

『うん』

「やっぱり、俺達のせいだよな？」

ハロウィーン編

23 仮装をしよう

10月。それは尾刈斗中学生にとって非常に大きなイベントがある月である。

古代ケルト民族のドルイド教で行われていたサウィン祭を起源とし、1年に1度だけ先祖の霊が家族の元に帰ってくるとされる日。そう、ハロウィーン！

歴史の授業でしっかりと教えてもらったため、予習はバッチリだ。

英語の先生はアクセントの位置に厳しく、みんなちゃんとウイにアクセントを置いて発音している。ハロウインは禁句だ。ここはホグワーツなのか？

そしてそのハロウィーンに重なるように尾刈斗中学の文化祭、尾刈斗祭が開かれる。10月31日は水曜日だから、日曜日の10月28日が開催日だ。

尾刈斗祭は校区外からもかなりの客がやってくるらしい。前世と比べてまだハロウィーンの文化がそんなに一般的じゃないから、仮装をしたい人達がここ尾刈斗に集中するのだ。

「仮装、かあ……」

仮装なんて、今までほとんどしたことがない。もちろん前世も含めて。せいぜいハロウィンっぽい帽子をかぶったくらいだ。あ、ハロウィンっぽいだね。

しかし来たたるハロウィンをそんな生半可な仮装で乗り切るわけにはいかない。この学校はガチなのだ。普段からハロウィン気分な格好をしているみんなも、よりレベルの高い仮装のための準備をしている。

不亂先輩がフェイスペイントの練習をしている姿を見てしまったときは、怖くて気絶してしまうかと思った。

いや本当に、なんの仮装をすればいいんだろう。

困ったときは仲間に相談。ってことで一番仲のいい三途に聞いてみた。

「うーん好きなようにしたら良いんじゃないかな。お祭りだし、そんなに気に病むことは無いと思うよ」

「好きなようにって言われても、それが一番難しいよ。三途のその頭につけてるソレはどういう意図でつけてるの?」

いつ頃からか、三途は三角頭巾を頭につけ始めた。第一印象は緑の長髪が特徴的って

くらいだったのに、ワンアイテムで尾刈斗らしい姿に化けた。

「ああこれ？幽霊をイメージしてるんだ。僕は自分のこと、幽霊みたいなものだと思うから。」

ハロウィーン当日は白い袴でも着て、全身幽霊でいくつもりだよ」

三途がジャパニーズ幽霊スタイルで行くなら、僕はブリティッシュユゴーストスタイルつてもありかもしれない。白い布でも被って……これだと魔界先輩と一緒にできるだけ他の人とキャラが被らないようにしたいから一旦保留で。

次は最近仲良くなりつつある屍に相談してみた。

「ぐふつ、実は俺もそれで悩んでる。だから役には立てない、ぐふつ」

相談する相手を間違えた。よく考えたら屍は特に普段から変な格好をしたりしていなかったし、喋り方を除けばごくごく一般的な感性を持つてるんだった。

次は普段からガチガチの仮装をしてる奴らに相談してみよう。

「ああこのマスク？かっこいいだろ！これが俺のアイデンティティ！」

ハロウィーン当日は支給される血糊をマスクにつけて、鉈を振り回してやるプランだ

ぜー！一応チェーンソーも用意してるから紫藤もどうだ？シャルユーチェーンソー？」

「え、遠慮しとくよ……」

さすがに本物の刃物は使わない、はず。

次！

「この帽子は母国の民族衣装アル。断じて仮装ではないアル」

「その御札は？」

「力が暴走しないように鎮めているだけアル」

「……」

霊幻ってこんなに病気を患ってたっけ？

魔界先輩のように厨二病に振り切っているわけでもないし、なんともとらえどころがないやつだ。

NEXT！

全身包帯男、木乃伊きのい。その理由は……

「……乾燥肌、だから」

入部早々多呂斗先輩によって明かされたのを覚えている。ズバリその包帯は保湿の

ためですねって。

先輩が間違っていたことなんて今までないし、うつすら覚えてる原作知識によるとそれが正解だったと思う。でも普通それで包帯とか巻く？

「保湿クリームとか塗った方が効果ありそうだと思うけどなあ。乾燥肌だからってそんなミイラみたいにする必要ある？」

「……紫藤はもう少し空気の読める人もんだと、思ってた」

思ったことを素直に木乃伊本人に尋ねると、微妙な空気の後に空気が読めないと言われてしまった。なんでだろう。

「その……、多呂斗先輩には……感謝しています」

脈略もなく先輩への感謝を言い出した。何を感謝することがあるのだろう。えーつと、あれ？

もしかして、乾燥肌は本当の理由じゃなかったってこと？多呂斗先輩の優しさ？

「ごめん、配慮が足りないことを言っちゃった」

「……大丈夫」

きつと木乃伊には隠しておきたいことがあったんだ。それなのに僕は空気も読まずに尋ねてしまった。その秘密の領域に安易に足を踏み入れてしまった。

みんなの奇怪な姿には各々の理由がある。それはただのノリかもしれないし、地雷が如き重く深い事情かもしれない。

全身を包帯で巻いたクラスメイトがいたら事情を聞きたくなるところだけど、この学校ではそれは良いマナーじゃない。異常が普通となるこの尾刈斗だからこそ、配慮しなきゃいけないことだ。

尾刈斗じゃなきゃ、認められなかった。なんて人がこの学校にはたくさんいる。多様性という観点で見れば、ここは他の学校よりもずば抜けている。だから僕も尾刈斗の一員として、その多様性を認める努力をしなきゃいけない。

尾刈斗生としての誇りなんてものを強く感じるくらいには、僕はこの学校が好きだった。いつの間にか、好きになっていった。尾刈斗を作ったことは影山の唯一の善行かもしれない。

☆☆☆

仮装について他の人に聞いて回る気も起きずに、結局あの後家に帰った。

家に着くと、ちようど母さんがかぼちやグラタンを作ってくれていた。

2人で食卓を囲んで、いつものようにおしゃべりする。

「今日スーパーで月村さんとばったり会って、月村さんが言うにはハロウィンに仮装をしなきゃいけないらしいじゃない」

ちようど悩んでいた問題だ。

「義務ってわけじゃないけど、ほぼみんな仮装するらしい。してないと逆に浮くかもって」

「それで月村さんのお宅はどのようにするんですか？って訊いたら、全身狼男の着ぐるみを手作りしてますって言うのよ。お母さんびっくりしちやって、どんな風につてるのか見せてくれませんかかって言っちゃったの」

着ぐるみを手作りしちやう月村ママ、恐ろしい。うちの母さんもアグレッシブさで言ううと負けてないかもしれない。昔はそんなことなかった気がするけど。

「月村先輩のお母さんと母さん、仲良かったんだ」

「月村さん家はまあまあ近所さんでね、市役所の近くのあのスーパーに行くときたまによく会うのよ」

近くのスーパーよりも安くて品揃えがいいとのこと、市役所の方まで母さんは毎日

自転車を片道15分走らせている。結構な距離だから「近所さんとは言えない気もする。

まあでも母さんにママ友がいるってことは嬉しい。昔はいたママ友も僕が尾刈斗に進学したせいでいなくなっていたから。こんなこと子供が心配することでもないか。

「月村さんのところもお父さんがいないらしくて、いろいろと話が合ったりするのよね」

初めから？離婚？死別？

少し気になったけど、母さんに尋ねはしなかった。他人の事情なんて好奇心丸出しで訊くもんじやないと今日学んだところだったから。

それに、月村先輩が可哀想な子供なんかじやないことはよく知っている。月村先輩は凄いいサツカープレイヤーだ、その事実は先輩の家庭環境によつて変わるもんじやあない。

「そう、それでね！月村さんにコツとか教えてもらつて、お母さんもちよつと作つてみたのよ。百均でフェルトの素材とか買つて、久しぶりに裁縫箱開いたの」

そう言つて母さんは立ち上がり（食事中に席を立つなと母さんはよく言うけど、自身は例外らしい）棚の中からあるものを取り出した。

「じゃーん！手作りかぼちゃ〜」

ジャック・オー・ランタンかぼちゃのような被り物。

「それほんとに手作り？普通に凄いじゃん！」

どんな酷いものが現れても褒めるつもりだったんだけど、予想していたより遙かに良い。

「でしよでしよ！この目と口の部分がメッシュになってて、ちゃんと外が見えるのよ。一旦被ってみて、写真撮るから」

言われるがままに僕はそれを被った。被り心地は悪くない。

こうして僕の仮装はかぼちゃに決定した。

24 大集合

ということ、尾刈斗祭当日！

最近なぜだか重苦しい空気が僕の周りに漂っていたような気がするが、今日は大丈夫！なぜならパーティーだからだ。パーティーっていうのは楽しくて明るいもんで決まってるのさ。

自転車を駐輪場に停めると、仮装している人達で溢れかえっていた。母さん手製のかぼちやを忘れてないかカバンの中をチェックする。

「みんな、イカした格好をしてるねえ」

「そりゃあ一年に一度の祭りだ。気合いも入るってもんだ」

話しているのは道化先輩と筒井先輩だ。もうサツカー部は引退してしまっただから、最近はめつきり話をしてない。

2人はもう仮装を済ませているらしい。

道化先輩は相変わらずの赤髪白肌で、さらにピエロらしくカラフルなフリフリ of 服装

をして、手には赤い風船が握られている。

一方筒井先輩は赤と緑のボーダーという謎センスの服を着て、右手には鉤爪のようなものが装着されている。そして何より目を引くのが、顔中が火炙りにでもされたかのようには焼けただれている。

「紫藤おはよう！久しぶりだな」

「おはよう、紫藤君。私達がいなくなってからいろいろと頑張ってるらしいねえ」

「おはようございませす！」

2人に話しかけられた。どうやら僕達が始めた革命は、既に2人の耳には届いているようだ。少なくとも、なんてことをしやがってとは思われていないようでホッとする。

「ところでその仮装、凄いですね」

「ああ、昨日4時間かけて特殊メイクをしたんだ。凄いだろ？」

「凄いです」

なんて褒めるのが正解なのか分からず、凄いですを連呼する。それにしても特殊メイクって……母さんの頑張りがしょぼく見えてしまうよ。

「てか紫藤、この仮装が誰だか分かるか？」

「すみません……道化先輩がペニーワイズなのは分かるんですが、筒井先輩の方はさっぱり」

筒井先輩にクイズを出されるも正直さっぱり分からない。見た目的に何かのホラー映画のキャラだとは思っただけども。

「フレディ、フレッド・クルーガー。知らないか？」

「あ、えーと、あれですよ。エルム街の悪夢。名前は聞いたことあります」

「そう、それぞれ！名作だからな、是非見るべきだ。DVD貸すぞ」

「筒井、つい最近まで小学生だった奴にホラー映画を勧めるのはどうかと思わないか」

道化先輩が常識的なツッコミを入れるが、実は僕はつい十数年前までは高校生だった訳で。ホラー映画が怖くて見られないなんて思われるのはちよつと納得が行かない。

「僕そういうの全然平気ですよ。今度、サッカー部のみんなを集めて見てみますか？」

「いいなそれ。賛成。あいつらが怖くて震える姿を見てみたいぜ」

そんなこんなで後日ホラー映画鑑賞会が開かれることが決定した。

サッカー部の中で誰が一番怖がりなのかについて話してらうちに（魔界先輩が実は一番怖がり、多呂斗先輩が一番平気だろうという結論に達した）、教室の前に辿り着いた。

僕ら1年3組はフランクフルトの出店をする。まさに文化祭の仕事って感じで楽しみだ。前世の中学校は文化祭なんて無かったし、高校ではなんとというか青春に乗り遅れ

ていたから楽しめなかったし。

かぼちやを装着して出店の準備。男子も女子もみんな思い思いの仮装をしている。僕を含め顔を隠している人もたくさんいて、声を聞かないと誰だか分からずプチパニツク状態だ。

こんな状況で一番楽しそうにしているのはやっぱり女子達だ。

「紫藤君、それカワイイね。手作り？」

「武羅渡君、その服めっちゃカッコイイね。売り子は任せた！」

「鉦君、マスクを血まみれにするのはホラーすぎるよ。さすがに血糊は不衛生だからフランクフルト焼くの禁止！あとそれ振り回すのやめて、お客さん来なくなるから」

「円谷の仮装はキモイよね。全身銀タイツはちよつと」

「普段真面目な人が羽目外したら、ってやつだね。マジキモイね」

僕達の仮装を好き勝手に評価してくる。鉦へのそれは正論だけれども、円谷がキモイキモイ言われているのはものすごく可哀想に思う。僕も仮装のチョイスを間違えたら同じ目にあつたのかと思うと恐ろしい。さすがに全身銀タイツなんて絶対やらないけど。

僕のシフトは午前中だけ。さあ、張り切って焼いていくぞ！

☆☆☆

「フランクフルトはいかがですか、って夕香ちゃん?!」

「おにいちゃんひさしぶりー」

おにいちゃんというワードに反応して一緒に来ていた修也に睨まれる。魔女っ子衣装の夕香ちゃんが可愛いのはよく分かるけど、自分以外がお兄ちゃん呼びされるのが嫌なんだったら、そう夕香ちゃん本人に頼み込んで欲しいよ。僕を睨んだって何も解決しないのに。

「久しぶりー! って、この帽子被ってたのになんで分かったの?」

「うーん、なんとなく?」

「つまり夕香ちゃんは観察力が優れてるってことだね! 修也もフランクフルト食べてく?」

先に出会ったのは夕香ちゃんだから、兄の方だけ名字で呼ぶのもなんだか変で下の名前前で呼んでいる。僕にとっては豪炎寺つてのがやっぱり一番しっくりくるから、喋る度に変な違和感がある。ちなみに修也は僕のことを下の名前で呼んでくれない。

「ああ、2本頼む」

「まいどあり〜」

「それにしても2人がここに来てくれるとは思わなかったよ」

「夕香がお前に会いたいとうるさくてな。SPを1人つけて遊びに来た」

「フランクフルトを食べながら少し不機嫌な様子で話す。やっぱりシスコンをこじらせすぎてるよ。」

「身を守るように進言したのは僕だけど、SPってお医者さんはお金の使い方が違うなあ。」

「お父さんは信じてくれたの？影山の話」

「お前が送ってきてくれた資料のおかげでなんとかな。感謝している」

「それなら良かった」

「医者者の遺伝子などという非科学的なことを主張するあの頑固親父のことだから、説得は難しくなるだろうと心配していたけど、なんとかなったようだ。」

「お、紫藤発見！」

「どこだ？」

「あのかぼちやだよ」

修也と話していると向こうの方からなんだか騒がしい人達がやってくる。

「お〜い！紫藤〜！」

「円堂、久しぶり〜！ってなんでみんな僕って分かるの？エスパー？」

やってきたのは円堂達。特に尾刈斗祭に誘ったりしたわけじゃなかったけど勝手に来てくれたみたい。

「じゃあ俺らも人数分フランクフルトを頼む」

「えーつと、風丸円堂半田で3つ……」

「……もう一人いるよ」

真後ろから声。振り返ると髪の毛の長い幽霊が……

「びっくりしたあ！心臓止まるかと思った」

「最近新しくサッカー部に入ってくれた影野だ。俺達の練習を見てカッコイイって思ってくれたんだぜ！」

「……少しは目立てるようになるかなと思って。よろしく」

「影野が尾刈斗に興味あるらしいから一緒に行こうぜって話になってな」

話し方や立ち振る舞いはまるで尾刈斗にいてもおかしくないな。確か尾刈斗祭でもどっかのクラブがお化け屋敷を実施していたらしいが、影野より恐ろしいはずがないだ

ろう。

「じゃあ4つってことね。600円になりまーす」

鈍はシフトを無視してどこかに逃げていったから、1人で4本焼かなきゃいけない。全然難しい仕事でもないけど。

「紫藤から話には聞いてたけど、やっぱ凄いやな。この学校。仮装のレベルも高いし」

「サッカー部のみんなはハロウィン関係なく毎日こう。半田とは違ってみんな個性バツグンだよ」

「悪かったな中途半端な没個性で」

「そこまでは言ってないって」

「ごちそうさま。俺と夕香は他を回っていくよ」

「ばいばいおにいちゃん！」

円堂達が来て少し場違いに感じたのか、フランクフルトを食べ終わった修也が串をゴミ箱に捨てて立ち去ろうとする。

「あー!!」

突然円堂が叫び声をあげる。

「豪炎寺だ！お前豪炎寺だよな！」

「円堂どうした、知り合いか？」

「見てたぜFFの決勝。最後の必殺シュートスゴかったな！お前のサッカーに対する思いをスゲエ感じたぜ！」

修也は面倒そうに顔をしかめる。気持ちは分かる、よく分かるよ。

「それで、なんか俺に用か？」

「なあ豪炎寺！サッカーやろうぜ！」

そう言いながら円堂はリュックサックからサッカーボールを取り出した。修也も今度ばかりは呆気にとられている。

「他校の文化祭になんでサッカーボール持って来るんだよ」

半田ナイスツッコミ。

25 ヴアイオリニストと助っ人

「何してるの？」

「フランクフルト食べてる」

「見れば分かる。ていうか勝手に食べていいの？」

「焼いてる途中にサツカーしに行くやつらが悪い」

「じゃあそのうち一本ちようだい」

言われた通りフランクフルトを一本渡す。

「150円になります」

「既に円堂君からお金取ってるでしょ」

「バレたか。つていうか心音こころねつて円堂と知り合いなんだ」

「そりゃ同じ学校に行ってるんだから知り合いでもいいでしょ。それよりあなたが円堂君と知り合いだったことのほうがびつくりよ。しかも小学校のころから交流があっただなんて」

「たまたま鉄塔で知り合っただよ」

今話しているのは奏かなでがはらヶ原心音こころね、神成FC時代のチームメイトだ。小さい頃からずっと

ヴァイオリンをやっていたそうで、サッカーとヴァイオリンの両方の練習で毎日忙しうだった。

女子サッカー部なんて近くにはなかったため、中学は雷門でヴァイオリンに専念すると言っていた。

「昔から秘密主義者だったもんね。幻斗は」

「そうかな？」

しばらくするとなぜだか心音は黙って僕を睨みつけてきた。

「え？何か僕変なこと言った？」

「あなたの秘密主義なんてどうでもいいのよ。それより着飾った女子がいたら何かかける言葉ないのかな？」

心音は綺麗なオレンジのドレスを着ていた。そういうのには全然詳しくないから分からないけど、多分プリンセスか何かの仮装だろう。

「えーっと、綺麗だね」

「うわっ適当だ」

「だってもつと派手でエグい仮装してる女子この学校にはいっぱいいるし」

「他の女と比べるのはNGよ」

「ごめんって」

とりあえず謝る。長い年月で僕が習得した最善の方法だ。

「刃也も来たら良かったのにな」

「帝国学園は全寮制で基本的に外出禁止なんだよ」

僕と刃也と心音は、それこそ仲良し3人組みみたいな感じだった。心音も刃也ほどじゃないけど賢くて、2人が話していると僕はついていだけでやっただった。僕って元高校生のはずなのに。

3人一緒に雷門に行こうって約束したけど、結局3人はバラバラになった。僕は尾刈斗に、刃也は帝国に、心音は雷門に。なんだか心音を裏切ってしまったような気がして申し訳ないな。

「そっか、それなら仕方ないね。私はてっきり2人が会ったらずいことがあるのか
なあって思っちゃったよ」

「どげんか？」

心音は僕の目をじっと見つめる。

さっきのように茶化して睨んだような顔じゃない。もっと真剣な目をしていた。

「幻斗と刃也、何かヤバいこと、してるでしょ？」

「……してないよ」

一瞬答えに窮する。自然に嘘をつくための努力はしてきたつもりだけど、いざというときには役に立たない。

「ううん、してるよ」

影山のことは刃世の他に誰にも聞かれないようにしていた。明日山あけびやまへの旅も全部2人だけの秘密だったはず。

「私が耳が良いのは知ってるでしょ？」

確かに心音は幼い頃から音楽漬けだったおかげか、凄く耳がよかった。そして何より、些細な変化にすぐに気づく人だった。

「去年の冬、2人で隠れて話してたでしょ。影山にバレたら死ぬかも、って。影山って帝国の総帥の人だよな？2人は何をしてるの？」

そっか、聞かれてたんだ。

その事実には不思議と少しホツとしている自分がいた。なんでだろう。

「死ぬってのはさすがに冗談だよ」

「幻斗はそんなこと言わない。死ぬとか殺すとか、そんな言葉は絶対使わなかったでしょ」

確かに冗談でもそんなことは言うなっつとずっとみんなに言っていた。時にそれが冗

談じやすまなくなるってことを知っていたから。

僕のポリシーが仇となったみたいだ。

「何があったのか洗いざらい話して欲しいけど……いいわ、それは諦める。私は物わかりがいいの」

「へ？」

肩透かしというかなんというか、僕はもう全部を話してしまおうかとすら考えていたところだったのに。

「だから、ひとつだけ約束して」

「うん」

「自分達の身を一番大事にして。危険だと思ったらすぐに身を引いて」

「分かった、約束する」

今度は努めて冷静に言うことができた。

今の僕の言葉を心音はどう受けとったのかは分からない。でも心音が僕の嘘を信じても信じなくても、僕がすることは変わらない。

「刃也と幻斗が仲が良かったってのは確実に知られてると思うよ」

少なくとも今も繋がってるってことはバレてないと思う。……多分。

夕香ちゃんを助けた件で尾刈斗に試合をさせないように地木流に命じるという雑な嫌がらせで済んでいるのは、ただの偶然に過ぎなかったと思われるから。刃也經由で情報が漏れていた（実際は原作知識だけ）のだと影山が疑っていたのなら、僕も刃也も今頃無事じゃないだろう。ていうかバレてないと信じるしかないって状況。

「6月だったかな、私のもとに電話が来たの。小学校時代のあなたの様子について詳しく聞かれた。尾刈斗のサッカー部監督だつて言ってたけど絶対ウソ。だつてジキルなんて名前明らかに偽名っぽいし」

偽名っぽいって言われていることに不意に笑いそうになった。偽名なのは大正解なんだけどさ。自分だつて奏ヶ原つて変な名前してるじゃん。

「地木流監督はほんとにいるよ。監督とはちよつといざこざがあつて……でももう解決したから大丈夫！」

「そう、なら良かった。無理して声色を変えていたような気もしたんだけど、気のせいだったかも。」

はい、この話題終わり！文化祭を楽しみましょう」

一旦話題は落ち着いた。でもそれを少し残念にも感じた。

多分、僕は心音に全部打ち明けたかったんだと思う。心音だけをハブっていたことに心苦しさがやっぱりあつたし。

刃也との連絡も大きく制限がかかる中、心音ならなんだか上手く不安から導いてくれるような信頼があつた。

秘密の共有者は最小限にしなければならないのに。これは僕の弱さ。気を引き締めないと。

フランクフルトも食べ終えて、そろそろ奇術同好会のマジックショーでも見に行こうかなと心音が言つたとき、放送が入つた。

『えー尾刈斗祭をお楽しみの方皆さん、突然のイベント連絡があります。何故か、本当に何故なのか、ただ今よりグラウンドでサッカーの試合が行われるようです。興味のある方はいらしてください。』

それからサッカー部への連絡です。今時間のある鉈以外のサッカー部員はグラウンドに来てください。レベルの高い選手が来てくださっています、いい経験になるでしょう』

「絶対円堂のせいじゃん」

「円堂君ならやりかねないね」

僕と心音の円堂に対する認識は完全に一致していた。

「レベルの高い選手って修也のことだよ。円堂のせいで監督も困惑してるのが分かるよ。」

僕がこの場を離れるとフランクフルト焼く人が誰もいなくなるのは気がかりだけど……修也とサッカーすることの方が大切！グラウンドに行くてくる」

「って、え？」

「一人で焼いてそこそこ売上げたんだからもういいでしょ。それとも心音が代わりに焼いてくれる？」

「いやその話じゃなくて……ていうか焼かないわよ。私も試合気になるし」

「マジックショーはいいの？」

「中学生のマジックなんてきつと大したことないって。それよりもあなたと円堂君の試合を見る方が楽しみよ。ちよつと確かめたいこともあるしね。」

「さあ、行きましょう！」

☆☆☆

グラウンドに着くと、円堂達や豪炎寺兄妹、3年生を含む尾刈斗サッカー部が好き勝手にボールを蹴っていた。

「引退してから全然ボールを触ってなかったからねえ」

「俺あの日の帝国戦が最後かも。マジで」

「先輩の底力、見せないト」

引退した先輩達とまたサッカーができるっていうのはやっぱり嬉しいな。

「お、紫藤も来たか！」

「月村先輩、なんなんですかこれは」

お母様特製の着ぐるみを被り、先輩はついに完全に狼になってしまったようだ。

「部室で魔界と不乱とゲー…休憩してたらな、そのパンダナのやつが『今からサッカーするんでグラウンド貸してください！』って頭下げてきたんだ」

「やっぱり円堂の仕業ですか」

他校のグラウンドを使おうと突然頼み込みに来るとか円堂クオリティ。

呆れた気持ちで円堂の方を見ると、円堂は最高に楽しそうな様子で手を振ってきた。

「そんでせっかくなら尾刈斗サッカー部も一緒にサッカーしようぜって、オレが」

「先輩が言い出したんですか」

「ああ、楽しそうだろ？」

先輩にも呆れを込めて見つめてみるが、お母様の技量が非常に高いということしか分からなかった。

それにしても円堂と月村先輩は案外似たもの同士なのかもしれない。

そうこう話しているうちに、サッカー部のメンツがチラホラと集まってきた。

吸血鬼、フランケンシュタイン、ミイラ男、ゾンビ、チャッキー人形、幽霊、魔法使い……尾刈斗の中でも特にやる気の高いサッカー部員が集まったことで、まるで渋谷かと錯覚するような仮装大会になっていた。一部普段通りな気もするが。

魔女姿（魔法使い姿ではなく）の多呂斗先輩もグラウンドにやってきたが、「黒研の黒魔術実演に客が思いの外たくさん来てしまったようなので、黒上君のサポートに行ってください」と言って帰っていった。

どうしてここから理科室の様子が分かるのかはもうツツコまない。あ、理科室つての

は黒魔術研究部の活動場所ね。

「皆さん集まってきましたね。文化祭の最中に呼び出して申し訳ありませんが、臨時の部活動とします。もちろんシフトや他の人との用事がある人は無理しなくても結構ですからね」

「えっと、あなたがサッカー部監督のジキルさんですか？」

「ええ、その通り私が地木流灰人です。変な名前でしょう？」

地木流という名前の人が実在する（偽名だけど）ことは心音も分かってくれたみたいだ。

「月村君とその円堂君という子に押されて企画に許可を出してしまいましたが……本当に良いんですか、豪炎寺君？君はただ妹さんと遊びに来ただけのようですが」

「俺だつてほんとは乗り気じゃないんだが、妹がどうしてもって言うんで」

夕香ちゃんの「お兄ちゃん頑張つて！」の一言ですっかり乗り気になつている様子の修也。チヨロい。

「ではまあ試合を始めようと思うんですが、どうします？」

「私はもちろんパスよ。こんなドレスを着たままサッカー出来ないし。というか皆さんその仮装のままサッカーするつもり？」

「仮装をしていると……視界が遮られる。それに怖い……。だから……いつも通りの姿でサッカーをしましょう。着るものは何かしら部屋にあるはずです……」

心音と木乃伊の言葉で一旦着替えタイムが始まる。ちなみに僕はフランクフルトを食べるときにかぼちゃを脱いで、そのまま出店に置きっぱだから普通に素顔だ。

みんないつも通りの姿に戻って（筒井先輩の4時間のメイクも剥がされた）、やっとチーム分けができるようになった。

「あの、あなた自身はそれ解ほどかないんですか？」

「これが……いつも通り」

まさかの返答に心音は固まる。そりや全身包帯が標準装備だなんて思わないよね。

これでやつとこさチーム分けが始められる。

今ここにいるのは、円堂風丸半田影野で雷門組が4人。3年生の先輩達が道化先輩と筒井先輩と堀田先輩で3人。2年生がさつき帰った多呂斗先輩以外で4人。1年生はえーつと、鉦と黒上と円谷がいないのかな？てことは8人だ。

最後に修也を加えて20人。どうせならあと2人欲しかったが、奇数になるよりはマシだ。

「おつ、間に合ったか？」

「面白そうだからボク達も混ぜてよね」

最高のタイミングで助っ人参戦だ。

「おおっ！染岡、マックス、来てくれたのか！」

雷門サッカー部全員集合。せっかくなら木野も来たら良かったのに。

「全く知らない番号から電話がかかってきたかと思えば今から尾刈斗で練習試合があるって、ほんと飽きさせないよね」

「で、日本一のストライカーってのはどこのどいつだ？」

「それは多分俺のことだ」

自覚はあるのか、修也が名乗りあげる。

本当ならばチームメイトでライバルになるはずだった2人の邂逅。この世界ではきつと起こりえない未来だけだ。

26 デジャヴ

円堂が監督に頼み込んだついでに職員室の電話を借り、染岡とマックスをここまで呼び込んだらしい。

家にいたのに急に電話で呼び出され、急いでバスに乗って来てくれた2人には感謝だ。

おかげで22人がピッタリ揃った。まさか！多呂斗先輩はこれを予期していたとでもいうのか……

色々と話し合つて、チーム分けはこんなふうになった。

Aチーム

——染岡——堀田——

——半田——松野——筒井——

——風丸——道化——

——紫藤——

——影野——三途——

—— 円堂 ——

B チーム

—— 武羅渡 —— 豪炎寺 ——

—— 月村 —— 人形 ——

—— 魔界 ——

—— 八墓 —— 木乃伊 ——

—— 靈幻 —— 不乱 —— 屍 ——

—— 不死 ——

道化先輩達がせっかくなら成長した後輩達と戦いたいと言い出して、円堂は修也のシユートを止めたいから別チームにしてくれと言い出して、色々妥協点を探した結果だ。僕はいいんだけど三途は親しくない雷門組のチームに放り込んでしまっただけで申し訳ない。

「まだサッカー部は人が足りないから、こうやって試合すんの初めてだけど一緒に頑張ろうな」

「初めて……？ああそっか、初めてだもんね」

そういえば円堂は対プロトコロオメガの記憶がないんだった。

「うーん、なんかこんな会話を紫藤としたような記憶があるんだけどなあ。思い出せないや」

「それデジャヴってやつだよ。多分」

Bチームの方が強そうとのことできっくオフは僕達Aチームから。放送のおかげか、ギャラリイもちよいちよい集まってきた。

僕達Aチームには優秀なドリブラーが揃っている。いかにして相手にボールを渡さないかが重要だ。

陣内でボールを回しながら攻撃の隙を窺う。先輩達と雷門組は初対面だから、ボールのやりとりでコミュニケーションを取らなきゃいけない。

それにしても雷門は前見たときよりもみんな動きが良くなっている。毎日練習を頑張っているのがプレーのひとつひとつからよく分かる。影野はまだぎこちないけど、この雷門にいればきつと上手くなれるだろう。

「くそつ、ちょこまかとめんどくさいぜ。怨霊！」

「その技は地面にいなければ効果がないって知っていたかい？レッドバルーン」

魔界先輩が必殺技でボールを奪いに来たけど、道化先輩は必殺技で赤い風船を作り出し、ぷかぷかと宙を泳ぎ始めた。

風船で空を飛ぶという非常にシンプルな技だけど、その汎用性は計り知れない。だって飛ぶんだよ？跳ぶとかじゃなくて滞空できんだよ？大介さんもびつくりの3次元移動だ。

相手のゴール近くまで飛んでいって、上空からシュートなんてこともできる。今回は不死先輩に撃ち落とされるからやらないけど。

「止めるうがー！フランケン守ターイン！」

巨大な緑の怪物が空を飛ぶ道化先輩の前に立ちはだかる。さすがに分が悪いと判断したのか、ボールが僕に帰ってくる。

空中からという滅多にない角度からのパスをなんとかトラップし、緑の巨体の突破方法を考える。

（不亂先輩は単純なところがあるから……久しぶりにアレ、使えるかもしれない）
「……残像」

フランケンが僕の残像に拳を振り下ろしている間に、こつそりと脇を駆け抜ける。

イリユージョンボールに続いて幻影系の技として練習したらあっさりと言得したけど、大抵の場面でイリユージョンボールの下位互換で使い道のなかった残像が久しぶりに役に立った。

霊幻の怨霊が僕の足元に届く前に、堀田先輩にパスで流す。

「先輩の威厳を見せてあげるヨ、ポルターガイスト」

不死先輩の歪む空間を警戒してか、目を閉じたままシュートを放つ。対する不死先輩は歪む空間が効果を為さないことに気づき、別の必殺技に切り替える。

「ロケツト(ごぶし)」

堀田先輩のシュート技は不思議な軌道を描き、オレンジの拳を避けていくようにゴールに吸い込まれていった。

A チーム先制点。

「お前目瞑っててもそんなこと出来んのかよ」

「実は薄目を開けてたからね」

「ずっるいな。先輩の威厳の欠片もないぞ」

ちなみにだけど、円堂や染岡達も尾刈斗の手の内を全部知っている。口の軽いどっかの誰かがペラペラと喋ったらしい。さらにちなみにだけど、そのどっかの誰かとは僕のことである。

さて、Bチームのボールで試合が再開。さつきまでは相手にボールを1度も渡すことなくという最高の立ち回りができていたけど、ここからはそう圧倒的な試合運びができるとは思えない。

Bチームは攻撃陣が桁違いに強いのだ。人形に武羅渡に月村先輩、そして修也がいる。

FF以降サッカーの練習なんてしていたはずがなかった原作でも、源田から見事点を奪ってみせた男である。この間の帝国戦で、中一の源田にあっさりと必殺シュートを止められた堀田先輩とは申し訳ないけど格が違う。

ボールを貰うと単身で駆け出す修也。僕達程度の守備は歯牙にもかけないようだ。

「どんだけ強いストライカーか知らねえが、止めてやる。クイックドロウ！」

「俺だつて！クイックドロウ」

「ボクもクイックドロウ」

「俺もだ、クイックドロウ」

染岡、半田、マックス、風丸による衝撃の4連続クイックドロウも、修也はひよいひよいと全部避けてしまった。

「あれ必殺技も使わずに全部避けるってマジかよ」

「さすが日本一のストライカー。レベルが違うねえ」

修也もクイックドロウを使えるからそれでボールを奪うのは難しいよって助言しておけばこんなことにはならなかったのに。この4連続のスカは僕の脳内珍プレー集フォルダに保存しておいた。

「それじゃあ僕は、フアントムミストからのクイックドロウ！」

「ヒートタックル」

このフアントムミストという技は10年後の霧野の技を真似て作ってみたんだけど、霧を無視して走れば簡単に突破できるという欠陥が発見されて（事実霧野もそうやって突破されてたよね）、使いにくさはあった。でもクイックドロウと組み合わせることで確実にボールを取れるってコンボができる。はずなんだけど……見事に焼かれました。

これでクイックドロウ失敗記録は5連続に更新されたね。

三途の怨霊も跳んで回避し、何も出来ずにいる影野の横を素早く抜き去り、修也は遂に円堂と一対一になる。

「ファイアトルネード」

「来い！ゴツドハンド」

炎を纏ったシユートが円堂の黄金の手にぶつかる。少しの間持ちこたえるも、ボールの炎とパワーを消し去るには至らずゴール内に押し込まれてしまう。

決められた。

「円堂のゴツドハンドを破った……」

風丸が呆然とするのも無理はない。実際ゴツドハンドはFFでも充分通用するほどの強力な必殺技だ。円堂は不死先輩と同じかそれ以上に強いと僕はみんなに説明したけど、その説明もやはり間違ってるなと思う。

ただ、修也が強すぎたのだ。

「豪炎寺すっげえな！まだ手がジンジンするぜ」

ゴールを決められた本人の円堂はすごく楽しそうにしているけど。

とりあえず、修也はやばい。マジでヤバイ。絶対にボールを渡してはならない。一応影野には修也をマークしておくようにと伝えておこう。どれだけ効果があるか分からないけど。

持っているボールをどれだけ保持し続けられるか。最初と同じ状況だ。

またパス回しで攻撃のタイミングを窺っているが、さつきよりもボールの動かしづらさを感じる。魔界先輩の指示なのか、選手がみな嫌な位置にいる。なかなか前線へと運べない。

「悪夢は如何？ ナイトメアロード」

夢の中で追いかけてくるなにかから逃げるため全力で走ろうとするけど、何故か走れない。なんて経験をしたことある人は多いと思う。一説によると脳が変化する背景の処理が追いつかないから速い移動はできないんだとか何とか。そんな現象を再現することができるのがこの必殺技だ。

必殺技の発動とともに暗い紫の液体のようななにかが地面に広がり、その液体で舗装された地面の上にいる選手は走ることができなくなってしまう。走ろうとしても足がうまく動かずもつれてしまう。なんとか走ろうと思つて走るといふ行為を意識すればするほど、さらに走れなくなるという素晴らしい設計をしている。

お察しの通り、尾刈斗の例に漏れず催眠術の一種。だから目を閉じるだけで簡単に防げてしまうだけだね。

けれども、視界を封じてボールを奪えるほど筒井先輩は甘いはずがない。

しつかりヒールリフトを決めて、目を瞑っていた月村先輩を抜き去る。かつこいい

よ、威厳が溢れてるよ、筒井先輩。

そこからさらに筒井先輩と道化先輩のひとりじゃないワンツーで魔界先輩を抜き去り、どんどん進んでいく。

ボールはまたしても堀田先輩に繋がり、目を閉じているのか薄目を開けているのか分からない状態でシュート体制に移る。そしてその目の前に飛び出すのは屍。

「もういちど……ポルターガイスト」

「いつまでも俺が何もできないと思うな！タフネスブロック！」

「キラーブレード」

体を張ったシュートブロックで威力が大きく削がれたシュートをキラーブレードで危なげなく止める。タフネスブロックはキーパー技ってことになってるけど、手を使わないからキーパー以外が使ったっていい。屍は体が丈夫だから合っているかもしれないと僕が提案したのだ。

「ぐふふっ……俺、活躍できた」

堀田先輩のシュートが止められてしまったわけだけど、屍の活躍にちよつと嬉しく感じている。

ってそんなこと考えてる暇はない。止められたってことは相手のカウンターチャンスだ。

真つ二つに切断されたはずのボールはいつの間にか元に戻つて、ゴールキックで一氣に前線の修也にまで届いてしまう。

不死先輩の強みはなんといつてもその正確性で、ロケットこぶしで狙つた場所にボールを弾けるのが特技だ。そしてもちろんゴールキックはそれ以上に正確。

空中でトラップした修也はそのまま空中で人形にパス。さらに魔界先輩、月村先輩へと素早くパスが繋がっていく。

「行くぜ！地獄車！」

月村先輩と魔界先輩がボールを挟んでぐるぐると回転して突進してくる。クイックドロウとかをしようとしても簡単にぶつ飛ばされてしまうから、止めるのは簡単じゃない。

唯一方法があるとすれば、全力でぶつかりに行つて全力でぶつとんでファウルをアピールすることなただけ……今回は無審判でやってるから無理だね。そもそもこの世界のファウルの基準未だによく分からないし。

必殺技が終了してから普通のドリブルに切り替わるまでの流れもスムーズで全く隙がない。月村先輩と魔界先輩の同学年コンビの信頼関係がなせる技だね。

豪炎寺にボールが渡る前になんとか止めないと。

「フアントムミスト！」

いつものように真つ黒な霧じゃなくて薄い灰色の霧が出てきた。

「さつき2連で必殺技を使っちゃったせいで不完全な発動になっちゃったなあ」

「こんな薄い霧無いのと変わんねえよ！ ってえ？」

ちよつと棒読みが過ぎたかもしれない。でも、ちゃんと月村先輩は転けてくれた。

今の薄い霧はブラフ。本命は下から這い寄る三途の必殺技、怨霊。

フアントムミストを完全に使ってしまうと僕すらも何も見えなくなってしまうから、

あえて薄く留めておく方が便利だったりもする。それにしても霧野は霧の中で一体ど

うやって状況を認識してたんだろうか。霧と感覚が共有してて空間を把握できるとか

…？モラウHUNTER × HUNTERの霧の能力者じゃあるまいし。

霧の中意識外から怨霊に足を掴まれたらどんな人も転ばすにはいられない。

僕と三途の同学年コンビもなかなかのもんでしょ？

27 サッカーバカ達

僕と三途のコンビでなんとかボールを奪い返すことができた。

また道化先輩や筒井先輩達がいる右サイドに任せてもいいんだけど、どうやら相手チームの守備もそっち側に固められているような気がする。

ここは左サイド、雷門攻撃陣に任せてみようじゃないか。

「風丸、パス！」

「あの技、使わせてもらうぜ！疾風ダツシユ」

目で追うことすらできないすばやさで人形を抜き去ってみせる。疾風ダツシユをしつかり自分のものにしたみたいだ。

そのまま風丸はマックスへとパス。

「じゃあボクは、イリユージュオンボール」

3つに分裂したボールがぐるぐるマックスの周りを漂う。

いつの間にそんな技を覚えたんだか。どうせまた僕の真似してたらなんかできたよ

でも言うんだらう。

「急いで仕事を……止めるべきはボールじゃない……怨霊」

「え、なにこれ？」

木乃伊の必殺技でマックスの足が固定されてしまう。やっぱりこの技ものすごく便利だ。ファントムミストと一人コンボできたら絶対強いと思うし、次に習得したい技の第一候補だね。

ボールはまだふわふわと回っているが、足が動けないんじゃないや突破のしようがない。木乃伊は今まで僕のイリユージョンボールを見てきたから、自分なりに対策を考えていたんだらう。

「マックス、俺が奪うからそれ止めてくれ！」

「おっけ」

マックスから数メートル離れた位置にいる半田が声をかけ、マックスの必殺技が解除される。

1つに戻ったボールがマックスの足元に落ちた瞬間、

「クイックドロウ！」

必殺技で一気に距離を詰め、半田がマックスからボールを奪った。

「もう一度……おんりよ」

「ジグザグスパーク！」

さらに、怨霊で追撃しようとした木乃伊を必殺技で突破する。大活躍だぞ半田。

「行けっ、染岡！」

「おう！豪炎寺よりもかけえ俺の必殺シュートを見せてやるぜ。ドラゴンクラッシュ」

半田からパスを貰ってすぐに必殺シュートを放つ。

やっぱり染岡も習得していたらしい。なんだか新必殺技のお披露目会くらいにバンバン使うね。

「タフネスブロック」

「フランケン守タイン」

少しゴールから離れすぎていたのか、シュートブロックを2枚入れられてしまう。屍の体はなんとか弾き飛ばしたものの、不亂先輩の緑の怪物は貫くことはできず、ゴールに届くことすらせず止められてしまった。

「くそっ！」

「取らせないアル。呪い」

マックスがパスの渡った霊幻へとスライディングを仕掛けるも、霊幻の必殺技の呪いに囚われて身動きが取れなくなってしまう。

ブロック技の怨霊と対を成すドリブル技で、とりあえず覚えたい必殺技がない人にはこの2つがまず教えられるおかげで結構みんな使える技だ。

霊幻から八墓にパスが渡り……

「俺も……呪い」

ほら、みんな使えるでしょ？

こんなふうに、チームみんなが同じドリブル技やブロック技を覚えてるってことは少なくない。シュート技なんかと違って、パワーよりも手数が重視されることが多いから、1つの技のノウハウをチーム内で共有するってことになりやすいのだ。

雷門の場合、クイツクドロウがそれになるかもしれないね。

とかそんなことを解説してるうちに、ボールは魔界先輩のもとに。月村先輩と細かくパスを交換しながら上がってくる。

さつきと同じ流れだけど、必殺技を使われていない分より厄介だ。

さつきと同じようにフロントムミスと怨霊コンボでボールを奪おうにも、それに合

わけて地獄車を使われると突破されてしまう。

でも考えてるだけじゃどんどん詰め寄られてしまう。なんでもいいから何かしないと。

「それじゃ、クイックドロウ」

毎度お世話になっておりますクイックドロウで奪おうとしたけど、ボールに届く直前に武羅渡にパスされてしまった。

使い勝手はいいけど、タイミングを知られていると割と簡単に対処されちゃうんだよね。何回でも気楽に使えるから便利なのは確かなんだけど。

武羅渡はすぐさま人形へパスをし、受け取った人形もまたすぐに前にパスを送る。そのパスの先にいるのはもちろん、修也だ。

影野がずっとマークしていたはずだけど、簡単に外されてしまっていた。

「次は止める！」

「ファイアトルネード」

「ゴッドハンド」

円堂の気合いも空しく、円堂は再び押し込まれて失点を許してしまう。

1点ビハインド。まだまだ勝てる点差だけど、尾刈斗の強さを知ってるからそう簡単

に巻き返せるとは思えない。

「ごめん……」

マークを外されてしまったことに責任を感じているのか、影野は頭を下げる。

「影野が謝ることじゃないさ。キーパーつてフィールド全体がよく見えるからさ、お前が豪炎寺のマークを頑張ってたのもしっかり見えてたぜ」

「逆に円堂はよく平然としてられるな。あのゴッドハンドが破られたんだぞ？」

風丸達にとつて、ゴッドハンドは最強だった。染岡のドラゴンクラツシュでも破ることはできず、ゴッドハンドが負けているところは見たことがなかったという。

雷門は練習試合なんてしたことないから、他の選手のシュート技を止めたことなんてほとんどない井の中の蛙なのはみんなだつて理解していた。それでも最強だと錯覚させられるほどのオーラという安心感つてものが確かにあった。

「そりゃ悔しいぜ。じいちゃんが遺してくれた技だしさ」

「それならなんでそんなに笑ってるんだ？」

「なんでつて、そりゃ楽しいからに決まってるだろ？豪炎寺のシュートからはサッカー

が大好きだって気持ちを感じるんだ。だから俺もそれに全力で応えないとって」

「そっか、そういうえばお前はサッカーバカだったな」

鉄塔の上で保護者のように見守ってたときと変わらず、風丸は呆れたような顔で円堂を見ている。

「でもさ、風丸もすごく楽しそうにしてたよね。ボールを持ったときとかさ。サッカーバカなのは円堂だけじゃないよ」

「俺達みんなサッカーバカってか。確かにそうかもしれないな」

風丸もおかしそうに笑う。やっぱりサッカーにはみんなを楽しくさせるパワーがあるんだって思う。

「サッカーはやっぱり楽しい。でもやるからには勝ちたい。」

紫藤の言う通り尾刈斗は強いし豪炎寺はヤバイしで、ちよつとキツいかもって思わなくもないけど、これが俺達にとって初試合だから。俺達攻撃陣が頑張つて攻めて勝つて終わらせようぜ」

「半田にしてはなんかかっこいいこと言うじゃん」

「俺にしてはってなんだよ」

「ボクだって、負けるつもりはさらさらないよ」

「点を取られても、その分雷門の点取り屋の俺が取り返してやるぜ。だから影野も気に入んな！」

半田だけじゃなくマックスも染岡もやる気充分。

そりゃみんな雷門だもん。負けてても最後まで勝つのを諦めたりしない。

「そういうことなんで、先輩達も手伝ってくださいね」

僕達の会話を遠巻きに眺めていた道化先輩達にも頼む。

「いやあ、若いつていいねえ」

「2つしか変わらないのにもう隠居した人生の先輩感出すな」

前世含めたら僕が1番年上だけでも。もちろん口にはしない。

「雷門の子達のためにも頑張ろうか」

「全力を尽くすまでサ」

「あ、僕も頑張るよ」

数合わせのために1人だけAチームに来ることになった三途はほんとうごめん。

僕達はこの試合を最大に楽しんで、そして勝つてやる。

染岡から堀田先輩へのキックオフで試合は始まる。

逆転するための時間は十分に……あ、10分しかないや。

まず1点を返す。今はそれだけを考えよう。

「シユートブロックされるとキツイんで、なんとかディフェンスを封じることができないですかね」

「1つ思いついた案があるネ。でもそのためにはまず前線にボールを運ばないト」

さつき試合が止まったときにほとんど作戦会議が出来なかつたので、試合中ながらフィールドで話し合う。

今は道化先輩がレッドバルーンでなんとかボールを保持してくれているところ。

筒井先輩や風丸半田マックスなど、このチームには優秀なドリブル技を持つ選手が多いから、今のところなんとかボールを奪われずに耐えられている。

でも向こうも僕達の手札を理解しきってしまっているから、攻めきることができない。

まだ秘密の必殺技を隠し持つてる人がいたりしたらいいんだけど。

「今ボク凄く面白いことを思いついたんだけど、言っていていい?」

「勝つために必要なことなら言ってみて、マックス」

「確かその幽霊頭巾の子もアレ、使えるんだよね?」

マックスはなにか素晴らしい悪戯が思いついたかのように、声を潜めて僕に言う。

「——てマックスが言ってたんだけど、いけると思う?」

「理論上は行けるんじゃないかな」

こんなの試合中にするんじゃないけど、三途と話し合つて作戦を固める。

「僕達に策がある。パス!」

疾風ダッシュでちょうど人形を抜いていたところの風丸に、ジェスチャーと一緒にパスを求める。

ボールを受け取つた僕とマックスと三途が3人並ぶ。

「行くよ!」

「「イリユージョンパーティー」」

3つに分裂したボールはそこからさらに3つに分裂し、合計9つのボールが空中を自由にくるぐる動き回る。

こんなにもボールが沢山あると、全部を目で追うのは不可能になる。派手に暴れ回る8つのボールが視線を誘導し、本命の1つは筒井先輩にしっかりと渡った。

即興の割にはかなりいい技になったんじゃないかと思う。

「しつかり受け取ったぜ、堀田！」

「今度こそ、ポルターガイスト」

しかしゴールから距離が離れすぎている。それにやっぱり軌道上に不亂と屍が待ち構えている。

「タフネスブロック」

「フランケン守タイン」

するとシユートは2人を避けるように左に逸れた。そういえば、堀田先輩のポルターガイストは軌道を操れるのが強みなんだった。

でも左に逸れ過ぎて、ゴールには届かないんじゃない？

「ドンピシャだぜ！ドラゴンクラッシュユ！」

「キラーブレード」

染岡のシュートチェインが見事に決まり、不死先輩の青色の刃を打ち砕いた。

「いつの間にそんな連携決めてたんですか？」

「何も話はしていない、ただ目を見ただけ」

染岡と堀田先輩、同じFWどうし通じ合うものがあつたのかもしれない。

「俺は雷門の点取り屋だ。ボールが来たらシュートをする。それだけだぜ」

いやあ、みんなかつこいいなあ。

Bチームのキックオフで試合は再開。残り時間は後1分も無いくらいかな。ここで逆転できたなら最高だけど、さすがに厳しいかも。でももうすぐ終わるって気を抜いていと簡単に1点は取られてしまう。

ボールを貰ってすぐに修也が駆け出す。

1点目を取られたときと同じように、スライディングやクイックドロウを難なく躲していく。

修也にとってこの試合は記念すべき初試合ってわけでもないし、久しぶりの後輩との手合わせってわけでもない。ただ知らない人達の試合に巻き込まれたただけだ。

でも修也は本気だ。もちろん大好きな夕香ちゃんが見てるからってのもあるんだろ
うけど、修也にとつてサッカーはそれだけ大切で真剣に向き合う相手なのだろう。

修也の思いに応えないとつて言った円堂の気持ちには、なんとなくだけ僕にも分かる。

今の修也は誰にも止められないんじゃないか、そう思ってしまうほどの気迫を感じる。でも、止められなくなつて、時間稼ぎしかできなくなつて、僕のプレーで示したい。僕のサッカーに対する思いとかそういうの全部ひつくるめて、修也に、みんなに。

「フアントムミスト！」

「怨霊」

僕の霧も迷いもなく突き抜け、ほとんど見えないはずの三途の怨霊は跳んで回避する。

「追撃の着地狩り！クイック…」

「ヒートタックル！」

これまた最初と同じように、炎を纏った突進で僕のクイックドロウは失敗に終わる。僕らしい微妙な活躍だ。でも、これでいい。少しでも修也を消耗させられたら。

円堂なら、やってくれる。最後は祈るだけになつちやうのは悔しいけど。

「ファイアトルネード」

「みんなが取ってくれた1点を、無駄にはしない！ゴッドハンド…改!!」

土壇場で進化した円堂の必殺技が修也の炎の必殺シュートを包み込み、しっかりと受け止めた。

タイミングを見計らったかのように監督が試合終了の笛を鳴らす。

2―2。引き分けだ。

28 ハロウィーンデート

ハロウィーン当日。僕は例のかぼちやを被って待ち合わせの公園にいる。

せつかくのデートだから精一杯オシャレしても良かったんだけど、どれだけ頑張ってもかぼちや以上に印象が残る気がしなくてやめた。

「あ、幻斗発見！珍しく幻斗の方が早いね」

かぼちやを被ってるにも関わらずやっぱりすぐに正体がバレる。いや、今回の場合は被ってるから分かりやすかったのか。

「学校から直ってきたから」

背中にしよつたりユックを見せる。いつも通りの教科書いっぱい入るやつだ。オシャレな肩掛けカバンだったりはしない。

「部活は無かったの？」

「今日はデートがあるんでって言って休んできた」

「デ、デートって……それ誤解生まない？」

「女の子と一緒に遊ぶってそれ即ちデートでしょ」

「幻斗って私のこと女の子として見てくれてたんだ……」

上目遣いで見つめられる。

「急にラブコメ編始めるのやめて心音。別に心音は男勝りな性格だけど実は乙女な一面もあるキャラでもなんでもないでしょ」

「そうそう、デートのお相手は心音だ。心音以外に逆に誰がいるんだって話だけだ。」

「ダメだわ、自分でさっきの発言がキツくなって来ちゃった」

まあ確かに上目遣いはキツかった。

「そういうの、他の男子にするの絶対やめたほうがいい。僕だから冗談って分かるけど真に受けられたら悲惨だよ」

「善処します、という心音からは反省が見られない。今後変なトラブルに巻き込まれても知らないぞ。」

「そんなくだらない会話をしながら僕達は目的地へと移動をする。」

「そういえばなんでわざわざ公園を待ち合わせにしたのよ。ここに行くんだったら現地

集合で良いじゃない」

「あ、確かに。その方が早く予約とれてたし。デートは公園で待ち合わせって固定観念に縛られてた」

目的地に到着したものの、予約を入れてなかったせいで30分ほど待たされる羽目に。

「ドリンクバー使っても良いってさ」

「じゃあ私コーヒーお願いね」

「えっ、僕に入れさせるの?」

「デートだから当然でしょ」

「都合の良いときだけデート主張するのずるくないか」

たった数歩を面倒くさががる心音の代わりにコーヒーを入れて、僕は適当にメロンソーダをコップに注ぐ。

個室の方から、熱唱してらっしやる方々の声が微かに聴こえる。

今僕達がいるのはそう、カラオケだ。

☆☆☆

このデート(?)をすることになった原因は、元を辿れば鉦にある。えーつと順を追って説明しようか。

結局、あの練習試合は引き分けに終わった。染岡の見事なシュートに最後の円堂のナイスセーブにとなかなか凄いい試合だったと振り返っても思う。見に来てくれた人も超次元サッカーの魅力が伝わったかと思う。

終わったあと円堂と修也はかなり打ち解けて、楽しそうに話していた。

一緒に文化祭回ろうぜ、と円堂が修也に提案したが、いろいろ事情があつてもう帰らないといけないのだと修也は断った。後で訊くと、夕香ちゃんを心配したお父さんが外出時間に制限をかけていたらしい。SP雇ってるから心配することないはずなのに。いやもしかしたらその支出が心配なのかも。

結局午後は雷門のみんなと僕の8人の大所帯で文化祭を回った。

「せっかく尾刈斗祭に来たんだしお化け屋敷に行かなくちゃ」と心音が言うので、まずはお化け屋敷に向かった。そんなに有名だとは思っていなかったけど、クオリティが高

いことは保証する。お化け屋敷マニアで有名な百谷先輩が監修しているとかなんとか。

日頃からお化けのようなやつらに囲まれてたからそこまで怖くはなかった。筒井先輩のフレデイのほうがエグかったし。おかげで半田のように醜態を晒さずに済んだ。

円堂や風丸染岡も半田ほどじゃないけど怖がっているように見えた。染岡がビビっている様子を見られるのは貴重だね。マックスはかなり涼しい顔をしていて、影野はそもそもどんな顔をしているか分からなかった。

そして言い出しつぺの心音は、みんなが怖がっている姿を楽しそうに見ていた。

その次は奇術同好会のマジックショー午後の部。左手に注目して見ていたら、意外と簡単にタネは見抜けた。このマジシャンの技術はサッカーにも応用が効く。僕の仕事はたいてい右手になることだ。

そのあとは黒研で黒上から黒魔術の手解きを受けたり、超研で円谷から宇宙人はいるのだと講義を受けたり、写真部で玉響先輩達が撮った心霊写真を眺めたり。みんなでワイワイと尾刈斗祭を満喫していた。

時間の限り遊び尽くして、「そろそろ片付けを始めなきゃだから」と解散しようとしていたとき、監督から説教をくらってる最中の鉈に遭遇した。

文化祭中どこを探してもいなかった鉈は、実は学校を抜け出してカラオケに行っていたらしい。

本人は完全犯罪をやり遂げだつてもりだつたらしいが、教師達にはしつかりとバレていて、校門に戻ってきたところを捕まえられたのだという。

そうして叱られている様子を見ていた心音が

「そういえばカラオケとか全然行つてないね。そうだ、誰か今度の水曜日にカラオケ行かない？ ちょうどその日はヴァイオリンがお休みなだよ」

と雷門のみんなをカラオケに誘った。ところがみんな、家でパーティーをするとかいろいろ予定があつて断られてしまう。影野は特に何も言つてなかつたけど、心音は影野を誘うつもりなどなかつたようだ。

「じゃあ幻斗は？」とやつと僕に話題が振られたので、「部活を休めば行けるかな」と答えたならそのまま話が纏まった。これがカラオケデートの真相だ。

☆☆☆

「そういえば心音つて雷門のみんなからは名字で呼ばれてるんだね。奏ヶ原つて言いにくいから下の名前で呼んで欲しいんじゃないやなかつたの？」

ちよつとだけ気になつていた質問をぶつける。

「やっぱり幻斗は女心が分かってないね」

「え、どういうこと？」

前世でもろくにコミュニケーションを取ってこなかった僕にはさっぱり分からない。

「幻斗ってさ、好きな人とかいないの？」

「どういふことか尋ねたはずなのに、何故か別の質問が返ってくる。いないよ、と正直に答えておく。」

「へー」

前世はいたけどね。その子はいつの間にかタクヤと付き合っていたんだった。タクヤは運動神経よくてかっこいいから凄くモテてたし。

僕の初恋は誰にも知られることなく静かに終わった。悲しい思い出を思い出してしまった。

「心音はいないの？好きな人」

特に興味があつたわけじゃないけど、仕返しのように訊き返す。

「いるよ」

「へー」

「紫藤さん、2名様でご予約の紫藤さん」

ちょうど店員さんに呼ばれたおかげで会話が途切れた。ものすごく知りたいわけでもなかったけど、心音の好きな人の話は宙ぶらりんな感じになってしまった。

☆☆☆

2人で2時間歌い尽くしたあと、しつかり割り勘して（心音はデートなので僕が全部払うべきだと厚かましく主張したが）カラオケ店を出た。

「幻斗って歌のチョイス渋いね」

「そうかもね」

最近の曲になればなるほど、前世とは違う曲が流行っているから、前世から慣れ親しんだ曲を探すと古い曲ばかりになるのだ。仕方がない。

僕は今日は徒歩で学校に行ったから、心音と一緒に神成町まで歩いて帰る。

「幻斗と2人つきりで話ができるのは久しぶりね。あ、いやそのラブコメ的な意味じゃなくてね」

そうだね、って感じに軽く相槌を打ちながら歩く。歩いてるあいだは何も言わなくても歩いてるが残るから気が楽だ。

「お父さんのこととか、ほとんど何も言わずに尾刈斗に行つてさ」

「それはごめん」

「刃也とは私を除け者になにか企てて」

「ごめんって」

心音の言葉にただ謝ることしかできない。

また会話が途切れる。2人はただ歩いてるをしてるだけになった。言いたいことは言い尽くしたつてわけじゃない。僕も、多分心音も、言いたいことはたくさんある。

昨日の思い出つてまだまだ語り尽くせていないし、尾刈斗でのフシギ体験とか、奇人エピソードとか、話題なんて無限にある。でも、それは今話すことじゃない気がする。今話すべきことつてなんだろう？ 仲直りの言葉……はそもそも喧嘩してないから違うな。

そんなことを考えているうちに僕達は神成町に辿り着き、2人の道が別れる地点まで来た。

「ありがとうね。今日は楽しかった」

「僕も楽しかったよ」

楽しかったってのはもちろん本心だ。僕が心音に隠し事をしてしまってるせいで、会話がぎこちなくなっちゃっただけで。

「そういえば、あの電話監督さんじゃなかったよ」

「え？」

「電話の声と地木流さんの声、全然違った」

心音のもとにかかってきたという、僕について尋ねる電話。監督本人のものだと僕は思っていたんだけど。

地木流と名乗ったのが嘘なら、一体誰なんだ？

「じゃあ、誰の声？」

「そんなの知らないわよ」

「そっか」

「じゃあそういうことで、バイバイ」

心音はそう言って家の方へ小走りで帰っていった。

「なんで最後になってそんな爆弾置いてくんだよ……」

☆☆☆

「——つてことがあつてさ」

ことのあらましを刃也に伝えた。今日は刃也との定期連絡の日だ。

刃也がどう反応するか気になって、「今日心音とデートしたんだ」つて言ってみただけ、
「女の子と遊ぶこととデートは同値じゃないよ」と言われただけだった。実に面白い。
ない。

電話ではまず刃也が、「影山の金庫に泥棒が入ったとかで警備が嚴重になった」と報告した。影山の金庫に泥棒だなんて自殺行為としか思えないが、犯人はまだ見つからないらしい。そのせいで全ての部屋に監視カメラが設置され、刃也のすることもかなり減つてしまいいい迷惑だ。

心音への謎の電話の件について話を戻そう。

「心音がそういうのなら地木流ではないつてのは間違いないんだろうが、謎だな」

「影山が探りを入れてきたんじゃないのかな」

僕について調べようとするとするやつなんて影山以外に思いつかない。他に誰か喧嘩を売った覚えなんてないし。

「それは6月頃だと心音は言っただら？」

「うん、確かにそう言っただ」

「それなら影山とは考えにくいな。その時点じゃ豪炎寺の妹の一件も起きていないから影山が幻斗を狙う理由がない。それに、そのときはまだ地木流は影山の手下だったはずだからわざわざ地木流の名を騙らなくとも本人が電話をかければいいはずだ」

「確かに」

さすが刃也、非常に論理的な考えだ。僕は全く考えが回っていなかった。

「じゃああれは誰だったの？」

「皆目見当がつかないな」

あの電話の主が誰だったのかは謎のまま、定期連絡は終わった。

29 収穫祭の夜

小さなアパートの一室。年の離れた2人の男が夜食に炒飯を食べている。キッチンに自炊の跡はなく、ただレンジで温めるだけの冷凍炒飯のようだ。

「ほんとにこの炒飯美味いですよね。去年の今頃はこれがなかったなんて信じられません？」

「お前もこれくらい美味しい炒飯を自分で作れるようになれ。冷凍食品とカップ麺ばかりの生活は正直好かん」

「僕はこれで満足なので。不満があるなら自分で料理をすればどうですか」
「前も言ったが私は料理などできん」

「奇遇ですね、僕もできません」

「どうやら2人とも生活力は非常に低いらしい。」

「それに私は忙しいのだ。お前と違ってな」

「僕だつていろいろと動いてますよ。いろいろと」

「ハロウィンパーティーに参加するのがお前の仕事か？」

「顔を隠して学校に入れる滅多にない機会です。行くしかありませんよ」

そう言いながら若い男は床に無造作に置かれたお面を顔につける。百均に売っているようなプラスチックのお化けのお面だが、そのシンプルな造形がやや不気味さを醸し出している。

「どうですこれ？怖いでしょう」

「全く怖くない。さっさと食べる」

「はい」

冷たくあしらわれた若い男は仮面を後ろに投げ捨て、美味しい冷凍炒飯を再び食べ始める。

「それで、何か分かったか？」

年老いた男は食べ終わった皿をシンクに置きながら、若い男に尋ねる。

「何かあって？」

「遊びじゃないと否定したのはお前だろう。尾刈斗の文化祭を見に行つて分かったことが何かと聞いているんだ」

「それはもういろいろと。突然尾刈斗と雷門が試合を始めたんで観戦してたんですけど、凄かったですよ。尾刈斗も雷門も豪炎寺も皆強くなっているし、円堂なんてもう

ゴッドハンドを改に進化させてました」

「そんな面白いイベントがあったのならもっと早く報告しろ。」

いやそれにしてもゴッドハンド改か……FFが始まるころにはマジン・ザ・ハンドを習得していいそうな勢いだ、恐ろしい」

「ほんと恐いですよね。豪炎寺も1年間特訓を続けたらどんな化け物になるのか想像もつきません」

爆熱ストームでポセイドンからゴールを量産する豪炎寺の姿を想像し、若い男は少し身を震わせる。

「最も恐ろしいのは尾刈斗だと私は思うがな。あいつの力は未知数だ」

「確かに転生者がどう動くかなんてさっぱり分かりませんね。僕達の敵でないのは確かですが」

「あいつを転生者だと判断したときの状況をもう一度教えてくれ」

「つい最近も話したと思うんですけど。もしかしてもうボケが来ましたか？」

年老いた男に冷たく睨まれていることを察したのか、若い男は渋々説明を始める。

「本当なら知らない人が尾刈斗にいた時点で気づくべきだったのかも知れませんが。僕が彼に初めて気づいたのは、街中で例のサッカー少年支援団体の寄附金を集めてたとき

です」

「全てのサッカー少年の医療費を支援、だったか。あれほど莫大な金がどこから来てるのやら」

「だから、投資で大儲けしたからそれを回してるんですって」

「投資で大儲けしたと言うやつは、極一部の運と才能に恵まれたやつかインサイダーか情報商材を売りたい嘘つきかのどれかだ。そしてお前はその2つ目だろう」

「まあ大丈夫ですよ。未来に起きることを知ってるなんて現代日本の法廷じゃ認められません。立件は不可能です」

もし未来を知る術があれば、投資で財を築くことなど容易いことだろう。それは真つ当な手段ではないが、バレなきや犯罪じゃない、というように2人は特段気に留めていないようだった。

「それで、話を戻しますね。僕が募金箱を持って駅前で呼びかけをしていたんです。

普段は僕本人が募金集めなんてすることないんですけどね。ほらその金の出処とかでちよつと疑惑みたいなのがあったじゃないですか。僕もそれなりに顔は知られてるし、好感度上げていかないとなあつて思つたんです。

そのとき彼が僕に話しかけてきました。『僕も、サッカーが消えるのは嫌ですから。頑張ってください』と言つて、少しばかりのお金を箱に入れてくれたんです」

「サッカーが消えるという言い方は確かに妙だが、それだけで転生者だと判断するのは早計じゃないか？」

「それだけじゃありませんよ。彼の瞳が僕に語りかけてきました。僕も同じ転生者ですつて」

「瞳は話すことなどできん。それはお前の主観だ」

年老いた男は呆れたように若い男を見つめる。

「で、彼が尾刈斗サッカー部の一員だったのは覚えていたから、尾刈斗の名簿を辿って住所とか小学校とかを特定して、周囲の人に聞きこみ調査をしました。幼少期から頭が良くて、時折未来を知っているような言動を見せたそうです。これは間違いないでしょ」

「一つ疑問がある。お前はなぜそんな面倒なことをした？本人に直接訊けば良かっただろう」

「だって違ったとき困るじゃないですか。あの人頭おかしい人だって指さされますよ。尾刈斗なら前世とか転生とか言っても大丈夫なのかもしれないけど僕は尾刈斗出身じゃないし、社会人ですから。記事にあることないこと書かれますよ」

「多少回りくどく言ってみるとか他に方法はあったらうに。それじゃあ転生者だと確信を持ったあと、本人に確かめたわけだな」

「いいえ、結局一度も本人に確認はしていません。あの頃は忙しかったので。」

それに、彼も僕が転生者だと気づいていたのに敢えて口にしなかった。つまり僕とは極力関わりたくなかったんじゃないかと思ひまして。

それでも気になるのですしたら、どうします？今からでも会いに行きますか？」

「邪魔をしてこないのであれば放っておけ。今会っても混乱させるだけだろう」

「それもそうですね」

2人の会話は終わり、若い男は2人分の皿を洗い始める。全く家事をしてくれないことに文句を言いそうになるが、この部屋を追い出されたら住むあてがなくなることを考え思いとどまる。

洗い物を終えたあと、風呂も入らずに若い男は布団に寝転がる。この部屋には風呂もシャワーもないため仕方ないことなのかもしれないが。

「今日はもうすることないんで寝ます」

年老いた男からの返事は特にない。おやすみの一言くらいあってもいいのに、という言葉は再び心にしまい込み、壁にかけられたカレンダーに視線をやる。

「今日はハロウィン。死者の霊が現世にやってくるんだっけか」

もう二度と会えない誰かに思いを馳せながら、若い男は眠りにつく。



「おはよう」

「おはよう、幻斗。昨日はよく寝れた？また怖い夢見てない？」

「心配しなくても大丈夫だよ母さん。ぐっすり寝られたよ」

悪夢を見たことあるなんて、母さんに言ったことなかったはずだけど。母さんには全部お見通しだったみたい。

でも今日はほんとによく眠れたので、正直にそう答える。

「そう、それなら良かった。幻斗が昨日夢の中でお父さんと呼んでいるのが聞こえたから、また嫌な夢を見ちゃったのかと母さん勘違いしちゃった」

母さんの話を聞きながら、夢の内容を断片的にでも思い出そうとする。

「凄くいい夢だったよ。どんな夢だったかはほとんど覚えてないけど、凄く懐かしい夢だった。懐かしい人に会えたような、そんな感覚」

「お父さんが会いに来てくれたのかしらね」

登場人物紹介

紹介

《紫藤一家》

・紫藤幻斗
しとうげんと

本作の主人公。一時期サッカーを嫌いになっていたものの刃也のおかげで再びサッカーを始める。

神成FCでも落ちこぼれ気味だったが、ジュニアエンパイア戦でイリユージョンボウルを披露する。それが影山の目に止まってしまったのか、父親を交通事故で亡くしてしまう。

その後尾刈斗に進学し、DFやMFとして活躍する。

・紫藤涼子
しとうりょうこ

幻斗の母親。パートの掛け持ちで家計を支える。幻斗がサッカーをすることを応援している。

・紫藤柊斗
しとうしゅうと

幻斗の父親。交通事故で幻斗の身代わりとなって死んでしまう。

《尾刈斗中学》

・ 鉦なた 十三じゅうぞう

幻斗と同学年のG.K。ジェイソンのようにホッケーマスクを被り、「アンビリーバボー」など横文字を好んで使う。

文化祭で血塗れた鉦を振り回す準備をしていたかと思えば、当日脱走してカラオケに行ったりと自由気ままなやつ。

・ 三途渡さんず わたる

同学年のD.F。過去に霊体験をしたことがあり、生きている自信が持てないらしい。

幻斗と同じ日に入部したこともあり、サッカー部の中でも特に幻斗と仲良くしている1人。尾刈斗にしては比較的まともな方で、常に冷静に周囲を観察する。

・ 柳田やなぎだ しげる

一つ下のD.F。妖怪研究が趣味で、なんでも妖怪のせいにする妖怪ウォッチ時空の住人。

未登場。

・ 不乱拳ふらんけん

一つ上のD.F。生命の創造を研究しているが、そんなに頭は良くないらしい。

絶対的なデیفエンス力で皆に信頼されているが、フエイントに弱いのが玉に瑕。

・屍藤美しかばね、ふじみ

同学年のDF。自分を不死身だと信じているのだとか。

同級生のいじりから逃げて尾刈斗に入学した。サッカー部でもなかなか必殺技を覚えてられず、自分を卑下していた。

幻斗とは互いに共感しあえる仲であり、幻斗が必殺技の特訓に付き合うことも多い。

・靈幻道久れいげん、みちひさ

同学年のMF。体が固くキョンシーのように飛び回る。「アル」の語尾が特徴的。

時折厨二病的な一面を見ることがあるが、話し方とそれを除けばごくごくまとも。

語尾が特徴的でキャラの判別が楽だから台詞を言わせがち。

・木乃伊魔美きのい、まみ

同学年のMF。乾燥肌のため、全身に包帯を巻いているのだとか。

頭の回転が早く、必殺技をその場で応用して使うのが得意。

多呂斗がちやうどいい理由をあてがっただけで、包帯を巻いている理由はまた別にあ
るのかもしれない。

・八墓崇やつはか、たたる

同学年のMF。呪いや崇りに詳しい。丑の刻参りのように頭に蠟燭をつけている。

髪で顔が隠れているうえに無口で滅多に喋らないためとても不気味。

・幽谷博之
ゆうくくひろゆき

一つ下のF W。靈感が高く、有名選手の霊にコーチを受けているらしい。一つ目小僧のようなバンダナで目を隠してプレーする。原作キャプテン。

未登場。

・月村憲一
つきむらけんいち

一つ上のF W。月を見ると凶暴化してしまう狼人間体質。

満月が近づくと調子上がり、新月が近づくと調子下がる不思議な体質。満月を見て理性を失った状態になると、地木流以外には止められない。

みんなを盛り上げるリーダーシップを買われ、道化からキャプテンに選ばれる。

同学年の魔界とは特に親しく、いつも仲が良さそうに話している。

母子家庭なのだとか。

・武羅渡牙
ぶらどぎば

同学年のF W。日が落ちると強くなる体質。トマトジュースが好物。

太陽が沈むと身体能力が上昇する。月村のような代償もないが、そもそも中学生の試合が夜に組まれることはないため活躍のタイミングが少ない。

トマトジュースを優雅に飲んで貴族感を醸し出しているが、月村が凶暴化したときは

真つ先に逃げ出すほどの小心者。

・不死祀ふじまつる

一つ上のG K。痛みをほとんど感じないゾンビ体質。

信頼できる正G K。頑強な体もさることながら、正確無比なボールコントロールも魅力の一つである。

・人形幻ひとがたげん

同学年のF W。昔の記憶がなく、自分は改造人間だと主張する。

キャラ設定がコロコロ変わるため、ただの虚言癖だと幻斗は睨んでいる。

すぐに調子に乗ってしまう性格だが、シユートチェインを一発で成功させてしまうように、口だけでないセンスがある。

・円谷未知つぶらやみち

同学年のF W。U F Oを信じていて、毎晩夜空をチェックしている。

前世の高校の記憶がある幻斗を軽く凌駕する秀才。頭は良いのだが、全身銀タイトの仮装をするなどの奇行で女子からは敬遠されている。

・黒上呪くろがみのろい

同学年のF W。黒魔術に詳しく、試合前に相手チームを呪うとか。魔導師的なフードで顔を隠している。

黒魔術研究部、通称黒研の次期部長で、サッカー部への出席は少なめ。黒研の先輩である多呂斗とは仲が良い。根は真面目。

・魔界まかい崇雄たかお

一つ上のMF。自分は魔界の住人であると言い張り、お化けのような被り物を常に被っている。

根つからの厨二病で、被り物のことはみんなからいじられている。特に月村とは毎日のように軽口を交わす仲。

意外にもゲームメイク能力が高く、相手が絶妙に嫌がる位置に人を配置することができる。

・多呂斗たろと占せん

一つ上のDF。オリキャラ。

タロット占いが得意な黒研現部長。今いない場所の状況を占ったり、じゃんけんの手を予測したり、果ては人の心を読んだり(?)、設定がほとんど付け加えられていき、いつの間にかスパーパーエスパー少年になってしまった。

サッカー部員として主体的に動くことは多くないが、分析力や判断力に優れ、とても頼りになるDFである。

・道化みちばけ一糸いと

二つ上のMF。ペニーワイズが元ネタの赤髪白肌ピエロ男。

いつもはねっとりとした独特の話し方だが、先生の前ではちゃんとした話し方ができる真面目な人。元キャプテンで、个性的なメンバーを束ねるのに苦労していた。

幻斗と同じ年の部員の中には、道化にひっぱられてきて入部したという人も少なくな
い。

再登場するかは未定。

・筒井つづい悪夢あくむ

二つ上のMF。悪夢を見がちだったが、地木流に治療してもらったという。

ホラー映画が好きで、文化祭ではフレディの精巧な仮装をして周囲をビビらせた。

再登場するかは未定。

・堀田ほった騒霊そうれい

二つ上のFW。元ネタはポルターガイスト。最後の一文字にアクセントを置く独特の話し方。キャラが立つので喋らせやすい。

不規則に軌道を変えるシュート技を武器にする、トリッキーなプレーが得意なFW。文化祭の練習試合では染岡と即席シュートチェインを決め、FW同士友情を深めた。

再登場するかは未定。

・百谷鬼行
ももたに おにゆき

二つ上のD F。百鬼夜行をもじっただけ。

お化け屋敷が大好きで、文化祭のお化け屋敷を監修する。

恐らく再登場しません。

・冥門希望
くらかど のぞみ

二つ上のD F。元ネタは地獄の門。

文化祭にて、ロダン繋がりで考える人の仮装をするも、微動だにしなすぎて誰にも気づかれなれないという話を考えていたのですが、書き忘れていたので完全に空気になりました。

恐らく再登場しません。

・玉響真
たまゆら まこと

二つ上のM F。元ネタは玉響現象と心霊写真。名前だけだと一番気に入っているが、サッカーにどう活かすかが思いつかずベンチに。

写真部所属。

恐らく再登場しません。

・陰山時史
かげやま とししづみ

二つ上のD.F。元ネタは陰謀論。元ネタが元ネタのせいでイカれたキャラクターになつてしまった。

影山とは赤の他人。

恐らく再登場しません。

・じきる地木流はいと灰人

尾刈斗中サッカー部の監督で、ゴーストロックの使い手。

中卒催眠術留学という異次元の経歴を持っていて、催眠術師時代に影山に嵌められて影山の手下となる。この名前はなんと偽名。

自らの保身のため悪事に加担し続けていたが幻斗に暴かれ、反帝国に寝返ることを約束する。

・校長

尾刈斗中学の校長先生。登場した順でいうとかなり早い。

入学式では雉狩りの伝説など、どうでもいい話を長々と語る。尾刈斗の創設に影山が深く関わっているため、影山には頭が上がらないらしい。

今後いろいろと関わってくる予定なので紹介。

《雷門中学》

・ 円堂守

説明不要、原作主人公。

鉄塔に押しかけてきた幻斗と意気投合し、すぐに仲良くなる。一緒に雷門に行こうぜと約束していたが、幻斗の父の交通事故を受けて果たすことは出来なくなる。

入学式、駆けつけた幻斗や天馬達と協力してプロトコル・オメガに勝つが、円堂自身はその日のことを覚えていない。

中学入学時点で既にゴッドハンドを覚えており、文化祭の練習試合で改に進化させる。

・ 風丸一郎太

疾風ディフェンダーで円堂の幼馴染。

円堂と幻斗の鉄塔での特訓に時折混ざっていたが、あくまで陸上がしたいと言って2人のサッカー部への誘いを断っていた。

しかし幻斗が雷門に行けなくなり、1人で部活を立ち上げることになった円堂の姿を見かねたのか、陸上部に入らずサッカー部に入部した。

・ 半田真一

中途半田。実は雷門初期部員。

小学生の頃に何度か幻斗と戦ったことがある。

・染岡竜吾

豪炎寺とチームメイトになることはなかったが、敵対心を抱いているのは相変わらず。

・松野空介
マツクス

円堂が原作と違い必殺技を既に習得していたため、それを見て面白そうだと入部。幻斗が苦戦したイリユージュンボールをすぐに真似て習得するなど器用なやつ。

・影野仁

人数が多く活動的だったおかげか、原作よりも1年早く入部する。尾刈斗にやや興味あり。

・木野秋

幻斗とはプロトコル・オメガ戦で出会うが、そのときの記憶がないため、顔見知りなのについて出会ったか分からないという怖い状況になっている。

・奏ヶ原心音
かなでがはらこころね

幻斗と刃也の友達。小さい頃から聡明で、2人の良き話し相手となっていた。

神成FCではDFとして活躍し、雷門に進学してからは幼少期から習っていたヴァイ

オリンに専念している。

幻斗と刃也の秘密について少しだけ知りながらも、不干渉の立場をとっている。
好きな人がいるらしい。

《帝国学園》

・影山零治

諸悪の根源。

最高傑作である鬼道が幻斗に部分的だとしても敗北を喫したため、幻斗に目をつけ帝国へと誘う。幻斗の父の交通事故のあと、再び幻斗を誘うがやはり拒絶され、尾刈斗に幻斗を迎え入れるように指示を出した。

殺人・殺人未遂容疑が山ほどあることが幻斗によって明かされた。原作で殺した描写があるのは小野正隆（冬花のパパ）だけだが、他にも手を下していると考えるのも不自然ではない。

・野賀刃也のがしんや

幻斗の親友。軽く闇堕ちしていた幻斗を、再びサッカーの道に戻してくれた恩人。エリート一家の生まれで、転生者の幻斗より賢いやバイやつ。

神成FCではチームの頭脳と守備の要として活躍していた。幻斗の父の死の真相を

探るため、帝国学園に入学してスパイ活動をする。

幻斗が何かの秘密を抱えていることには気づいているため、いつか打ち明けてくれる日を待っている。

《明日山中学》

・くろがね だいすけ
鐵大輔

明日山中サッカー部のエースストライカー。

その高い実力を影山に警戒され、煙草を吸っていたという濡れ衣を着せられてしまう。

FF優勝という夢が潰えた苛立ちで、親友の拓矢に暴力を振るってしまう。そしてサッカー部も退部させられ、クラス中から避けられる毎日を送っていた。

事件の真相を知っているという幻斗と話をして、影山の存在を知る。

幻斗達に背中を押され、拓矢と仲直りをしようと決める。

再登場するかは未定。

・みずの たくや
水野拓矢

大輔の親友。共にFF優勝しようと約束していたが、煙草による出場停止と精神が不安定になっていた大輔の暴力による怪我で全て終わってしまった。ひぐらしのなく頃

にの被害者。

再登場するかは未定。

《前世》

・マモル

主人公幻斗の前世。円堂と名前が同じだという理由でイナズマイレブンを見てサッカーを始めるが、挫折してやめてしまう。

パソコン部にゆるく通いながら教室でゲームをする毎日を送っていた。歩きスマホでトラックに轢かれて死亡する。

・カケルとタクヤ

マモルの友人達。一人称が僕で、大人しめなのがカケル。一人称が俺でやや熱いところがあるのがタクヤ。今のところ2人を区別する必要はなし。

マモルがサッカーをやめたあととも友達になろうと努力していたが拒絶され、マモルの死に責任を感じてしまっている。

《謎の奴ら》

・謎の若い男

自らを転生者であると言い、原作の流れを知っている様子。

未来の知識を利用して投資で収入を上げ、サッカー少年の支援団体を作っているらしい。その団体の募金活動をしているとき、もう一人の転生者と出会ったという。

文化祭も仮装をして偵察に訪れたのだからか。

・謎の年老いた男

転生という概念を理解していて、若い男と同様に原作を知っているような口振りで話す。

傍観する少女編

30 新しい風

時は流れ、僕は中学2年生になった。

今年は、色んなことが起こる年だ。王者帝国の陥落から世宇子の登場、エイリア襲来にFFIの開催。そう、原作が始まる。

僕は強くなった、と思う。少なくとも神成FCにいた頃や、前世よりはかなり強くなってるはずだ。

僕の目標はただ一つ、影山を潰すこと。僕達尾刈斗が勝ち上がれたらそれでもいいけど、原作通り雷門が世宇子を倒してくれたっていい。

修也がいけない分厳しいかなと思っていたけど、みんな真面目に練習しているおかげで原作よりももっと強くなっているように見える。

壁山や栗松など新入生が入ってきて、より部が活発になったと円堂から聞いた。今のみんななら練習せずに部室でゲームみたいなことにはならないだろう。

今部員が10人だから、あと1人部員を集めたらちやんと練習試合をしようと言って

くれた。最後の部員として思いつくのは目金だが、帝国戦で不戦敗しなかったための数合わせなんて状況じゃなければ入ってくれそうな気がしない。新入生に声をかけて回れば誰か1人くらい入ってくれそうな気もするけど。

新入生といえ、我がが尾刈斗サッカー部も新しいメンバーが増えた。

妖怪博士の柳田やなぎだしげると、原作キャプテン幽谷博ゆうくひろゆき之だ。2人ともとても良い子で、一緒にいると自分がいい先輩であるように感じられる。神成FCは縦の繋がりがあんまり無かったし、前世はあれだったしで、後輩と接するという経験は意外と初めてかもしれない。

2人だけってのはちょっと少ないけど、それはおいおい集めていこう。

☆☆☆

「オレが最高学年ってなんだか実感湧かねえな」

「窓傍先輩達に教えて貰って頃がついこの間みたいだ。魔界の住人は時が進む速度も違うのか」

「お前中2じゃなくなったのにまだそんなこと言ってるのか」

「俺が魔界の住人なのは事実だからな」

月村先輩と魔界先輩は相も変わらずいつもの掛け合いをしている。やっぱり仲がいい。

「今日のミーティングって何なんですか？」

「去年もあつただろ、監督からの部の方針の説明みたいなもの」

そう言っているときちょうど監督が部室に入ってきた。

「皆さん集まってくれましたか？」

何人か別の部活に顔を出している人もいるが、幽谷と柳田さえいればいいのか満足そうに頷く。

「今から尾刈斗中サッカー部の方針について説明します。気になったことがあつたらなくても質問してください。そしてその上でどうしても相容れないと思つたならば、やめていただいで結構です」

去年も同じことを言つて話し始めていた気がする。

僕は原作知識のおかげでこの学校が催眠術を使っていることを知つていたけど、知らずにサッカーの強豪だと思つて入つたらインチキ集団だつたと幻滅するかもしれない。

サッカーの強豪だとしてもそのためだけに尾刈斗に入ろうとするやつなんて滅多に居ないと思うけど。

僕は尾刈斗に入るしか選択肢がなかった。だから催眠術でもなんでもサッカーができるならそれでいいと思った。

大切なのは妥協すること。

この学校の人達の多くは、自分の世界が存在している。普通なら分かり合えるはずがないけど、互いに尊重しあつて妥協しあつて仲良くしている。

なんかそれっぽいことを言っているけど、結局は言い訳に過ぎない。本当なら円堂達みたいに正々堂々と戦いたいけど、勝てないから催眠術なんかに頼っている。

勝つために手段選ばないなんてまさに影山じゃないかと思つてしまうことがあるけど、少なくともサッカーに催眠術を禁ずるルールはないのに対し、鉄骨落としては普通に犯罪だ。規模が違う。

考え事をしている間に、監督の催眠術についての説明が終わった。

「分かりました。郷に入れば郷に従えですね」

前から思っていたけど、幽谷つて見た目に反して凄い真面目なやつなのかもしれない。

「それから、もうひとつ大切な話があります。私達が今、成そうとして居る事です。今から話すことは他言無用、他の先生方にも言つてはいけません」

より真剣な口調で語り始めた監督を前に、幽谷と柳田は恐怖と好奇心の混ざった顔で次の言葉を待つ。

「私達は今、打倒帝国を掲げて戦つています——」

☆☆☆

「幽谷つてさ、やっぱり色々視えるの？」

前世だったら靈感あるとか言つてる人は全員イカサマだと思つていたけど、この世界じゃそんなことは無さそうだ。

少なくとも変なバンダナで目を隠してるのに普通に生活している時点で、幽谷の目が普通じゃないのは間違いない。

「はい。普段はこれでセーブしてるんですけど、外したらちゃんと視えますよ。先輩の会いたい人についても視ましようか？」

僕の心も視えてるのかなって思つたけど、今はバンダナしてるからそんなことないは

ずだ。

そういう特殊な目をしているせいで、霊能者をさせられることも多かつたのかもしれない。

「え、いいの？ 視るのに代償とかあるなら全然遠慮するけど」

「大丈夫です。視えすぎて視界がうるさくなるくらいなんです。先輩が会いたい人つて先輩とどういう関係なんですか？」

「会いたいのは、僕の父だ」

そう、僕が幽谷に話しかけたのは、僕のせいで死んでしまった父さんと話が出来ないかと思つたからだ。

「先輩、目を閉じていてください」

言われた通りに目を閉じる。幽谷が少し動く音が聞こえる。バンダナを外しているのだろうか。

「先輩と似た波長の霊を探します」

波長つていうものの意味がよく分からないが、父さんの霊を探しているのだろう。

「うー、見つかりません。先輩の近くにいらつしやるかと思っただんですけど、全然関係ない霊でいっぱい」

幽霊っていっぱいいるんだ。今まで死んだ人類の総数を考えるとそりやそうだった話だけ。

「もう目を開けていいですよ。すいません、頼りになれなくて」

目を開けると、再びバンダナを巻き直した幽谷に謝られた。

「いやそんな謝ることじゃないって」

「現世にとどまらず、成仏してしまったのかもしれません」

「それならそれでいいよ。っていうかそれがいいよ」

幽霊の満員電車に揉まれていくくらいなら、成仏して天国にいてくれたほうが嬉しい。

もっとしつかり父さんの霊を探そうと思えば、事故現場とか他に父さんがいそうなところに幽谷を連れ回すって手もあるけど、そこまで後輩に迷惑もかけられないし。

波長つてのは魂の波長を意味していて、僕の魂は前世のマモル由来だから、父さんと全然似てなかったのかもしれないという仮説が思いついたのはその日の夜。

なかなかありそうなことだと思っただけ、これを幽谷に説明するのは難しそうだ。

父さんと話をするのは諦めようか。僕の魂が紫藤幻斗のものではないってことは、あんまり父さんには聞かせたくない話だし。

★★★

尾刈斗中学、校長室。

生徒が入ることなど滅多にないこの部屋に、わざわざ2人きりで話がしたいと言って彼はやってきた。

「それで、どうしても私の耳に入れたい話とはなんだい？」

校長はいつものように、優しい顔で尋ねる。

「サッカー部のことです。サッカー部は今、影山を倒そうと画策しています」

「影山というのはサッカー協会の副会長さんのことか？それがサッカー部とどう関わりがあるんだ」

「この学校が影山とズブズブなことは知っています」

好々爺の演技は不要と気づいたのか、校長は優しい微笑みを解く。

「僕に提案があります」

「それはつまり、私と交渉しようということかね？」

「僕がサッカー部の企ての証拠を持ってきたら、その見返りに僕を帝国学園に入れてください」

31 ゴーストロック

中学2年生に進級したということは、クラスも変わるわけで。今年は三途と同じクラスになれた。

そういえば春休み明けのテストも返された。さすがに僕には簡単すぎたからほぼ満点だった。完全に満点でないことを恥ずべきなのかもしれないけど。

「さっすがー」という視線を頂戴して得意な気分になるのは、本当に努力した人達に失礼かもしれない。そう思っただけで冷静に振る舞うと、それもまた気どつてるように見える。難しいね。

火曜日が変わった心理学の授業を受け終えて、いつも通りサッカー部室へ向かう。そのついでに「ちよつと忙しいから遅れます。昨日に引き続きゴーストロックの練習を」と監督から伝言を貰った。

原作開始が近づいてるといいうのに、あまりにも普通の日常。本当にこんなのでいいのだろうか。

☆☆☆

「幽谷、柳田。今日もゴーストロックの練習だつてさ」

「はい！」

二人ともとても元気だ。後輩が元気でおじさん嬉しいよ。前世合わせたら実際おじさんだからシャレにならないな。

僕と三途、八墓の3人で体の動きをみっちり教える。手の動きひとつ変わっただけでも、ゴーストロックは成立しない。見た目に反してもものすごく繊細な必殺タクティクスなのだ。

どれだけ実力差があろうと、相手が対策できなければ一方的に動きを封じることができ。最強の必殺タクティクスだ。

エイリア編におけるネットパーの「神破り」を鑑みるに、大きすぎる実力差があれば打ち破られるのかもしれないが。うーん、よく分からない。そもそもヘブンズタイムってどういう原理なんだ？

「先輩ってどう思ってますか？」

突然幽谷に質問される。もうちよつと脈絡つてもものが欲しいけど、なんとなく幽谷の

意図は伝わった。

「どう思うって?」

なんとなく伝わりはしたけど、一応問い返す。

「監督の作戦に納得しているのかってことですよ」

そう幽谷が訊くということは、幽谷から見れば納得していないように見えるってことだ。これはなかなか手痛い質問だ。

実際、僕はこれに対して、とても乗り気かというところというわけではない。

「でも、勝つために必要だから。僕はどうしても影山に勝たなきゃいけない。そのための最善の作戦があるなら僕はそれに頼る」

「勝たなきゃいけない理由って復讐ですか?」

「なんで?」

このタイミングでのなんで?は肯定だ。そんなことは分かっているけど、なんでみんなそんな簡単に僕の心を読んでしまうのだろうというのが気になる。

この間、父さんと合わせてくれと幽谷にお願いしたことから推測したのかな。ほんと推理力どうなってんだ。

「大切なものの順番は間違えないでくださいね」

「分かってる」

後輩に説教されちゃった。大丈夫、間違えるつもりはない。

「皆さん練習は順調ですか？」

遅れて監督がやってくる。授業の準備やらいろいろと、監督はいつも忙しそうだ。

「監督が来ないとゴーストロックの練習は始まりませんよ」

三途の言う通り、この必殺タクティクスは監督ありきで成り立っている。監督の催眠術を真似して、というのもやってみただけ、やっぱり監督じゃないとできなかつた。

「じゃあ早速練習を始めますか。——お前ら何ちんたらしてんだ！俺がいないと何もできない能無しは要らねえって言ってんだろ」

監督の突然のハイドモードへの豹変に驚くが、監督はハイドモードじゃないと催眠術をかけられない呪いにかかっているから仕方ない。このモードのときの言葉は本心じゃないってジキルモードの監督が言ってるし。

あれ、これ殴ったあとと優しくするDV男と一緒にじゃね？

「マレマレトマ——柳田！手の角度が違う。やり直しだ！」

「はい、すいません……」

今日は柳田の調子が悪いのか、ミスを連発して監督に叱られている。

「監督、一旦練習中断しましょう。このまま続けても良くなる気がしません」
「——それもそうですね。ゴーストロックの練習は今日はここまでとします」

またすぐにジキルモード戻った監督は、練習の終了を告げる。

終わろうと言ったらちゃんと終わってくれるのはありがたいけど、ハイドモードの監督はちよつとスパルタ過ぎるんだよね。

スパルタが悪いことではないけど、度をすぎたスパルタは心を壊してしまっただけだ。というか、ただでさえ新入部員が少ないのに、これ以上減ってしまうと困る。

「柳田、気にしないで大丈夫だよ」

一応先輩としてフォローはかけておく。この一言にどれほどの意味があるのかは分からないけど、僕は柳田の立場と変わってあげることもできないから。

「そうそう、紫藤の言う通りアル。理想は全員がゴーストロックを発動できることだけど、別にできない人がいても問題ないって監督も言ってたアルヨ」

様子を見ていた霊幻がフォローを重ねてくれる。霊幻は体が固くてゴーストロックを上手く扱えなかったが、それでも今尾刈斗イレブンの一員として活躍してくれている。

「はい、ちよつと僕部室で休憩してきますね」

マレマレトマレを聞き続けていると本当に頭がおかしくなりかねないから、休憩は大切。いつてらっしやいと声をかけると柳田は部屋に帰っていった。

「大丈夫かな……」

霊幻だとすると語尾が普通だから、ぽつりとそう零したのは僕だったんだろう。そう思うくらい無意識に、柳田を心配する言葉が出ていた。

大丈夫じゃなかった。それに気づくのはまだまだ先のことだった。



場所は変わって、雷門中学のグラウンド。

「疾風ダツシユ！」

「風丸さんスゴいッス！」「さすがでやんす」

風丸が披露した必殺技に、興奮を隠せない1年生達。

「俺だって、ジグザグスパーク」

「半田さんもすごいでやんすよ」

風丸みたいにチャホヤされたいという考えは見透かされていたのか、軽くあしらわれる半田。何とも不遇である。

「お前らも、必殺技の感覚を掴めばすぐにできるようになると思うぞ。まずはクイックドロウから……」

そう言いかけて風丸は一旦言葉を止める。壁山の巨体を見上げて、

「あー、壁山は無理かもしれないな」

「そんなツス」

「まあ、必殺技を覚える方法はひとつじゃないさ。壁山に合いそうな必殺技について紫藤にいつかきいておかないとな」

必殺技を覚えるためには簡単な必殺技から入ることが重要であるが、人によって向き不向きは存在する。まずは自分にあつた必殺技を探さなければならぬのだ。

「スーパリアルマジロなんかいいんじゃないかと思うわ。小学校の頃対戦したチームの大柄な選手が使ってた技よ。探せば映像なんかもあるんじゃないかと思うけど」

「あ、ありがとうツス。今度探してみるツス」

突然の助言に感謝を伝える壁山。

「そういえば壁山達は会ったことなかったか。奏ヶ原はヴァイオリンが得意なんだけど、サツカーもできるんだ。本当にすごい人だぞ」

助言の主、奏ヶ原心音について半田が説明する。半田と心音は昔からそれほど仲が良かったわけではないが、尾刈斗祭以降サツカー部と心音は関わる機会が多い。

「買い被りすぎよ。サツカーはもうやめたから、そんなにできないわ」

そう言いながらも満更でもない様子。

「そういえば最近幻斗と一緒に練習とかしてるの？」

心音がグラウンドに降りてきたのは、これが聞きたかったからである。月に数回のペースで雷門サツカー部に遊びに来ていた幻斗の姿が見えなくなっていたことを、心音は気にしていたのだ。

「いいや、全然。最近尾刈斗の方でいろいろあって、来てる暇がないんだってさ」

「いろいろねえ」

いろいろな思い当たる節があるのかなのか、心音はしばらく考え込む。

どれだけ秘密を抱え込めば気が済むのかしらと心の中で呆れつつ、午後がフリーな日はないかとカレンダーを脳内で検索する。

「今度、私の方から尾刈斗に遊びに行こうかな」

32 転生日記と少女の奮闘

△月×日

今日からこの日記帳に日記をつけようと思う。

この日記帳は誰にも見せてはならない。墓場まで持つていく秘密つてやつ。

私には前世の記憶がある。そして前世の最後の記憶から考えるに、ここはイナズマイレブンの世界だ。

△月■日

お母さんに聞いたところ、この辺りで一番難しい中学校は帝国学園と言うらしい。やっぱりイナズマイレブンの世界だった。

無印原作は確か2002年だから、計算すると私は推しと同級生になれるみたい。

ワクワクが止まらない。

○月☆日

せっかくだしサッカーを始めてみよう。

明日お母さんに近所のサッカークラブに入れてくれるように頼むことにする。

原作キャラがいたりしないかな。

○月×日

原作キヤラはいなかったけど、面白そうな人達が沢山いた。前世基準で奇抜な苗字の人もたくさんいて（私を含む）、イナズマイレブンだなあと思って思った。

○月●日

円堂守に会いに鉄塔へ行こうかと自転車漕ぎかけたけどやっぱりやめた。

変なバタフライエフェクトが起きてしまったら困る。原作を間近で見ることができたら私はそれだけで十分、自ら参加しようとは思わない。

×月□日

初めて必殺技を覚えた。すごく強いデیفエンス技。

意外と簡単に覚えられたから、神様が転生ボーナスを与えてくれるのかもしれない。他の転生者がいないと分からないけど。

☆月○日

転生者って本当にこの世界に私だけなのだろうか。勝手に私しかいないと思い込んでいたけど、神様がそんなこと言ったわけじゃない。

もしかして紫藤幻斗って転生者？

△月★日

真つ黒だった。そういう言い方が正しいのかは分からないけど。間違いなく転生者だと思ふ。

果たして私の味方かどうか。影山やエイリアなどにつく理由が考えられないから、ひとまず味方だと考えていいのかな。

私と違って原作に介入する気満々っぽいけど、私に文句を言う筋合いなんてないし。

○月□日

彼はやる気みたい。影山とやり合うつもりでいる。

お父さんの事故のことを考えると憎んでしまう気持ちも分かるけど。それでまた周りに危険を及ぼしたらどうするつもり？

でも、影山の存在を知っていながら何もしなかった私はただ黙って見届けるほかないのかな。

■月●日

どうしよう。すごく悩んでいる。私がなすべきことは何か。

■月☆日

私はこれまで、推しの姿を近くで見て、原作のあの名シーンを生で目に焼きつけることが出来たらそれで十分だと思っていた。

でも、私もそろそろ動かないといけなのかもしれない。

同郷の彼を救うために。

★★★

夜。下校時刻の6時はとくに過ぎていく。遅くまで仕事をしていた先生達も帰り、職員室からも明かりが消えた。

真つ暗なサッカー部室で、懐中電灯を取り出す男が1人。

ロッカーと壁の隙間に手を入れ、中から隠しカメラを取り出す。

部室内のようすがバツチリ撮れていたことを確認し、メモリを交換する。

その次に机の下に仕掛けた盗聴器を外そうと手を伸ばし――

「何をされているんですか？」

もう誰もいないはずの学校で突然声をかけられて驚いた男は、咄嗟に懐中電灯を消す。

「今更消したつて無駄ですよ。どうもこんばんは、私は奏ヶ原心音です」

軽く自己紹介をしながら、心音は持つてきた自分の懐中電灯で男の顔を照らす。

「あなたに会いたくて校門前で待つていたのにいつまでたつても現れないので、私から会いに来ました。魔女姿お似合いですよ、多呂斗さん」

その男——多呂斗占は何も言わない。

「喋つたらあの電話のことがバレるとでも思つていらっしゃるんですか？」

黙秘は無意味だと悟つた多呂斗は口を開く。

「なんだ、気づいていたんですか」

「私は耳が良いので。それよりも、半年前の尾刈斗祭の日、グラウンドに来たにもかかわらず何もせずには帰つたあなたの行動が不可解すぎましたから」

「ああ、それですか。僕は預言者キャラで通つてますから、部活のみんなは大抵意味深に解釈してくれるんですが。あなたにはバレますね」

「幻斗からは心が読める人だと紹介されましたが、やっぱりただのキャラだったんですね。監視カメラの映像から人の行動を読み当てて預言者気取りですか？」

多呂斗は少し不満げに反論する。

「確かに、監視カメラや盗聴器で情報を収集していたことは認めます。ですが、心が読めるというのは事実ですよ。あなたの心も読んでみましょうか？」

そんなことができるならやってみるといふ顔の心音をじっと見つめて、多呂斗は語り始める。

「あなたには誰にも言えない秘密がある。そして、その秘密の共有者たりうる人物を知っているものの、その人物に頼らず一人で問題を解決しようとしている。違いますか？」

「全然違うわ」

心音の即答に、おかしいですね……と首を傾げる多呂斗。

「楽しいおしゃべりも終わったところですし、そろそろ僕は帰っていいですか？ 下校時刻も過ぎてしまっているのです」

そう言いながらも、多呂斗は帰る姿勢を見せない。心音が返してくれないことなど分かっているのだろう。

「まさか。あなたからは聞きたいことがたくさんあるから」

「聞きたいこととは？」

おおよそ分かっていながら多呂斗はとぼけて尋ねる。

「まずはあなたと影山のご関係から」

「少年サッカー協会の副会長さんと僕がどのような関係があるというのですか？赤の他人ですよ」

関係を否定したその発言は、逆説的に多呂斗が黒であることを示していた。少年サッカー協会副会長の名前なんて、普通の中学生は知っていないはずがない。

漢字は違うが、陰山という男が過去に尾刈斗サッカー部にいたということも心音は調べていた。本当に多呂斗と影山が赤の他人であるならば、かげやまと聞いて先に思いつくのはそちらではないのか。

追及したいことは山ほどあったが、どれほど問い詰めても多呂斗が真実を吐くことはないだろうと心音は感じていた。

監視カメラと盗聴器という明らかに怪しいアイテムの設置を目撃できたので、それについて幻斗に報告して、あとは幻斗と監督さんに対処を任せるべき。心音はそう結論づけた。

「僕の口が固そうなので、とりあえずカメラと盗聴器を監督にでも報告しようと考えて

いるところですか?」

「はい、そのつもりです」

多呂斗に考えを見事に言い当てられたが、心音はそれほど驚きもしなかった。推理のみで辿り着ける程度であったし、仮に心を読まれていたとしても自身の絶対有利な状況は覆らない。

「その報告は一旦やめてもらえませんか?」

「それはお願いですか?」

今更多呂斗に頼まれても、報告をやめるつもりなど心音には全くなかった。

「いいえ、交渉です」

そう言つて多呂斗は少し言葉を区切つた。

「僕は、————を知っています」

時に、情報というものはたつた一つでも状況を逆転させうる。心音はそれを実感した。

33 尾刈斗が来た！

「雷門は、間違いなく全国レベルのチームです」

今僕がいるのは雷門中の生徒会室。

豪炎寺が雷門にいない以上、帝国は雷門に目をつけることがない。つまり雷門はFFに出場できない。

さすがにそれは困るということで、雷門中の生徒会長雷門夏未に直談判しに来たのだ。

「ですが、雷門サッカー部は試合に必要な11人すら揃っていないのですよ？」

「その点は問題ありません。ちょうど今日、11人目の部員が入ったと円堂から聞いています」

部員が揃っていないければさすがに話にならないので、誰でもいいから11人揃えておいてと円堂に頼んでいた。そしたら原作通りというか、目金なぜか入ってくれたらしい。あまり戦力にはならないかもしれないけど、いないよりはマシ。

「今週末の日曜日、僕達尾刈斗サッカー部と雷門サッカー部で練習試合を行います」

「では、その試合で雷門中サッカー部が——」

「雷門の勝利をF F参加の条件とするならば、僕達は棄権します。尾刈斗はこう見えても強豪ですから」

夏末の提案は先んじて拒否する。雷門が勝てばF Fに出場させると言質を取り、帝国みたく棄権しようかとも考えたけど、それはやめた。まるで夏末を騙すみたいになるし、僕達はみんな雷門と本気で戦いたかったからだ。

「僕達は本気で勝つための試合をします。そして夏末さんは、その試合を見て判断してください。サッカー部をF Fに出場させるべきか否かを」

試合終了の笛がなるまで勝敗を決めるため死力を尽くして戦う、そんな試合がしたかったのだ。

そしてその試合を見た夏末は円堂に一目惚れしてくれよう。多分。このツンデレヒロインさえ味方になれば、雷門サッカー部は安泰のはず。

尾刈斗が、原作での帝国学園の代役を務める。言うなれば、尾刈斗が来た！大作戦だ。

☆☆☆

「アチャー！クイツクドロウ」

「タイムिंगを測ってつと」

少林寺のクイツクドロウを横に跳んで避けて、八墓にパス。しつかりみんなが使えようになつてゐるのは感心だけど、最近この技が囁ませ化してゐるような気がするな。

「行かせません！」

「無駄だよ……呪い」

八墓を止めようとやつてきた穴戸を必殺技で封じ、更に前線にフリーでいた幽谷へとボールを繋げる。

これは大チャンスだと思いきや、さつきまで中盤にいたはずの風丸が幽谷の近くまで一瞬で駆け寄つていた。さすが風丸。

しかしうちの新入りも負けてはいない。後ろに目でもあるのかという反応で風丸を躲し、そのままシユート体勢に入る。

「喰らえつ！ファントムシユート」

分裂し紫のオーラを纏つたボールが円堂に襲いかかる。

「来い！真ゴツドハンド!!」

で、円堂があつきり止める。

さつきからこれの繰り返しだ。フィールドプレーヤーの実力はこっちの方が上のは

ずなのに、どれだけシュートを撃っても円堂一人に阻まれる。

とはいえさつきからシュートを連発しているから、さすがの円堂でも疲労が溜まっているだろう。

多呂斗先輩に不亂先輩、そしてつい先日正キーパーの座を勝ち取った鉈が守っているゴールを突破する術がなければ、ジリ貧で雷門の負けだ。

「怨霊」

「疾風ダツシュー! マックス!」

風丸はその素早い身のこなしで魔界先輩の怨霊を回避し、マックスへとパスを繋げる。

「行くよ。イリユージョンボール」

3つに分裂したボールの対処は当然僕の役目だ。1つ目、これは幻影。2つ目、これも幻影。じゃあ3つ目! も幻影……?」

「パクられた!」

3つ全部偽物、トリックイリユージョンボールだ。本物のボールは影野を経由して既に半田の元へ。

「その君！人の必殺技を勝手にパクリ扱いするのはいけませんね」
「ごめん……」

目金に説教される。よく考えたら、マックスの前でこれを使ったことは無かった。僕に思いつく程度のことは、誰だつて思いつくことができるということだ。ちよつと僕つて天才かもしれないと自惚れてました。

ていうかなんで急に目金？

「ふふん、この3つ全てが幻影であるトリックイリュージョンボールの考案者は、何を隠そうこの僕、目金欠流なのですよ！人呼んで、雷門の知将です」

「う、うん」

疑問に思っていたことをすぐに解説してくれる目金。どうやら僕のネーミングセンスは目金と一致していたっぽい。

つてそんなどうでもいいことを考えてる暇は無くって。守備と攻撃のどちらでも厄介になるマックスをマークしながら、周囲を見回す。

ジグザグスパークで柳田を抜いた半田が、すぐさま転がり始める。間違いない、ローリングキックだ。歪む空間は間に合っていないらしい。まずいな。

「ローリングキック!!」

その軌道上で待つのは染岡。シユートチェインだ。

空中でチェインされると歪む空間も効かないし、染岡のキック力を考えるとシュートブロックを挟んでもキラーブレードで止められるか怪しい。

そんな染岡に近づいたのが多呂斗先輩。

「失礼しますね、ザ・タワー」

「くそつ、地面が」

染岡の立つ地面ごと必殺技で持ち上げ、無理やりシュートの軌道から外してチェインを阻止した。ザ・タワーにそんな使い方があったとは……

シュートチェインを阻止しながらシュートブロックにもなり、勢いの弱まった半田のローリングキックは鈍のキラーブレードで簡単に止められた。

「怪我はないが？」

「ああ、助かったぜ」

ザ・タワーが破壊されたことで塔の頂上から落とされてしまったが、不亂先輩がしっかりキャッチしてくれたおかげで怪我なく済んだようだ。

それにしても必殺技で直接相手の位置を動かすというのは考えたことが無かったな。僕の技は物理的実体を持たないのばかりだから活用できそうにないけど。

尾刈斗ボールで試合再開、鈍がゴールキックをしようをしたとき、

「皆さん、今日の試合はここまでです」

監督が手を叩いて注目を集めながらフィールドに入ってきた。

「え、ここまで?」

「決着を付けさせてくれねえのかよ」

試合も盛り上がっていたところで、両チームから不満の声上がるが、監督は「この試合は棄権します」と勝手に宣言する。

監督の意図は分かるけど、僕だって勝負を決めるつもりで来ていたからこんな終わり方は不完全燃焼だ。

「強豪校には強豪校なりの事情があるのでしよう。あまり不服を言うようですと品位を疑われましてよ」

夏末も状況を察したのか、監督を庇うように雷門のみんなを宥める。

「この勝負はしばらく持ち越し。フットボールフロンティアで決着をつけるということですよしくつて?」

「え?それって……」

夏末の言葉の意味するところを理解した円堂は、次第に興奮して顔をほころばせる。

「サッカー部のフットボールフロンティア出場を認めます」

その言葉に喜ぶ雷門一同。僕だって嬉しい。もし夏末が認めてくれなかったら催眠

術でも使おうかとまでちよつと考えていたから、そんな大罪を犯さずに済んでホツとしている気持ちもある。

「ありがとうな、夏未！」

そう言つてニカツと笑う円堂。その無邪気な笑顔が無意識に女の子を落とすしちゃうんだぞ。

「別にあなた達のために決めたわけじゃないわ。サッカーの強豪である尾刈斗の方々がわざわざ頼みに来てくださったから、無下に出来なかつたというだけよ」

「僕達からも感謝します。雷門のフットボールフロンティア出場を認めていただいて」

なんとか雷門周辺は原作通りに進みそうだ。もうどうしようもないくらいに違つてる気がするけど。

☆☆☆

「そういえば、監督はなんで試合を中断させたんだ？」

みんな仲良く歩いて尾刈斗のグラウンドまで帰ってきたあと、魔界先輩が疑問を口に出した。

当の監督は校長先生に呼ばれてどこかに行っていた。

「それほんとなんでなんすかね」

「急にモチベーションがフライアウェイした的な？」

人形や鈍も状況をよく分かってなかったらしい。他にも同じように不思議に思っている人は多くいるように見える。

「お前から観察力が足りねえな。気づいてたやつ手を挙げろ」

月村先輩に言われて、僕や三途、木乃伊や幽谷が手を挙げる。

「桜の木の後ろ、ですよね」

「さすが幽谷、正解だ」

後輩が優秀で嬉しいよ。幽谷の場合は第六感的なやつで分かったのかもしれないけど。

「どういうことだ？」

「桜の木の後ろにいたんだよ。オレ達を偵察してるやつが。そんなもん被ってるから視界が狭くなってるんだぞ魔界」

「だーかーらー。これは俺の体の一部で……」

「多分帝国でしようね。雷門が脅威として認識されているとはとても思えないので、僕達が帝国から警戒されていると考えるのが自然でしようか」

いつもの馬鹿みたいな掛け合いは置いておいて、桜の木の後ろの男の正体について考えを共有する。

「これ以上手札を晒すのはまずいと監督は判断したんだろうね」

「三途君の言う通りです。皆さんの察しが良くて助かります」

いつの間にかやら校長先生との話を終わらせていた監督が、意図を説明する。といつても、僕達の予想と特に違いは無く、僕達が熱くなつて切り札を迂闊に偵察隊に見せてしまふことを危惧していたらしい。

それを聞いてみんな納得してくれたようだ。

「円堂君達にも、後で申し訳なかつたと伝えてください」

「はい。今度会つたときに」

「それと、帝国について。どうやら尾刈斗のことを完全に敵として認識したようです」
いつか来るとわかつていた帝国との全面対決。それが間近に迫っているらしい。

「今度帝国と練習試合があります。帝国に負ければ、尾刈斗サッカー部は廃部。校長先

生曰くそれは決定事項だそうです」

帝国と全面対決するということは、尾刈斗中学という学校そのものを敵に回すことになる。茨の道を旅すると決めたのは僕だけど、いざ直面すると怖いなあ。



「これで僕は帝国に行けるんですね？」

彼の交渉だと、校長に尾刈斗の反逆の証拠を突き出し、その見返りとして帝国に入学させてもらうという話だった。そして彼は約束したとおり証拠の映像を校長に渡した。

「いいや、まだ条件がある。尾刈斗対帝国の結果次第だ。帝国に完璧な勝利をもたらした暁には帝国に受け入れようと総帥はおっしゃっていた」

「それは良かったです。尾刈斗が帝国に勝てるはずなどありません」

彼は嬉しそうに顔をほころばせる。

帝国に入ること、それも帝国の裏の顔を知った上で、は彼にとってそれほど大切なことなのか。一体どうしてかと動機を校長が尋ねると、

「僕は、帝国に行かなきゃいけないんです」

彼は悲痛そうに言葉を零した。

——彼が思い浮かべるのは、彼が帝国に行くことを期待していた父と母の姿。

『お前なら帝国に入学できると信じていたのに』

『あなたを帝国に行かせるために私がどれだけお金と時間を使ったと思ってるの』

2人の憎悪のこもった声が頭の中に響く。

(あれから家庭は崩壊した。仲の良かった頃の家族に戻るためには、僕は帝国に行かないといけないんだ)

34 帝国が来た！

「ついにこの日が来ました。私達がこの1年間打倒を掲げて練習してきた相手、帝国です。この日のためにいろいろ準備してきました」

みんなが強く頷く。今日までの時間を振り返ると、帝国を恐れる理由などどこにもない。柳田なんかはまだ自信がなく戸惑っているようだけど。

「負けると、尾刈斗サッカー部は廃部です。今までの全てが無駄になります」

監督の言うとおり、僕達はなにがなんでも負けるわけにはいかない。

「最低でも引き分け。そのための策は十分練ったはずです」

「ああ、やってやろうぜ。みんな円陣だ！」

月村先輩の狼の一声で、尾刈斗サッカー部のメンバー全員が円になって集まる。普段は円陣なんて組まないけど、今日は僕も気合いを入れるために組みたい気分だ。

「廃部になんてさせねえ！尾刈斗！」

「ファイト！」「ファイア！」

「オーー!」 「うがー!」

「オー………?」

しっかり決めてなかったせいであちよつとグダグダ。だけどこれでいい。

不穏な何かの到来を暗示するかのような急な曇天も、僕達は気にならない。この辺りじゃよくあることだし。

ガタゴトと戦車のような帝国バスが進んでくる音が聞こえてくる。

尾刈斗への道は舗道が十分でないため、通常の車幅の乗用車なら問題なく通ることができるが、バスのように大きい車の場合少しガタガタしてしまうのだ。特に今日はいつにも増して土がでこぼこしている。まるで誰かがわざと掘り起こしたように。

そう、僕達は今日のためにいろいろな準備をしてきた。なにがなんでも負けるわけにはいかないのだ。

☆☆☆

吹奏楽部が練習する不気味な短調の音楽の横を通り過ぎて、帝国イレブンを乗せたバ

スがグラウンドにやってくる。

ドライアイスか何か分からない謎の煙を噴出しながら、バスの扉が開く。サッカーボールをドリブルする謎の少年達と一緒に黒いカーペットが広がっていく。

刃也によると、この謎の少年達は帝国の二軍以下の選手らしい。去年はずっとそのドリブル役ばかりだったと零していた。ちなみにその刃也は今日は来ていない。僕達が共犯関係にあることは知られていなくても、過去のチームメイトである僕達と一緒にさせるべきじゃないと考えたのだろう。

「ここが尾刈斗中か……なんだか気味が悪いな」

「試合をすると呪われるという噂で有名だからな」

「ひえー、恐ろしい」

少しでも帝国に士気を下げられないかと不気味な演出を準備してきたのはこつちだけど、帝国のやつらに言われたら僕としてもツツコミたくなる。

（試合に負けると校舎を破壊されるほうがよっぽど恐ろしいだろ！）

「ていうか鬼道サン、なんでこんなところまで俺達が来ないとダメだったんすか？道もガタガタでバスは揺れるし、気分最悪なんすけど」

「成神、口の利き方には気をつけろ」

「ふつ、構わん。総帥は尾刈斗を徹底的に潰すおつもりだ」

帝国は本気つてことか…なんて思っている間に帝国バスの屋上が開き、高そうな椅子とともに影山が現れた。

影山零治。僕の父さんを殺した全ての元凶。正直今すぐフロントムシユートを蹴りこみたいくらい憎いけどぐつと堪える。

「お前が尾刈斗のキャプテンか」

「ああ」

鬼道に指をさされた月村先輩が少し警戒しながら答える。

「ウォーミングアップがしたい。少しグラウンドを貸してくれないか」

「好きに使ってくれ」

「なんか感じ悪いな。年上相手にお前呼びとか」

「だけど魔界、去年も戦ったから覚えてるだろう。あいつのサッカーの実力はオレより遥かに上だ。サッカー選手として負けている以上、何を言っても負け犬の遠吠えだと言われるぞ」

「お前の場合、ただの狼の遠吠えじゃねえか」

月村先輩と魔界先輩がいつもの漫才をしている間、帝国イレブンは各々ウォーミングアップを始めている。

気色悪いくらいに体から離れないリフティングだったり、消えたかと思うほどの高速移動だったり、それらを見せつけて戦意を削ごうつてのが帝国のやり方なんだろう。

「負けないうがー!」

「パフォーマンス用の動き……あまり実用的ではない」

尾刈斗には特に効果は無かったっぽいけど。

寺門の蹴ったボールが辺見のオーバーヘッドで鬼道に繋がり、ダイレクトでシュートする。多分下手な必殺技より威力があるぞこれ。

シュートの先にいたのは我ら尾刈斗のキーパー、鉈。しかし突然のシュートに、歪む空間はもちろんキラーブレードを発動させる時間もない。

「ウォーミングアップは許しましたが……帝国では人にボールをぶつけることもウォーミングアップと言うんですか?」

そのシュートを止めたのは多呂斗先輩。しつかりシュートを空中でトラップして、嫌味を込めた言葉と一緒に返す。

「少し足元が狂っただけだ」

そうやって不敵に笑う鬼道。鬼道には鬼道なりの事情があることを僕は知っているけど、それでも今は嫌な奴に見える。

☆☆☆

尾刈斗中学

———月村———

———魔界———木乃伊———

———八墓——————靈幻———

———三途——————紫藤———

———不乱———多呂斗———屍———

——————鉦——————

帝国学園

———寺門——————佐久間———

———咲山——————洞面———

——————鬼道——————

―成神―辺見―五条―
―大野―万丈―
―源田―

僕達の目的は負けないことだから、F Wは月村先輩一人に任せてかなりデیفエンスに厚めの配置にしている。幽谷は優秀なF Wなんだけど、今日はベンチで待機していてもらう。

対する帝国はガチガチのガチメンツ。僕達を本気で潰す気らしいから仕方ないね。

キックオフは尾刈斗から。月村先輩から魔界先輩にパスが渡り、八墓三途を通って多呂斗先輩にボールが渡る。

一旦G Kの鉈まで下がったボールは屍に渡り、再び多呂斗先輩のもとに。

キングオブゴールキーパーと呼ばれる源田から点を奪って帝国に勝つというのはかなり難しい。でも、負けないというだけならそう不可能ではない。

卑怯だと言われても仕方がない。負けなかったためのもっとも勝算の高い作戦はこれだったのだから。

パス回しをしようと最初に言い出したのは確か多呂斗先輩だったか。でも、みんな少なからずその案は頭の中にあっただと思う。みんなで他にいい作戦はないかと考えを出

し合った長いミーティングの末、監督は作戦の決定はキャプテンである月村先輩に委ねるとした。つまり、最終的にこの作戦を選んだのは月村先輩だ。

月村先輩は本来こんな作戦は好きじゃない。円堂と同じサッカーバカで、正々堂々とぶつかり合うのが好きなタイプだ。でも、負けたら尾刈斗のみんなとサッカーができなくなるという事態を前に、月村先輩はこの作戦を選んだ。

それを責める人は誰もいなかった。自分達にもつと実力があれば、正々堂々戦うこともできたと理解していたからだ。

「引き籠もりやがってうぜえ！キラーズライド！」

「……呪い」

僕達に攻める気がないことはすぐに帝国にも伝わったようで、必殺技を使ってボールを奪い取ろうと突撃してくる。なんとか必殺技で対応しているが、このペースでやられると続かない。

道化先輩のレッドバルーンとかがあれば便利だったんだけど。

「よいしょつと、イリユージョンボール」

僕がイリユージョンボールを使えることはデータとして向こうに伝わってるはずだ

と思うけど、鬼道の十八番を僕が実際に使っている姿を見ると驚くようで、その隙にフリーになっていた靈幻にパス。ちよつとだけ持ちこたえたかも。

靈幻からさらに前線にパスが繋がり、ボールは唯一のFW、月村先輩のもとへ。

「カウンターか……！」

鬼道の素早い指示によって、辺見ら中盤の選手は後ろに下がりカウンターに構える。

「オレ達はプライドまで捨てた。だから負けるわけにはいかねえんだよ。行くぞ魔界！」

「おうよー！」

「地獄車!!」

月村先輩と魔界先輩がボールを挟んで車輪を作り回転する。その2人の進行方向の先で待ち構えていたのは、

「ザ・タワー」

多呂斗先輩だ。

多呂斗先輩が裏切つて2人を止めたというわけではない。というか、地獄車は尾刈斗ゴール方向に転がって来たからどちらかという裏切つたように見えるのは月村先輩達の方だろう。

回転する2人は多呂斗先輩のタワーにぶつかり、その勢いのまま塔の側面を回転しながら登る。

その結果塔の上に多呂斗先輩と月村先輩と魔界先輩が降り立った。

「ザ・タワー籠城作戦ってね」

発案者は僕。最低最悪の作戦が始まった。

35 占い師

「ふっ、小賢しい奴らだ。潰せー」

ザ・タワーの上でボールを持って時間切れまで耐久する。サッカーの前提を覆すかのような常識外れな作戦だ。

この高い塔の上には、さすがの帝国も届くまい……なんて言ってるわけにはいかないことは満月の日の月村先輩が実証してくれている。天魔大戦（思い出す度にイタい名前だと思う）があつたあの日、月村先輩は一度の跳躍で塔をあつさり飛び越えてみせた。

満月の日の月村先輩の身体能力は、ずば抜けているとしても、日本一の帝国が再現できないと考えるのは楽観視しすぎだろう。

「てことで頼んだよ、屍ー」

「ぐふふっ、リトル・グラビティションー」

屍が地面に手をつけると、紫のオーラが空間に広がり、周囲の重力がちよつとだけ強

まる。

タフネスブロックしか必殺技がなかった屍が新しく編み出したブロック技だ。身動きを取れなくさせるほど強い重力には及ばなかったため、リトル・グラビティションと僕が名付けた。通称リトグラ。完全に動きを封じられるようになったとき、リトルを外してグラビティションが完成するのだ。

「くっ、体が重い……」

ボールを奪おうと飛び上がった寺門が地に落ちる。今はリトルな重力でも十分役に立つ。

塔の上まで誰一人として近づかせないことが僕らの仕事だ。

「塔を破壊しろ！」

鬼道の号令に合わせて、帝国の攻撃が塔に集中する。みんな一斉に塔に蹴りを入れる様はとてモサッカーの試合中だとは思えない。ナニコレ。

「サイクロン！」

「サイクロン！」

必殺技によって塔にも少しずつヒビが入っていく。

「竜巻を発生させて塔を破壊するって異世界の魔法大戦か何かですかね。」

このタワーはもう長くは持ちません。そろそろです」
多呂斗先輩が塔の上で冷静に状況を分析しながら、指で僕達に合図を送る。

「行くぜお前ら！マレマレトマレ……」

監督が素早くモードを切り替えて、呪文を唱え始める。

それに合わせて僕と三途と八墓でゴーストロックを発動させる。僕達の切り札だ。

当然ゴーストロックの対処法は帝国も知っていて、目を閉じたり耳を塞いだりされると催眠術は届かない。誰か一人くらい反応が遅れて固まってくれたらラッキーだと思っただけで、無理か。ゴーストロックは初見の相手には超有効だけど、知られると一瞬の間を作ることしかできない。

「跳ぶぜー！」

「跳びましょうー！」

屍がリトル・グラビティションを解除したタイミングに合わせて、塔の上にいた先輩達が空を駆ける。

「おいで、ザ・タワー」

多呂斗先輩が再度ザ・タワーを使用し、地面からせり上がってきた塔の上に再び着地する。それを見た屍がリトグラを再展開。

「引越しは成功だ。多呂斗、大丈夫か？」

「はい……なんとか」

必殺技の連続使用は体への負担が大きい。90分間ずっとこの方法で逃げ切ることは無理があるだろう。

引越しの回数を減らすためにも、僕達で塔への侵攻を食い止めねばならない。

「もういつちよ！サイクロ……クソっ」

「蹴り込む動作で……風を作る……足を縛れば使えない」

木乃伊の必殺技、怨霊によって足を封じられ、サイクロンは不発に終わる。

「魔界の住人の俺様が上から支援してやるぜ！呪い！」

魔界先輩の背後から現れた黒い影が、塔を破壊しようとする帝国選手に上から降り注ぐ。怨霊も呪いも相手の足止めにはうってつけの技だ。

ただそれでも塔の破壊は進み、いよいよ2つ目の塔も破壊されそうになっていた。

多呂斗先輩以外の誰かが同じくザ・タワーを使えるようになれば負担も軽減できたんだけど、技の相性とかが関係するのか、誰もものに出ることが出来なかった。

「もう一回、できるか？」

「一旦、休憩を挟まないで、厳しい、です」

「俺も、リトグラの展開が限界です……」

2人とも疲労の色が見える。籠城も限界が近づいてきたようだ。

「それなら最後に一発ぶちかますぜ！ファントムシュート!!」

うちのエースストライカー月村先輩の、高さの乗った強力な必殺シュート。さっきの引越しの際に、少しゴールに近い位置に移動したからそれなりの威力にはなるはずだ。

「止める、パワーシールド」

高い角度からの月村先輩の必殺シュートも、源田の出した衝撃波によって跳ね返される。キングオブゴールキーパーは伊達じゃない。

全方位からのシュートを守る万能キーパー技パワーシールドに弱点があるとすれば、一つは必ずシュートを弾いてしまうことだ。

バスケットにおけるリバウンドのようなこのボールを拾うことができるかで、この後の戦況が大きく変わる。

跳ね返りの位置を計算し、魔界先輩がボールを回収しに行く。

しかしリバウンドの重要性は帝国のDF達もちろん分かっているようで、ちょうどボールがやってくるその位置に万丈が既に待機していた。胸でボールをトラップしたあとドリブルしようとして、ステツと転げる。

「でこでボールはいただくぜ」

「先んじて怨霊を使わせてもらったアル」

靈幻のナイスアシストで再び尾刈斗ボールに。大野がボールを奪おうと詰め寄ってきたから急いで後ろにパス。

「呪い」

「イリュージョンボール」

ドリブル技を駆使して、なんとかボールを奪われずに自陣ゴール近くまで戻した。

パス回しで様子を見つつ、再び籠城するタイミングを見計らう。

「多呂斗先輩、もう一回でできますか？」

「多分、できます。やり、ます」

もう息も絶え絶えっぽいけど、普段は静かな多呂斗先輩が熱くやる気を出してくれている。僕が今すべきことは、先輩を信じることに。

「やります、ザ・タワー!!」

今日三度目のザ・タワー。さっきより少し背が低いような気もするけど大丈夫かな。

「つたく、またそれかよ」

「今度こそぶっ壊してやるぜ！」

試合開始からそれなりに時間が経っているにも関わらずまだボールに触れてすらないという異常事態に、王者帝国の面々はいらだちを隠せないらしい。鬼道だけは不敵な笑みを浮かべたままだけ。

「百烈ショット」

「ジャツジスルー」

再び大量の蹴りが塔を襲う。呪いや怨霊で止めようとしても間に合わない。ファントムミストで暗闇にしても多分意味ないしなあ。

三回目で耐久性も下がっていたのか、さつきまでよりも早く塔の限界が来てしまった。根元から崩れ始め、完全に倒れてしまった。

「多呂斗、大丈夫が？」

「ナイスキャッチです、不乱君。ほんと、もっと、粘るはずだったんですが、すみませ
ん」

「何言ってるんだ？お前はよく頑張ったぞ」

墜落した多呂斗先輩は不乱先輩がちゃんとキャッチしてくれた。そして肝心のボールの行方は、塔の崩壊による土煙のせいで分からない。

「ああ、しやらくせえ！サイクロン！」

辺見が必殺技で起こした風によって土煙が晴れ、ボールを誰が持っているのが明らかになる。

「貴様らのつまらん時間稼ぎはおしまいだ」

ボールを持っていたのは、鬼道有人。帝国の反撃が始まる。

ここまで帝国相手にボール保持率ほぼ100%という驚異的な記録を達成していたが、ついに鬼道にボールを取られてしまった。

ずっと尾刈斗ボールだったとはいえ、点を入れたわけではなくただ籠城していただけ。消耗もこちらの方が明らかに大きく、不利な状況としか言いようがない。

一つ良いニュースがあるとすれば、前半の時間は残りわずか。後もうひと頑張りで前半を無失点に抑えることができる。

「反撃開始」

鬼道から素早くパスが洞面に渡り、ダイレクトで佐久間、寺門へと繋がっていく。どうやって互いにコンタクトを取ってるのかも分からない速すぎる連携。

「行くぜ、百烈ショット!」

塔を破壊するための手段ではなくシュート技として、百烈ショットが尾刈斗ゴールを襲う。

あまりにも素早すぎて、不乱先輩のシュートブロックは間に合わない。多呂斗先輩も屍も、さつきまでの必殺技の多用で疲労困憊。ゴールを守るのは鈍一人だけ。

「トラストミー! キラーブレード改!!」

鉈はいつの間にか進化させていた青い刃で、寺門の必殺シユートを真つ二つにしてみせた。

「オーケー？これが正キーパーの力さ」

鉈から不乱、屍へと再びパス回しを目論んでいると、ファウルすれすれの佐久間のスライディングでボールが奪われてしまう。疲労している屍がウィークポイントだと狙われていたのかも。

「取られたら取り返すだけ。怨霊」

三途の怨霊は跳んで回避される。その着地にクイックドロウを合わせてボールを奪取しようとする構えが、僕の考えも見透かされていたのか空中で洞面へとパスされてしまう。

「分身フェイント」

3人に分身して八墓を翻弄し抜き去り、そのまま洞面がシユート体勢に入る。

「行くよ！フリーズショット」

地面が突然凍り、その上を滑るように洞面のシユートが突き進む。

「止める。タフネスブロック」

ボールを取られてしまった失態を取り返そうと意気込んで、屍がシユートブロックをするが、地面が滑るため全く力が入らない。屍はシユートに巻き込まれるように一緒に

ゴールへと滑っていく。

屍ごと切ってしまうから、これじゃキラブレードが使えない。

ゴールを見ると、中心で守っていなければならないのは鉈がゴールポストの近くでシュートを待ち構えていた。

「ノープロブレム！アイスホッケーのキーパーの経験が今活きるぜ。キラブレード改
！」

そう言つて鉈はゴールポストを強く蹴り、ゴールへ直進するボールと屍に対して斜めからぶつかりに行く。そして青い刃をちょうどボールと屍の間に差し込み、ボールだけをホッケーのように弾き飛ばした。

フリーズショット、一見大したパワーはなさそうに見えるが、地面を凍らせるというのがあまりにも強すぎる。踏ん張りが効かなくなるから、シュートブロックはもちろんキヤッチをしてもそのままゴールに押し込まれる可能性が高い。

ゴールポストを蹴って勢いをつけたのは咄嗟にしてはすごい判断だよ。

ていうか、そのホッケーマスク、ジェイソンを意識してるんじゃないやなくて本当にアイスホッケーしてたんだ。それが一番の驚き。

ピー
ピー

と、ここで前半終了の笛が鳴る。なんとか無失点で凌ぐことができた。

☆☆☆

「柳田君、後半から多呂斗君に変わってDFで入れますか？」

「は、はい……」

ハーフタイム中、監督が多呂斗先輩と柳田の交代を指示する。

「僕はまだ戦えます」

多呂斗先輩の消耗を考えると自然なことなのだが、そんな監督の采配に多呂斗先輩本人が反対する。

「多呂斗君、その熱い気持ちは分かりますが、今の君ではチームの役に立ちません」
「僕は3年生です。先輩です。この部を守る責任があるんです」

多呂斗先輩がこんな熱いことを言うのは今日が初めてだった。去年のハロウインの日の試合もそうだったけど、黒研の部長ということもあってか積極的に部活に関わろうとはしていなかった。いつも月村先輩や魔界先輩が熱くなっている様を後ろから見ているようなタイプだった。

「僕は、尾刈斗サッカー部が大好きなんです」

そう言つて多呂斗先輩は、監督の目を見つめた。しばらく睨み合う時間が続いた。目で語り合うつてのはこういうことを言うんだらう。

「分かりました。あなたの力を信じます」

先に目を逸らしたのは監督の方だった。

「紫藤君、ちよつとお話いいですか」

「はい」

フィールドに戻る前に、多呂斗先輩に呼び止められた。

「後半が始まる前に君に伝えたいことがあります」

「はい」

後半に向けて秘策か何かでもあるのだろうか。いつものことだけど多呂斗先輩の顔からは何を考えているのかは窺えない。

「1年ほど前、部内で紅白戦をしましたよね。天魔大戦みたいな名前の」

「確かにしました」

「あの日、僕はチームのキャプテンを君に譲りました。覚えていますか？」

「覚えていません。確か僕を選ぶと吉みたいな占いが出たとかで……」

結局多呂斗先輩をじゃんけん必勝マンとして味方に引き入れたから、多呂斗先輩がキャプテンだったときとほとんど変わらなかつたような気がするけど。

「あの理由は、嘘だったんです。君がキャプテンに相応しいと思つたのには別の理由があります」

「別の理由……？」

「僕も、知っていたんです、全部。尾刈斗が影山の支配下にあるつてことも。でも僕は何もしなかつた。何かを変えられる君の強さは、キャプテンに相応しい資質です」

「やっぱり、先輩達は知っていたんですね」

去年のFFでの帝国に対するあの消極的な姿勢から、そうじゃないかと思つていた。やっぱり全てを知つた上で影山のもとサッカーをする安寧を選択していたんだ。

でもその安寧は僕がぶち壊した。そのせいで一度は（監督によつて）練習試合が全部なくなつたし、今は廃部の危機に陥つてゐる。でも先輩はその選択を「強さ」だと認めしてくれた。

僕がこの試合に責任を感じてゐるんじゃないかと思つて、先輩は声をかけてくれたんだろう。

「次のキャプテンは君が相応しいつて月村君も言つてましたよ。後は任せますよ」

「ありがとうございます！」

原作では幽谷がキャプテンだったけど、その座は僕になるのか。ちよつとニヤついてしまふ。

でも、この試合に負けたら全部なかったことになる。気合を入れなおせ、紫藤幻斗。

さあ、後半が始まる。

36 無知と自己犠牲

多呂斗先輩は試合への出場を強く希望したため交代しなかったが、同じく疲労していた屍は武羅渡と交代した。武羅渡は優秀なFWだが、源田からゴールを奪えるほどの突破力があるわけではない。DFが一人減ったというのは、この試合において大きな損失だ。

後半は帝国ボールから。さっきは鉈の大活躍でなんとか失点は防げたけど、体力を考えてもずつと守り続けられるとは考えられない。

佐久間から寺門へのパスで試合再開。

僕達が負けないための後半の作戦は主に2パターンある。なんとか点をもぎ取るか、前半みたいにボールを保持し続けるか。

「怨霊」

「かまいたち」

どちらにしろ、まずはボールを奪わなきゃいけない。今だって魔界先輩が必殺技で止めようとして寺門の必殺技によって失敗した。

やはり必殺技のぶつかり合いにおいて、搦手が主体の僕達はパワーで勝つことができ

ない。

不亂先輩のフランケン守ティンなんかはパワーも凄いんだけど、シュートブロック以外の場面では動きが鈍いせいで役に立たないことも多いし。

「止めるよっ!」

普通のスライディングでボールを奪いにいくけど、直前に佐久間にパスされ失敗する。やっぱり動きが素早い。

その佐久間の前に素早く立ちはだかったのは八墓。しかし一切動くことなく佐久間の突破を許す。

「影縫い」

——ように見せかけて佐久間の影を自らの影と結びつける。

影を縫われた佐久間は足を躓き、八墓が悠々とボールを奪う。

「キラースライド!」

「すまない……」

が、すぐに洞面にボールを奪われる。そしてそのまま必殺シュートを放つ。

「フリーズショット」

地面が凍りつき、ボールが滑るように加速していく。さっきはゴールポストを蹴って滑るといふ鈍の活躍によって止めることができたけど、あんな大胆なことはそう何回も

したくはない。

「蜘蛛の糸……鈍、これで踏ん張りが効くはず」

木乃伊が忍者のように人差し指を立てたあとと地面に手をつけると、木乃伊を中心に蜘蛛の糸が広がっていく。その蜘蛛の糸は地面を滑るシュートを減速させていく同時に、ゴールで仁王立ちする鈍の足に絡みつく。

「こんなスローなシュート、必殺技なしでもノープロブレム！」

蜘蛛の糸によって足を固定された鈍は滑ることなく、しっかりと両手でシュートを受け止める。

木乃伊の必殺技を活用する機転にはいつも驚かされる。

なんとかこっちのボールになった。てことでさっきも言ったように僕達が取れる行動は攻めるかパス回しするかのどっちかだけ……

帝国のゴールを守る源田の姿を見て考えを改める。無理だ、あれ。上空からの月村先輩のフアントムシュートですら無理だったんだから。

奥の手はないことはないけど、まだその時じやない。

「実は僕も使えるんだよね。イリユージョンボール」

三途がイリユージョンボールを披露して帝国陣を少し驚かせながら、なんとかボールを奪われないようにパスを回す。

「マジック」

さらにパスを受け取った武羅渡はどこからともなく取り出したマントで身を隠し、タネも仕掛けもない超次元パワーでテレポート(?)する。FWのはずの武羅渡もハーフライン下まで下がってパス回しに参加しているのだ。

「ボールを渡さないアル! 呪い」

「オレだつて器用なことができるつて見せてやんぜ! マジック」

靈幻や月村先輩もドリブル技を駆使してなんとかボールを守る。

なんだか奇妙な試合展開だ。

「帝国の様子がおかしいですね。僕達を疲弊させることが目的……?」

「確かにさつきからあいつら必殺技を使つてないな。俺たちに散々遊ばせたあと一気に攻めて蹴りをつけようつて魂胆か」

いくら僕達がパス回しに徹しているからといって、あの王者帝国を相手してボールを保持し続けているなんてありえない。多呂斗先輩や魔界先輩が言うように、帝国はまだ本気を出していないとかんがえるのが自然だ。

「先輩達ほどのタイミングで攻めてくると思つていますか?」

校舎の時計を見ながらタイミングを先輩達に尋ねる。後半は残り20分強。短いよ
うで結構長い。

「もうかなり終盤だ。魔界の住人である俺様の未来を視る力によると、あと5分以内に帝国が暴れ出す可能性が非常に高い」

「僕も魔界君と同じ考えです。僕達が限界近くまで必殺技を連発してしまっているため、一度帝国が攻勢に転じれば、それを止めるのはなかなか困難です」

「二応不亂はシュートブロック要因として、極力動かずに体力を温存しろって指示を出しているが」

不亂先輩が万全の状態でゴールを守ってるってのは心強い。地味に気が利く男、それが魔界先輩である。鬼道のゴーグルと同じ理論で、目の部分だけ穴の空いたその被り物が逆に視野を広げているとでも言うのか？

「交代しようにも裏の人形達は純粋なFWだから、守りきることが目的の現状ではあまり意味がありません。僕は正直柳田を試合に出すべきじゃないと思っただけで、今のメンバーで凌ぎきるしかないってことですな」

交代できない、というのは僕個人の意見だけど、ベンチを見ると監督は誰も交代の準備をさせていない。交代はもうしないつもりだと思っただけだろう。

「鈍君がキラーブレードを進化させてくれたおかげで、百烈ショットくらいなら任せられるのは朗報です。」

ただやはり帝国が本領を發揮するのは二人以上の合体技ですので油断はできません。

デスゾーンや皇帝ペンギン2号を使われると不亂君のシュートブロック込みでも止められるか微妙です」

（あれ、なんか違和感が——）

「サイクロン！」

帝国が本気で動かないことをいいことに、試合中に喋りすぎてしまっていたけど、少し悠長すぎたようだ。何か考えてた気がするけど、一旦それは後回し。

既に何度も必殺技を使ってしまっていた靈幻は対処も間に合わずあつさり万丈にボールを奪われてしまう。

さつきまでとは段違いのスピードでパスが回され、あつという間に咲山の足元にボールが届く。

体力を温存していたおかげで余裕のある不亂先輩が咲山の前に立ちはだかる。

「まずは邪魔者の排除だ。潰せ」

「死ねっ！ジャツジスルー！」

不亂先輩が必殺技を出す間もなく、ボール越しに回し蹴りを入れられる。

しかし不亂先輩は吹き飛ばされることなく、持ち前の根性で耐えてみせる。

「うがー！これくらいなんのその！」

「へっ、やるじゃねーか。もっかい行くぜ！ジャツジスルー！」

「ぐはっ」

さらにもう一度蹴りを食らうも、不亂先輩はなんとか耐える。

さっきの一撃で怯んだ隙に、咲山は突破することができたはずだった。それをしなかったのは、不亂先輩を痛めつけること自体が目的であるからだろう。

そして不亂先輩だってそんなことを分かっている。その上で、耐え続けることで時間を稼ぐことを選んだ。

「いつまで持つかな？ ジャッツジスルー！」

3 回目の蹴りを受けて不亂先輩もついにふらつき始める。

「4 回目だ。ジャッツジ……あれ？」

さらに追撃を入れようとしたところで、咲山がふらついて必殺技を中断する。

「こんなの黙って見てられないアル」

靈幻の今日何度目か分からない怨霊が、咲山の足を止めたのだった。ただもう体力も尽きかけた靈幻の怨霊にいつものような強度はない。咲山が足を動かすと、ブチブチと黒い影がちぎれていく。

そして仕切り直して咲山は不亂先輩に4 回目の蹴りを入れる。

「ジャッツスルー！」

「うぐっ！がー！」

不亂先輩はもう限界に見える。それなのに、少しでも時間を稼ごうと不屈の意志で耐え続けている。

(不亂先輩が蹴られることで時間を稼ぐことができる。僕はただ、黙って見ていたらいいんだ。僕は影山を倒すためには手段を選ばないんだろ?)

咲山が5回目のジャツジスルーの構えに入る。

「今度こそ死ね。ジャツジ——」

「クイックドロウ！」

「スルー!!」

不亂先輩を助ける必要なんてないと自分の中で何度も正当化したはずだった。でも、気づいたら体は動いていた。

咲山の蹴りが不亂先輩を襲う直前、必殺技で一気に距離を詰めた僕は不亂先輩を押しつけた。蹴りは不亂先輩の代わりに僕に当たり、体重の軽い僕はその一撃を食らって遠くに吹っ飛んだ。

なんとか受身をとって立ち上がったが、蹴られた脇腹はひどく痛んだ。不亂先輩はこれを4回も耐えていたんだ。

僕はなんでジャンプ主人公みたいなことをしてるんだろう。ただ痛い目にあっただけで、状況は何も良くなっていない。

致命的な怪我はせずにすんだものの、不乱先輩はもう限界に近い。帝国の必殺シュートに対してシュートブロックができるほどの余力はないだろう。

不乱先輩をいたぶることをやめた帝国はすぐさま攻撃に転じた。

鋭いパス回しで尾刈斗のペナルティエリア近くまで詰め寄られ、鬼道に絶好のシュートチャンスを与えてしまう。

「ツインブースト」

鬼道が蹴りあげたボールを佐久間がヘディングで鬼道に戻し、それをさらに鬼道がゴールへ蹴り込むという合体技。歪む空間対策なんだろうけど、完全に目を閉じだ状態で一連の連携を行っているのが相変わらずの帝国クオリティだ。

これはまずい、すぐくまずい。不乱先輩がダウンしてしまいシュートブロックができない。

「キラーブレード改!!!」

鈍の青い刃がシュートに切りかかる。少し拮抗するも、合体技のパワーは凄まじいよ。うで刃は鈍もろとも弾き飛ばされてしまった。

ボールは少し軌道が逸れながらそのままゴールに入ってしまった。そうになるが、ギリギリのところまで三途がボールに食らいつく。

「シュートブロック技がなくなっちゃって、僕も尾刈斗のDFなんだ!」

いつもは控えめな三途らしからぬ叫びをあげて、ヘディングでシュートを食い止める。押し込まれないように足を怨霊で固定していたことが功を奏してか、なんとかシュートを弾き返すことに成功した。

「サンキューだ、三途」

「ノープロブレム！なんちゃってね……」

足を固定していたせいで三途はゴールの中へ後頭部から倒れこんでしまった。それでも鉈の口調を真似て返事するほどの余裕はあるようだからまあ大丈夫だろう。

三途が弾いたボールがちょうど僕のいる方向に飛んできたので、軽くトラップをするも寺門が近づいてくる。

「残像」

どれほど効果があるかは分からないけど、残像を作って惑わしながら多呂斗先輩にパス。

パスを貰った多呂斗先輩がさらに八墓へパスを出そうとしていたところ、辺見の強烈なタックルに襲われる。

相手を押しのけることを目的とした明らかなファウルチャージに、多呂斗先輩も大きく弾き飛ばされた。

この強引なプレーにはさすがの審判も笛を鳴らす。帝国が用意した審判だから帝国

が何をしてでもファウルなんて取らないもんだと思っていた。ジャッジスルーは文字通りスルーし続けてたし。

本当に公正な審判であれば明らかにイエローカードを出すプレーだったから、やはり帝国覇頂なのは間違いないだろうけど。

「先輩、大丈夫ですか？」

「はい、なんとか。不乱君の次は僕を潰してきたということですかね」

上手く受身は取れたようで、大したダメージがないらしいのは安心だ。このまま多呂斗先輩までサッカーリンチを受けては、尾刈斗の防御はままならない。

そういえば先輩に尋ねたいことが何かあったような気がしたんだけど、なんだっけ。思い出せない。

尾刈斗には直接フリーキックが与えられた。キッカーは僕。ファウルを取られない程度に無駄に時間を使いながら、フリーだった魔界先輩にボールをやる。

足がつったフリをして時間を稼ごうともちよつと考えたけど、それを実行に移せるほど手段を選ばない人にはなりきれなかった。

「邪魔だキモメガネ。呪い」

「クツクツク……まだ2人いますよ……」

魔界先輩が呪いで五条を突破しようとしたが、いつの間にか分身ディフェンスを使われていたようで、呪いを受けていない残りの2人の五条によってボールを奪われてしまふ。

ボールは五条から中央に戻され、ゲームメーカー鬼道の元へ。

「デスゾーン、開始」

鬼道の掛け声とともに、佐久間、寺門、洞面が走り出す。

デスゾーン、帝国の最強のシユート技の一つ。去年のFFでは多呂斗先輩と引退した冥門先輩の2人の強力なシユートブロックがあつてやつと止めることができた技だ。鈍1人で止めるのはさすがに無理があるだろう。

だから、発動する前に止めなければならぬ。

佐久間ら3名が、ボールを中心に空中に回転し、紫色のオーラをボールに注ぎ込む。

「ちようど……こころザ・タワー!!」

デスゾーンのちようど真下から多呂斗先輩が塔を発生させ、3人が描く紫色の三角形を突き破る。

強力ながら発動に時間がかかるシユート技は数多く存在する。それらは総じて溜めの時間が弱点となるが、デスゾーンは空中で溜めることで今まで解決していた。

しかし、僕達には三次元の方向への移動を可能にしてくれる頼れる先輩がいたのだ。作戦通り、デスゾーンの阻止に成功した。

三角形が崩れたことで蓄えられていたエネルギーが暴発し、その衝撃でもう4回目の発動で脆弱な塔は崩れてしまった。ボールを奪うことは叶わなかったが、先輩は大活躍してくれたといえるだろう。

ちなみに落下した多呂斗先輩はまたまた不亂先輩にキャッチされていた。

多呂斗先輩に負担が集中するものの、デスゾーンへの対抗手段を得た。デスゾーンさえ使えば僕達から点を奪うことができると考えていた帝国にとっては大きな誤算だろう。

帝国のメンバーにも焦りが広がっている様子が見て取れる。

実際のところ、多呂斗先輩はもう限界ギリギリだ。練習でも一試合に5回以上発動させたことはない。それでも、まだ使えるかもと思わせるだけで抑止力となりうる。

皇帝ペンギン2号なんかを使われたら阻止も間に合わずに点を奪われてしまうかもしれないが、あの技は原作で円堂のゴッドハンドを攻略するために皇帝ペンギン1号を改良して作られた技。まだ存在していない。

皇帝ペンギン1号をなんとか改良しようという計画自体は一応存在していると刃也から聞いていたが――

「あっ!!」

さつきまで抱いていた違和感の理由がようやく分かった。

多呂斗先輩は知っているはずのないことを知っていた。

確かに先輩はいつも未来を知っているかのように振舞ったりするが、これはそういった次元の話ではない。

「先輩、ひとつ質問してもいいですか?」

少し息も切らしながら立つ多呂斗先輩に質問を投げかける。

「はい」

「皇帝ペンギン2号という必殺技をどこで知ったんですか?」

先輩は言っていた。デスゾーンや皇帝ペンギン2号を使われると止めることはできないかもしれない。

皇帝ペンギン2号は、帝国の内部の人間でなければ知るはずのない必殺技だ。それを先輩は一体どうやって知った?

「僕としたことが、迂闊にも口を滑らせてしまいましたね」

僕が多呂斗先輩を問い詰めている間も、試合は進んでいく。

試合終了まで時間は極わずか。帝国も動かざるを得ない。

「どうせ奴の体力は限界、押し切ればなんとでもなる。最後にデスゾーンだ」

鬼道の指示で再び同じ3人がデスゾーンを開始する。ザ・タワーが使えない僕らに阻止する術はない。

「紫藤君は、僕が帝国のスパイだとも思っているんですか？」

多呂斗先輩の質問に、否定はできずに俯く。今日の行動を見てもスパイだとはとても思えない。でも、知るはずのない皇帝ペンギン2号を知っている理由として、スパイを疑っているのも確かだった。

「それなら、行動で示します」

踵を返し、空中でオーラを注入し続けるデスゾーンに向き合う多呂斗先輩。その瞳からは、強い意志が感じられる。

「もしかして、必殺技も使わず生身で止めるつもりですか？」

必殺技を使う余力すらないのに、デスゾーンを止めようだなんて無茶だ。無謀でしか

ない。

「僕は——いや私は、ずっとこの世界を傍観し続けてきたの。最後までいいカッコつけさせてほしいな。だから、尾刈斗は任せよう」

「「デスゾーン!!!」」

尾刈斗ゴールへ襲いかかる紫の必殺シュートに、多呂斗先輩は一人突撃する。

多呂斗先輩はシュートを胸で受け止め、必死でシュートの勢いを抑え込む。

本当なら、一瞬で弾き飛ばされてもおかしくない状況だ。それなのに先輩の思いが、気迫が、ありえないほどのパワーを引き出している。

「多呂斗先輩!!」

僕は思わず声を上げる。

「「多呂斗（先輩）!!!」」

尾刈斗メンバーみんなの応援が、先輩に届く。

「私の大好きな尾刈斗を壊されてたまるかあ!!!」

雄叫びとともに、背中からは思いが具現化したかのように黒いオーラが現れる。時代が違えば「化身」と呼ばれていたそれは、先輩にさらなるパワーを与えた。

長いようで短いせめぎあいした後、ボールは完全に勢いを失った。

デスゾーンが、止まった。

ピー　ピーー　ピーーー！

試合終了の笛がなる。得点は0―0、引き分けだ。

「や、やった!!」

「アンビリーバボー!!」

「サッカー部は守られたんだ!」

尾刈斗のみんなが歓喜の声をあげる。

「多呂斗のおかげだぜ!」

「多呂斗先輩がMVPアルヨ!!」

胸上げでもしようかと、この試合で一番活躍してくれた多呂斗先輩にみんなの視線が集まる。

「こんな喜ばしい状況なのに、先輩は微動だにしない。

「先輩、大丈夫ですか?」

デスゾーンを止めるために全てを出し尽くした多呂斗先輩は、バタリと顔面から地面に倒れ込んだ。

☆☆☆

『僕も、知っていたんです、全部』

多呂斗先輩の言葉が蘇る。

どうして気づけなかったのだろう。気づくためのヒントは十分にあったはずなのに。

多呂斗占なんて選手は、原作にはいなかった。どうしてその理由を考えなかったのだろう。

(多呂斗先輩は、僕と同じだったんですね)

先輩となら、このイナズマイレブンという世界について、知識を交換することができ

ただろう。いずれ襲いかかるエイリアという脅威について、一緒に対策を練ることもできたかもしれない。

好きなキャラについて語り合う、それも楽しいかもしれない。きっと尾刈斗についての推し語りが止まらないだろう。

前世では何をしていたのだろうか。実はコスプレ女子だったとか？魔女っ娘のクオリティを考えるとありえなくはないような気がするな。

でも、もう遅い。

同じ転生者として先輩と話をすることは、もう二度とできない。

37 お見舞い

多呂斗先輩の身を挺したデیفエンスによってゴールは守られ、尾刈斗は廃部の危機から脱することができた。しかし、その代償は大きかった。

☆☆☆

「多呂斗さん、いますか?」

「はい」

病室から元気な返事が聞こえる。失礼しまーすと言いながらドアを開け、多呂斗先輩のベッドの隣に立つ。

僕達は今、稲妻総合病院に来ている。この辺りで一番大きな病院ということもあつてとにかく広い。病室を訪れるのは初めてじゃないはずなのに、また迷いそうになった。

「えーつと、紫藤君と黒上君で良かったかな?」

「はい!」

お見舞いに訪れたのは僕と黒上。黒上は先輩と同じ黒魔術研究部所属ということで、サッカー部の中でも特に多呂斗先輩と親しくしていた。

「これ、羊羹です……前は和菓子が好きだったので」

そう言つて黒上は紙袋を先輩に渡す。

先輩の好物なんて、僕は何ひとつとして知らなかった。

「ありがとう。多分羊羹は好きな気がする」

好き嫌いつてのは、やっぱり変わらないものなのだろうか。

「怪我の具合はどうですか？」

「快方に向かつてるよ。来週くらいには退院できると言つてた」

丁寧語じゃない多呂斗先輩は、まだ少し違和感がある。こつちが素つてことなのかな。

「でも、両親からもうサッカーはするなって言われてる。だから君達とサッカーすることはできないと思う。ごめんね」

「謝らないでください。悪いのは僕らですし、ご両親がそう言うのも仕方ないことだと思います」

帝国戦の日の夜、多呂斗先輩の両親が監督に詰め寄っていたのを覚えている。多呂斗

先輩がこんな目に遭ったことについて、尾刈斗の全員が責任を感じていたが、やはり客観的に責任を問われる立場なのが監督である。

サッカーはもうさせないと言う両親に、監督も反論できるはずがなかった。

「サッカーって楽しい?」

「はい。とても」

「楽しいです」

即答する。

最近僕も何が正しいのか分からなくなっちゃったけど、サッカーを好きだと思う気持ちには、絶対になくさないようにしている。

僕にとってサッカーはとても重要な存在だからこそ、多呂斗先輩からそれを失わせてしまったことを申し訳なく感じる。

「今の僕にサッカーをしていた記憶は全くないんだけど、多分僕にとつても凄く大切なものだったんだろうなって気はする。この羊羹が好きだったような気がするのと同じように。」

君達の話だと、僕は自分からそのデスゾーンってやつに突っ込んだんだよね。僕の意思で。君達が責任を感じることにじゃない、と僕は思う」

僕達の心の内を見透かしているかのように話すのは相変わらずだ。僕は悪くないなんて開き直るつもりはないけど、先輩の言葉に少し心が軽くなったのも確かだった。

「記憶が戻る手立ては何かないんですか？ サッカーをしたら思い出すかも、みたいな」

「さあ、お医者さんもお手上げだって。記憶喪失でも体はサッカーを覚えてたりするのかな？」

あの帝国戦でデスゾーンを生身で受け止めて倒れた多呂斗先輩は、目を覚ましたとき、全ての記憶を失っていた。

僕達の名前も、家族の名前も、自分自身の名前も。

今一番辛くて不安なのは先輩のはずなのに、そんなことおくびにもださずに、明るく振舞っている。

「そういえば、小学校の頃から日記をつけてるって以前言っていました。それを読んだら思い出せることもあるかも……」

「そんなのあるの？」「ほんとに？」

黒上の衝撃発言に僕と先輩の声が重なる。日記というのは確かに記憶を取り戻す助けになりそうだけど、多呂斗先輩の場合恐ろしい事態になりかねない。

もし、この世界について書かれていて、誰かがそれを読んだとする。単なる妄言として扱われるなら問題ないが、その日記に書かれた未来予測は死海文書もびつくりな精度でこれから起きることを言い当てる。この世界が誰かの創造物に過ぎないという事実はこの世界の住民のアイデンティティを完全に否定しうるだろう。

「おかしいなあ。母も同じことを考えて僕の部屋を物色したらしいんだけど、何も見つからなかったって言ってたよ」

日記なんてないはずだと首を傾げる先輩。

多呂斗先輩は簡単には見つからない位置にその日記を隠してたってわけだ。一安心。「謎ですね……それと、黒魔術研究部は戻られるつもりはありますか？ サツカー部はもう退部の処理がされていますが、黒研はまだ部員のようにです」

「ああ、そういうえば僕はその部活の部長もやってたんだっけ」

「一応今は俺が部長です。あの帝国戦の日の朝に、俺に部長の座を渡すと言っていたので」

「そっか、退院して元気になって、気が向いたら行ってみようかな」

黒上と先輩の黒魔術研究部に関するやりとりを聞いて、また考えてしまうことがある。

先輩は、帝国戦が最後のサッカーになることを悟っていたのではないか。原作知識などではなく、本当に未来を占う力があるとすれば、自らの運命くらい分かっていたような気もする。だから黒研の部長も降りたし、僕に後を託すようなことも言った。隠し続けていた秘密も最後だから僕に話した。

さらに悪い妄想は続く。もしかしたら、先輩はこうなることを望んでいたのではないか。未来を知っていたなら今よりももっとスマートな解決法があつたはずだ。それをしなかったのは――

「紫藤君、なんか怖い顔してるけど大丈夫?」

いつの間にか先輩と黒上の話は終わってたみたいだ。

「あ、なんでもないです。大丈夫です」

「じゃあそろそろ俺達部活に戻りますね」

「部活の途中だったんだ。頑張つてね。それとまた機会があつたらこうして遊びに来て、尾刈斗について教えて欲しい」

「はい!先輩が大好きだった尾刈斗のみんなについて教えますよ」

お大事に、と言いながら僕達は病室を後にする。

「紫藤君、ちよつといいかね」

帰ろうとしていると後ろから呼び止められる。

「え、豪炎寺さん？」

修也の父親、豪炎寺勝也がそこにいた。

☆☆☆

「突然呼び止めてすまないね。君と話がしたくて」

「そういえば、豪炎寺さんは稲津総合病院に勤めてらっしゃるんでしたね」

豪炎寺さんとは、影山に関するあれこれで顔見知りである。

最初は会うのが怖くて、資料とかだけ送ってやりとりは修也に任せるっていうスタイルでやっていた。でも豪炎寺さんが僕に感謝していて会いたいということで、会って話すことになった。

娘の命の恩人だと頭を下げられると、どうしてだかいつも申し訳ない気持ちになる。

「過去の影山の事件の被害者からの情報収集は今のところ順調だ。影山が関わっているとする状況証拠は集まりつつある。」

ただ、知り合いの弁護士と話したんだが、実際に裁判に持ち込もうなどとすると難し

いらしい。ほぼ全ての事件が過失致死などで判決が下されていて、具体的な証拠なくしてそれを覆すのは難しいそうだ」

「そうですか。本当にありがとうございます」

ほとんど成果はない、という風に豪炎寺さんは話すが、どれも僕や刃也だけじゃ到底できなかったことだ。子供2人での情報収集力なんてたかが知れているし、そんな凄い人脈も持っていない。やっぱり大人っていうのは頼りになるな。

帝国を倒し、世宇子も倒す。それが影山を失墜させる正攻法だと僕は思っているけど、司法に頼る方法だって諦めていなかった。

影山が警察内部とも繋がりを持っていることは気がかりだけど、豪炎寺さんもそれなりのコネがある。簡単にもみ消されたりはしないだろう。

そうそう、警察といえは、もちろんあの人も僕達の仲間だ。ずっと前から接触したいと思っていたけど、その方法を考えあぐねていた。

だから向こうから僕に接触してきたときは本当に驚いた。影山についての捜査の途中で同じように調べ回っている存在を知ったのだという。

「何やら考えこんでいるところ悪いが、今日はその影山の話をしに来たわけじゃない」「すいません、悪い癖で」

豪炎寺さんに言われてまた一人考えこんでいたことに気づいた。最近こういうこと

が多い気がする。

「影山と全く関係ない話ではないんだが、本題は多呂斗君のことだ」

「はい、つてえ？」

どうしてここで先輩の名前が？と少し驚くが、冷静に考えれば何もおかしな話では無かったことに気づく。

「もしかして、多呂斗先輩が言っていた医者というのが——」

「ああ、多呂斗占君の主治医は私だ」

世界は狭いというやつだ。先輩の症状を考えると豪炎寺さんが駆り出されるのも必然なのかもしれないけど。

「もう一度、彼が倒れたときの状況を教えてくれないか。監督さんからも話は聞いたが、同じフィールドに立っていた君からの視点も欲しい」

「作戦の都合で、先輩には試合の前半から負担が集中していました。後半も出すべきじゃなかったのに、先輩なら大丈夫だと思ってしまったんです。先輩自身も出たいと主張していて、つい頼ってしまいました」

聞かれていることはそんなことじゃないはずなのに、僕の口からは言い訳がこぼれる。言い訳をするということは、僕が自分が悪いと思っていることの何よりの証拠だ。

「ザ・タワーという必殺技があつて、最大で8 mくらいの高さから落下もしていました。最後の方は5 mもないくらいの高さでした。落下は2回ほど。不亂先輩という大柄な先輩がキャッチしてくれていた。ダメージはあまりないように僕には見えましたが」

「その時はなんともないように見えても、損傷は体に蓄積されていくものだ」

8 mから落下と聞いて少し面食らつたようにも見えたが、豪炎寺さんは冷静に何があつたか分析をする。

「そして試合終了間際、デスゾーンという必殺技を使われて、それを止めるために先輩は生身で立ち向かいました。胸のこのあたりでボールを受け止めて、シュートの勢いを失わせました」

自分の胸をこのあたりと指さしながら説明する。いわゆる胸トラップの位置だ。

「そしてその直後に試合終了の笛がなり、みんなが先輩のもとに駆け寄ろうとしたとき、先輩は倒れました」

「その倒れたというのは頭からか？」

「細かくは覚えていませんが、多分そうだったような気がします」

「なるほど……」

一通り僕の説明を聞き終えた豪炎寺さんは、今度は医者として先輩の今の状況につい

て話し始めてくれた。

「私も修也のサッカーの試合を見に行つたこともあるが、必殺シュートを生身で受け止めて大怪我をすることは理解できる。逆に今までほとんど怪我人がいなかったことが不思議で仕方がないくらいだ」

怪我也するときはするけど、サッカーの試合中つていつもよりも体が頑丈になる気がする。

不乱先輩もあれだけボコボコにされていながらほとんど怪我はなかつたし。いや、不亂先輩はもとから体が凄く頑丈なのか。

「彼は肋骨が複数箇所折れて、内臓も損傷していた。試合中盤までの疲労の蓄積がどれほどかは分からないが、そのデスゾーンとやらを受け止めたのが原因だと考えて間違いない」

だが、と言葉を区切つて豪炎寺さんは続ける。

「どうして記憶が失われたのかは私には分からないんだ。脳機能は私の得意分野のはずなんだが、彼の脳には一切異常が見られない。そもそも話を聞く限り、頭を打つたり心停止していたりなどは特になく、原因がどこにも見当たらない」

「原因がわからない限り、治療もできないってわけですか」

「そういうことだ。紫藤君、何か心当たりはないかね？ 倒れた日の試合以外でも、練習中

に頭を打ったりだとか、頭痛を訴えたりとか」

「僕の知る限りではありませんでした。そういうのなら、さつき一緒にいた黒上のほうがもう少し詳しく知っているかもしれない。普段から親しくしていたので」

頭を打ったなどは聞いたことがないが、僕なりに原因を推理することもできる気がした。転生者だとかそういうことは言うわけにはいかないから（言ったら間違いなく僕の脳が正常か疑われる）、少し濁して説明する必要があるけど。

「僕は医学的なことはわかりませんが、原因は脳ではなく心にあるような気がします」
「心……どういふ意味なんだ？」

心とは脳のことだ、とする考え方もある。実際、心が心臓にあると考えるよりも脳にあると考える方が自然だろう。心を「意識」と定義しても、「感情」と定義しても、あるいは「記憶」と定義してみても、それらは全て脳の機能にすぎない。専門家である豪炎寺さんはこんな議論もとつくにご存知なんだろうけど、僕はあえて脳と心を異なるものとして話した。

脳が異なるはずなのに記憶と意識と感情を共有する「転生者」という、今の理論のまさに反例となる存在がここにいるからだ。

多呂斗先輩の記憶喪失は、前世の記憶と関係がある。そう僕は確信に近いものを感じている。

「先輩は、忘れたいと思っただけのことがあったんじゃないでしょうか。心のどこかでそう望んでいたから、試合の怪我がきつかけとなって記憶喪失になった。僕はそう推察します」

多呂斗先輩の前世で何があったかは僕は全く知らない。話す暇もなく倒れて記憶を失ってしまったから。でも、僕の前世と多呂斗先輩の前世でまず間違いなく共通しているだろうことが一つだけある。それは、イナズマイレブンを見ていたということ。

「その忘れたいことは一体？」

「先輩は、影山の悪行について知っていました。その上で何もしなかったことを後悔しているようにも見えました。先輩が助ける義務なんてなかったはずなのに、知っていたら責任だけ感じるんです。」

そして、先輩はこれから起きることも知っているようでした。全てを救えるか分からないのに知っているということが辛いから、それならいつそ全部忘れることができた方がいいのに。そう先輩は思ったのかもしれないし、ありません」

一番辛いのは、変えられない過去の記憶ではない。変えたくても変えられないかもしれない未来の記憶だ。

「そうか、なるほどな。貴重な情報と意見をありがとう」

最後にもう一つだけ、豪炎寺さんは僕に質問する。

『知っていることが辛いから、いつそ忘れてしまいたい』これは君自身が考えていることだったりするか？』

修也によく似た瞳が僕を貫く。ただ先輩の考えを推測してみただけですよ、といつもみたいに生意気に言えばいいのに、豪炎寺さんを前にして嘘をつき通せる気がしなかった。

「そう、かもしれません。」

ただ何にも知らずにみんなとサッカーできるなら、それが一番幸せなんだと思います」

そう僕はしおらしく答えた。全く僕らしくない。

「そうか、君は十分頑張ってる。どう見ても頑張りすぎているくらいに。もつと頑張った自分を褒めて、そしてもつと大人を頼ってみても良いんだ」

豪炎寺さんが優しく諭すように話してくれる。

でも、全部を打ち明けることなんてできない。僕は一人で戦わなきゃいけない。

「ありがとうございます」

そう豪炎寺さんにお礼を言っつて病院を離れる。

唯一の秘密の共有者になりうると思った多呂斗先輩が記憶を失ったということは、思ったより僕の心にダメージを与えているのかもしれない。いつもより重い足どりで歩きながら、そんなことを冷静に考えていた。

38 思惑

「突然ですが、『死』ってなんだと思います?」

「辞書を引くか、法医学についてでも学んだらどうだ? 私は哲学は好きではない」

小さなアパートで、死について問う若い男。年老いた男は真面目に取り合う気がないようで、そのことに気づいた若い男は一人で語り始めることにした。

「僕が思うに、死ぬということは断絶することだと思えます。確かに一般には脳死だとか心停止だとかが死の定義だとされることが多いんですが、それは本質じゃない。だって現に、僕は一度脳も心臓もトラックに潰されたはずなのに、こうして生きています」

何の反応も示さない年老いた男を前に、若い男はさらに続ける。

「生きるというのは記憶と意識の連続のことで、それが途切れたときが『死』なんじゃないですか?」

「つまり君は何が言いたい?」

「あなたが彼女を殺したんじゃないかってことです」

憎しみとも憐れみともとれる目で、年老いた男を見る。

「生憎だが、私は多呂斗を潰せなどと命令をした記憶はない。私は無関係だ」
「なるほど。これは一本取られましたね」

先程の自分自身の理論を使って上手く言い返された若い男は、険しい顔からうつつかわって楽しそうに笑う。

「それと今、お前は『彼女』と言ったな。多呂斗は女性だったのか？」

「ええ、はい。女性でした」

そう言いながら若い男は、1冊のノートブックを取り出して掲げる。

「彼女の部屋から見つけました。日記帳です」

「全く。どうやって手に入れたのやら」

「ワープドライブですよ。便利ですよね」

ワープを発生させる手の動きをジェスチャーして説明する若い男。つまるところ、不法侵入である。

「最近色んな必殺技が覚えられるようになって楽しいんですよ。チートですよねこれ」

「そうか、それで何が書いてあるんだ？」

「それはそれは色々。前世は女性だったようで、日記の中の一人称は『私』でした。

前世から尾刈斗中のことが好きだったようで——今趣味悪いなって考えましたね。まあ気持ちちは分かります。

昔から尾刈斗でサツカーするのが夢だったようです。小学生の頃にデیفエンス技のザ・タワーを覚えてからそれなりに活躍していたそうですが、原作に介入する気はないタイプで、尾刈斗でのんびりしようと考えていたようです。大好きな尾刈斗を眺めているのが幸せだそう。そのために監視カメラを仕掛けるのはやりすぎだと思いますが」

「観察するために監視カメラを仕掛けるなんて、それはまた趣味が悪い」
「あなたが言えることじゃありませんよ」

「それでも、素敵な人だと僕は思いますよ。大切な人のために命を賭けるのは普通の人にはできません。というか彼女、日記の最後のページを見た限り死ぬかもしれない覚悟があつたようですし」

「それは本当か？」

「ええ。監視カメラや原作知識があつたとはいえ、彼女の予知能力は本物です。『この日記を書くのはきつとこれが最後になる』って、分かっていたのに彼女は試合に出たんです」

日記の最後の部分を読み上げながら、多呂斗占がどんな気持ちで試合に挑んだのか若い男は考える。

「そもそもだがあの試合、彼女はそれほど頑張る必要があったのか？彼女以外の選手は実力をやや隠しているように見えた」

「それについても日記に書いていますね。『切り札はFFまで隠さなきゃいけない。次の試合で目立つのは私だけでいい』だそうです。勝つための策も無いわけじゃなかったのに、次に繋げるためにそれを隠したんです。自分が犠牲になることが分かっていたとしても」

「やはりそうか。それにしても、勝利のために自分の命すらも犠牲にできるとはな」

「あなたとは気が合いそうですね」

「なんのことやら」

「そもそも、あの試合自体が尾刈斗監督の作戦のうちだったようですね。多呂斗が倒れることに関しては、さすがに監督は想定していなかったようですが」

「あの監督はなかなか頭が切れる男だ」

「それにしても、帝国メンバー全員に呪いをかけるとは、なかなかえげつないことをしますよね」

例の試合で多呂斗が倒れたあと、尾刈斗の監督が帝国のメンバー全員に、これから2週間の間試合で実力を発揮できなくなるといって催眠術をかけた。

プロトコルオメガのマインドコントロールと同じ理論ですね、と呟きながらあの催眠術の意味を推測する。無敵のはずの帝国が、ザ・タワー籠城作戦などという意味不明な作戦を前に引き分けに終わったというのは、帝国メンバーにとっては大きな屈辱で、自信を喪失させられただろう。そして精神が不安定になったスキに催眠術をかけるという算段だったのではないか。

「あ、そういえばフランも似たような感じでしたね」

「何の話か分からないが、催眠術をかけること自体が目的だと考えているようではまだまだ」

「え、違うんですか？催眠術をかけることでFFの勝ちを磐石にしようってことだと思っていたんですか」

「まさか。彼らはそんな手段で納得しない。奇を衒っているように見えて、中身は円堂と同じようなサッカーバカだ」

「あなたがサッカーバカを語るなんて珍しいですが。でも催眠術をかけたということは正々堂々と試合をすることなんてできないでしょう？」

「少年サッカー協会副会長の権力を舐めるなということだ」

——若い男はその数時間後に、年老いた男の言葉の意味を知ることになる。

少年サッカー協会は、FFの開催を例年より3週間遅らせることを宣言した。

そしてそれもまた尾刈斗の思惑どおりであることを若い男が知るのは、もう少しあとのこと。

クーデター編

39 こつくりさん

今日は8月23日。FFの決勝戦があるはずの日で、すなわちエイリア学園の襲撃が始まるはずの日だ。

FFを延期させるにあたって、一番気がかりだったのは今日だった。

この世界がアニメの時系列に沿っていると考えるならば、FFの決勝戦の直後にジェミニストームが現れて各地の学校を破壊して回る。その行動の裏には「FFで大活躍だった優勝校をサッカーで圧倒することで、ハイソルジャーの兵器としての実用性を見せつける」という意図があったと思う。影山がエリア皇帝陛下、すなわち吉良星二郎と繋がっていたという情報をもとに考えると、王者帝国を圧倒的な力で打ち負かした世子中学をさらに圧倒的な力で打ち負かすところまでが計画だったのかもしれない。

となると、エイリアの計画はFFが終了するのを待つ必要がある。つまりこの8月23日という日付自体は重要ではない、はず。

不安だけど、監督や他のみんなには相談することができない。多呂斗先輩がいたら、

なんでも話すことができたのに。

なんて考え事をしていたら、つまずいて転けてしまった。ルーレットのように回転する地面に体を持っていかれ、巻き添えで一緒に走っていた魔界先輩も転んでしまう。幽谷は僕らの屍（チームメイトの屍の話ではない）をひよひよいと飛び越え回避していた。

「すみません……」

「気にすんなって」

「これっていつまで続くんですか？冗談じゃなくもうすぐ死にますよ」

真面目な幽谷も珍しく不平を垂れる。それくらいにこれはしんどいのだ。

「始まってから体感1時間くらいで、確か時間設定は1万秒だから……1万秒ってどれくらいだっけ？」

「えっと、2時間40分くらい？」

「サンキュ紫藤、てことは残り1時間40分くらいか。長えな」

「それにしても40年間誇りを被っていたはずの施設がちゃんと電気も通って動いているの意味分かんないですよ」

「40年前の雷門の監督が凄く自由奔放なサッカーバカで、莫大な資金を投じて最新鋭の技術を駆使して作ったんじゃない？多分だけ」

そう言いながら、大介さんなら周囲に反対されてもやりそうだななんて考える。言い忘れてたけど僕らが今いる場所は雷門の地下、イナビカリ修練場だ。

どうしてここを使わせてもらうことになったのかと言うと、話は1週間ほど前に遡る。

☆☆☆

「こつくりさん？」

「そうそう、今後の方針をこつくりさんに尋ねてみようかと思って」

「紫藤がそんなこと言うのは珍しいな。そういうの信じないタイプかと思ってた」

まあ実際そんなに信じてないんだけど。これくらいしか方法が思いつかなかつたんだ。

「こつくりさんは科学的に説明されています」

秀才の円谷が茶々を入れてくる。尾刈斗の中でもオカルト現象に対するスタンスは人それぞれで、スピリチュアルなものを信じている人もいればあくまで科学的にSF的

に考察する人もいる。円谷は典型的な後者パターンだ。

「こっくりさんは西洋のテーブルニングに起源を持つとされますが、日本でも明治時代から井上円了などがその原理を解明しています。参加者の潜在意識、あるいは不覚筋動によるものです」

「井上円了……妖怪研究の創始者」

円谷の話に珍しく反応したのは柳田。

「柳田もこっくりさんは存在しない派か？」

「い、いや……そういうわけじゃありません。確かに井上円了はこっくりさんを誤怪だと判断して、それには科学的な根拠がありますが……存在しないことを証明したわけではありません」

「なるほど。だがそれは悪魔の証明だろ？」

魔界先輩が手厳しい指摘をする。確かに存在しないことを証明できるはずなどない。

「そ、それもそうなんですけど……こっくりさんの場合、多くの人に存在を信じられています。人の思いによってモノが妖怪となる例は多数ありますし、多くの人の言わば信仰によってこっくりさんが存在するようになってもお不思議ではない、と僕は思います」

一理あるようなないような。

「それじゃあこの中でこっくりさんを信じてるって人は手を挙げてみてよ」

何となく気になるので、今部屋にいる面々に肯定派か否定派か質問をぶつけてみる。意外にも、手を挙げたのは僕と柳田と八墓と三途の4人だけだった。

「へー、他のみんなは信じてないんだ」

「というより、興味がありませんね。東洋のちよつとした都市伝説なんて、俺にとつては子供騙しにすぎません」

「いや、こつくりさんの起源は西洋だつて円谷が言つてたつしよ」という人形のツツコミは無視して、武羅渡は優雅にトマトジュースを飲んでいる。

そういえば、月村先輩や木乃伊や靈幻など、日本以外のモンスターをアイデンティイにしてる人達は手を挙げていないつぽい。だから何つて話だけど、ちよつと興味深い。

「じゃあ信じてる僕達4人でやろうよ」

そこからトントン拍子に準備が進む。僕が財布から十円玉を取り出している間に八墓が紙に鳥居と五十音などを書いていた。意外と達筆な八墓の文字に驚きながら、鳥居の絵の上に十円玉を置く。

みんなで十円玉に指を乗せる。

「始めよ」

「こっくりさん、こっくりさん、どうぞおいでください。もしおいでになられましたら、はい」にお進みください」

十円玉がゆっくりと「はい」の方に進んでいく。自分で動かしているのではなく、何かに引つ張られるような感覚。

これがフカキンドウつてやつか。よく分かんないけど勝手に納得する。「じゃあ僕からこっくりさんに質問するね」

十円玉を鳥居の位置に戻し、言い出しつぺの僕が最初に質問を試してみる。

「こっくりさん、こっくりさん、僕達は帝国学園に勝てますか？」

十円玉は再び「はい」へと進んでいく。もしこれがみんなの無意識的な意思によるものだとすると、みんな帝国に勝てる、あるいは勝つてやると思っているということだ。そう思うとなんだか嬉しい。

「僕達勝てるんだってさ」

じゃあ次は僕の番かなと三途が続いて質問する。

「こっくりさん、こっくりさん、僕達が勝つために必要な戦術はなんですか？」

十円玉はまた動き始める。「ま」「ん」「け」「つ」と4文字を示したあと、

十円玉は動かなくなつた。紙には濁音を用意していなかつたから濁点を補完して読む

と、まんげつ、すなわち満月となる。

「やっぱり満月の月村先輩を軸にするのが良いみたいだね」

既に分かりきっていることを聞いても意味が無いような気もするけど、方針が固まったという意味では良かったのかもしれない。

「時計回りで質問していつてるから、次は八墓の番だ」

「こつくりさん、こつくりさん、俺が次に覚えるべき必殺技はなんですか？」

十円玉はまず「か」へと移動する。「か」から始まる必殺技って何があったっけ。か、か……かつとびデیفエンス？

そう頓珍漢な推理をしている間に十円玉は「ま」へと動いていく。なるほど、やっと分かったぞ。つまり次は「い」だね。

そして予想通り、十円玉は「い」に動いていく。少しは僕が動かしているのかもかもしれない。ただ「ま」に行つたときまでは僕にはなんの必殺技も見当がついていなかったから、僕以外の3人の中に「カマイタチ」を完成させようと動かししている人がいるのだろうか。多分だけど。

そしてその後「た」「ち」と移動し、ドリブル技の名前が浮かび上がる。

「なるほど……カマイタチか」

「じゃ、じゃあ次は僕です……」

こっくりさん、こっくりさん、どうしたら自分に自信が持てますか？」

柳田は少し怯えながらこっくりさんに尋ねる。

自分に自信を持つ方法。僕なりの答えがある。それは――

「し、ふ、ん、を、あ、い、す。自分を、愛す……う？」

「自分を愛せば自分自身の素敵さに気づけるってことだ。まあせいぜい頑張りな」

月村先輩が先輩面して柳田になんか良いことを言っている。実際その通りだと僕も思う。

「ぐふふふつ。それが一番大切で……一番難しい」

「柳田なら上手くやれる。俺が保証してやるからよ」

屍や人形が柳田を励ますように声をかける。このチームには素敵な人がたくさんいる。きつともうすぐすれば、自分を好きになることができる気がする。

「人生啓発も大切だけど、こっくりさん放置しとくのは良くないんじゃない？途中で指離したりしたら呪われるんだろ？」

「魔界先輩はこっくりさん信じてるわけじゃないのにそんなこと気にするんですね」

「だってそりゃ、こっくりさんに乗り移られるとか気味悪いじゃん」

以前言っていた魔界先輩実は怖がり説が再浮上。ってそんなのはどうでもよくて、せつかく話をこっくりさんに戻してもらったのでさっさと要件を済ませよう。実際指

を十円玉に乗せ続けるのも辛かったし。

「じゃあ二周目の質問をするね。こつくりさん、こつくりさん、僕達の最適な特訓方法はなんですか？」

この質問が本題だ。鳥居に置かれている十円玉をまずは「ら」へと移動させる。続いて「い」「も」「ん」「へ」と。「雷門？」と首をかしげる3人をよそに、次々に十円玉を動かしていく。自分で動かしているはずなのに、途中から十円玉に動かされているような気もしてきた。この奇妙な感覚がこつくりさんの迷信を広めることになったのかな。

なんて考えている間に十円玉の動きが止まった。

「ら、い、も、ん、ち、か、し、ゆ、う、れ、ん、し、よ、う。最初の4つは雷門かな。チカシユウレンしよう？チカシユウレンってなんだろう」

すぐに分かりすぎるのも不自然だから、あえてちよつとぼけてみる。

「つまりこれはこつくりさんがいないということが証明されたのでは？」

こつくりさん否定派の円谷がこれがチャンスだと乱入してくる。

「そ、そんなはずありません……僕達がちゃんと読めてないだけで、こつくりさんは意味のある何かを伝えててくれているはずです」

「その話はみんなの質問が終わってこっくりさんを帰してからにしない？ 解読は一旦後回しで」

と三途の提案でこっくりさんへの質問を再開する。

「僕は生きていますか？」が三途の2回目の質問で、答えは当然「はい」だった。そりやそうだ。

「儀式に求められるカエルの腸は他の両生類で代用できますか？」というかなり意味不明な質問をしたのは八墓だ。試合中にわざわざ火をつけた蠟燭を頭に巻き付けるのもずつと意味不明だったけど、こうして謎の儀式とやらについて話されると、髪で顔が窺えないのもあってかなり不気味だ。

ちなみに答えは「いいえ」。ヤモリじやダメらしい。

「妖怪は日本以外にも生息しますか？」が柳田の2回目の質問で、答えは「はい」。ライオコツト島に河童がいたから生息するのは確かかもしれないけど、柳田にとって日本に河童が生存することは当たり前前提ってことなのか。

「妖怪は日本にのみ生息するのか、日本以外では正しく認知されていないだけなのか常々気になっていたけど、これで妖怪は世界共通であることが示された。海外で伝承されるモンスターは日本の妖怪と同種である可能性が……」と急にぶつぶつ語り出した柳

田には驚いた。さつきまでの弱々しきはどこに行ったんだろう。

みんなが思い思いの質問をした後、こつくりさんにお礼を言い、お帰りくださいと鳥居に帰した。

「もう手を離していいんだよね？」

「大丈夫なはず」

こつくりさんを信じていないはずなのに少し怖くなって恐る恐る十円玉から手を離す。手を離れた途端安堵に包まれて、自分がずっと緊張していたことに気づいた。

そしてその後解読できなかった「らいもんちかしゆうれんしよう」をみんなで頑張つて解読し、雷門の地下に修練場という特訓場所があるのだろうという結論に達した。

解読が終わったあと、「紫藤ってインサイダーみたい」と人形が僕に言ってきた。マダミス部でインサイダーゲームというゲームをすることがある人形によると、僕は答えを知った上で答えに誘導しているように見えたという。気のせいだろうけど、と言っていたけどまさにその通りだった。

この学校の人達はたまに察しが良すぎるから困る。

☆☆☆

お宅の地下に修練場があるらしいんですが、使わせてもらおうことってできますか？と雷門の生徒会長である夏末に突撃する。何のことを言ってるのか分からず困惑されたので、こっくりさんに教えてもらったと説明すれば余計困惑された。雷門中と尾刈斗中での交流イベントを企画してもらったり、なかなか夏末には懇意にしてもらってたわけだけど、今回ばかりはかなり引かれたのを感じる。危うく尾刈斗と縁を切られるところだったかもしれない。

なんとか説得して地下に謎の施設がないか図面を調べてもらったところ、やはり修練場があったことが発覚する。

「あなたたち、一体どこでこんな情報を手に入れたのかしら？」と冷たい目で睨まれる。人によつてはご褒美なのかもしれないが、僕は怯えて「その、ほんとに、こっくりさんがそう教えてくれて……」と釈明する。こっくりさんをしたつてのは嘘じゃないもん。

夏末は少し何かを計算するかのようを考え込んだあと口を開いた。

「この修練場はあくまで雷門のもんです。しかしあなた達がいなければ発見できなかつたのも事実。

基本的に雷門の生徒が利用し、空いた時間にあなた達が使用するのも認めることにし

ます。いかがかしら？詳しいことはサッカー部のキャプテンの円堂君と話し合っ
て欲しいけれど、私があると云おうと彼なら快く修練場を貸し出すと思うわ」

「あ、ありがとう！」

説得は上手くいった。説得が通らなかつた場合、催眠術……はさすがにしない
けれど、円堂の個人情報などを交換材料に取引を持ちかけるところだった。

そんなこんなで僕達はイナビカリ修練場を使うことができるようになったのだ。

☆☆☆

ピピピツとタイマーが鳴ったあと、ガタツと扉が自動で開けられる。なんてハイテク
なんだと感動している余裕はない。ただ地獄を生き延びたことに安心する。

「ほんとうにキツかったアル」

「僕って実はもう死んでたりしない？」

かなりハードな特訓に、みんな死にかけ状態だ。

「そうか？オレはまだまだ遊び足りねえけどな」

月村先輩を除いたみんな、だった。今日8月23日は満月。先輩は絶好調である。

「もうちよい特訓してくるぜー」と奥に消えていった先輩に「月が出るまでには帰ってくださいよー」と一応声をかけておいて、残りのみんなは先に帰ることする。帰り道を歩くのも精一杯だ。

そういえば、幽谷に聞いておきたいことがあったのだった。

「ちよつとさつきこっくりさんの話を思い出してただけど、幽谷つてこっくりさん否定派なんだっけ？」

こっくりさんを信じる人に手を挙げさせたとき、幽谷は手を挙げなかった。というより、全く会話の輪に入っていないなかったような気がする。

「だって、俺が言えば面白くないじゃないですか。俺は答えが視えてますから」
幽谷はバンダナで隠した自分の目に手を当てる。

「それじゃあ、結局答えはいるのかいなのかどつちなのか？ 答え合わせをしたいんだけど」

信じていないつもりだったけど、やっぱり分からないままというのは落ち着かない。

「俺が言わなくても、参加していた先輩は答えを分かっていると思います。動かされている感覚、あつたんじやないですか？」

40 いざフットボールフロンティア

「フットボールフロンティア！フットボール！フロンティア！」

フから始まる言葉しか話せない呪いをかけられたかのように、その言葉を連呼する円堂。もしかしたら助けを求めているのかもしれないと円堂の顔を注視してみたが、めちゃめちゃ楽しそうだったので、たとえ呪いにかけていたのだとしても助ける必要はないと判断した。

「最近ずつとこの調子なんだ」

呆れた様子の風丸に大変だねと相槌を打つ。

「だってフットボールでフロンティアなんだぞ！」と円堂は主張するがやっぱり何言ってるのか分からない。

「それで、フットボールフロンティアの予選の組み合わせが決まるのはいつなんだっけ」

「それは……知らない！」

「今日の夜。冬海監督が抽選に行くってくれるそうさ」

円堂の代わりに答えるのは、やっぱり頼れる副部長の風丸だ。名目上部長は円堂と

なっているが、先生や生徒会とのやりとりなどの仕事は風丸が担当しているらしい。

それにしても冬海監督か……影山に買収されてなきやいいけど。豪炎寺がいるわけでもないし、雷門がそんなに帝国からマークされてるはずがない。よね？

「それでだな、対戦相手はまだ決まっていらないが、フットボールフロンティアに向けて作戦会議をしていきたい」

「尾刈斗戦で、俺たちの問題点が分かった。それでこんなフォーメーションを考えただ。じいちゃんのメモがベースなんだけども」

僕が見ているというのも気にせずに、円堂はホワイトボードに書かれた新しいフォーメーションを説明する。流石部長、サッカーへの熱意じゃ誰にも負けていない。

染岡のワントップ、今までとそんなに変わったわけじゃないみたいだ。風丸が中盤まで上がって全体的に攻撃的になったようだけど、守りは円堂任せでも十分だと判断したのか。

ただ少し気になることがあるというか……部外者だけど構わず口を出してみよう。部外者だからこそ言えることだと思ってあると思う。

「ていうか皆、この11人のままフットボールフロンティアに挑むつもり？」

「え？」

「控えもないから誰か怪我したら10人でプレーしなきゃだよ？試合にフルで出場できる体力があるのか疑問の残る人もいるし……」

主に目金とか目金とか。

「もう少し部員を集めてみたほうがいいんじゃないの？」

「それはだな……できないんだ。円堂が頑張つて勧誘してくれてたんだが、頑張りがすぎでだな、ほかの全ての部活の部室と活動場所が俺達は出禁を食らった。あと教室や廊下での勧誘も迷惑だから止めろと先生から注意を受けてる」

「残ってる場所はトイレくらいしかないんだけど、もしボク達がトイレ立入禁止なんてことになったら大変だから勧誘は一旦諦めてる。一応ポスターとかは貼っつけてあるんだけど」

「雷門もいろいろ大変なんだね。えーっと、うん、頑張つて」

サッカー部の現状が八方塞がりっぽいので無責任に応援をしたけど、どうなるんだろうこれ。目金がずっとスタメンってのは不安しかない。

「そうだ！紫藤がチームに入ってくれないか？」

「いやルール上無理だろ。紫藤は尾刈斗生だし、自分のチームがあるし」

円堂の錯乱した発言に、ツツコミ係（だと僕が勝手に思っている）半田がちゃんとツツ

喜んでくれた。

「ていうかそもそも、その尾刈斗生の紫藤が、なんで雷門のミーティングに参加してるんだ？」

厳しい顔の染岡に問い詰められるけど、「別にいーじゃん」と軽く答える。昔はこれが怖かったんだけど、慣れたらもう全然萎縮もしないもんだね。

イナビカリ修練所の特訓の後に雷門のメンツに混じって駄弁るとというのが習慣化していたんだけど、あまりにも僕が雷門に馴染みすぎていたのか、何故か僕を追い出さずにミーティングを始めたんだ。

僕に敵情視察の機会を与えた円堂達が悪い。

「フットボールフロンティアの雷門戦に備えるため、ここで聞いた作戦の内容は全部尾刈斗に持ち帰らせてもらうつもりだよ」

「対策されたとしても負ける気は無いぞ！」

「僕も円堂達に負ける気はさらさらないからね」

円堂と見つめあつて笑い合う。何だかライバルみたいだ。

「そのためにもまずは予選を勝ち抜かないとな。木戸川の対策から考えようぜ」

「え?」

円堂と一緒に素っ頓狂な声をあげる。

「え?」

僕達が驚いたことに驚いて、半田も声をあげる。

「円堂も紫藤も知らないのか? 雷門と尾刈斗は別の地区だぞ」

「えー?!」

「円堂はともかく紫藤も知らなかったのは意外だな。普通それくらい調べるだろ」

風丸が呆れたような目で僕達を見る。いつもの円堂を見るときの目線を僕にも向けるのはやめてよ。

「ほんとに雷門と尾刈斗と別地区なの?」

「隣町だから同じ地区だと思ってしまうのも無理はないだろうが、ちょうど稲妻町と尾刈斗町の境が東京Bと東京Aの境界になるんだ。」

実際過去にも一度だけ雷門はF Fに参加したことがあるが、その時も東京B地区で出場していたらしいしな」

原作では雷門は帝国や尾刈斗と同じ地区で出場していたから、それについて全く疑いかなかったのだけれど、雷門が東京Aで出場していたことの方がイレギュラーなこと

だったのかもしれない。

御影専農など自分の配下が多い東京A地区で出場させることで、雷門の動きを制御しやすくする。おおかたそんな狙いで影山は雷門の出場地区を操作したのだろう。

「そっか、そうだったのか。なるほど。東京B地区つてことは雷門は修也率いる木戸川に勝たないとなのか。大変だね」

「紫藤もそんなこと言ってる余裕はあるのか？俺達と戦うつてことはあの帝国に勝たないといけないんだぞ」

「それは分かってるよ。帝国には本気で勝つつもりでいるからね。僕達が帝国に勝てるつてことはこっくりさんが証明してくれているよ」

「紫藤さんつて尾刈斗ツスね」

「そうでやんすね」

「なんでだか変人だと思われてる気がする。おかしい。僕は尾刈斗の中では常識人のはずだもん！」

★★★

夜、少年サッカー協会本部。まさに敵の本拠地とも言える場所に私は乗り込んでいた。

たかが抽選ごときでどうしてこれだけ派手に盛り上げようとするのか私にはさっぱり分からないが、カラフルにライトアップされなぜかへりまで飛んでいる。彼の手下として働いていた頃から常々思っていたが影山は金の使い方が下手だ。出処不明の金を使つて装飾にこだわつた施設ばかり作つている。

ウサギの被り物をしたバニーガール——これはもはやバニーガールと言えるのかは分からないが——が、抽選を執り行う。全くセンスが悪い。尾刈斗の個性的な生徒達を見習つて欲しいものだ。

バラエティ番組で見たことがあるようなエア―抽選機の中を各チームの監督の似顔絵が書かれたボールがふわふわ漂つている。もちろんその中には私、地木流灰人の似顔絵が描かれたボールもあるのだろう。最初にFFに参加した年、似顔絵を描かせてくださいと言われて本当に驚いたのを覚えている。どうしてこんな分かりづらい方法を採用するのだろうか。

バニーガールがボタンを押すとボールのひとつが抽選機から出てきて、バニーガールの持つているシルクハットに入る。

「くだらないな……」

思わず呟いてしまったが、周りの監督方の耳には入らなかつたようで安堵する。

今どきどんなに下手な手品師でもやらないような雑な手口だ。シルクハットの中に予めボールを入れ、入ってきたボールとすりかえる。そうすることで予選の組み合わせを自由に操作することができるといふ仕組みだ。

左のバニーガールが取り出したボールには、御影専農の監督、富山新一郎の似顔絵。そして右のバニーガールが取り出したのは私の似顔絵。

尾刈斗の初戦の相手は御影専農に決定した。

影山の計画通りの対戦相手なのだろう。今からシルクハットの中身を暴けば不正を告発することもできるのかもしれないが、尾刈斗の皆が御影専農に負けるとは思っていない。このままで構わない。

御影専農と言えば最近影山と手を組み始めた学校で、帝国の所有する大量のデータ元に試合を組み立てる徹底的なデータサッカーが特徴的だ。

プレーを分析され、着実に攻撃の芽を摘まれるというのは選手にとってなかなかストレスが溜まるものである。その上御影専農は分析した選手をトレースしたりもする。うだから、対戦したチームはいつもの調子でプレーできなくなることだろう。場合によっては、試合が終わったあとも不調が続くかもしれない。

以前帝国に催眠術をかけた意趣返しのもつりでも私達と対戦させたのだろうか。もつ

とも、私の教え子達はその程度で調子を崩すほどヤワではないが。

御影専農との初戦は明々後日。

それまでに、私の最後の仕事を終わらせなければならぬ。

作戦の決行は、明日だ。

4 1 たくらみ

校長はだだっ広い校長室に一人、落ち着かない様子で無駄に豪華な椅子に座っていた。

そこに彼——柳田しげるは体を震わせながら入ってくる。

柳田はこの場所で「帝国の勝利は磐石だ」と約束してみせたのに、結果は引き分け。一体どんな制裁を受けることになるのか恐怖していることだろう。

『ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい』

ただひたすらに虚ろな目で謝り続ける柳田の姿は、まるで親から一度も肯定されてこなかった子供のようでもとも哀れだ。彼の「過去」を考えると仕方がないのだろうか。

『お前は自分が何をしたのか分かっていいるのか？あの帝国の顔に泥を塗ったのだぞ』

校長は柳田を厳しく叱責する。ただこの校長もまた、ついさつき影山から叱責の電話を貰ったところである。帝国の顔に泥を塗ったのだぞという言い回しは、影山に言われた言葉そのままだ。

そして影山はこうも続けていた。『このまま尾刈斗が何事もなくFFに出場してしまつては困る。後は——分かったな？これが貴様への最後のチャンスだ』

自分が怒られたことを下の者のせいにして自分の鬱憤をぶつけるというのは、まさにブラックな企業そのものだ。そしてブラック企業というものは大抵、仕事を部下に押し付けるものである。

『柳田、お前に最後のチャンスをやろう。なんとかして尾刈斗のフットボールフロンティア参加を阻止せよ。さすればお前を帝国に編入させてやっても構わん』

その言葉を聞いた柳田は『任せてください』と覚悟の決まった目で即答した。

『帝国に入るためなら、僕はなんでもやります』

柳田は地獄で一筋の光明を見たかのように、その提案に縋りついた。行き着く先がまた別の地獄に過ぎないとしても。

柳田の「過去」は壮絶そのものだ。キャリアウーマンだった母親は、子育てでキャリアを捨てることに納得がいかず、そのストレスの捌け口として息子を虐待した。

かつて帝国に入学することを夢見てそれが叶わなかった父親は、学歴にコンプレックスを抱き続け、息子に帝国に行くように強制した。勉強をせずに成績が悪くなると厳しく叱られたが、真面目に勉強している間は暴力を振るわれることもなかったから、柳田は勉強がそこまで嫌いではなかった。自分が頑張つて帝国に入学することさえできれば、両親も喜んでくれて普通の平和な家族になれる。柳田はそう信じていた。

だがそんな普通で平和な日常は訪れなかった。有り体に言えば、才能がなかった。た

だそれだけだった。

『僕が帝国への受験を失敗したせいで家庭が崩壊して……でも、僕が帝国に行くことができたなら、もう誰も僕のことを出来損ないだなんて言わないんです』

『そうか、それなら君は頑張らないといけないね』

校長は悪魔のような微笑みを柳田に向ける。

もし本当に柳田が帝国に行けなかったことで精神的虐待を受けているのなら、校長は教育者としてしかるべき機関に報告するべきだ。それをしないのは教育者失格である。

影山との協力によって得た尾刈斗中学校長という立場をみすみす失いたくない。ただただ醜い男だ。

両親はあれから喧嘩が絶えず、柳田に対して出来損ないだと罵ることなく優しく話しかけることも一度もなかった。こんな悲惨な現状を変えるには、尾刈斗のFF出場をなんとしてでも阻止して、影山直々に入学を認めてもらうしかない。今の柳田の考えはそれだけだ。

読んでいて苦しくなるタイプの鬱系の小説かのように、柳田の過去の設定はヘビーだ。正直どんどん設定が思いついてしまつて必要以上に重くしてしまつただけど許

してほしい。

尾刈斗を裏切って影山の下に付く理由付けが必要だったためにこんな感じになったが、そもそも帝国に受験失敗したとしてわざわざこの尾刈斗に来た理由が全然説明できていない。でもまあ些細な問題なので。お願い見逃して。

追い詰められた柳田の精神状態を見透かしたかのように、校長はこう持ちかける。

『君の夢を叶えるために、私が少し知恵を貸してやろう。なあに、そう難しい話ではない。尾刈斗イレブンは対外試合などの移動のときに、バスを使うだろうか？』

バス。みなまで言わずとも、イナズマイレブンを見たことある人なら何が行われるか予想がつくだろう。

40年前に影山が響木らイナズマイレブンに対して行ったこと。そして原作で冬海が円堂ら雷門イレブンに行ったこと。

『バスのブレーキオイルを抜くんだ。そうすれば彼らの乗るバスは事故を起こし、フットボールフロンティアに参加することが出来なくなる』

『それは……犯罪じゃないんですか？』

『いいや大丈夫だ。このことはきつと総帥がもみ消してくれる。君の帝国での学園生活は総帥が保証してくれているから、何も心配することはないんだ。』

それともあれかね？犯罪者になることが怖いのかな。君は帝国に入るためには何でもするんじゃないのか？』

校長はじわりじわりと柳田を追い詰めていく。柳田が言ったように、ブレイキオイルを抜くというのはれっきとした犯罪であり、ただの殺人行為である。

総帥ならもみ消せるなどと大口を叩いたものの、自分で手を汚さずに柳田に実行させようとしているのは、本当に影山が手を貸してくれるか確証が持てないからであろう。影山に切り捨てられるのは柳田だけでいい。そんな校長の小賢しい考えが見え透く。

柳田のバスへの細工が明るみになった際には、殺人教唆で罪に問われる可能性もあるが、唆した証拠もなく、柳田の精神状態が不安定であることを鑑みるに、有罪となることはないだろう。そう校長は高を括っている。

どこまでも救いようのない男だ。

「もう、証拠は十分すぎるほど集まりましたよね？」

校長室で校長が柳田を唆している決定的場面の監視カメラ映像を見ながら、僕はそう尋ねた。

☆☆☆

これだけの証拠があれば起訴できる、というOKサインを貰って、僕は部室を飛び出した。

向かった先はもちろん、校長室。

乱暴にドアを蹴り開け、すかさずパチンと手を叩く。

「猫騙し！正気に戻った？」

「ああ、はい。ありがとうございます」

「一体これはどういうことだ？」

突然校長室に突入してきた僕と、猫騙しを受けてすっかり目の生気も取り戻した柳田の姿を交互に見て、校長はようやく自分が嵌められたのだということに思い至る。

「前回柳田があそこに監視カメラを仕掛けてくれてね、それで校長先生が面白いことを言ってくれないかなってみんなで見てたんだけど、まさかこんなに怖い犯罪を企てていたなんて思ってたよ」

校長室の隅に置かれた監視カメラを指さした後、僕は精一杯馬鹿にした顔を作って校長に向ける。

「ちなみに、これのおおまかな脚本を考えたのは俺ね。結構ダークな設定盛り込みすぎ

たけど、意外とリアリティーあったっしょ」

そう言いながらまた校長室に入ってきたのは、尾刈斗の虚言癖こと人形幻ひとがたげん。柳田の過去設定のほとんどは人形が考えてくれた。

この作戦で一番頑張ってくれたのは間違いない柳田だが、柳田の次の功労者は人形だろう。「ゲーム以外で人を騙すっての、人生で一度はやってみたかったんだよね」と隣でケラケラ笑っている本人は、頑張ったなどという実感は全然ないのかもしれないが。

尾刈斗イレブンは揃いも揃って狂人ばかりである。

「あれは全部、演技だったとでも言うのか？」

自分が今最悪の状況に置かれていると次第に理解しつつも、まだ信じられない様子の校長。

まあ確かに、柳田のあれが全部演技だったとしたら凄すぎる。子役としてスカウトされてアカデミー賞間違いなしだ。でも実際は演じていたというわけでもなく……

「監督に暗示をかけてもらいました。設定が真実だと思い込めるように。『敵を騙すにはまず自分から』って人形さんが言っていたので」

ちなみにさっきの猫騙しはこの暗示を解くためのものである。

「くそつ、どうすれば……」

「監視カメラの映像はパソコンで取り込んだ後、さらに円谷にクラウドにアップしてもらってる。カメラを壊したって意味が無いよ」

壊そうと思ったのかカメラに近づいた校長に追い打ちをかける。校長はもう詰んでいるんじゃないかな。

「チエックメイト、だね」

「どこまでも私をコケにしやがって」

校長は机の上に置いてあった文鎮を手を取った。冷静さを完全に失ったまま僕のところまで近づき、文鎮を持った手を頭上まで持ち上げた。そして僕の頭をかち割ろうと僕に向かって振り下ろす——ことはできなかった。

「タガの外れたおっさんほど怖いもんはないってほんとだったんだ。ヤバいことがバれて生徒を殺そうとするなんて校長として終わってんな」

校長の振り上げた腕には黒い影が絡みつき、振り下ろす途中で動かすことができなくなっていた。さつきから校長を煽り散らしている人形が、呪いを使って僕を助けてくれたのだ。

そろそろあの人が入ってきてくれてもいい頃合いだ。

「警視庁の鬼瓦だ。殺人未遂の現行犯でお前を逮捕する」

僕らの最強の協力者、鬼瓦刑事が校長に手錠をかけにやってきた。

「お前には聞きたいことがたんまりあるからな。影山についても署でじっくりと聞かせてもらおう」

☆☆☆

「俺が校長室に踏み入るのを少し待っていてくれと言ったのは、あの状況を作るためだったのか？」

事件に一段落ついたあと、鬼瓦刑事に問い詰められる。

「だって、いくら映像証拠があったとしても、影山の警察との繋がりを考えるとみ消される可能性もやっぱりあったじゃないですか」

鬼瓦刑事のことは原作知識で信頼しているが、正直なところ僕は警察という組織をあまり信用できていない。父さんが死んだときだって影山の圧力に負けたのか、真面目に捜査すらされなかった。

「だから、現行犯で捕まえた方が楽だと思っただんです。人形が多分止めてくれるだろうって信じてましたし」

「それでわざと犯人挑発するなんて。万が一君が危険な目に遭ったらどうするつもりだったんだ。君はまだ子供なんだぞ！」

そう言われても、あいにく僕は合計すると30のおっさんなんだ。黙って見ているなんてできない。

「君は復讐のつもりかもしれないが、それで君が傷ついて、お母さんは喜ぶのかい？」

言われて母さんの顔が頭に浮かぶと、少し胸が痛くなった。そんな僕の様子を見た鬼瓦刑事は、「次からは気をつけてくれ」と優しく声をかけてくれた。

「それから、地木流灰人も逮捕された。校長が彼を告発したからな。これも君のシナリオ通りか？」

「はい」

監督は僕達にとつてとても頼りになる大人だったけど、犯罪者であることは変わりはない。正しく裁かれ、罪を償った後にまた会えることを願っている。今度は、偽名じゃなく本名で。

「これで君達のチームには監督がいなくなったわけだが、大丈夫か？FFの大会基準じゃ、監督のいないチームは出場できないんだろう？」

しまった、忘れてた！「新監督を探せ！」編開幕！……とはならない。

「もちろん、そんなこと重々承知です。地木流監督もずっと監督を続けられるわけではないことくらい分かっていたので、次の監督はもう決めてるんです」

「君達のような個性派揃いのチームを纏められる監督なんてそうそういるとは思えんが」

「それがちようどいるんですよ。僕達にふさわしい異名を持つ監督がね。

僕達がどうしてわざわざFFの開催を3週間遅らせたとお思いで？」

42 種明かし

尾刈斗中学の校長先生は、「一身上の都合で」退任して今まで教頭だった人が校長になり、心理学を教えていた地木流先生も同様に退任した。

僕達のクーデターが成功したのだ。

尾刈斗を影山の魔の手から解放する。それが僕達の一貫した目的だった。

そして尾刈斗中サッカー部には新しい監督がやってきた。その名は——
いや、それは順を追って説明した後でしょう。

☆☆☆

遡ることおよそ10ヶ月。ちょうど天魔大戦があつた翌週くらいに、僕は地木流監督に呼び出された。

監督を辞めるかもしれないから、新しい監督のアテがないかという話だった。

「辞めるって、一体どうしてですか？僕と一緒に戦ってくれるんじゃない」

練習試合がことごとく断られてしまつて件で監督を問い詰めたとき、監督は一度学校を離れようとした。僕が辞めさせるために問い詰めたのだと思われたつてもあるんだらうけど、罪悪感に苛まれて辞め時を探していたのだらう。

「もちろん、私は君達と一緒に戦うつもりです。しかしそれでも、私が犯罪者であることは違いありません」

「そんなことももちろん分かっています」

監督が犯罪者だつてことは分かっているながら僕は監督を利用すると決めた。

「いいや、君はまだ分かかっていません。私達が帝国に反逆した暁には、たくさん勢力が妨害しにくるでしょう。元犯罪者の監督だなんて格好の標的ではない」

「それは……確かに」

自分がずっと監督を続けることは危険だと主張しながら、監督は今の尾刈斗が置かれた状況を教えてくれた。

「先日のミーティングでは帝国に勝とうと意思を固めました、このままだとFFに参加できるかすら分かりません」

最大の敵はここ尾刈斗中学だと言うこともできるでしょう」

F Fに出場するかどうかの決定権は基本的に校長に与えられている。雷門では夏末に決定権があったように見えたが、あれは校長へ夏末という意味不明な力関係が生じていたための例外である。

今の校長が影山派である限り、F Fで帝国を打ち破るといふのは現実味のない夢だ。

「我々が心置きなくF Fで戦うためには、校長に代わってもらうしかありません。しかし原則として新しい校長を選ぶ権利は理事長にあり、理事長は校長以上に影山との繋がりが深い。新しい校長も影山派であることは明白で、打つ手なしです」

「そう言いながら、何か策があるんじゃないですか？ 原則というからにはもちろん例外があるんでしょう」

監督は力強く頷いた。きつとこの影山の支配から逃れる抜け道をずっと考えていてくれたのだろう。

「年度の途中で不測の事態により校長がその職を退いたとき、その年度が終わるまでは教頭が校長代理を務めることになっている。幸いにも、教頭先生は影山との繋がりはない。もし校長になったのならサッカー部を支援すると約束してくれました」

この1週間の間に、監督は教頭先生とまで話をつけてくれていたらしい。味方になってくれた監督は本当に心強い。

「つまり、来年の年度が始まってから、校長をその座から引きずり落とす必要があるとい

うことですね」

「クーデターが成功したときには、私も自首しようと思います。私のような爆弾はさっさと手放すべきです」

監督は既に覚悟を決めていた。

「なるほど、それで最初の話に戻るんですね。新しい監督について、1人心当たりがありません。影山との因縁もありますし、僕達に力を貸してくれると思います」

☆☆☆

その新しい監督候補と会うことになったのは更に3ヶ月後、冬休みが始まってすぐのこと。

稲妻町にある喫茶店で、その人と待ち合わせをしていた。古いフォークソングが流れる雰囲気のある喫茶店。

以前鐵さんと話をするために刃也と明日山の喫茶店を訪れたときのことを思い出していた。

13時、約束の時間ぴったりに、その人はやってきた。

「こんにちは、私が尾刈斗中学の教員をしている地木流です」

「僕は尾刈斗中サッカー部員の紫藤です」

2人で自己紹介を済ませる。子供の僕がいるのはやっぱり少し場違いだと思うが、監督に強く頼まれたから着いてきてしまった。

「私も昔は小学校で教師をしていたので元同業者ですね」

「私の場合は教員免許を偽造しているのです、同業者を名乗る権利はないんですが」

監督の爆弾発言に少し引きつった表情を見せたが、直ぐに冗談だと流して席に座りながらコーヒーを3つマスターに注文した。しばらく間を置いたあと、話を続けた。

「自己紹介が遅れましたが久遠です。それで、私を監督して呼びたいという話でしたかね？」

心当たりのあつた監督候補とは、イナズマジヤパンの監督、久遠道也である。

選手とのコミュニケーション能力にやや難があるような気もしなくはないが、作中で最も優れた監督の1人だ。

「申し訳ありませんが、私は今10年間の監督禁止令を敷かれています。引き受けることは難しいかと」

久遠さんが9年前の事件のことで監督禁止になっていることくらい僕らは当然知っている。原作知識としても知っているし、小学生時代に調べていた影山事件ファイルにも記録している。

「あなたの禁止令は、9年前のFF決勝戦直後、8月26日に言い渡されたものですよね？」

「ええ、はい」

「ですから、来年の8月27日から監督をしていただきたいと考えています」

「それではFF終了後になってしまえますが大丈夫ですか？」

影山が少年サッカー協会のトップにいる限り、禁止令を取り消すのは不可能に近い。だから発想の転換をした。コペルニクスもびっくりの転回だ。

「なんの問題ありません。というより、FFの開催自体を遅らせてしまえば良いのです」

「うちの監督が元催眠術師なんで、FF開催直前に調子を悪くする催眠をかけてもらうつもりです。影山のことだから負けの芽は絶対に摘もうと延期してきます」

具体的な作戦を僕が補足して説明する。

久遠さんは正気を疑うかのような目で僕らを見る。気持ちは分かる。この作戦の発案者は監督なんだけど、僕も初めに聞いたときは同じような反応をしたから。

「どうしてそこまでして私を監督に？ 実は何度かあなたの試合も拝見させてもらったこともありますが、私の見た限りあなたの監督としての能力は十分高いように思えます。選手からの信頼も厚いようですよ」

「色々と事情があります……教員免許偽造してる犯罪者なので、バレたら普通に捕まらるんですよ」

「え、ほんとにそんなことしていたんですか？」

原作では常に冷静なイメージがあっただけに、あたふたと戸惑っている様子の久遠さんを見ると面白い。

「監督の意味不明な経歴は話し始めると長くなるので置いておいて、久遠さんには監督として帝国を打ち破る手伝いをしていただきたいんです」

そうやって久遠さんに頭を下げていると、マスターがコーヒーを3つ運んできた。

「影山に逆らおうなんてしないほうがいいぜ」

マスターが去り際に呟いた台詞に驚いて顔を見ると、茶色い長髪と特徴的なサンングラ

ス。原作でちよつとだけ見たことのあるマスターがいた。この人は確か――

「雷門のオオカミの名が廃りますね」

元伝説のイナズマイレブン、民山謡。夢を諦めた彼が水を差すようなことを言つてきて少し腹が立ったのかもしれない。僕は思わずマスターを挑発していた。

「あんた、どうしてそれを？」

「40年前の事件についても少し調べていたことがあつただけです」

「それならあんたも知つてははずだ。ヤツに逆らつたらどうなるか」

もちろんさ。影山の恐ろしさを、僕は嫌というほど知つている。

「勝てないからつて諦めるんですか？それがイナズマイレブンの精神なんですか？」

「るーららら。俺ももうジジイになつたつてことさ。いつまでもあの頃みたいに若くはいられねえんだ」

そう口では朗らかにおどけながら、マスターは深刻な顔つきをしていた。僕の言葉に考えてしまうところがあつたのかもしれない。大介さんの言葉でも思い出しているのだろうか。

「2人は急にどうしたんですか。マスターは影山とどのような関係で？」

突然僕とマスターが話し始めたから、監督が戸惑いつつマスターに質問する。

「ヤツとは少し縁があつただけさ」

そうやって話を切り上げて、マスターは席を後にする。

「るーらら。あんたらを止めようと思ってたんだが、気が変わった。好きにすりやあい。俺はなんにもしてやれないが。だがあいつに教えてやるくらいはしてやつてもいいかもな……」

最後に何を呟いたかは聞き取れなかったが、僕のことを認めてくれたのだろうか。僕が憧れたイナズマイレブンの元祖となった人に認められたと思うと、少し嬉しかった。

結局その後は、久遠さんに僕達の置かれている状況などを詳しく説明して、クーデターが成功したのちに監督になってくれるということまで話がまとまった。

☆☆☆

校長を退任させて、帝国に催眠術をかけて、FFの開催を延期させる。どれひとつとして簡単なことではない。

帝国に催眠術をかけることだけを考えるならば、帝国に試合を申し込むのが一番簡単だ。ただ、催眠術をかけるタイミングはFF開催直前である必要がある、そんな時期に

帝国が練習試合の申し込みを受けてくれるか不安が残る。

それならいつそ帝国から試合を持ちかけてもらおうということで、逆スパイ作戦は始まった。

尾刈斗が帝国に反逆しているという情報が伝わったら、まず初めに潰しに来ることは予想できる。それを返り討ちにしてやろうという魂胆だった。

帝国に反逆の情報を伝えるのは別に匿名の密告でも良かったのだが、せっかくなら一人をスパイとして校長に売り込むことで、1つ目の目標をも同時に達成させようと目論んだのだ。

4月、新学期の最初のミーティング。それまで基本的に僕と監督との間だけで組み立てていた作戦を、新入部員2人を加えた部員全員を前にして説明した。

逆スパイ作戦の話が持ち上がったとき、まず立候補したのは僕と人形だった。僕は早い段階から作戦に関わっていた身として、そして何より影山と深い因縁がある身として、この大役を仰せつかりたかった。僕以外の子供を危険な目に遭わせたくないという僕のエゴもあっただろう。人形は多分面白そうだからって理由で立候補してた。

しかし、僕は影山との因縁は知られている可能性が高く、人形は普段から教師陣をかかって回っているため信用が無いだろうという理由で却下された。

そして僕達の代わりに手を挙げたのが、ちょうど入部したての柳田だった。「1年間一緒にサツカーをしてきた先輩方が仲間を売るより、入ってきたばかりの僕がするほうが自然でしょう」とのことだった。

柳田には本当に感謝している。

演技を信じるために自分に暗示をかけたらしい、なんて簡単に言うけれど、よく考えたらとても恐ろしいことだった。自分の記憶や自分自身を操作するということは、アイデンティティを喪失することに他ならない。

逆スパイを続けていくうちに、柳田はどんどん精神的にやられているように見えた。

先輩は監督の作戦に納得してるんですか?と問われたのはいつだったか。柳田の不調にいち早く気づいていたのは、同じ1年生の幽谷だった。

そこからは、僕の知らないところで物語が続いていた。知らないうちに柳田は元気になって、知らないうちに1年生コンビは親友のように仲良くなっていた。

幽谷と柳田との間に何があったのか漠然と推測することしかできないが、そのおかげで作戦は完全な成功を収めることができた。

帝国は僕らを潰すために練習試合を持ちかけてきて、無失点に抑えた後帝国選手に催眠術をかけた。そして柳田は見事に校長を騙し切り、恐喝殺人未遂その他もろもろの罪

でとつ捕まえることができた。

こうして僕らは、FFで心置きなくサッカーをすることができるようになったのだ。

☆☆☆

「キャプテン、そろそろ試合が始まりますよ」

キャプテン？ ああ、僕のことか。柳田からの慣れない呼びかけに少し戸惑いながら、考え事をストツプする。

周りを見ると、多呂斗先輩以外の尾刈斗サッカー部員全員と新しく監督になった久遠監督が僕のことを見ていた。

先日僕に部長とキャプテンの座を譲った月村先輩の顔を見ると、何か言えよ的な視線を感じた。

これはあれか。僕がキャプテンとして、士気をあげることを言わなきやいけないやつか。

「僕達が今こうしてフットボールフロンティアの地に立つことができてるのは、みんなの、地木流監督の、そして多呂斗先輩の尽力があったからです。だから——」

みんなの視線を見た感じ、そんなに長い話は求められてなかったみたい。それじゃ短く、

「勝つぞ!!」

「おー!!! (うがー!!!)」

F F地区大会初戦、御影専農との試合が始まる。

FF開幕編

43 データサッカー

控え室からフィールドに向かう途中で、御影専農のキャプテン杉森とぶつかった。原作でも見たことのあるようなイベントだ。

「君は尾刈斗キャプテンの紫藤か」

「はい。あなたは御影専農キャプテンの杉森さんですね、今日はいいい試合をしましょう」
杉森は3年生で年上だから一応敬語を使って話す。

「ちなみに参考まで聞いておきたいんですが、僕達が勝つ確率は何%なんですか？」
「聞かない方がいい」

君達がなんでもかんでもデータ化してるのは知ってるんだぞという意図を込めて挑発したものの、軽く流して立ち去られる。

まあいいさ。決着は試合でつけられればいいだけの話。

正直なところ、御影専農に負ける気はしていない。

河川敷で練習していた原作雷門とは違い、僕らは基本的に学校の敷地内のグラウンド

で練習していた。情報の重要性については地木流監督がよく知っていたから、練習には基本的に部外者を立ち会わせないように徹底していた。内部に帝国と通ずる者がいなければ、僕達の情報が漏れることはないだろう。

そもそも柳田の他に内通者がいたのなら先日の作戦は成功しているはずがなかったし、警戒する必要は全くない。帝国に反旗を翻すまでは地木流監督がデータを送っていたからそれは多少伝わってるかもしれないが、それだけだ。

つまり何が言いたいかというと、帝国や御影専農は僕らがイナビカリ修練場でパワーアップしていることを知らないのだ。イナビカリ修練場で特訓していること自体はバレていたとしても、僕らがどれほど強くなったのかのデータはない。

御影専農の最大の強みである敵選手のデータ解析を封じた以上、僕らに負ける道理はないというわけだ。

とはいえ、手を抜いて勝てる相手ではないことは分かっている。気を引き締めなおしてピッチに立つ。

☆☆☆

尾刈斗中学

――― 幽谷―――

――― 武羅渡――― 月村――

――― 八墓――紫藤――魔界――

――― 不乱――― 屍―――

――― 三途――― 柳田――

――― 鉦―――

御影專業農業高校附属中学

――― 山岸――下鶴――

山郷――大部――寺川――藤丸

―――

花岡――室伏――弘山――稲田

―――

――― 杉森――

一番前にいる幽谷とDF位置の柳田は、公式先初起用の1年生コンビだ。御影専農のデータにもないだろうから活躍のチャンスだ。

そして僕はチームのど真ん中、アンカーの位置を託された。前線へ繋げるパサーというより守備の要としての役割を久遠監督は僕に期待しているのだろう。キャプテンになつてからどんだん責任がのしかかってくるような気がする。

尾刈斗ボールで試合が始まる。幽谷と月村先輩でボールをやりとりしながら前に進んでいく。心なしか御影専農のデイフェンスが弱い気がする。

これはあれだ、舐めプってやつだ。

「手を抜いたことを後悔させますよ……ファントムシュート!!」

「からのファントムシュートV2!!」

幽谷と月村先輩による2連ファントムシュート。いつの間にか先輩のは進化して、満月時を除けば今の尾刈斗の最高火力になるだろう。

「デイフェンスフォーメーションY3」

シュートの軌道上で待ち構える6人の選手が、シュートポケットの亜種のような水色の衝撃波を出し、シュートの勢いを少しずつ殺していく。

DFを効率的に配置することで消耗を最小限にシュートブロックをするというのは、さすが御影専農、なかなか参考になる。

「ロケットこぶし」

そして杉森の必殺技によって、シュートは完全に弾き返されてしまった。

「ロケットこぶしはパンチング技。こぼれ球はいただくぜ！」

不死先輩の十八番でもあったロケットこぶしに対応して魔界先輩がボールを拾いに行くが、

「スーパースキャン」

頭に軽く包帯を巻いた御影DFの、ブロック技の方のスーパースキャンによってすぐに奪われる。今の動きを見るに、魔界先輩が拾いに来ることを読んで待ち構えていたのだろう。

そこからすぐに御影専農のフォーメーションが変わり、カウンターの構えを作られる。ボールは中盤の大柄な選手の下へ。

ここは僕が食い止めたいところだけど、体格差で競り負けるからパワー系の選手は得意でない。

「柔よく剛を制す的な。ファントムミスト」

即座にいい感じのことわざが思いつくのは刃也のおかげだろうか。パワーで負けたいたとしても、他にも方法はある。黒い霧で相手の視界を封じ、その隙にクイックドロ

ウを狙う。

という完璧なコンボを決めるはずだったが、冷静なバックパスで凌がれる。進行を食い止めたと見ればそう悪くないが、必殺技をひとつ使ったわりにボールを奪えていないというのはあまりおいしくない。

こちらがされたら嫌なことを的確にしてくる奴らだ。

ボールは左サイドへと流れ、茶髪のMFに渡る。

「止める……影縫い」

すれ違いざまに八墓が影を繋げるが、茶髪のMFは即座に隣の紫の髪の選手にパスを出す。

影縫いは影を繋げることで相手選手の移動範囲を制限する。単騎でやってくるFWを止めるには非常に有効だが、逆に距離を取らない限りなんの拘束にもならないためこうして簡単にパスを出されてしまうのが欠点だ。

「フランケン守タイン！」

「スーパースキャン」

不乱先輩も必殺技を使って止めようとするが、今回は少し悪手だったのかもしれない

い。フランケン守タインは既に解析済みなのか、巨大な緑の怪物の脇の下をヒョイヒョイとぐり抜ける。

フランケン守タインは強固である反面、図体がでかく動きが鈍い。この試合でどんな僕達の弱点が露わになっているような気がする。

とはいえ、図体がでかいことは何もデメリットばかりではない。

「死角からこんには〜」

フランケンの怪物の後ろに隠れていた三途が、スライディングでボールを奪う。ボールがタッチラインを割ってしまったため御影専農ボールで試合は再開となるが、なんとか攻撃を食い止めることはできた。

守備を固めて再び御影の攻撃に備える。FWの2人を重点的にマークするが、僅かな隙から逃げられ下鶴にボールが渡ってしまう。

下鶴の使用するシュート技と言えば、グングニルはまだ使えるわけがないとして、フアイアトルネードかパトリオットシュートだ。果たしてどちらだろうか。

目を閉じてシュート体勢に入る下鶴。歪む空間が全く活躍させてもらえない件についてはもう諦めるとして、この特徴的なヒールリフトはまさか……

「フアントムシュート！」

ボールは6つに分裂して鈍の待つゴールを襲う。予想外のシュート技に少し反応が

遅れるも、しっかり必殺技で対抗する鉈。

「ちよつとビビったけど、見慣れてイージーさ！キラーブレード改……って、ほげ？」
本物のボールを見つけ出したはずが、青い刃は空を切る。本当の本物はゴールネットに突き刺さっていた。

フアントムシユートは見慣れてくると、どのボールが本物なのかだいたい分かる。今鉈が切ろうとしたボールこそが本物だと、僕も勘違いしていた。

「アンビリーバボー……わざとーっだけ雰囲気を変えてたってか」

キラーブレードはパワーシールドのような面に対応できる技と違い、直線にしか対応できないため、どのボールが本物でどのボールが偽物か見極めるしかなかった。その上でフアントムシユートを使い慣れた我々が判断を見誤ったのは、下鶴の技巧が流石だったとしか言いようがない。

幽谷のキックオフで試合は再開。早いうちに1点を取り返しておきたいが、攻めの手に欠ける。

「幽谷と月村先輩のシユートチェインでも止められたんじゃ、もう無理ですよ……」

「柳田まだまだ諦めんな！最初のあれは6人も邪魔してきたから止まっただけ。普通にやればきつと決まるさ」

魔界先輩が言うように、あのデイフェンスフォーメーションなんちゃらというやつをされなければ、シユートを決めることはそう難しくないだろう。杉森も優秀なGKだと思うが、うちには幽谷・武羅渡・月村先輩と凄腕のFWが揃っている。

問題は、こちらがシユートを放とうとすると必ず例の並び方をされてしまうことだ。こちらの動きが読まれているように、先回りしてDFが待ち構える。

シユートをする場所がなく幽谷が攻めあぐねている間に、小柄なDFによってスーパースキャンでボールを奪われる。

その後ボールは杉森まで戻され、その付近でグルグルと回る。

もうひとつの問題は、御影専農が時間稼ぎに徹していることだ。

怨霊やクイックドロウなどでボールを奪おうとしても、上手く躲かれて成功しない。正直に言って、打つ手なしである。

結局、僕達は失点を取り返すことができないまま、0-1で前半を終了した。

ハーフタイム中に後半の何か有効な策を練らなければならないな。

☆☆☆

「ええええ?!」

「必殺技の使用禁止?!」

「アンビリーバボー!」

鈍だけでなく、選手みんながアンビリーバボーな気持ちだっただろう。
久遠監督、初就任の試合からエンジン全開である。

4 4 必殺技禁止令

「八墓は靈幻と、魔界は木乃伊と交代だ」

僕の両隣にいたMFが交代させられる。パス回しで時間稼ぎに徹する御影からボールを奪おうと果敢にアタックしていたから消耗も激しいのだろう。2人は文句もなくベンチへと下がった。

今の交代は納得の采配だ。しかし、その次に伝えた作戦がアンビリーバボーだった。後半は、必殺技の使用を禁止する」

「ええええ?!」

「必殺技の使用禁止?!」

久遠監督の信じられない作戦に、御影ベンチに届くほどみんなの驚きの声が重なる。「ただし鈍、お前だけは必殺技を使ってもよい。相手の必殺シユートにはそれで応戦しろ」

「あ、オーケー」

後半も出場する奴らはアップしておけとだけ言って、久遠監督は伝えるべきことは全て伝えたかのように黙りこくった。

「僕達にとつて全然オーケーじゃないんですけど、監督、せめてどういう意図があるのか教えてくれないんじゃないですか？」

「お前達は手取り足取り教えてもらわないと満足に指示に従うこともできないのか？」

手取り足取り教えるのが監督の仕事でしょうよ、と言いつ返したくなつたが堪えておく。どうせ久遠監督は何も教えてくれない。自分で考えろつてことだ。

「凄い監督だつてのはなんとなく分かるんだけど、ちよつとコミユ力に問題があるんだろうな」

と評したのは人形。かなり無茶な作戦に驚いてはいるものの、監督に対して一定の信頼は置いているっぽい。

三途は監督の意図について一人考え込んでいるし、月村先輩は武羅渡とノーマルシートで点を決めるための作戦会議をしている。少なくとも、監督は尾刈斗に勝たせる気がないと思つている人はいないみたいだ。

10年前の桜咲木中の事件をみんなは知つているから、同情する気持ちもあるのだろう。

☆☆☆

後半は御影の大きなバックパスから試合が始まる。

「露骨に攻める気がないアルネ」

呆れた様子の靈幻だが、ぶつちやけ僕らにこれを非難する資格はないと思う。先日の帝国戦では、ザ・タワーに籠城するというパス回しよりもよっぽど卑怯な作戦を使ったんだから。

円堂が聞いたら卑怯だって言うんだらうなあ。

「スーパースキャン」

「スーパースキャン」

御影のスーパースキャンに阻まれ、なかなかボールを奪うことができない。ブロック技とドリブル技の2種類があるが、御影は基本的にこの技しか使わない。

「オレ達の動きが全部読まれてるみてえだ。気味がわりい」

「ぐふふつ、普段は怖がらせてる俺達が気味悪がるなんて皮肉……」

イナビカリ修練場で僕達はレベルアップして、データ以上の力を手に入れたはずだった。しかし蓋を開けてみれば、全てデータ通りだと言わんばかりに御影に翻弄されてい

る。

「まさか誰かが僕達のデータを漏らした……？ いや、そんなわけないか」

御影の情報源について思索にふけるが、考えがまとまらない。尾刈斗のみんなは信用できる仲間達のはずだ。

「犯人探しもいいけど、今は試合に集中すべきじゃないかな。必殺技を使わずに、どうやってこの緻密なパスワードを崩すのか。教えてよキャプテン」

三途の言う通り、キャプテンである僕が今すべきことは、この試合に勝つことだ。

しかし、久遠監督に必殺技を禁じられたせいで御影の必殺技に対抗することができない。

「本当に、必殺技を使えたら対抗できてたんでしょ……？」

「え？」

「あ、いや、えつと……必殺技を使えないから打つ手がない、みたいな顔をキャプテンがしていたんですけど、そもそも必殺技を使ったところで勝てなかったんじゃないですか？」

「ぐふつ、柳田の言う通り……前半は必殺技を使ってもなお、いいようにやられてた」

確かに2人の指摘通り、前半の僕達は必殺技を使っても相手のペースに乗せられていた。僕らのしたいことが完全に読み切られていたように思う。

それにしても、僕ってそんなに思ってることが顔に出ちゃってるのかな……

「前半、僕達の必殺技は全て動きを知っていたかのように躲された。逆にフランケン守タインの裏からのスライディングは、ただのスライディングだったけど、意表を突いたこともあり通った」

三途が前半のプレーを振り返ってまとめている。

なるほど、なんとなく久遠監督の意図が見えてきた気がする。

「スーパースキャン」

前線を見れば、小太りのDFの必殺技によって月村先輩のスライディングが躲されていた。

続けざまにボールを奪いに行くは、期待の新人幽谷。

「つまりは、こういうことっすよね」

御影DFは最適なルートを計算し幽谷を抜こうとするが、幽谷はバックステップで一巨距離をとる。ボールを奪う目的とは一見乖離した行動だが、それによってスーパースキャンの計算を崩し、必殺技が終了したタイミングに合わせてスライディングする。

「やるじゃねーか幽谷！」

「俺達の動きは読まれていても、単純に実力で負けてるってわけじゃありません。読みさえ外せばこつちのもんです」

ボールは幽谷から武羅渡へと渡る。小柄なDFが再び必殺技でボールを奪おうとするが――

「スーパースキャン」

「1年の幽谷になんとかできて、俺にできない道理などありませんよ」

ボールをかかどで蹴り上げて、相手の頭上にボールを通して華麗に抜き去った。ヒールリフトだ。オシヤレ度の高い技だが、安定しないため実際の試合で使われることはまずない。

フアントムシュートの一連の動きとして使うことはよくあるんだけどね。

「俺がヒールリフトを使うことは正しく予測できていましたか？ 月村さん、後は任せますよ！」

武羅渡からのパスを受け取った月村先輩は、ヒールリフトでボールを蹴りあげてからシュート体勢に入る。御影のコンピューターはきつとこう計算したことだろう。『フアントムシュートの可能性、99.5%』みたいに。

「ダイフェンスフォーメーションγ2」

シューートの軌道上に、御影DF2人が立ちはだかる。このままでは前半の焼き直し。水色の衝撃波によってシューートの勢いを削がれてしまう。

「お前らが読んでくることは読んでんだよ！」

月村先輩はファントムシューートを放つ代わりに斜め上、DFの頭上にボールを緩く蹴り上げた。そして地面を蹴って空中でそのボールに追いつき、ゴールの左上に向かって蹴りこんだ。

「シュートポケット」

隅っこギリギリを狙った、普通に手を伸ばしても届かない絶妙なコースのシューोटだったが、杉森の必殺技によって空中で勢いを失い停止する。

その停止したボールを杉森が右手で掴みとろうとしたとき、

「いつけえええ!!」

突進してきた幽谷がボールをヘディングし、身ごとゴールに押し込んだ。

「ナイスだ幽谷！」

必殺技を一切使うことなく、僕達は1点を取り返した。

☆☆☆

「つまり、こういうことですね。僕達は実力で敵わない帝国に太刀打ちしようと、必殺技を使うことに躍起になっていた」

つまり、から言い始めるのは円谷の癖だ。状況を解説するその様は、まるで雷門の目金のように見えてきた。

「だからこそ、テクニックで劣っているわけでもない御影専農を相手にも不要に必殺技を使ってしまうていた。動きの固定化された必殺技は、深く分析された場合は逆に隙になってしまう。監督はそのことを僕達に教えようとしてくれていたんですね」

久遠監督はただ静かに頷いた。

それを素直に口で言ってくれてもいいと思うんだけど。ダメ？

「幽谷は円谷と交代だ。必殺技はもう自由に使ってよい」

大活躍の幽谷はベンチに帰還する。ちなみにこのフットボールフロンティア、選手交代は無制限に可能である。

御影専農ボールで試合は再開。追いつかれたことに焦って攻めてくるが、そう何度も通すつもりはない。

「スーパースキャン」

n 回目のスーパースキャンで木乃伊が突破されるが、木乃伊の後ろから僕がスライディング。1人でダメなら2人で止めるだけ。

今までより精彩を欠いたように見えるスライディングを躲して、靈幻にパスを出す。

「呪い」

必殺技が解禁されたので、靈幻はいつものあの呪いを放つ。

黒い影が御影DFを襲うが、それでも構わずスライディングで靈幻からボールを奪おうとしてくる。

「いつもは悠々と横をドリブルしているけど、別にパスをしたっていいアルヨ」

御影DFの奮闘虚しく、ボールは既に武羅渡のもとへ。

「もう1点もすぐに奪ってみせますよ」

ヒールリフトからのフロントムシユートの構え。

「ディフェンスフォーメーションヨ」

これまたn回目の並びで、シユートを妨害しようとDFが立ちはだかる。

「御影専農は全く学習しないんですね……」

珍しく毒舌をこぼしたのは柳田だ。僕もやけにあっさり同じ手を通ってびっくりしてる。

御影のコンピューターは今回もフロントムシユートだと予測したのだろうか。

武羅渡は必殺シユートを放つ代わりに、円谷へパスを出す。DFがディフェンスフォーメーションに集中していたため誰にも邪魔されずにパスが通った。

「しかと受け取りました！彗星シユート！」

ボールを受け取った円谷はその場ですぐに必殺シユートを放ち、武羅渡は整列したDF達の間を抜けて青く煌めくシユートを追いかける。

「シユートチェインです。ファントムシユート」

青いシユートは5つの幻を率いて、杉森1人が待つゴールを襲う。

「ロケットハッブ」

さすがに分析しきっているのか、杉森は本物のボールにロケットこぶしをぶつけて對抗するが、チェインした分威力も増している。黄色い拳が少しずつ押されていく。

「そんな……俺は、負けるのか？」

円谷と武羅渡の2人のシユートはロケットこぶしを弾き飛ばす。

「まだだ！シユートポケット!!」

杉森はさらにシユートポケットを繰り返してシユートを止めようとするが、時間がなく中途半端な出力で、威力を僅かに削いだだけだった。

そして杉森は、最後は両手でそのボールを迎えうつ。必殺技でもなんでもない杉森の両手が青い煌めきを抑えこみ、しばらくの拮抗の後ボールは停止した。

「止められましたか……」

杉森の遠投で中盤の青髪のMFにまでボールが届くが、不乱先輩がしっかりと立ちはだかる。

「スーパースキャン」

「アースクエイク！はんい攻撃なら避けようがないうがー！」

不乱先輩だつてそう馬鹿ではない。フランケン守タイムが対策されているなら、別の技を使えばいいのだ。

「どうして……」「そんな……」

不乱先輩からパスを貰った直後、御影の選手の動きが突然止まった。みんな困惑の声を上げている。

「再計算の結果、御影専農の勝利の可能性はほぼ0だと？」

御影ベンチを見ると、監督の姿はもうどこにもなかった。

もう諦めてしまったのだろうか。点数は1-1で同点のはずなのに、コンピューター

が負けると予測したら戦意喪失するなんてあつけない。簡単に試合を放棄する姿勢に腹さえ立つてきた。

「何故だ……我々の分析は完璧で、確実に勝てる作業のはずだったのに」

「結局、完璧な未来予測なんて不可能だつてことじゃないかな。計算の上ではどちらが勝つか予測できても、いつ大番狂わせが起きるか分からない。サッカーは不確定で、だからこそ楽しいんだと思う」

三途とのワンツーで相手を抜き去りながら、御影の選手に対して語りかける。

「君達のデータは正確だったかもしれないけど、計算し忘れてたことがある。試合の中でだつて成長するつてこと。」

必殺技が上手くいかなかったら、次はどうやったたら上手くいくか考える。上手くいったら嬉しいし、上手くいかなかったら悔しい。こうやって一喜一憂できるのも全部、勝つか負けるか分からないからさ」

僕じゃ円堂の代わりになんてなれないのかもしれないけど、本当のサッカーを伝えたんだ。

「だから杉森も、あれだけ必死になったんでしょ？負けたくないから必死にシュートを

止めて、上手くいったから喜んだ」

円谷と武羅渡のシユートを止めたときの杉森は、確かに笑っていた。

杉森は原作では円堂の熱い気持ちに心動かされたように見えたけど、実際はもつと単純なことだったのかもしれない。サッカーへの思いは初めから心の内にあつて、円堂はそれに気づかせただけ。

小学生1年生の頃の僕が、刃也に誘われてあつけなくサッカーの楽しさを思い出せたように。

「サッカーって楽しいでしょ？フアントムシユート！」

僕だつて一応使えるんだぞ！と予測できなかったであろうシユートを放つ。簡単に覚えられたから覚えたものの、滅多に攻撃に参加することがないから公式戦で使ったのは初めてかもしれない。

シユートにはサッカーが好きだつて思いが籠る、なんてことを言つてたのは円堂だつたっけ。

ならば、その気持ちを杉森にも伝えたい。

「フアントムシユート！」

「オレも行くぜ！フアントムシユートV2！」

僕のシユートだけでは非力極まりなかったが、尾刈斗が誇るストライカー2人のチェ

インによつて、強力なシュートとなり杉森を襲う。

「サツカーが楽しい……?」

僕の言葉をしばらく反芻している様子の杉森だったが、シュートが来ると止めたいと思うのがキーパーの性なのだ。

両手をパチンと叩いてシュートを迎えうつ。

「室伏、弘山!手伝つてくれ!」

DF2人に呼びかけて、例の水色の衝撃波でシュートの勢いを弱めさせる。

「絶対に止める!ロケットこぶし!シュートポケット改!!」

杉森はロケットこぶしを飛ばし、すぐさまシュートポケットも発動する。試合中に成長することだつてあるつて説教垂れてたら、相手に成長されちゃったみたいだ。

黄色い拳を押し返すことまではなんとかだったが、進化したシュートポケットによつてシュートの勢いは殺され、しつかりとキヤッチされてしまった。

「まだ同点だ。ゴールは俺が守り抜く。みんな勝て!」

杉森は諦めていない。頭に付けられたコードを引きちぎりながら、杉森は仲間を奮立たせる。

「ああ!」 「勝つぞ!」

杉森の熱い思いは御影の仲間達にも火をつけた。前半よりもさらにキレの良くなつ

た動きで尾刈斗を攻め始める。

「怨霊」

「スーパースキャン」

「スーパースキャン」

「マジック」

地面からの手を回避されたかと思えば、摩訶不思議マジックで惑わしてスーパースキャンを阻止。互いに一步も引かない接戦になっている。

しかしボールはついにFWの下鶴のもとへ。

「決める！パトリオットシユート！」

下鶴が蹴りあげたボールは空中で一瞬停止し、ミサイルのようにゴールに向かって突き進む。

「リベンジだぜ！キラーブレード改！」

そのミサイルのような必殺シユートを、鉈は青い刃で真つ二つに切断した。

復活したボールはキックで僕のもとまで届けられる。

「今度はこつちの番だね。イリユージョンボール」

十八番のイリユージョンボールで御影MFを抜き去り、武羅渡へパスを出す。

「今度こそ点を奪つてみせますよ!とりたいところですが……杉森さん、あなたは素晴らしいキーパーだ」

帝国の源田には及ばないにしても、杉森は全国でも有数の名キーパーの1人だ。さつきからシュートを止めまくっているし、原作でもファイアトルネード↓ドラゴントルネード↓イナズマ落としの三連撃を全て防ぐという離れ業をやってみせた。

「1度は半ば奇襲に近い形で点を取ることもできましたが、正攻法であなたを打ち破るにはまだパワーが足りません。」

俺達も出し惜しみはしません。紫藤、闇に誘え!」
「りょーかいですつと。ファントムミスト!」

黒いもやで観客席からフィールドを隠す。帝国の斥候にはまだこれを見せるわけにはいかないのだ。

☆

武羅渡が秘策の必殺技を使う。

尾刈斗で最強のシュートが御影ゴールを襲う。

そのシュートは、DF達と杉森をなぎ倒し、ゴールネットを揺らした。

僕が出したもやが晴れた頃、試合終了の笛がなった。



スタジアムの後方から、試合を眺めていた2人。

「2―1で尾刈斗が勝利したか。予想通りだ」

「その割には随分試合に魅入ってみたいだな、鬼道」

「あの新しい監督の腕がどんなものか観察していただけさ。とても見事な采配だった」
帝国学園の鬼道と佐久間は、尾刈斗との再戦に向けて情報収集に来ていた。

「それにしても、最後は何があつたんだ？あの杉森というキーパー、源田には及ばないと
してもなかなか優秀だ。イマイチ攻め手に欠ける尾刈斗に突破手段があつたようには
思えない」

「だからその攻め手とやらをずつと隠していたんだろう」

そう話を切り上げて、2人はスタジアムを立ち去る。

「最後に黒いもやの中から聞こえた雄叫び。あれは一体……」

45 突撃！メイド喫茶

「にしても、オレ達の切り札を切らされるなんてな。御影専農のことはぶっちやけナメてたぜ」

「地区予選じゃ帝国以外敵がいないと驕ってしまいましたね。次の秋葉名戸は最弱の雑魚のようなので問題ないでしょうが」

「そうやって侮ってるから痛い目見るんじゃないですか、武羅渡先輩？秋葉名戸が本当に最弱なら、1回戦であの強豪野生中を突破できてませんよ」

「柳田も言うようになったな」

月村先輩と武羅渡に柳田。学年も違う3人が仲良く意見交換している。我が部の日常だ。

月村先輩の言う通り、柳田は一皮むけたというか、先輩にも臆せず逞しくなってきたように見える。

「御影戦であそこまで俺達が追い詰められたのは、侮っていたからというより、俺達の情報に敵に漏れていたからでしょう？」

「それもそうだな」

試合中ずっと疑問に思いながら、あえて考えないようにしていた裏切り者問題。

外部から遮断されたイナビカリ修練場での特訓の成果を含めて僕らの個々の能力が把握されているのは、やっぱり内通者がいるからだとか考えられなかった。

ただもつと冷静に考えれば、そんなことが可能な人は1人しかいなかった。

「それで、監督は吐いたんだっけ?」

「そりやもうバツチリと。冬花ちゃんにあることないこと吹き込むぞつて脅しをかけたら、あっさりゲロつてくれたぜ」

バツチグーとサムズアップする人形。手段を選ばなさすぎて恐ろしいわ。

そもそも僕達は、個人トレーニングばかりだった修練場の弊害で、チームメイドの現在の正確な能力を知らない。それを把握しているのは地木流監督か久遠監督の2人の監督だけ。

そのうち地木流監督は絶賛取り調べ中なので、消去法で犯人は久遠監督となる。

「動機についてはなんて供述してるの?」

「御影の解析プログラムを使わせて、俺達の弱点を理解させたかったんだつてさ」

そういう意味では効果はあったんだろうと理解はできるんだけど……

「そーゆーのやるなら言って欲しいよね。不和の原因になるよ」

「だから厳しく脅しといたぜ。次また勝手にこんなことをしたら、もう二度と冬花ちゃんにパパと呼んでももらえなくなるよって」

「それは効きそうだね」

多分久遠監督には冗談に聞こえないだろうな。久遠親子の秘密にクリティカルヒットしちゃってる。

「私がどうかしましたか?」

「ああいや、なんでもないよ」

噂をすれば影。部室に入ってきたのは尾刈斗サッカー部のマドンナ、冬花ちゃんである。

尾刈斗生というわけではないんだけど、週末だけ久遠監督の手伝いにやってくるのだ。

我がサッカー部には今までマネージャーがいなかったこともあって、みんな冬花ちゃん冬花ちゃんとチャホヤしちやっっている。

あれ、マネージャーっていなかった……よね? 誰かいたような気もするんだけど、こ

のサッカー部には創部以来マネージャーはついていないらしいし記憶違いかな。部室の隅がぼんやりと光って、急に背筋に冷たいものが走る。

「校門の近くでこんなもの貰ったんですが、要りますか?」

冬花ちゃんの言葉で背筋を走る何かは消えて、我に返る。変なことを考え込んでしまっていたみたい。

喫茶店の名前が書かれたチケットののようなものを僕らに見せてくれる。

「ライ アットマーク カフェ?」

「喫茶店の一品無料券みたいです。秋葉名戸の選手が、挨拶代わりにサッカー部の皆さんに、と。全部で17枚あります」

「なるほど、自らの立場をわきまえているようですね」

「意外と良い奴なんだな」

と感心する武羅渡と月村先輩。うん、普通の反応だ。

そしてそれとは対照的に、

「これは罨だな」

「罨だね」

とひねくれているのが人形と僕。

原作で秋葉名戸がどんな人達なのか知っているけど、あいつらはそんな優しい人達ではなかった。対戦相手に下剤を飲ませたり平気でするような奴らだ。

このRAI@CAFÉというのは、秋葉名戸の奴らがたむろしていたあのメイド喫茶だろう。わざわざ敵地に出向く必要などない。

「わざわざ対戦相手にこんなチケットを渡すメリットなんて秋葉名戸にはない。野生中も喫茶店に誘われて、下剤が何か混ぜられたんじゃないすか？間違いない罠つすよ」

ズバリ中の推理をする人形。一人でこの推理に辿り着くのはひねくれすぎているような気がするけど。

「それならなおのこと突撃してやらねえとな。狼を罠にかけようもんなら罠ごと食いちぎるってとこ見せてやるぜ」

出向く必要などないはずなのに、月村先輩は余計乗り気になってしまった。
「行かない方がいいと思うんですけど……」

と言っても、部内はもうメイド喫茶に乗り込むムードで固まっていた。

「ランチにはちよつと早いけど、善は急げ、レッツラゴー！」

「僕が部長のはずなのに……」

☆☆☆

ということ、僕達は今メイド喫茶の前にいる。

突撃班のメンバーは、僕・人形・月村先輩・武羅渡・冬花、それともう一人。

「僕もこのメイド喫茶は気になつていたんですよね。そんなときにあなた達が無料券を持つて現れてくれるなんて、まさに渡りに船です！」

「あの、誰ですか？」

「よくぞ聞いてくれました！僕は雷門の知将こと目金欠流です！あなたは新しく尾刈斗のマネージャーになったと噂の久遠冬花さんですね」

「マネージャーってわけじゃないんですが」

目金がここにいるのは、何故かメイド喫茶前にいて勝手に合流してきたからだ。無料券は余るほどあったから特に困りはしなかったけど。

冬花ちゃんも興味ありそうだったから連れてきたけど、バレたら久遠監督に殺されな
いかな、大丈夫かな。

「なんで雷門のこいつと一緒なんだ？」

「まあまあ、毒味役だと思えばいいんじゃない？」

「人形、お前は発想がシンプルにサイコなんだよ」

サイコパスな会話は聞かなかったことにしながら、総計6人でRAI@CAFÉに乗り込む。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

扉が開くとメイド服を着た店員が待ち構えていた。分かっただけのもの、その壮観にうわあとよく分からない声をこぼしてしまった。

「6名様ですね。こちらにどうぞ」

メイド店員に案内されるがまま、僕らはテーブル席に座る。

「月村先輩、あの時の威勢はどうしたんですか？」

「うるせえ。オレだってこんなとこ慣れてねえんだよ」

軽く先輩を茶化してみるもどうも様子がおかしい。みんなこのメイド喫茶の空気に呑まれているようだ。

「ご注文は何に致しますかあ？」

ピンクのときめきミルクティー、麗しの君ジャスミンティー、魅惑のドキドキハーブティー、……ろくなメニューがないや。

「トマトジュースはないのか?」

「すみません、当店では扱っておりません」

「せっかく一品無料券持ってるんだからさ、ソフトドリンクじゃなくてもっと高いメニュー頼もうぜ」

「月村先輩って意外とケチつすよね」

「えーつとじゃあ、きまぐれカレーで」

「僕も貧乏性なので、一番高いやつを選ぶ。券が無ければカレーに1600円も払われるのか、恐ろしい。」

「何ですかあ?正確にメニューを教えてください」

「えっと、破茶滅茶☆メイドの気まぐれカレーで」

「かしこまりましたあ」

「このシステム、めんどくさい。」

「いけませんねえ。メイド喫茶に来たなら、彼女達との交流を楽しまないと」

「なんて言いながらこなれた様子でときめきピコピコケーキセットを頼む目金。」

「君、見所があるね」

「何やら目金は見所があるとやらで、謎の男に声をかけられる。」

間違いない。こいつが秋葉名戸のキャプテン、野部流来人だ。

「君に見せたいものがあるんだ。食事が終わったら私に着いてきたまえ」

「あなたが野部流来人さんですよね？」

「ああ、それは私のことだが」

「えっ！あのシルキーナナの?!」と興奮している目金をよそに、僕は秋葉名戸のキャプテンに話しかける。

「わざわざチケットをありがとうございます。部長として、代表して感謝させてもらいます」

「いやいや、礼には及ばないさ。うちの監督がここの店長も務めていてね。顧客の拡大を狙ってたつてわけさ。」

それと君、シルキーナナを知ってくれているんだね。こんなところでファンと会えるなんて嬉しいなあ」

なるほど、尾刈斗中からこのメイド喫茶はそれなりに距離があるが、自転車などを使えばそう遠いというわけでもない。17枚のチケットを渡してでも、尾刈斗中という新たな客を手に入れたかったわけだ。

秋葉名戸側にメリットはないと思っていたけど、RAI@CAFÉ側にはメリットはあったのか。

「メイド喫茶の店長をやりながらサッカーの監督もするなんて、珍しいですね。

秋葉名戸の生徒はよくここに来られるんですか?」

「ああ、この建物の地下に私達の秘密基地があつてね。ちやうどそこを彼に説明しようとしていたところなんだ」

「秘密基地?まさか、野部流来人先生の執筆場所!」とまた騒ぐ目金は無視して、本題を告げる。

「もし皆さんおられるのなら、一緒に昼食をとりませんか?チケットもだいぶ余っちゃつてますし」

「いいね。君達とは仲良くしたいと思つているからね。メイド喫茶の料理の味わい方を教えてあげるよ」

「ちなみに野部流さんはこの店のどのメニューがお好きですか?今食べたいものとかあります?」

「私はこの破茶滅茶☆メイドの気まぐれカレーが大好物だね。いつもこれしか頼まないんだ。萌えキュンを注入することで美味しさが極限まで引き上げられるのだよ」

萌えキュン注入の効果は疑問だけど、好物がこのカレーだつてのはちやうどいいね。

野部流と雑談している間に、料理が届き始める。

さつき注文したばかりなのに早すぎる。作り置きであることを隠す気がないじゃん。「料理が出来上がったみたいだね。どうぞ召し上がれ。地下にいるみんなも呼んでこようか?」

「こちらが破茶滅茶☆メイドの気まぐれカレーです。萌えキュンを注入しましょうかあ?」

ちようど僕のもとにもカレーが届く。萌えキュンなんてどうでもいい。ここが勝負時だ。

「思ったより大盛りなんですわ、てつきりなんていうか、もつと軽い感じなのかなって思っていました」

「十分な量があることも、このRAI@CAFÉの魅力の一つなのだよ」

野部流が自慢げに説明する。

「実は僕、ここに来る前におにぎりを食べてきてしまって、こんなにたくさんは食べられそうにありません。」

僕は軽いメニューを頼むんで、野部流さん、代わりにこのカレーを食べてくださいませんか」

もし僕達の考えが杞憂だったなら、ただのくだらない妄想だったなら、こんな小芝居を打つ必要もない。

「ああ、構わないさ」なんて言って、野部流がカレーを食べ始めてくれることを僕は少し期待していた。

「悪いね。実は私はもうお昼ご飯は食べてしまったんだ。尾刈斗の他の誰かに代わりに食べてもらってくれるかな」

野部流は眉を掻きながら答える。顔つきは少し険しくなり、声のトーンも少し低い。地木流先生の授業を受けてきた僕達はみんな、野部流の変化に気づいた。典型的な嘘をつくときの仕草。

「まだ12時もなっていないのに。随分と早いですね」

「私はいつも昼食は早めにとる派なんだ。いつ食べようが私の勝手だろう?」

息苦しい雰囲気が漂う。尾刈斗のみんなは料理に手をつけず、固唾を飲んで僕と野部流のやりとりを見守る。

「あれ、なんで皆さん固まってるんですか?僕だけケーキセット食べちゃいますよ?」

状況を理解していない目金^{メネ}がケーキにフォークを伸ばすが、

「あの、そのケーキ、毒が入っているかもしれない」

「ひえええ」

冬花ちゃんの言葉に驚いて目金はフォークを落とす。

「毒入りだなんて嘘だよ。このメイド喫茶の料理には愛と萌えとキュンしか入っていないー！」

野部流がひとり声を荒らげる。

「何も言わずに黙って見てるだけみたいだけど、君達も何か知ってるんじゃないの？」
人形が近くに立っているメイド達に矛先を向ける。

「……」

料理に毒が入っているかもしれないという、もし嘘なら相当酷いクレームを言われているのに、彼女達は何も答えない。

「もし僕達の勘違いなら、全力で謝ります。だからお願いです。ただこのカレーを食べてください」

僕は深く頭を下げる。

「無理なものは無理だ。私は今はち切れそうなほどお腹がいっぱいでね。一口も食べることはできないー！」

傍目に見ても、野部流に無理があるのは明らかだった。

「シルキーナナは僕に勇気を教えてくれた作品で、野部流来人先生、僕はあなたを尊敬しています。だから、嘘なんてついていないとシルキーナナに誓ってください」

目金の言葉に、野部流は言葉を詰まらせる。野部流にも野部流なりの、プライドというものがあるのだろう。

「通りかかったらシルキーナナって言葉が聞こえたんだけど、僕に何か用かな？」

この沈黙の場に現れたのは、頭にペンを突き刺して、櫛代わりになっている男。見たことがあらず、秋葉名戸の選手だ。

「漫画、私はもう既に昼食をたくさん食べてお腹いっぱいだよな？」

野部流は救いを求めるかのように、漫画に尋ねる。

「野部流、何を言ってるんだ？今日はさつきまでずっと執筆部屋にこもりきりで、昼ごはんどころか朝ごはんも食べてないだろ」

どうしてこんな質問をされたのか何も理解できずにキョトンとしている漫画の隣で、野部流は崩れ落ちた。

★★★

「フットボールフロンティアで優勝して、副賞のアメリカ旅行でコスミックプリティレイナの限定フィギュアを手に入れたかった」

料理に薬を混入させるといふ犯罪行為をした割には浅すぎる動機。

「本当に、そんな説明で納得してくれたのかい？」

RAI@CAFÉの地下3階、秋葉名戸の秘密基地にて、漫画は野部流に尋ねる。

「ああ」

「警察にも言わずに秘密にしてくれるんだってな。尾刈斗って良い奴らなんだな」

「ああ」

罪を犯した人は、時に裁かれることで救われることもある。尾刈斗に赦されてしまった野部流は、ただ罪悪感に押しつぶされていた。

「どうして僕に言わなかった。どうして勝手にこんな真似をした」

そんな野部流の様子に、苛立ちさえ覚える漫画。

「僕達はコンビだろう？1人で全部抱え込もうとしないでくれ」

ただ黙って棚を見つめる野部流。視線の先には、漫画と2人で書き上げた萌え漫画、マジカルプリンセス・シルキーナが並んでいる。

「君がそのつもりなら、僕は共犯者になろう」

漫画は、野部流の机の上に置いてある錠剤入りの瓶を手にとって言う。

「ところでこの薬は一体どんな作用があるんだ？」

「さあね。あの男が持ってきた薬だ。私は何も知らないよ」

46 正々堂々

「本日はわざわざお越しいただいてありがとうございます。今日は正々堂々とした試合をしましょう」

やけにかしこまった口調で野部流は僕らを歓迎する。

昨日のメイド喫茶での件があったから仕方ないんだろうけど。

「正々堂々、だつてさ……」

人形は疑わしそうに呟く。人形は僕と同じく薬を盛られたまさに被害者なのだから、皮肉の一つや二つ飛ばしたくなるのも仕方がない。

それが聞こえてかどうかは分からないけど、野部流はさらに俯いて暗い顔をする。

「どうして……許した？」

「え？」

それは唐突で、質問したのが普段は滅多に喋ることすらない八墓だったから僕は余計に驚いた。

「俺なら……許せない。俺や俺の仲間を傷つけようとしたやつは、呪う……末代まで」

髪で隠れた八墓の瞳は漫画や秋葉名戸に憎しみの眼差しを向けているんじゃないかと思うと、少し恐怖してしまう。けどそれ以上に、八墓の熱く仲間思いな一面が窺い知れたようで嬉しい。

「でも、告発とかしちやったら不戦勝になっちゃうじゃん」

いっばしのサッカーバカとして、それは面白くないなって思っただけ。

「……」

八墓がどんな顔をしているのかは見るのができないけど、きつと呆れた顔をしているんだらうな。

「決着は正々堂々サッカーで、つてね」

ゴールずらしまでは許容するからさ。

★★★

尾刈斗にマネージャーがいないことに憤慨する相戸留あいとるや仮沢かりさわに、ひたすらゲームをしている芸夢げいむや明井戸あけいと達。

そんな個性的な面々の集まる秋葉名戸控え室で、キャプテンと副キャプテンは暗い顔

をしていた。

「正々堂々戦つて、勝てると思うか？」

「強豪と呼ばれる野生にだって勝つことができたんだ。私達が勝てないとは限らない
さ」

野部流はそう口にするも、表情はやはり暗いまま。

「でも勝てないと思つたから昨日薬を盛つたわけだろ？」

「……ああ」

2人とも分かっていた。正々堂々尾刈斗に勝つなんて不可能だつてことは。

☆☆☆

体力も技術も足りない秋葉名戸は、FFに出場するにあたつて五里霧中やゴールずらしなど、反則スレスレの技を編み出した。優勝したらアメリカ旅行に行けるかも？という淡い夢を見て、みんなでアイデアを出し合つたのだ。

何かの思い出になるだろう、という記念受験のような心持ちも幾分かあつた。それでも地区大会初戦、強豪野生中を相手に勝つためのサッカーをして、見事1―0で勝つことができた。

尾刈斗の部室にて、人形はきつと野生中にも薬を盛ったのだらうと推理していたが、この勝利は（少なくともゴールずらし以上の）卑怯な手を使っていない、紛れもない勝利だった。

後半開始早々のど根性バットで意表を突けたこと、素人の拙いフェイントが通じたこと、五里霧中とゴールずらしのトリックに最後まで気づかれなかったこと。野生に勝った勝因を、このように野部流は推察していた。

確かに身体能力は秋葉名戸の比ではなかったが、軽くジャンプしただけでつられて数m跳び上がるのは案外扱いやすかった。

野生中に勝利した夜、みんなでいつものメイド喫茶に集まり、監督の奢りで祝杯を開いた。スポーツというのも案外悪くないな、今度スポ根もの書いてみようか、なんて言いながらお菓子を貪りゲームを囲む。

最高に楽しい夜だった。

野生中に勝ったことを後悔する日が来るだなんて、そのときは誰も思いもしなかった。

野部流と漫画の2人が影山から接触を受けたのは、その翌日。

尾刈斗が準決勝に進まれると困るから、次の試合は勝って欲しいという話だった。何か策はあるのかと尋ねられ、ゴールずらしについて白状したが、『そんな子供騙しを通じる相手ではない』と一蹴された。

『試合までに絶対に勝てる方法を考えろ。さもなければ後悔することになる』とも脅しをかけられた。

最初は2人とも影山の脅しをあまり真面目に受け取っていなかった。

しかし次第に周囲で異変が生じ始め、その言葉の意味を理解し始める。

秋葉名戸が取り壊されるかもしれないという噂が流れ始め、RAI@CAFÉは教育に悪いという名目で近々休業させられることが決まった。

そして、いつも仕事でお世話になっている編集者から、新作の件ですが……と野部流に電話が来た。

『大変申し上げにくいのですが、今書いていただいている新しいライトノベルの出版は取りやめることになりそうです』

『そんな……一体どうしてですか？』

野部流と漫画の代表作であるシルキーナナが有害図書に分類されることが決まったということ、それに伴って新作を出版すべきか社内で会議があり、上からの圧力で出版は取りやめる方向性で話がまとまったということ。急な決定に罪悪感があつたからか、

編集者は丁寧な事情を説明してくれた。

『上から出版について口出しされるなんてなかなか異例です。野部流君、出版界の大物を敵に回したりしてませんか？』

出版界の大物ではないが、野部流が思い浮かべたのは当然影山の姿だった。

秋葉名戸の取り壊し、RAI@CAFÉの営業停止、新作ライトノベルの出版停止、全て偶然同時に起きたとは到底考えられなかった。

そしてその翌日、影山は再び野部流の前に現れた。『死ぬことは無いから安心して使え』と謎の薬の入った瓶を渡し、再度野部流に脅しをかけた。

『それから、警察に言っても無駄だ。警察には私の協力者がいてな。君が万が一通報なんてした場合には、私のもとに連絡が来ることになっている』

(尾刈斗に飲ませろ、ということだろうか……)

瓶を眺めながら影山の意図について野部流が考え込んでいると、ある人物から話しかけられた。

影山に脅されていた人物は、野部流と漫画の他にもう一人いた。最も直接的に影山の被害に遭う人物、RAI@CAFÉ店長で監督の真二屋才人だ。

『やるしかありませんね』

『ボクも生活がかかっているから仕方ないんだヨ』

真二屋はいつも通りのふざけた口調だが、それはこれから行う犯罪への緊張の裏返しだと野部流は分かっていた。

漫画には何も告げないまま、野部流と真二屋はメイド喫茶での作戦を実行に移した。

そして、失敗した。

☆☆☆

「さあさあ試合が始まるヨ！何かあったらゼーんぶボクのせいってことにしてくれてい
いからサ、頑張っちゃって！」

真二屋の後押しを受けて、野部流はフィールドに立つ。

F Fに出場するにあたって監督が必要になり、通っているメイド喫茶の店長に名前だけ
借りることにしたという経緯で監督になった真二屋だが、誰よりも秋葉名戸のみんなを
大切に思ってくれていることを野部流は感じていた。

秋葉名戸ボールでスタート。

前半は試合を動かさず体力温存に徹底する。それが秋葉名戸が勝つための唯一の方法だった。

「発進！ハイパーサッカーボール、発射！」

「来たな、悪の軍団め！お前達にこの地球は渡さん！」

各々が好き勝手にしているだけに見えるが、これも相手の調子を崩すというれつきとした作戦である。少なくとも野生中相手にはそれなりに効果的であつたと野部流は考えていた。

「怨霊。もーらいつと」

尾刈斗中相手には、ほとんど効果がないようだが。

野部流にとって、尾刈斗は不気味で仕方がなかった。どうしてあんな恐ろしい帝国学園と敵対関係にあるのかも謎であつたし、どうして葉を盛つたことがバレたのかも不明であつた。

ボールを奪われてしまったため、秋葉名戸は守りを固めないといけない。

しかし、秋葉名戸の守備は五里霧中とゴールずらし頼りであり、他にろくなブロック技は存在しない。

前半からそんなことに体力を使つては、後半には倒れてしまう。

「まずは1点、いただきですよ。ファントムシュート」

だから、あつけなくシュートが決められる様子を、野部流は黙って見るしかなかった。前半が終わる頃には、秋葉名戸は4点差もつけて負けてしまっていた。

☆☆☆

ハーフタイム。秋葉名戸ベンチは敗戦ムードでお通夜……というわけではなく、呑気にゲーム機を動かしていた。

もともとそんなに勝てるとは思っていなかったし、後半一矢報いることができたならそれでいっかくらいの軽いノリである。

この試合に秋葉名戸とRAI@CAFÉとシルキーナナの命運がかかっていることを知っているのは、野部流と漫画と真二屋の3人だけだ。

「今頃、雷門はスポーツドリンクを飲んじゃってるのカナ？」

軽く口にする真二屋だが、それがどれだけ重要な意味を持つのか野部流は分かっていた。

試合開始前、野部流が尾刈斗の選手と話をして頭を下げている間に、漫画がスポーツドリンクに薬を混入させる。それが3人で考えた作戦だった。

ベンチに誰かが残っていたら終わりという拙い作戦だったが、確かに一瞬尾刈斗ベンチは無人になっていた。きつと尾刈斗にマネージャーがいればこれほど首尾よく進まなかっただろう、と野部流は尾刈斗の体制に感謝していた。

「私達はこうするしかなかったんだ。しかたないだろう?」

野部流は誰に向けてか、言い訳を零す。

漫画はそれを聞きながら、自分のとった行動は正しかったのか自問するしかなかった。

尾刈斗ボールで後半が始まる。

尾刈斗の選手に特に不調は見られなかった。そもそも、影山から貰った薬が一体どんな効果を持つのか、どれほどの即効性があるのか、野部流は何も知ってはいなかった。

前半で温存した分の体力を解放する。いきなりアクティブになった秋葉名戸に驚いていたのか、芸夢があっさりボールを奪取できた。

そこからの高速カウンター。野生中戦でも用いた必殺戦術である。
「行くぜ！ど根性バット！」

芸夢が漫画の足を掴んで、野球のバットのようフルスイングする。

「オー！イッツクレイジー！キラーブレード改」

秋葉名戸における紛れもない最強シユートだったが、尾刈斗キーパーの鉈にあっさり
両断される。

秋葉名戸と尾刈斗の間には、ただ圧倒的な実力差があった。

「やっぱり最初から、勝ち目なんてなかったんだ」

漫画がボソリと呟く。

ボールは鉈から霊幻、八墓、月村へと渡り、幾度目かの尾刈斗のシユートチャンスと
なる。

「五里霧中！」

作戦通り、足をばたつかせ土煙を発生させる。スポーツドリンクに薬を混ぜて、目く
らましというしょうもないことをして、私は一体何をしているのだろうと自虐しながら、
野部流は自分の仕事をただただこなす。

「行くぜ！フアントムシユートV2！」

「ゴールずらしー！」

土煙の後ろで、相戸留がゴールそのものを弾き飛ばす。どれだけ威力の高いシュートが来ても勝てる理論上最強の技だ。

だが、その最強の技もすぐに破られることになる。

「ずつと足をバタバタさせ続けられるわけじゃなさそうだからさ、土煙が晴れるまで待てばいいだけだよね」

紫藤のその一言で、五里霧中はまだ無駄に体力を消耗させるだけの技に成り下がった。

丸見え状態のゴールずらしは最強ではない。そもそも反則スレスレでありバレルと問題だというものもあるが、ゴールの左右どちらに立っているかでどちらにずらすか分かかってしまうのである。

またこの男か、と野部流は紫藤を忌々しく見つめる。

(それにしても、いつになったら薬の効き目は現れるんだ)

野部流が不思議に思っている間に、さらに失点を3つ重ね、後半も終わった。

0-7で秋葉名戸の敗北だ。

☆☆☆

「薬の作用がいつ現れるか分からないから、気をつけることだね」

野部流が急にそう言い出したのは、もうどうなっても構わないというやけくその思いが根底にあったからだ。

「薬の作用ってなんのことだ？」

野部流は正直に全て話した。影山に脅されていたこと、謎の薬の入った瓶を貰ったこと、その薬をスポーツドリンクに混入させたこと。

隠し事をする元気はもう残っていないかった。驚く尾刈斗とチームメイト達を見ながら、どうしてこうなってしまったのだろうと他人事のように考えていた。

「え、もしかして僕死ぬ？」

「影山の持つてくる薬なんて世界で一番危険な薬に違いないだろ」

知らぬ間に薬を飲まされていたと知って尾刈斗はパニックに陥る。

「やっぱり……許すべきじゃなかった……呪い改」

怒りを込めて呪いを放つ八墓。強化された黒い影が、野部流を強く締めつける。

野部流はやつと罰が与えられたような気がして、一切の抵抗をせずに受け入れた。

「ちよつと待つてくれ！話を聞いてくれ！」

漫画が必死に八墓に声をかけるが、八墓は無視をして締めつけを強くする。

「やめろ八墓！」

野部流が意識を手放す直前に、八墓が体当たりを受けて弾き飛ばされ、黒い影も霧散する。体当たりをしたのは黒上だった。

「俺はもう、サッカーのせいで誰かが傷つくのを見たくないんだ」

多呂斗と最も仲の良かった黒上だからこそそのその考えに、野部流は救われたのだ。た。

「お願いだから話を聞いてくれ!!」

八墓はまだ何か言おうとするが、漫画の叫び声に遮られる。

「僕は確かに君達のスポーツドリンクに薬を入れようとした。でも、できなかったのさ。僕の中のシルキーナナが許してくれなかったから」

薬を混入させようと尾刈斗ベンチに近づいた漫画だったが、寸前で思いとどまった。たとえ連載を続けるためだとしても、自分たちが創り出したキャラクターに顔向けできないようなことはしてはならないと思ったのだった。

「つまり、僕達死なない？」

「なんだよ、すげえビビったじゃねーか」

結局薬は入っていなかったということで、パニックはひとまず落ち着いた。秋葉名戸のチームメイトも何がなにやら分からなかい様子だったが、とりあえず最悪よりはマシな状態であるとは理解したようだ。

漫画は「裏切つてすまない」と野部流に詫び、野部流は「それが正解だったんだよ」と漫画の選択を認めた。計画は失敗に終わったが、野部流は確かに安堵の気持ちを抱いていた。

「これ、頼れる刑事さんの連絡先」

今にも立ち崩れそうな様子の野部流に紫藤が近づいてきて、電話番号の書かれた紙を手渡した。野部流はもはや何もかも現実味を感じなくなっていたが、紫藤が自分を助けようとしてくれていることは理解できた。

「どうして影山の言葉を信じちゃったかな。最初から警察に通報すればよかったのに」

昨日メイド喫茶で野部流にカレーを食べさせようとしたときと同じ目。温度のない、蔑むかのようなその目が野部流には恐ろしかった。

47 事の顛末

「そんなことがあったのか……」

「影山の野郎、とんだ大悪人じゃねーか。さつさととつ捕まえられねーのか？」

雷門のイナビカリ修練場を借りたついでに、円堂達がいる部室に秋葉名戸戦の土産話を持ってきたら、いつの間にかどんどん犯罪の話になっていつてしまった。

染岡が凄みのある顔で影山への怒りを露わにするが、そう簡単にはいかないのが辛いところ。

「さつさと捕まえられたら楽なんだけどね。警察内部とも色々繋がりがあって、鬼瓦刑事も苦戦してるらしいよ。」

脅迫の証拠をテープレコーダーなんかで残しておいてくれたらまだなんとかなったのかもしれないけど、そこまで頭が回らなかったんだろうね」

「にしても、邪智暴虐って言葉がこんなに似合う奴はなかなかいないよな」

2年生の国語の教科書に乗っているあの有名な物語を思い出してか、半田はそう呟く。

ただ残念なことに、ただ走るだけでは影山は改心してくれそうにない。それができるのはフィディオくらいだろうか。

改心したとしてもこれまで犯した大量の罪が消えるわけではないけど。

みんなで影山の悪口を言い合っていたけど、この中で一番影山に対して怒りの感情を抱いていたのは、僕でないとするなら、円堂だった。

「許せない……」

世の中には怒ると熱くなる人と、怒ると冷たくなる人の2パターン存在する。そして円堂は、意外かもしれないけど後者だった。

静かに燃える青い炎のように、円堂は影山に対する怒りを滲ませる。

「サツカーは楽しむためのものだ。誰かを不幸にするための道具なんかじゃない」

「うん、そうだね」

円堂の気持ちは痛いほど分かる。

「でもね、影山はこの間の秋葉名戸関係だけでも色んな悪事を働いたけど、必ずしもみんなが不幸になったってわけじゃないんだ」

暗い世の中でも明るい話が完全に絶えることはないように、この一件の間にも良いニュースはいくつかあった。

「秋葉名戸学園の取り壊し、メイド喫茶の営業停止、ライトノベルの有害図書指定と発売停止、野部流達はこの3つの要素で影山から脅かされていた」

僕は指をひとつずつ立てて、影山の行った脅迫についておさらいする。

「僕達が秋葉名戸に勝つちやっただけで、この3つは全て実行に移された。でも実際のところ、全部対処可能な問題だったんだ」

「対処可能って？」

「結局どの問題も、みんな協力すればなんとかなる話だったってこと。

まず、秋葉名戸の取り壊し問題。僕らが試合に勝ったその日に理事長が書類に印を押して、もう取り壊される流れになってしまった。でも秋葉名戸のパソコンに強い人達が理事長のパソコンをハッキングして、不正なお金の流れがあることを発見したんだ。その情報を元に、鬼瓦刑事と協力して追及していくつもりらしいよ」

ハッキングだとか不正なお金の流れだとか、サスペンス映画でしか聞かないようなワードに固まる円堂達。

原作でも勝敗結果の書き換えとかやってたし、本当にFBIとかで働いたとしてもおかしくないよ、あの人達。10年後はハッカーとして活躍してるんだっけ。

「野部流は警察にも誰にも頼らずに解決しようとしていたけど、最強の仲間はずぐ近くにいたんだよ」

最強ハッカー達のおかげで解決！と言いながら指をひとつ折る。

「次に、メイド喫茶の営業停止問題。これも裏で影山が動いていたのは間違いないんだけど、直接的に営業停止の指示を出したのは稲妻町の町内会なんだ。サリーさんが言うには上からの圧力みたいなのがあって、元から子供が学校帰りにメイド喫茶に寄るってことをよく思ってたから言われた通り営業停止処分を下したんだってさ。」

秋葉名戸のメンバー総出でサリーさんに撤回を求めに行ったら、町内会のサッカーチームに勝てたら取り消しを認めるって話になっ——」

「町内会にサッカーチームがあるのか?!」

サッカーという言葉を聞いて途端に元気になる円堂。時折傘美野中と練習試合をしていたくらいで弱小サッカー部と試合をしてくれるところはなかなかなかったから、練習相手になるとでも考えたのかな。

「うん、あるみたい。サリーさんサッカー好きらしいし、練習試合を申し込んだら断られないと思うよ。」

ってその話は今はどうでもよくて、営業停止を取り消すために町内会のチームと戦うことになったんだって。意外とサリーさん達強くて、いや秋葉名戸が弱いだけなのかもしれないけど、結構苦戦したみたい。正々堂々と戦わないと意味が無いつて言つて五里

霧中とかゴールずらしとかを封印してたのもキツかったんだろうね。

結局3回目の挑戦でなんとか勝つことができて、営業停止は見事取り消されたんだ。秋葉名戸の人達にとってメイド喫茶が居場所になってるってことをサリーさんも理解してくれて、また影山つてやつが何か言ってきたてもメイド喫茶を守つてやるつて約束もしてくれたらしい」

サリーさんを説得できて解決！ともうひとつ指を折る。

ここまでの2つの件で思うことは、野部流はやっぱりに頼るべきだったつてこと。僕も随分誤解していたけど、秋葉名戸の選手達はああ見えて仲間思いな良い人達なのだ。

そんな素敵な仲間を頼らずに、犯罪行為に走つてしまったことは愚かなことだったと思う。よく考えたらハッキングも犯罪行為なような気がするけど気にしな—い。

「最後に、ライトノベルの有害図書問題。有害図書指定のニュースをいち早く知ったシルキーナナのファンが、都に問い合わせをして、その対応に不備があったとファンサイトからインターネットで発信したんだ。日本中のシルキーナナのファンの団結を促して、有害図書指定の取り消しを求める署名を集めてるみたい。ネット署名だけでも数千は集まってるんだとか」

まだインターネット黎明期だけど、インターネットの持つ影響力は本当に恐ろしい。シルキーナナの読者層と、インターネットを利用する層が似ていたことも幸いだったのかな。

「秋葉名戸との試合があつてからまだ3日だろう？なんていうか、すげえな」

「紫藤、もしかしてだけど、その熱心なファンって……」

「多分半田が今考えてる人だと思うよ。今はここにはいないみたいだけど」

「練習が終わってすぐ、やらなきやいけないことがあるんですけどか言つてソツコーで家に帰つてつたよ。ここ数日忙しそうにしてると思つたらそんなことをしてたのか……」

今話題に上がっているのは、そう、あの目金だ。

「目金はこの間の薬混入事件のときに、メイド喫茶にいたメンバーの1人。野部流先生がこんなことするはずがないとか言つて、事情を色々と探つてみたい」

頼りない奴だと思つていたけど、やる気を出した目金は思つていた数倍アグレッシブで、味方であることが本心に心強かった。

「でも雷門は大丈夫なの？大会中に目金があんなことばっかりしててさ。前も言つた気がするけど他の部員を探した方がいいんじゃない？」

僕にとつてはとても心強い味方だったのだけれど、雷門にとつては迷惑なチームメイトになつてしまつてるような気がする。

原作と違い豪炎寺や土門がおらず、未だ部員は11人のまま。目金もレギュラーとしてフル出場させないといけないのだ。

「それは大丈夫。目金は最近練習後すぐに家に帰ってるけどさ、練習はすつげー真面目にやってるんだぜ」

円堂が嬉しそうにそう説明する。実際、みんなが意欲的にサッカーをしてくれるというところが、円堂にとって何より嬉しいのだろう。

「それで結局、有害図書指定というのは取り消されることになりそうなの？」

「うーん、そこら辺は僕は詳しくないからよく分からないんだ。ただ、豪炎寺さんの知合いの弁護士さんによると、一定数の署名が集まれば無視するわけにはいなくて、都が説明の場を設けるんじゃないかってさ。といっても法的拘束力はないから有耶無耶にされる可能性も高いけど」

「そっか……」

少し残念そうに肩を落とす秋。シルキーナナが有害図書になるかなんて全く興味がないけど、ここまで来ると応援したくなっちゃうよね。

「まあでも、有耶無耶にされたとしてもどこまでも追い詰めることになると思うよ。ファンサイトから広がったこの運動は、ついに掲示板を動かすことになったからね」

「ん、掲示板？」

イマイチピンと来てない様子の円堂達。確かにまだ一般に知られてるもんじやないし、きつと頭には保健だよりとかが貼つてある学校の掲示板が浮かんでるのだろう。

「なんて言うんだろう……インターネット上でおしゃべりしてる暇な人達の集まり？」
ちよつと偏見も混じつてるような説明だけど、そう違わないでしょ。多分。

「なーんか頼りないなあ」

「あの人達を舐めちゃダメだよ。世界で一番敵に回しちゃいけない集団なんだから」

掲示板というと、どうしても前世のあの「祭り」を思い出す。味方になるとこんな心強い存在になるとは思わなかった。

「有害図書的事件や、他のFFに関わる色々な事件で、影山が裏にいるって情報はもう掲示板に流したから、後は勝手に動いてくれるはず。」

帝国学園のホームページも、もうサーバー落ちちやつてるしね」

「なんかすげーな……」

ついさつきは頼りないと言っていたはずの半田も、インターネット世界での圧倒的な攻撃力を知つて考えを改める。

日本中のファンや掲示板民を動かして多分解決！と最後の指も折る。

つまりは、秋葉名戸の学校の外に目を向けても、野部流を助けてくれる人はたくさんいたつてことだ。

「てことで、脅迫の内容は全部解決しそうなんだ。それどころか秋葉名戸の絆は深まったし、シルキーナナのファンの結束も固まった。結果だけ見たらいいことばっかりで、みんながみんな不幸になっただけじゃやないんだ」

試合後に秋葉名戸周辺で起きたことをおおよそ話し終えた。影山が悪くないなんて言うつもりはさらさらないけど、この世界を作った神様はそんなにバッドエンド好きじゃないってことは確かだ。

「それに、帝国学園は僕達尾刈斗が責任を持つて倒すから。40年間築き上げてきた悪の帝国は僕達がぶち壊す」

鬼瓦刑事や豪炎寺さんを始め、秋葉名戸や掲示板の見知らぬ人達、たくさんの人が影山の悪事を終わらせるために協力してくれている。

だから僕は、絶対に負けるわけにはいかないのだ。夢で会うあの子のためにも。「それは心強いな」

そう笑って返す風丸だが、何か危惧することがあるのか、でも——と言葉を続ける。「本当に、大丈夫なのか？」

試合に勝てるかって意味じゃない。あいつは、影山は手段を選ばないやつなんだろう？尾刈斗の次の対戦相手の暴走学園は不良や問題児がたくさんいる学校だ。影山がまた何か唆して、紫藤達を潰しにくるのなら、今度は本当に傷害事件になりかねない。

喧嘩の強いやつがサッカー部に入ったって噂も聞くし、本当に気をつけるよ？」

風丸の眼差しからも、僕を本気で心配していることが見て取れる。

「まあ大丈夫だよ。何かあったら鬼瓦刑事に助けを呼べばいいし、不死先輩とか意外と喧嘩強いから返り討ちにできちゃうかも」

不死先輩はどれだけ傷ついても痛みを感じることはないびつくり不死身人間だ。痛みを感じないってのは人間の大切な防衛システムが働かないってことで危険なように思えるけど、不死先輩は痛みを感じない上に馬鹿みたいに頑丈だから多分問題はない。

「喧嘩になったらうちから染岡を貸すぞ」

「おいコラ勝手に貸すんじゃねえ！」

半田と染岡のふざけた掛け合いで、少し暗かった部室の雰囲気も明るくなる。

風丸は危機感の無い僕らに呆れるようにため息をついたあと、「まあ、なんとかなるか」と呟いて心配するのをやめた。

「そういえば新しいドリブル技できたんだけど、半田、実験台になってくれない？」
「実験台ってなんだ、実験台って。練習相手と言えばいいだろ」

☆☆☆

その後、「俺も紫藤の新必殺技見たい！」と円堂も外に飛び出てきて、紫藤と円堂にまぼろしドリブルの練習相手になってもらった。

相も変わらず幻影系の技。やっぱりオリジナリティーはないけど、この世界では僕のオリジナル技ってことになっちゃうのだろう。ごめん、栗松。

日が落ちるまで練習を続けたせいで、部室でおしやべりすることはもうなかったのだけれど、もう少し暴走学園についての知識を深めておくべきだったように思う。

少なくとも風丸からあの噂について深く聞いておく必要があつた。新たにサッカー部に入ったという喧嘩の強いやつは、一体なんという異名で呼ばれているのか、とか。

すっかり情報収集を行っていたなら、試合当日に対戦相手を見たときに、こんなに困惑しなかったかもしれない。

(なんでもうサッカーを始めてるんだよ、蹴りのトビー！)

48 蹴りのトビー

準決勝の相手は暴走学園。不良が学校を支配してるとか、近づいたらカツアゲされるとか、ろくでもない噂が絶えない治安の悪い学校だ。

あまり積極的に練習試合などを申し込んで関わりを持ちたい学校ではなかったから、一度も試合をしたことはないんだけど、キラースライドとかジャツジスルーなどの暴力的な必殺技を好んで使っているらしい。うん、解釈一致。

風丸に脅しをかけられていたこともあって、暴走学園の奴らが殴り込みに来るんじゃないかと少しビクビクしていたが、特に何事もなく試合当日を迎えることができた。

今回は普通にサッカーができるのかな？ って気を緩めちやつてたから、対戦相手の姿を見たときに心の中でこう叫んでしまったのも、何も悪くないと思う。

(なんでもうサッカーを始めてるんだよ、蹴りのトビーー！)

原作では世界編で仲間になるはずの男、飛鷹征矢がそこにいた。しかも、なんか暴走学園のキャプテンらしい。

☆☆☆

「暴走学園が使う必殺技は帝国学園のそれと重なる部分が多い。次の帝国戦の練習だと思つて挑め」

久遠監督が普通に普通なことを言っている。必殺技禁止みたいな奇を衒つた戦術は、ありがたいことにあれ以来ない。

「今回、敵は高性能のカメラを用意しているようです。僕も持っていますが、紫外線や赤外線などさまざまな波長の光を感知できる優れものです」

UFOの搜索のため毎晩夜空を観察してるといふ円谷が、観客席に設置されたカメラを指さして解説する。ここでいう「敵」とは、暴走学園ではなく帝国のことだ。

「つまり、御影専農戦で行つたようにモヤでフィールドを隠すという手法は、無意味である可能性が高いということです。この試合、秘策は使わずに勝つ必要があります」

円谷の尤もな意見に耳を傾けながらも、僕の頭の中は飛鷹がサッカーをしている謎でいっぱいだった。

「さつきから紫藤も様子がおかしいけど、暴走学園の選手に知り合いでもいた？」

心の中の混乱を顔に出さないように努めていたはずなのに、三途にはほとんどお見通しだ。本当に察しが良すぎやしない？

「知り合いつていうか、僕が一方的に知ってるだけなんだけど」

「凄く驚いていたように見えたから、その人がサッカーやってるって知らなかったって
ハハハ。」

「うん、まあ、そんな感じ」

「適当に誤魔化して答えながら、もう一度暴走学園のベンチを見ると、飛鷹以外にも知っている顔がちらほら。オレンジのリーゼントが特徴的な背の低い選手は鈴目^{すずめ}で、ピンの長髪は、トレードマークのパーカーはさすがに被ってないみたいだけど唐須^{からす}かな？他にも名前の知らない飛鷹の舎弟が数人いる。

（いやほんと、なんで君らサッカーしてんの？サッカーのこと玉遊びって見下してたんじゃないの？）

頭の中はずっとハテナだらけだけど、僕の混乱をおいてけぼりにして試合は始まる。

☆☆☆

尾刈斗中学

― 円谷― 月村― 人形―

― 八墓― 魔界―

― 靈幻 ― ― 木乃伊

― ― 紫藤 ― ―

― 不亂 ― ― 屍 ―

― ― 不死 ― ―

暴走学園

― 佐野 ― 唐須 ― 窪谷 ―

― 浦飯 ― 三橋 ― 荒北 ―

― 小山 ― 細川 ―

― ― 鈴目 ― ―

― ― 飛鷹 ― ―

― ― 太田 ― ―

尾刈斗のフォーメーションはいつもの5―4―1ではなく、3―4―3のやや攻撃的な布陣。ジャツジスルーなどの技にも対抗できるようにDFは頑丈な不亂先輩と屍、ついでに僕といった感じだ。GKが不死先輩なのは久しぶりだね。

フィジカルの弱い三途や柳田の選出は避け、帝国戦に備えてくれぐれも怪我をするこ

とがないようにという久遠監督の思惑が見える。逆にレギュラーメンバー以外は怪我をしても仕方がないという、久遠監督のやや冷酷な一面が現れたとも言える。

対して暴走学園はかなり尖っている。守備は飛鷹に任せ、FWが大量。1―3―6という馬鹿みたいなフォーメーションだ。

ただ舐めてかかつてはいけない。トーナメント表を見た限り、比較的強豪の少ないグループに属してはいたが、それでもここまで2戦勝ち上がったのは事実だ。

原作での飛鷹の活躍を知っているから、守備は飛鷹1人で十分なのだと言われても納得してしまう。もし既に真空魔を習得しているのなら、僕達の放つシユートはほとんど止められてしまうだろう。

暴走学園ボールで試合は始まる。

開始早々、単身で攻め上がる唐須。想定していたより遥かに速い。でもサッカーは1人で――

「サッカーは1人でももんじゃないんだぜ。怨霊」

言いたいことを魔界先輩に言われてしまった。そしていつもの怨霊で唐須の足止めを図る。

しかし怨霊の発動を見た唐須は、チツと軽く舌打ちしながら、蠢く手が足に届くより

早くバックパスしてボールを奪わせない。

「猪突猛進タイプに見せかけて冷静な判断もできんのかよ」

なかなか手強い相手かもしれないと、警戒レベルをさらに一段階上げる。

ボールは1度後ろに下げられたあと、再び唐須に戻される。そして唐須は一直線で魔界先輩に向かって走り出す。

ドリブルとはディフェンスを避けようとするのが普通であり、それを目掛けてダツシユだなんて普通じゃない。突然の唐須の行動に怨霊の発動も間に合わず、魔界先輩はジャツジスルーの餌食になる。

「死ねっ！ジャツジスルー！」

魔界先輩の体は大きく吹き飛ばされるが、上手く受身は取れたみたいだ。

それにしても、そんなストレートな暴言はダメだと思うの。帝国の咲山も全く同じような暴言を吐いてた気がするけど、「死ねっ」まで含めて必殺技名だったりする？

木乃伊がボールを奪いに行くが、上がってきた細身のMFに寸前でパスされてしま

う。
MFがここまで上がってきているということがおかしい。元から最前線に6人ものFWがいる超攻撃的フォーメーションだったのに、さらにMFの選手も加わり尾刈斗のコートに暴走の選手が集結しているという異常事態だ。

カウンターは全く考慮していないのか、それとも……

細身のMFは隣に立つ小柄なMFにパスを送るが、その際に何故かボールが平べったいサーフボードのような形に変形する。世界最高峰のチームも使うドリブル技だ。

「エアライド！」

そういえばこいつら原作ではスケボー乗りこなしてたんだつけとか感心しているうちに、小柄なMFは八墓と霊幻を飛び越えて、僕のいるデیفエンスラインまで切り込んでくる。

「貫うよ、クイックドロウ」

「キラーズライド」

咄嗟のクイックドロウでボールを奪うが、直後に飛び込んできた必殺スライディングで奪われてしまう。飛び込んで必殺技を使う一連の動作になんの躊躇いもないのが恐ろしいところ。

「唐須やつちまえ！」

右サイドにいた唐須の元に再びボールが渡る。右サイドバックの屍が対応するが、唐須はニヤリと嫌な笑みを浮かべたまま、やはり避けようとはせず屍に突っ込んでいく。

再びジャッジスルーされてしまうのかと屍が臆したその隙に、唐須はボールを空中に蹴りあげる。そして追走していたもう一人のFWにグルグルと回転の勢いで投げ飛ば

してもらい、唐須は空中でボールに追いつく。

「行くぜ！ホークシヨット！」

不亂先輩のシュートブロックも入れられない右サイドからの必殺シュート。多分意図したわけではないんだろうけど、空中からのシュートということで歪む空間が通用しないのも厳しい。

「ロケット(ぶし)」

「キラブレード」

ロケットこぶしで勢いを殺した後、青い刃で切断する。不死先輩のこの二段構えは鉈とは違った安心感があるけど、必殺技を2つ使う分消耗も倍だから気をつけないと。

不死先輩得意の遠投でハーフライン近くに立つ八墓までパスが渡る。相手のディフェンスは鈴目と飛鷹の2人だけ。

「俺が止めます！キラースライド！」

「カマイタチ」

鈴目の必殺技も難なくきりもみ回転の必殺技で突破し、残すは飛鷹のみ。

飛鷹はボールを奪いに行くわけでもなくゴール前でキーパーかのように佇んで、さあどこからでも打ってこい、とシュートを待ち構える。

F Wを自由にさせるということは、こちらはいくらでも準備ができるということ。すなわち、絶好のシュートチェインチャンスなのだ。

飛鷹がゴール前にいるおかげでオフサイドにもならないしね。

「彗星シュート！」

「からのファントムシュート！」

「トドメだ！ファントムシュートV2!!」

円谷、人形、月村先輩が順にシュートを重ねる。実戦ではなかなか決まることのない連続チェインだ。

飛鷹はもちろんあの十八番の必殺技でシュートを迎え撃つ。

シュートブロック狙いは実際のところあまり強い戦術ではない。シュートの軌道上でしっかり待つ必要があるし、タイミングを合わせるのも難しい。そして必殺シュートは大抵キーパー技でなければ止めることが難しいため、成功してもせいぜいパワーダウンさせるだけに終わったりもするからだ。

「真空魔V2!!」

——ただしDFの実力が圧倒的である場合はその限りでない。

3人のF Wのパワーが乗せられたシュートは、飛鷹が作り出した空間の亀裂に吸い込まれ、その勢いを完全に失った。

「マジかよ……」

たった1人のDFにシュートを完全に止められたという予想外の事態に、月村先輩も絶句する。

月村先輩だけじゃなく、尾刈斗の全員が驚いて固まってしまっている。僕だってそうだ。世界レベルの才能の持ち主だということは分かっていたけど、まさかもう既にここまでの強さを持っているとは思わなかった。

(マジでなんでもうそんな強くなってるんだよ、蹴りのトビー！)

49 ウィークポイント

なんで？と心の中で叫んでも現実は何も変わらない。

事実として、飛鷹は3人がかりのシユートを一人で止めてみせたのだから。

「鈴目！」

そしてその驚異的なキック力で、ハーフライン近くまで上がっていた鈴目にパスを出す。

「スカイウォーク！」

空中でボールをトラップした鈴目は、そのまま着地することなく空を駆け抜ける。

飛鷹以外の選手は攻撃が本業ってわけか、やっぱりいい技を持っているね。

そして鈴目からのパスで、ヒョロ&チビのMFコンビにボールが渡ってしまう。2人が繰り出す技はもちろん、

「エアライドー！」

ボールを器用に乗りこなし、霊幻の頭上を越えていく。

尾刈斗は空中戦に弱い。歪む空間が空中の相手に効きづらいというのはさつき説明

したと思うけど、それよりも困るのは怨霊が届かないことだ。地面を這う怨霊は空中の敵に対してなんの脅威にもなり得ない。

秋葉名戸が何故か勝ってくれたおかげで戦わずに済んだけど、野生中と当たることになつていたら、準々決勝でかなり苦戦していたかもしれないね。

地面に降りた瞬間を着地狩りしようと思は地上で待機していたけど、サーフボード状のボールだけを前に飛ばして（レジエンドジャパンの綱海が使っていたスパークルウェイブみたいな感じ）、ボールを地面に落とさずに前にパスを繋げられる。

乗り手のいなくなったボードボールは元の球体に戻り、空中のそれを拾いに行くのは前回と同じ唐須。

「ホークショットー」

味方の協力で空に飛んだ唐須が、再び鷹のようにシュートを放つ。

エアライドからダイレクトにシュートをされたせいで対応が間に合わず、不乱先輩のシュートブロックも入れられない。屍のタフネスブロックはそもそも高い角度のシュートには使えない。

「ロケットこぶし」

「キラードレード」

不死先輩がなんとかセーブしてくれたけど、このペースで攻撃されるとさすがに体

力ってというかTPが持たないな。

「これ、結構まずいアルネ。次はちゃんと食い止めないとアル」

「私達が苦手とする空中でのパス……弱点は分析済みと」

「スカイウォークとかエアライドとかも厄介だけど、ジャツジスルーも気をつけねえとな。あれ普通に痛いし」

暴走のドリブル技は多彩で、どれも対処が難しい。このままだとどうしても流れを暴走に握られてしまいそう。

不死先輩は前回はカウンター狙いで中盤までボールを投げたけど、飛鷹の対処法が見えない以上無闇に攻めてもまた痛い目を見るだけだと判断して、手近な屍にパスを出す。

僕と屍と不乱先輩の3人でボールを転がしながら、どう攻めようかと様子を探る。

しばらく戦況は膠着していたけど、屍がボールを持っていたタイミングで暴走FWに急に距離を詰められてプレッシャーを与えられ、ゴールの方にボールを零してしまう。

不死先輩が咄嗟に前に出て蹴り返してくれたからなんとかあったものの、今のはかなり危なかった。

不死先輩が蹴り返したボールは暴走のFWに拾われてしまうが、後ろに下がっていた人形が対応する。

「どけっ！ジャツジス——」

「ドツペルゲンガー」

自分とボールの間に肉壁になるように人形がドツペルゲンガーを発生させると、突然現れた自分そっくりな存在に驚いて相手はジャツジスルーの発動を中断した。

相手が驚いている隙に、人形本人がボールを掠めとる。この技はドツペルゲンガーを操作してボールを奪ってもらうこともできるし、ドツペルゲンガーをミスディレクションとして自分でボールを奪いに行くこともできる器用な技だ。

「このドツペルゲンガーは君と痛覚が共有されるから、蹴ってくれた方が面白かったのに」

残念だなあ、と人形は平気で嘘をつく。ドツペルゲンガーにはそんな仕様はないんだけど、この嘘を信じてしまえばドツペルゲンガーにジャツジスルーなどの技を使うことが躊躇われてしまう。

即座に淀みなく嘘をつけるのは本当に人形の才能だと思うよ。

「月村パイセン！」

人形から月村先輩にボールが託される。3人がかりのシュートすら止められたから、月村先輩1人の力でゴールを奪うことなどできそうにはないけど、今は月村先輩に頼るしかない。

「フロントムシュートV2!!」

「真空魔V2!」

6つに分裂したボールのうち本物だけが空間の裂け目に吸い込まれる。フロントムシュートの強みが何も活かせていないね。

「チツ、やっぱりダメか……」

いつまで経っても上手くない様子に魔界先輩も苛立ちを覚えているみたいだ。

「もう一回だ! 鈴目!」

「二度も同じことはさせませんよ」

さつきと全く同じように飛鷹は鈴目までロングパスを送るが、それを読んでいた円谷が空中でパスカット。

「魔界先輩、月村先輩に繋げてください!」

円谷は着地したあと、魔界先輩にパスを出す。月村先輩に次ぐ実力を持つ幽谷や武羅渡がないからつてのものもあるけど、やっぱりこのチームのエースとして信頼されているのは月村先輩なのだ。月村先輩ならなんとか飛鷹を攻略してくれるという無根拠な期待をしてしまうのも仕方ない。

ただ魔界先輩は円谷と違って月村先輩に頼りきるつもりはないなようで、無闇に攻め

でも無意味だと思っっているのか、しばらく様子を見るためにボールを保持する。

前半終了も近い。膠着した状況を打破しようと鈴目が魔界先輩に近づいてくる。

「魔界の住人の俺様を舐めんじゃねえ！呪い！」

後ろを振り返ることなく鈴目を必殺技で身動きを取れなくして、そのまま魔界先輩は飛鷹に突撃していく。

「おい魔界、1人で攻めんな！」

月村先輩の忠告も無視して、魔界先輩は飛鷹を抜き去ろうとする。

「キラースライド！」

しかし、真空魔以外も使えるらしい飛鷹によってやはり阻まれる。

「クソっ！」

「魔界、何してんだよ」

「お前に渡したって、どうせまた点は決められなかっただろ」

月村先輩と魔界先輩の間に険悪な雰囲気が出る。

確かに月村先輩のファントムシュートでも飛鷹の真空魔は対処できそうになかったけど、守備よりのMFである魔界先輩のほうがおさら不可能だ。いつもの魔界先輩ならそんなことちゃんと分かってたんだろうけど、焦って冷静じゃなくなっているんだ。

先輩達がいがい合っている隙に、ボールは飛鷹から鈴目へと移される。

「もういつちよ！スカイウオーク！」

何度目か分からないカウンターを食らう。僕達がなかなか対処できない空中のルートを使ってボールは再び前線まで運ばれる。

「ドッペルゲンガー。君が気絶してもいいなら好きに蹴りな」

パスコースを制限するように人形が再びFWのドッペルゲンガーを発生させる。人形はカウンターを警戒して、僕達DFのいる位置まで下がってきてくれていたんだ。

痛覚が共有されるという嘘を信じている相手は、乱暴なプレーをするわけにもいかずに何も出来ずにいる。

「しょーもない嘘に騙されてんじゃねーぞ！死ぬっ!!」

そこに唐須がやってきて、なんと、ドッペルゲンガーを直接蹴り飛ばした。

「あ？なんか文句あるか？この気色悪い偽モンは必殺技の一部なんだろ。蹴り飛ばしてもファウルにもなるわけねーじゃん」

「唐須、こいつは俺と痛覚が共有されるって」

もし本当だったら俺死んでたぞ！と唐須に怒るチームメイト。

「そーゆーところが馬鹿なんすよセンパイ。もしほんとに痛覚が共有されるんなら、自分からその偽モンを殴るとか、いくらでも他にすることあったに決まってるっしょ」

意外に冷静に推理を述べる唐須。しっかりと論理的に人形の嘘を見抜いていたわけ

だ。

「ま、もし本当に痛みが共有されたって俺が困るわけじゃねーし」

そう自己中心のことを言いながら、唐須は攻め上がる。

「クイツクドロウ！」

「どけっ！ ジャツジスルー！」

便利なクイツクドロウで唐須からボールを奪おうとするも、ジャツジスルーの直撃を食らってしまふ。

かなり吹っ飛ばされた。痛い。

唐須が使うのは再び右サイド。最初の攻撃と同じように屍が唐須の前に立ちほだかる。

「何回やっても同じだったの！ ジャツジスルー!!」

来たる衝撃に備えようと目をつぶる屍。しかし屍の予想していた衝撃は訪れない。

「騙されてやがんの」

唐須は必殺技の名前は叫んだが、実際にはジャツジスルーは使わなかった。ライアーショットのようにただ屍の頭にボールを通して、屍を抜き去った。

少し卑怯にも思えなくもないけど、これくらいの卑怯さは僕達も使ってきた。トリックイリユージョンボールとかね。冷たい言い方だけど、騙された屍が悪い、と思う。

屍が抜かれたことで残る皆は不死先輩だけ。

「ホークショット!!」

3度目のシュートが不死先輩に襲いかかる。

「キラブレード」

青い刃1つだけでは、唐須のシュートを止めるには足りなかった。

前半終了を目前にして、尾刈斗は1点の失点を許した。

☆☆☆

ハーフタイム。飛鷹の真空魔を崩す術がない以上、1点の失点はかなり重たい。

あからさまに口にする人はいないものの、ベンチには絶望に似た雰囲気が漂っている。

久遠監督がメンバーを集めて作戦を告げる。

「後半に向けての作戦を言う。まず、不死を鈍と交代する」

必殺技を多く使わされて、不死先輩は限界に近い。納得の交代。不甲斐ない結果だが、多分不死先輩本人もこう言われることを分かっていただろう。

「それから、屍と魔界にも下がってもらおう。2人はこの試合に勝つために必要ない。2

人の代わりに——」

「監督」

久遠監督が選手交代を告げている最中だけど、僕は口を挟む。確かに、屍と魔界先輩は現状このチームのウィークポイントとなってしまうている。その2人を下げようとする監督の意図は分かる。

「僕は2人を下げることには反対です」

でも、僕はその判断が正しいとは思わない。

「久遠監督は監督として選手をよく見ているのだと思います。でも、僕はキャプテンで、監督よりチームのことを知っている自負があります。」

屍と魔界先輩はこの試合に必要です。2人と話をする時間をください」

50 好きな物から逃げずに

「屍と魔界先輩はこの試合に必要です。2人と話をする時間をください」

前半での動きが良くなく、失点の原因を作った2人。それを交代させようとした監督の判断に僕は異議を唱えた。

「分かった。5分間だけやろう」

☆☆☆

屍も魔界先輩も、2年間一緒に戦ってきた仲間だ。今日の不調の原因はなんとなく予想がついている。

まず魔界先輩の問題から片付ける。多分、屍より魔界先輩の方がシンプルでしょうもない理由だ。

「魔界先輩、いつもそれで顔を隠したあなたと、腹を割って話すのは初めてですね」

いつもなら「これは体の一部だ！」なんてやかましく反論する魔界先輩だけど、今日

はそんな元気もないようだった。

魔界先輩の抱える感情には心当たりがあった。前世で、カケルやタクヤに僕が抱いていたのと同じ感情。

「単刀直入に訊きます。嫉妬してるんですよね？」

「……ああ」

誰に？と尋ねられることもなかった。嫉妬の対象は一人しかいない。魔界先輩のいつも隣にいて、誰よりもみんなの信頼を集めている人、月村先輩だ。

そういうえば原作の雷門でも、染岡が豪炎寺に嫉妬していつものプレーができなくなるというイベントがあった。あのとき、円堂はなんて助言をしていたんだっけな。

原作の記憶の中の円堂のセリフを引っ張ってこようとするけど、それじゃ違うと気づく。今日の前にいるのは染岡じゃなく魔界先輩で、今ここにいるのは円堂じゃなく僕だ。言いたいことがちゃんとまとまらなかったとしても、僕の言葉で言わなきゃいけない。

「確かに、月村先輩は素晴らしい選手で、憧れる気持ちも分かります。でも、月村先輩と魔界先輩は学年が同じでも、ポジションが違います。嫉妬するのは馬鹿らしいと思いませんか？」

そう言っつて僕は魔界先輩を挑発する。

F Wである染岡が優秀なストライカーである豪炎寺に嫉妬してたのとはわけが違って、魔界先輩はM Fで、月村先輩はF Wだ。

「あいつが俺のポジションにいても、俺より上手くやれるだろ」

「それはそうかもしれない。調子のいいときの月村先輩なら、どのポジションの誰よりも強いような気がします」

自分にしかできないことを探しても、何においても自分より優秀なやつがいる、というのはよくある話で。

「でも、それがどうしたんですか。なんでもできる全能の火星人が急に地球に現れたとして、それで何かが変わるんですか？ 今までの努力が全部無かったことにでもなるんですか？」

魔界先輩は月村先輩にはなれません。なれるわけありません。全く別人なんですから」

僕は、カケルとタクヤみたいになりたかったけど、彼らと違って僕には才能がなかった。転生して新しい自分になれたと思ったけど、結局神成FCでも僕はずっと落ちこぼれだった。優秀な刃也にも憧れたけど、なれるはずはなかった。

「他の誰かになることはできなくても、自分自身にだけはなることはできます。」

なれるはずのない他人を羨んでる暇があったら、なりたい自分になるためにがむしゃ

らに努力したらいいんじゃないですか？」

誰かになることはできなかつたけど、二回目はサッカーを続けることを選んだ。僕はサッカーをしている自分が一番好きだから。

「だから、魔界先輩は、素敵で頼れる魔界先輩になってください」

「ああ、なんか、ありがとうな。俺様は偉大な俺様になってやるよ」

ただ僕の思っていることを繋げただけで、意味不明な火星人の喻えも持ち出して、全然主張はまとまらなかつた。それでも、魔界先輩に伝えたいことは伝わったみたいだ。

☆

もう一人、屍の不調の原因もだいたい推測することはできる。

でも、そんな確証のない状況で問い詰められる話題ではないから念の為、僕以上にみんなのことを知っていそうな人に助言を求めた。

「三途も、屍の不調の原因に察しがついてるんでしょ？」

「まあね。今日はベンチからみんなのプレーをよく見れたし」

「三途は言つてたよね、暴走のメンバーを見てから僕も様子がおかしいって。他に様子がおかしかつた人がいたんだよね？」

「うん、多分君の予想してるとおり。暴走のメンバーを見てから明らかに様子がおかしくなっていたのは、屍だよ」

三途の言葉を聞いて予想を確信に変えた僕は、屍に向き合う。

「やつぱり……屍、怯えているんだよね？」

屍はこくりと静かに頷いた。

「それは、直接的にいじめてきた人？」

「まあ、うん。小学校の登校班が一緒でさ、いつもからかわれてたんだ、ぐふふつ、俺の方が年上なのに。ずっと怖かった。唐須のことが」

小学校の頃のいじり（あるいは1文字変えていじめ）から逃げてここ尾刈斗にやってきたという屍。そんな屍がどうも怯えている様子だから、もしかしてって思ったけど、まさか唐須がその当事者だとは思わなかった。

「俺は、みんなのおかげで強くなったと思ってた。でも、ぐふつ、今でもずっと怖がりだ。俺はやつぱり戦力外で、下がるべきだよ」

確かに辛い記憶というのとはそう簡単に癒えるもんじゃない。唐須の存在に怯えてしまふことは、仕方のないことだとは思ふ。

でも僕はキャプテンとして、いや1人の友人として、屍を助きたい。

「君が交代したいっていうなら、久遠監督も下げるつもりだし、そうなると思う。三途とかが代わりに入ってね」

「それでいいよ。俺なんかより三途の方がずっと役立つだろうから」

僕は、屍に「俺なんか」なんて言って欲しくない。

「でもそれじゃ、逃げることになるよ」

「逃げちゃいけないかったの？逃げてここに来た俺は間違いだったって言うのか？」

辛い境遇に置かれている人にとって、逃げることは救いだ。逃げることを悪だとする考え方こそが間違っているのかもしれない。

前世の最期の日、カケルとタクヤとした喧嘩を思い出す。

『逃げ続けることって悪いことなの？』

逃げ続けると後悔するぞと諭す2人に、僕はそう尋ねた。2人から答えは返ってこなかった。

でも今なら、その問いの答えが少しだけ分かる気がする。

「いや、逃げること自体は悪いことじゃない。君が唐須から逃げて尾刈斗中学を選んで、僕達と出会ったことは、決して悪いことであるはずがない。本当に苦しい時はなんとし

「でも逃げるべきだと僕は思うよ」

「じゃあ、と口を開きかけた屍を制するように僕は続ける。」

「でも、この試合から逃げることは違う。この試合から逃げるってことは、サッカーから逃げるってこと。サッカーから逃げるってことは、今まで屍が頑張ってきたことを全部自分で否定するってこと。」

僕は、君が頑張ってきたことを知ってる。君の強さを知ってる。僕は——君に逃げて欲しくない」

嫌な物から逃げるのは構わない。むしろ逃げるべきだ。でも、好きな物から絶対に逃げて欲しくない。好きな物から逃げるのがどれほど辛く苦しいことか、僕は知っているから。」

「屍が過去に立ち向かうことができるのは、今日しかない。今日を逃せば、ずっと後悔することになる」

今の屍はあの日の僕だ。ここで選択を間違えると、屍に僕と同じ後悔をさせることになる。僕はもう二度と間違えない。」

「屍は三途の強さは認めてるんだよね？」

「ああ、俺よりもずっと優秀なDFだよ」

「じゃあその三途が屍のことを信じるって言ったら、君は自分を信じられる？」

「僕は屍ならやれるって信じてるよ」

三途は屍の背中を押すように力強く頷く。

そしてそれに呼応するように、尾刈斗のみんなも屍を向いて頷く。俺達僕達も信じてるぞって。

「僕達を信じて、そして僕達が信じる屍藤美という選手を信じて欲しいんだ」

「紫藤、みんな、俺ちよつと勇気を出てきたよ。この試合、頑張ってみる」

屍は少し恥ずかしくなったのか、頭をポリポリと書きながらその決意を口にした。

やっぱりいつか鐵さんが言っていたように、信じてるって言葉には凄いパワーがあるのかもしれない。屍は、僕が選べなかつた正解の選択肢をちゃんと選んでみせた。

「屍先輩、大切なのは自分を愛することですよ」

「柳田の方が後輩なのに、ぐふつ、逆に説教されちゃったな」

いつものように自虐的なセリフだったけど、その顔はどこか朗らかだった。

「何言ってるんですか、屍先輩。それが大切だって僕に教えてくれたのは先輩ですよ」
「ぐふふつ、そうだったかもな」

☆☆☆

久遠監督は僕の提案を受けて入れてくれて、屍と魔界先輩は後半もフィールドで戦うことになった。

前半との違いはGKが不死先輩から鉈に変わったこと、そして僕と魔界先輩の位置を交換したこと。僕はいつになく前線に立ち、魔界先輩は守備に徹することになった。

尾刈斗ボールで後半は始まる。まずは八墓にボールを渡し、左サイドから攻め上がる。

「カマイタチ」

幸いにも飛鷹以外の選手のディフェンス力は並以下なので、カマイタチで易々と突破できる。きりもみ回転しながら突進するっていうシンプルな技だけど、こつくりさんイチオシというだけあって使い勝手が良さそうだ。

フリーになっていてる月村先輩へ八墓がパスを出そうとしたとき、意識の外にいた鈴目と飛鷹が意外な必殺技を使う。

「かつとびディフェンス！」

2人の足の裏を重ねて、飛鷹の凄まじい脚力で鈴目を弾丸のように飛ばす。

鈴目は八墓の足元までかつとびながら、足に直撃することなく今日にボールだけを掠

めとった。

「やりましたよ飛鷹さん！」

自慢げに飛鷹を呼ぶ鈴目の姿は、後輩だとしたら可愛くて仕方ないんだろうけど、その僅かな隙に鈴目のパスコースはどんどん塞がれていく。

散々手こずらされたエアライド組も、僕と人形でしつかりマーク。間を遮る位置に月村先輩がいるから、飛鷹へのバックパスも許さない。

「魔界の住人の俺様にはお前らの動きなどお見通しなのさー！」

すつかり調子を取り戻した魔界先輩が、孤立した鈴目のボールを奪いにいく。

変な被り物をしているせいで視野が狭そうに思えるけど、実は誰よりもフィールド全体を見ているのは魔界先輩なのだ。

「嫉妬するのは馬鹿らしくないですか？」なんて挑発しながら後半も出てもらうように魔界先輩を説得した後、僕は先輩に司令塔になってもらうように頼んだのだ。

『先輩はこの試合に必要なだつて監督に言つたのは、方便なんかじゃなく本心です。勝つために素敵で頼れる魔界先輩にやってほしいことがあります。』

守備の要としてディフェンスに立って、みんなに指示を出してくれませんか？』

『別に構わねえけど、俺でいいのか？』

『魔界先輩じやなきやダメなんです。1年前の練習試合、天魔対戦とかハロウィーンの一戦とかで、僕はどちらも先輩とは違うチームでしたが、どちらも先輩な確なゲームメイクに苦戦した覚えがあります。

きつとこれは、月村先輩にもできない、魔界先輩にしかできないことだと思います』

わざわざ嫉妬していた月村先輩の名前を持ち出して焚き付けたのはちよつとずるい言い方だったかなとは思ったけど、頼んでいた通り、いやそれ以上に魔界先輩は司令塔として活躍してくれた。

「そんじゃボールは頂くぜ！怨霊」

「スカイウオーク！」

完全にパスコースを塞いで追い詰めたかと思いきや、必殺技で空に逃げられてしまった。

「唐須！」

そして空から唐須にパスが繋がる。

最悪な人物にボールが渡ってしまったように見えるけど、ここまではちゃんと想定通りだ。

前半で良いようにされた唐須を僕らがフリーにさせるはずがない。唐須にはしっか

り彼についてもらっている。

「俺はもうすっかり眼中に無いのかい？」

唐須の前にしつかりと立ちはだかつたのは、前半よりも勇ましい顔を見せる屍。

『後半、唐須の対処は俺にまかせてくれ』と言つたのは屍自身だ。僕が屍に頼み込むより先に、屍は因縁の決着をつける覚悟を決めていた。

「ていうか、俺のこと覚えてないのか。俺は君のことを忘れた日はなかつたのに」

唐須は右側から突破する素振りを見せ、屍は重心を少し右に傾ける。

「お前はあいつか、不死身の藤美ちゃんか。懐かしいなあ！」

馬鹿にしたように笑いながら、唐須は重心が傾いた隙を狙って左から突破を狙う。

さっきのはフェイントだったってことか。

「その呼び方好きじゃないって、言わなかつたっけ！」

左右に揺らされ体勢を崩されたけど、屍は必死にボールに食らいつく。

「お前が俺に楯突くんじゃねーよ！ジャツジスルー！」

屍をどうしても突破できず痺れを切らした唐須は、ジャツジスルーで強引な突破を狙う。

「ぐふふつ、その技、待ってたよ。タフネスブロッカー！」

前半と違って屍は怯えていない。サッカーボールを前に逃げることは、もうない。

唐須の蹴りがボールごと屍を襲う。しかし倒れたのは屍ではなく、蹴りを食らわせた側の唐須だ。唐須はタフネスプロックで逆に弾き飛ばされて地面に転がっている。

「やったじゃん、屍！」

屍は自分の力でトラウマに打ち勝ったのだ。凄い、本当に凄いよ。

「ぐふふつ、俺、やった……！」

屍の活躍で暴走の攻勢を防ぎ、反転攻勢。僕らの番だ。ボールは屍から魔界先輩、木乃伊と渡り、僕のもとまで届く。

「紫藤、突っ切れ！」

「了解です！まぼろしドリブル！」

スライディングに来た鈴目を新技で躲しながら、司令塔である魔界先輩の指示通り、ボールをどんどん前へと運んでいく。この必殺技の特訓に付き合ってくれた半田には感謝だ。

最近ではDFとして前に出すぎないようにって言われていたから、こうしてドリブルで上がっていくのは久しぶり。守備とはまた違った楽しさがあるね。

「そろそろ一点返してもらおうよ。飛鷹、力勝負と行こうか！イリユージョンボール！」

飛鷹を少し挑発しながら、僕の十八番の必殺技で飛鷹に立ち向かう。

「受けて立つぜ。真空魔!!」

僕が生み出した幻のボールを吸い込まんと、飛鷹も十八番の必殺技を使う。

しかし、いつまで経ってもボールは吸い込まれない。

「なぜだっ!」

真空魔は一度の強力な蹴りで空間に裂け目を作る技だから、それを長時間持続させることはできない。紫色の裂け目は次第に吸い込む力が弱くなり、僕からボールを奪えな
いまま消えてしまった。

僕のイリユージョンボールが吸い込まれたのはなぜか。飛鷹に問われたから、そのく
だらない真相を教える。

「なぜかって、全部偽物だからね」

月村先輩のファントムシュートは、本物のボールだけが真空魔に吸い込まれていっ
た。それはつまり、真空魔は幻を吸い込むことはできないってことだ。幻は質量も持た
ないから、考えてみたら当たり前の話なんだけど。

そしてその答え合わせと同時に、彗星のような光を纏った本物のボールが飛んでく
る。狙いはもちろん、シュートチェイン。ボールが飛鷹の頭上を通過するくらいのタイ
ミングで月村先輩がボールに追いつく。

「ファントムシュートV2!!」

「止める! ワイルドクローV2!」

黄色いモヒカンのキーパーの黄色く輝く爪を弾き飛ばしてボールがゴールネットに突き刺さる。鈴目と同じく飛鷹の舎弟の1人だったと思われる彼は、原作でサッカーを馬鹿にしていたとは思えないくらいにしっかりと蹴りつけたが、飛鷹のような圧倒的なまでの力は持っていなかった。

スコアは1-1、同点に迫っていた。

☆☆☆

暴走ボールで試合は再開。点を取られたらまた取り返すだけだと暴走もやる気の姿勢だ。

「エアライド！」

また例のエアライド組がボールを変形させて空を乗りこなす。

「降りてきたら、ボールを貫くアルヨ」

着地点で霊幻が待ち構えるが、ボールを地面に落とすことなく前線のFWへと繋げられる。

しかしそれすらも魔界先輩の読み通りだったようで、パスの軌道上には不亂先輩が配置されている。

「フランケン守タイン」

緑の巨体がパスを叩き落とし、暴走からボールを奪う。不亂先輩のディフェンス力はほんとに頼りになる。

「この試合は全てこの俺様の手のひらの上……」

魔界先輩が調子に乗って悪役っぽいセリフを吐いているけど、先輩が試合の流れを握っているのは事実だ。これから尾刈斗の鬼道とでも呼ぼうかな。

魔界先輩が守備を取りまとめ、屍や不亂先輩という頼れるDF達と鉈がゴールを守る。もう後ろは心配しなくて良いね。

「もう1点決めてやるぜ！ 円谷へイ。パス！」

月村先輩がこの流れのまま試合を決めてやろうとパスを要求する。

「スキあり！ かつとびディフェンス！」

間に遮蔽物なんてなくて、普通に通るはずだったパスが、ハヤブサのように飛んで来た鈴目にカットされる。

動くボールにピンポイントで飛んでいくのはなかなか至難の業だと思うけど、飛鷹と鈴目の息を合わせるためにかなり練習したに違いない。敵が手強いという尾刈斗にとつて悪いニュースなのに、原作ではサッカーをしていなかった鈴目がしっかりサッカーを練習しているんだと考えると少し嬉しくなった。

鈴目にボールを奪われちゃったけど、我らが守備陣がすっかり攻め手を封じ、魔界先輩がボールを奪い返してくれた。

やっぱり、守備は完璧に近い。もう点を取られることはないだろう。

ただこつちだつて、攻め手に欠けているのは事実だった。

飛鷹を突破する策がそんなに思いついていない。僕は奇策を考えるのは得意だけど、大抵タネがバレたらなんとでもなるものばかりで、根本的な解決策は見つけられない。

「毒霧濃縮作戦……やってみますか？」

「それはほんとに最後の手段かな。健康被害がないって証拠もないし」

木乃伊が提案する毒霧濃縮作戦とは、真空魔に毒霧を吸い込ませて、技の終了時に時空の裂け目から出てきた濃縮毒霧を食らわせようという作戦である。ハーftimeにみんなで案を出し合っている最中に木乃伊が出してくれた作戦だけど、あんまり乗り気じゃない。

必殺技の毒霧は吸うと途端に動けないほど咳込んでしまうけど、技が終わるとすつかり毒が消えて元気になるという超次元な性質を持つ。だからそんな大変なことにはならないと信じたけれど、少し吸うだけで咳き込む毒を濃縮してしまつては後遺症レベルの被害が出ることも否定できない。

「さすがに倒れられたりしたら困るし。嫌だし。やつてること影山と一緒になっちゃう

「よ」

サッカーで人を傷つけることは、僕にとって許せないことのひとつだ。多分黒上とかも反対すると思う。

「そういえば木乃伊さ、だいぶ前の天魔大戦で毒霧の毒性を薄めてたけど、あれって再現できない?」

「あれは紫藤のフアントムミストで攻撃を隠す戦術を模倣しようと言葉を広げたら結果的に薄くなっただけで、毒霧の全体の総量が変わることは——」

言いながら、木乃伊は何かに気づいたようにハッと言葉を詰まらせる。

「それだ」「それですね」

僕と木乃伊の声が重なる。根本的な解決策にはなりえない奇策を、またひとつ思いついた。

☆

屍や不亂先輩が暴走の攻撃を防いだかと思えば、鈴目や飛鷹の守備に阻まれボールを奪い返される。互いに攻めきれないまま後半終了の時間が近づいていく。

1—1の同点のまま後半が終了すれば、勝敗をつけるために延長戦、PK戦へと続く

ていく。暴走のあまりに数の多いFW達の攻撃を凌ぐのに精一杯で、屍達守備陣の体力は尽きかけている。できることならこの延長戦に持ち込ませずに決着をつけたい。

残り体力を考えると、ほぼ一人で守備を担っている向こうの飛鷹の方が消耗は激しいはずなんだけど、飛鷹は全く疲れた様子を見せない。マジで誰からどんな特訓を受けたんだろう。

最後の攻撃のタイミングを見計らっているうちに、魔界先輩からパスを貰う。そのボールから今だ、やれ！というメッセージを受け取った。

「そろそろこの均衡を破るときだね」

例の奇策については、フィールドを走り回りながら既にみんなに耳打ちで伝えている。

「それじゃ、フアントムミスト！」

つい最近サッカー規則の改定があつて、ボールを持たない選手からボールを持たない選手への必殺技での干渉が反則行為に定められた。

あの帝国戦のように試合がもはやサッカーではない異能力バトルになるのを防ぐという意味では、影山にしては珍しく、良い改定だと思う。

ただ、その改定で僕らが打撃を受けているのも事実であつて、ボールを受け取る選手

を先んじて怨霊で身動きを封じる戦術などが使えなくなっている。

この新ルールに基づくと、ファントムミストで視界を封じる作戦は反則になりそうだけど、僕がボールを持っていてるタイミングで発動することで、「これはドリブル技だ！」という屁理屈でごり押すことにした。

ていうかこの技、ちゃんとブロック技として使ったことかあつたっけ？ 毎回変な使い方ばかりしてるような……

ルール上の扱いとかはまあどうでもよくて、結果としてフィールドの中央付近は闇に包まれた。そう、新たに思いついた奇策とは、かつて天魔大戦で行ったのと全く同じ闇闘作戦だ。

ファントムミストを広範囲化するの結構大変で、TP的なものがすっからかんになった気がする。

飛鷹は闇の外で何をしてくるか待ち構えている。誰がボールをドリブルしてきても、誰がシュートを放つても、真空魔で止めてやるつもりでいるのだろう。

ドリブルかシュートか。果たして答えは――

「地獄車!!」

月村先輩と魔界先輩の2人がボールを体で挟みこんで、回転しながら飛鷹にダイレクタアタック。猛スピードで突撃してきたそれに、流石の飛鷹も対応することができな

かった。

視界が塞がれたモヤの中で地獄車みたいなドリブル技を使っても、普通誰かにぶつかって止まってしまうのだけれど、暴走学園の「守備は飛鷹1人にほとんど任せて、残りは敵コートに入って攻撃参加」という歪なフォーメーションに助けられた。

「この勢いのまま行くぜ！」

飛鷹を地獄車で弾き飛ばした後、魔界先輩は転がる回転の勢いのまま月村先輩を上空へ蹴飛ばす。

「これが俺（オレ）達の新必殺技だ！」

魔界先輩のサポートで空高く跳び上がった月村先輩は、狼のようなオーラを纏って上空からボールを蹴り落とす。

「ワイルドクローV2！」

相手GKが必殺技で応戦するも難なく突き破って、魔界先輩と月村先輩の2人のシュートはゴールネットを揺らす。

「魔界の住人の俺様に、お前が加われば百人力だな」

「火星人のオレは何だってできるんだよ」

そう先輩達は軽口を交わしながら、ハイタッチをする。

その姿はとてもかっこよくて、そして僕にはとても尊いものに見えた。

カップリングが尊いとかそういう意味じゃなくてね。嫉妬によって関係性が歪むわけではなく、素敵に友情を育んでいる先輩たちの姿に、ただ尊い価値を感じたのだ。前世の僕には選べなかった関係性だったから。

「かつけー……」

普段はお調子者の人形も、先輩達の活躍に素直に感嘆している。

守備の要を託したはずなのに、それをすっかりこなした上でドリブルにシュートまでオールラウンダーに活躍されちゃうと、僕も魔界先輩に嫉妬してしまいそうだ。

「あんな技、いつ練習してたんですか?」

2人がこの合体技を練習しているところなんて見たことがなかった。

こっそり2人で練習していたのか、それともあの2人の絆ともなれば即興でも成功させられるのか。前半ではいがみ合っていたことが信じられないくらいに息がピッタリだった。

「こんな感じでやろうぜって話し合ったら、なんか1発で良い感じに出来たんだよな」

「まあオレは火星人だし?」

僕が諭えの中で月村先輩を火星人間扱いしたんだけど、本人になぜか気に入られてしまっている。

「ちなみに俺もう技名考えてるぜ」

「オレも良い名前を考えてある。一緒に言うか？」

「セーの——」

「魔界落とし!!」「リーピングウルフ!!」

そこは全然ピツタリじゃないんだ。

☆☆☆

またまた暴走ボールから試合が再開するけど、試合終了まであと僅か。さっきの1点が試合を決める最後の1点で、尾刈斗には優れた守備陣がいるし勝利は磐石。僕達はそう思い込んでいた。

僕達は、暴走学園を舐めていた。気まぐれでFFに出場した不良学校、なんて間違ったイメージを持ち続けていたのかもしれない。

彼らは本気で勝ちを求めに来ていた。最後の最後まで、彼らの闘志は消えていない。

「この試合、絶対勝つぞー!」

飛鷹の掛け声とともに、暴走の全員がこつちのコートに攻め上がってくる。鈴目も飛鷹も、そしてキーパーまでもが。

捨て身の攻撃だ。成功する確率が高くないとしても、僅かな勝利へのチャンスを掴みに来ている。

「勝つて黒岩さんに勝利を届けるんだ！」

暴走の気迫におされてか、僕はドリブルの突破を許してしまう。さっきのファントムミストで疲労困憊だったってのもあるけど、それも結局言い訳だ。

魔界先輩が必死に指示を出すけれど、文字通りの全員攻撃で押し込まれてしまう。

「怨霊」

「蜘蛛の糸」

霊幻や木乃伊の必殺技で足止めを凶つても、止める前にまた別の誰かにパスを出されボールを捕えられない。

「これが最後の攻撃だ！エアライドV2!!」

土壇場で必殺技を進化して、さっきまでよりさらに長い距離をボールに乗って飛んでいく。

「唐須、任せた！」「やっちまえ、唐須！」

チームメイトの期待を一身に受けて、唐須は空に飛び立つ。この試合で何度も見たホークショットの構えだ。

小学校時代に唐須が屍に対してしていたことはとても酷いことだし、僕はそれを許す

つもりはない。でも唐須が今、暴走の仲間達に信頼されていて、真剣に勝ちを目指してサツカーに取り組んでいるのも事実みたいだ。

ただひとつ言えることがあるとすれば、僕達尾刈斗も勝ちを譲る気なんてないってことだ。

唐須の対処は屍に一任している。屍ならきつと止められる。僕はただ、それを信じて見ているだけ。

ハーftime中に僕が屍に伝えたこと。

『暴走の空中戦によって、僕達は苦戦を強いられている。だから、今この試合で、あの技を完成させて欲しいんだ』

屍が今までの自分の努力を信じるのならば、きつとあの技を完成させることができる。サツカーから逃げずに立ち向かうことを決めた屍に、臆することなど何も無い。

「俺なら……:できる。グラビティション！」

リトル・グラビティションから進化した技、グラビティション。身動きが取れなくなるほどの超重力空間が屍が地に着けた手を中心に広がり、その紫の空間は空中でシュート態勢に入っていた唐須とボールを捉える。

「落ちろ、唐須」

鳥の翼がもがれたかのように、唐須は地面に落とされた。暴走の最後の攻撃も、屍の活躍によって止めきった。

ピー　ピーー　ピーー

試合終了の笛がなる。2―1で僕らの勝利。

こうして尾刈斗は、帝国学園が待つ地区大会決勝へコマを進めることとなった。